年報

令和２年度（2020 年度）

Oita University of Nursing and Health Sciences

公立大学法人大分県立看護科学大学

2020 年度の年報発行にあたって

大分県立看護科学大学

理事長・学長　村嶋幸代

2020 年度（令和 2 年度）の年報を発行できることをありがたく思います。

2020 年度は新型コロナウィルス感染症（COVID-19）に世界中が翻弄された一年でした。

このような中で、本学では質の高い教育を継続し、更に向上させるために、大きく 2 点について全学で取り組みました。1 点目は、新型コロナウィルス感染症下での教育の継続です。緊急事態宣言が発出され、小中学校が一斉休校となり、登校できなくなった中で、感染予防を徹底し、オンライン授業を速やかに導入して実習も工夫し、学事暦を遅らせることなく乗り切ることができました。2 点目は、令和元年度の看護師の指定規則の改正を受けて、全国的に令和 4 年度から新しいカリキュラム（カリキュラム 2022）になることを考慮し、早目にタスクグループを設置して、カリキュラム改革を行ったことです。これでカリキュラム 2022 が完成しました。

2018（平成 30）年に設置した看護学実習委員会は、オンラインでの実習を工夫して実施するとともに、品薄になっていたマスクや消毒薬・フェースシールド等を確保して、感染予防に努めるなど、このコロナ禍で力を発揮しました。カリキュラム 2022 では、実習をスリム化すると共に、1 年生の段階では、急性期病院から地域密着病院にシフトするなど、学習効果を考えて、一歩一歩進めることができました。

卒業式・修了式・学位記授与式は、2019 年度は中止せざるを得ませんでしたが、2020 年度には対面で実施し、看護師・保健師国家試験にも全員が合格することができました。関係者の皆様の多大なるご尽力に御礼申し上げます。

年報は、大学の活動を第三者に分かっていただくための資料ですが、自己点検・評価が行われていること、それぞれの部署や事業でどのように PDCA サイクルが回っているかを示す資料でもあります。年報を読んでいますと、各々の部署や授業の努力の跡も記されています。年報を所掌している自己点検・評価委員会は、全学の PDCA サイクルを回しながら、改善・改革を進める重要な委員会です。本年度、年報に記載された取り組みを今後の評価にも活かしながら、「大分県における看護学の拠点となる」という本学の使命発揮に向けて、更に、改善・改革に取り組んでいきたいと思います。

2020 年度の年報をご一読頂き、忌憚のないご意見、また、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2020 年度

大分県立看護科学大学

トピックス

看護師・保健師国家試験に全員合格

今年も、看護師・保健師国家試験に全員合格しました。

入学式、卒業式・修了式を開催

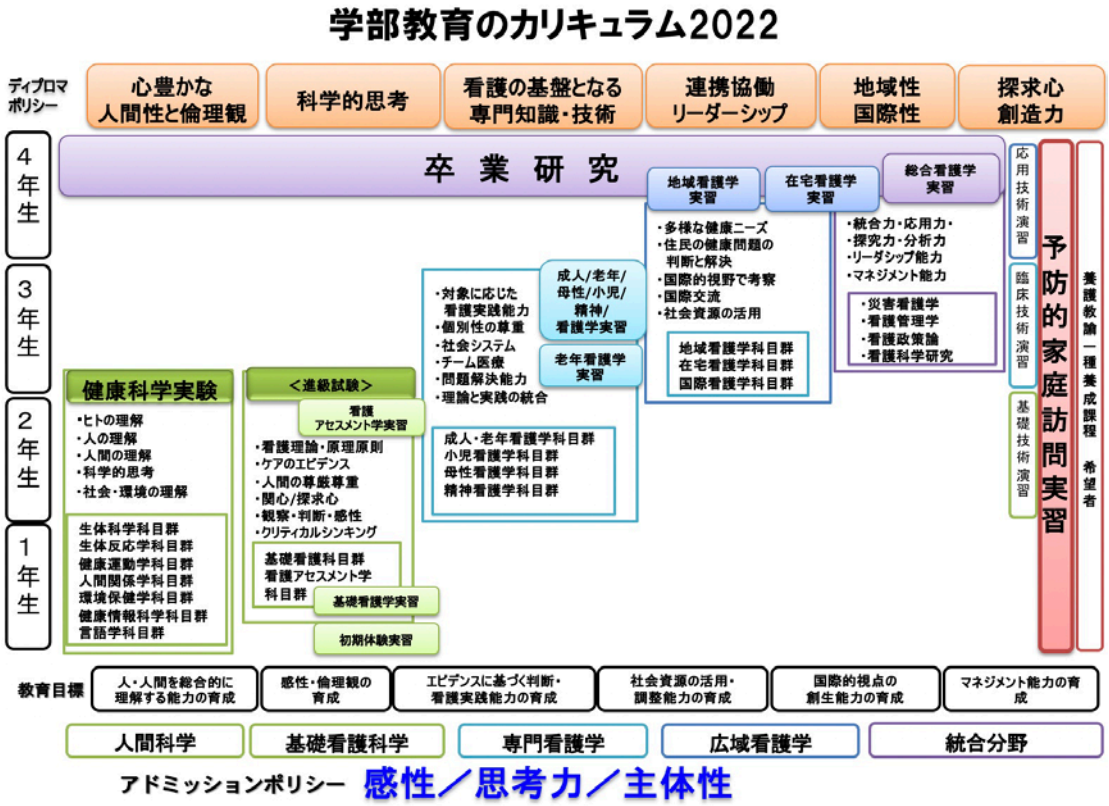
教職員の綿密な計画により三密を回避し、入学式、卒業式・修了式を対面で実施しました。

オンライン講義を速やかに導入

情報ネットワーク委員会の迅速な対応で、４月第３週から Zoom を用いた双方向のオンライン講義を開始しました。

カリキュラム改正に向けた取り組み

保助看学校養成所指定規則の改正に伴い、令和４年度からの新カリキュラムを検討するタスクグループで学長・学部長が陣頭指揮を執り、全学を上げて検討を進めました。今年は大学院の保健師・助産師を養成するコースのカリキュラムも検討しました（左の図は学部のカリキュラム・ツリー）。また、新たにアドミッション・オフィスも設置しました。



コロナ禍でも慎重に看護学実習を実施

コロナ禍の中、実習施設のご理解を賜り、教職員による綿密な準備により、慎重に実習を実施しました。

看護国際フォーラムをオンラインで開催

第 22 回看護国際フォーラム「AI・ICT が創る医療・看護の可能性を語ろう」を県看護協会と共催し、オンラインで開催しました。森口真由美先生 （北原国際病院看護統括）、井上創造先生（九州工業大学教授）、Dana Womack 先生（オレゴン健康科学大学）、Natalya Pasklinsky 先生（ニューヨーク大学校看護大学）をお迎えし、海外からの参加者も多く、盛況のうちに終わりました。

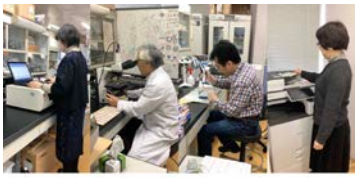
Executive Director, Natalya Pasklinsky

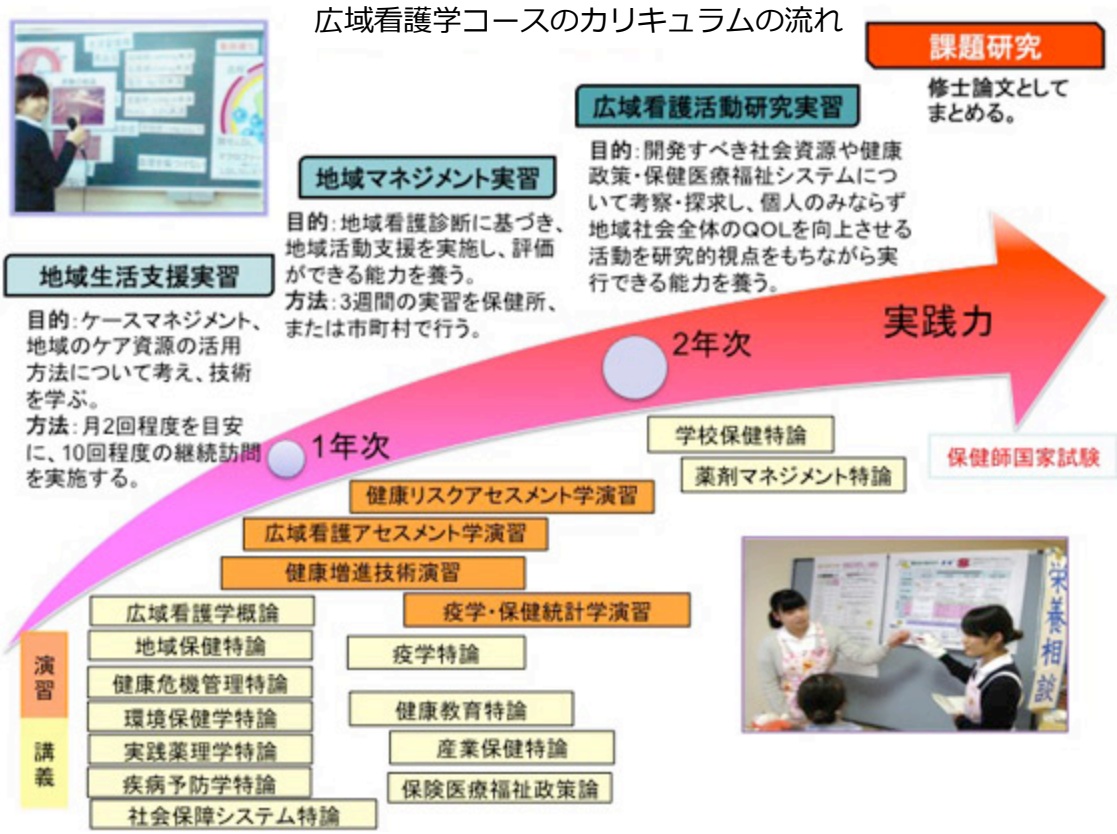
Assistant Director, Charles P. Tilley

Education Specialist, Katherine Marx

卒業生に応援メッセージ動画を配信

コロナ禍のためホームカミングデイが中止となった代わりに、学長や各研究室の教員が卒業生に向けて作成した応援メッセージ動画を配信しました。





大学院広域看護学コースの定員増が決定

以前より大学院広域看護学コースの定員の増員について、大分県と交渉してきましたが、近年増加している自然災害や新型コロナウイルスに対応するために保健師の需要が高まったため、大分県は定員を５名から１０名に増員することを認めました。

目次

1. 学内行事 1

2. 入学試験等 4

3. 学生の状況と進路 12

4. 授業等 17

5. 研究室活動 107

6. 研究助成・事業助成等 126

7. 研究業績 130

8. 社会貢献 144

9. 学務 158

10. 附属組織 190

11. 設備等 197

12. 名簿 198

1　学内行事

1-1　学年暦

前期

4月

8	入学式
9	新入生オリエンテーション
10	2～4年次生授業開始
10～17	前期履修登録
13	1年次生授業開始
14,15	健康診断
15～	予防的家庭訪問実習開始

5月

11～6/5	在宅看護学実習，地域看護学実習（4年次生）

6月

10	学生大会
19	開学記念日
15～7/3	総合看護学実習（4年次生）

7月

6～10	初期体験実習（1年次生）
15	大学院特別選抜
21	夏期休業開始
21～8/4	小児看護学（保育所）実習（3年次生）

8月

17～10/30	Webオープンキャンパス
22	大学院入学試験

9月

5	夏期休業終了
4~11/27	老年看護学実習，成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ，小児看護学実習，母性看護学実習，精神看護学実習（3年次生）

後期

10月

1	後期授業開始
1～9	後期履修登録
31	看護国際フォーラム

11月

23	学校推薦型選抜試験および社会人選抜試験
28	卒業研究要旨提出締切（4年次生）

12月

1	卒業研究論文提出締切（4年次生）
2,3	卒業研究発表会
7～21	看護ｱｾｽﾒﾝﾄ学実習（2年次生）
14	大学院入学試験（二次募集）
24	冬期休業開始

1月

7	冬期休業終了
12～25	基礎看護学実習（1年次生）
15	大学入学共通テスト準備（2,3,4年次生休講）
16,17	大学入学共通テスト

2月

14	看護師国家試験
25	一般選抜試験（前期）および私費外国人留学生選抜試験
26	進級試験（2年次生）
26	後期授業終了

3月

1	春期休業開始
12	一般選抜試験（後期）
18	卒業式・修了式

1-2　オープンキャンパス

オープンキャンパスは、COVID-19 感染拡大予防のため 8 月 17 日（月）～10 月 30 日（金）までの間、本学ホームページ上で Web により開催した。事前に、大分合同新聞など新聞社 5 社に記事を掲載、大分県オープンキャンパスガイドで広報した。Web では、学長挨拶や入試概要説明、模擬授業 2 講座といった 9 つの動画コンテンツを公開し、10 名の卒業生・修了生からのメッセージを掲載した。本学 YouTube の公式チャンネル登録数は 23 名、動画再生回数は多いもので 749 回（10 月 30 日時点）と、本学について大いにアピールできた。公開した動画コンテンツでは、大学施設案内、1 年次生の合格体験談、2～4 年次生からの在校生メッセージの発表などが好評であった。参加者からのアンケートを Web で募ったが回答が得られなかったため、アンケートの実施方法についても工夫が必要である。過去のアンケートで学生がどのような教育を受けているかの DVD 作成を引き続きの課題とする。令和 2 年度は、大学見学を希望する高校生のニーズに対応するため、夏休みに入試委員会がミニオープンキャンパスを開催した。このように、大学訪問によるオープンキャンパスを希望する高校生の意見があったことから、令和 3 年度は、Web と対面のハイブリッド式によるオープンキャンパスの実施を計画する。参加者数は、感染予防の 3 密を避けるために、事前申し込みと人数制限 100～150 名程度とし、午前・午後の 2 回開催する。

1-3　看護国際フォーラム

新型コロナウイルス感染症の流行状況及び対応のために、大分県看護協会と共催で第 22 回看護国際フォーラムを令和 2 年 10 月 31 日に、Zoom ウェビナーとして開催した。テーマを「AI・ICT が創る医療・看護の可能性を語ろう」とし、米国から 2 グループ計 4 名の講師が録画プレゼンテーション、国内から 2 名の講師がライブプレゼンテーションをした。参加者は 232 名と大盛況であり、その内訳は韓国 25 名、米国 1 名、インドネシア 1 名、日本の県内外から 205 名だった。参加者アンケートの結果では講演内容について 91%、質疑応答について 88%が「とても満足」「ほぼ満足」と回答しており、高い満足度を示していた。

1-4　国際交流

1)　韓国の蔚山大学校医科大学看護課程交流派遣学生受け入れと交流

蔚山大学から学部交流派遣として学部生 8 名を同行教員 2 名と共に 7 月 27 日から 7 月 31 日までの 5 日間受入れ、本学に滞在する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の流行状況及び対応を両校で協議し、今年度は中止とした。

2)　本学学生の派遣

本学から学部交流派遣として学部生 8 名を同行教員 2 名と共に 8 月 17 日から 8 月 21 日までの 5 日間、韓国の蔚山大学校医科大学看護課程に派遣する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の

流行状況及び対応を両校で協議し、今年度の派遣事業は中止とした。

1-5　若葉祭

令和 2 年度の若葉祭は、COVID-19 による感染拡大防止を踏まえた開催方法を検討したが、オンラインで開催するための準備に要する時間が不足していること、若葉祭が地域に根付いた学園祭であり、高齢者への感染リスクが高いことなど、実行委員会で数回にわたる会議を行った結果、中止を決定した。若葉祭の中止について学内と地域に公表した。次年度に向け、若葉祭の開催方法など次期実行委員会と共に検討する。

1-6　公開講座

公開講座は、2020 年 9 月 12 日（土）午後に大分県立看護科学大学の講堂を会場として準備していた。また、テーマは「アラフォーから足腰の健康を考えようー健康寿命日本一の実現」で、講師は近畿大学生物理工学部谷本道哉准教授と、本学の稲垣敦教授などで計画し、チラシ作成まで準備していた。しかし、国内外の COVID-19 の感染拡大があり、審議会での協議により中止とした。次年度は COVID-19 の状況を見ながら開催の検討が必要だが、講師等の依頼は準備を進め、6 月のチラシ配布前に判断する。

1-7　アニュアルミーティング

アニュアルミーティングの目的は、教員相互の研究を知る機会とスキル向上の機会を持つことで、全教員（助教以上）が 3 年に 1 度以上の発表をすることになっている。また、特定研究費（学内競争的研究費、海外国内研修旅費等）取得者の報告が義務付けられている。

昨年度は、カレッジホールにてポスター掲示をし、参加者が密にならないように、4 グループ 30 分ずつの交代による発表が行われた。今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止対策としてオンライン（Zoom）による発表を行った。2 グループ 45 分ずつ発表者がブレイクアウトルームに待機し、参加者が関心のあるテーマのルームに入るという方法をとった。12 月に発表予定者に日程を、1 月に演題登録、2 月下旬に要旨〆切および当日の発表形式を連絡した。発表時は、画面共有するデータ（形式自由）を用いてディスカッションした。共有データで公開可能なものは、当日を含めて 3 日程度学内サーバーに保存した。

今年度の開催は、3 月 9 日（火）14:00～16:00 に実施された。発表は 16 演題、参加者は発表者 16 名含め 50 名であった。発表の要旨集は、図書館に所蔵された。初めてのオンラインを活用した発表となったことについて、新型コロナウイルス感染状況をみながら運用方法等を検討していく。

2.　入学試験等

2-1　学部入試

令和 3 年度入学試験の選抜区分及び募集人員、入学者選抜試験結果の概略は次表のとおりである。

選抜の区分及び募集人員

学　部	学　科	入学定員	募　集　人　員				
			一 般 選 抜		学校推薦型	社会人	私費外国人留学生
			前期日程	後期日程			
看護学部	看護学科	80 人	40 人	10 人	30 人	若干名 注 1)	若干名 注 2)

注 1)　社会人の「若干名」は学校推薦型の 30 人に含める。

注 2)　私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の 40 人に含める。

入学者選抜試験結果の概略　　（単位：人、倍、%）

区　　分		志願者	受験者	合格者	競争率	入　　学　　者		
						計	県内（率）	男性（率）
学校推薦型		89	89	30	3.0	30	30 (100.0)	1 (　3.3)
社会人		0	0	0	－	0	－	－
私費外国人留学生		1	1	1	－	1	0(0.0)	0(0.0)
一　般	前期日程	122	116	47	2.5	42	23 (　51.1)	4 (　9.5)
	後期日程	193	73	10	7.3	8	1 (　12.5)	0 (　0.0)
	計	315	189	57	3.3	50	24 (　48.0)	4 (　8.0)
合　　計		405	279	88	3.2	81	54 (　66.7)	5 (　6.2)

試験教科等

区　　分		教　　科	試 験 期 日	出 願 期 間
学校推薦型		総合問題 面接	令和 2 年 11 月 23 日（月・祝）	令和 2 年 11 月 2 日（月）～11 月 10 日（火）
社会人				
私費外国人留学生		総合問題 面接	令和 3 年 2 月 25 日（木）	令和 3 年 1 月 25 日（月）～2 月 5 日（金）
一　般	前期日程	総合問題 面接	令和 3 年 2 月 25 日（木）	令和 3 年 1 月 25 日（月）～2 月 5 日（金）
	後期日程	総合問題 面接	令和 3 年 3 月 12 日（金）	

2-1-1　学校推薦型

大分県内の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長が推薦した生徒を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接等	計
学校推薦型	200	50　注１） 段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする	250

注１）面接等 50 点に、出願書類（活動報告書）の評価点 20 点を含む。

2-1-2　社会人

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人選抜を設けているが、志願者はなかった。

年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を 3 年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、「総合問題」と「面接」を試験科目とし、試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接	計
社会人	200	40 得点が配点の 50%以下の場合は、総合点にかかわらず不合格とする	240

2-1-3　私費外国人留学生

日本国籍を有しない者であって、所定の要件を満たした在留資格を有する者に対して、私費外国人留学生選抜を実施した。

「総合問題」と「面接」を試験科目とし、試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接	計
私費外国人留学生	200	段階評価を行い、その評価が一定基準に達しない場合は不合格とする	200

2-1-4　一般選抜（前期日程）

令和 3 年度大学入学共通テストで本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、「総合問題」と「面接」により試験を実施した。

<table>
<tr><th>教科</th><th colspan="3">科目</th><th>教科・科目数</th></tr>
<tr><td>国語</td><td colspan="2">『国語』</td><td>1 科目</td><td rowspan="6">5 教科 7 科目
または
5 教科 8 科目</td></tr>
<tr><td>地理歴史
・公民</td><td colspan="2">「世界史Ａ」
「世界史Ｂ」
「日本史Ａ」
「日本史Ｂ」
「地理Ａ」
「地理Ｂ」
「現代社会」
「倫理」
「政治・経済」
『倫理、政治・経済』</td><td>左記科目から 1 科目

2 科目受験した場合は、いずれか高得点の科目を合否判定に利用</td></tr>
<tr><td>数学</td><td colspan="2">『数学Ⅰ・数学Ａ』
『数学Ⅱ・数学Ｂ』</td><td>2 科目</td></tr>
<tr><td rowspan="2">理科</td><td>①</td><td>「物理基礎」
「化学基礎」
「生物基礎」
「地学基礎」</td><td rowspan="2">左記科目から次のＡまたはＢを選択

Ａ　理科①から 2 科目及び
理科②から 1 科目
Ｂ　理科②から 2 科目</td></tr>
<tr><td>②</td><td>「物理」
「化学」
「生物」
「地学」</td></tr>
<tr><td>外国語</td><td colspan="2">『英語』</td><td>1 科目</td></tr>
</table>

本学で実施する個別試験を含んだ配点は下表の通りである。

試験区分	国語	地理歴史・公民	数学	理科	外国語	総合問題	面接	合計
大学入学共通テスト	100 注 1)	50 注 2)	100 注 3)	100 注 4)	200 注 5)	－	－	550
個別試験	－	－	－	－	－	200	30	230
計	100	50	100	100	200	200	30	780

注 1)「国語」100 点は、200 点に 0.5 を乗じた値とする。
注 2)「地理歴史・公民」50 点は、1 科目 100 点に 0.5 を乗じた値とする。
注 3)「数学」の配点は、1 科目を 50 点に換算し計 100 点とする。
注 4)「理科」の配点は、計 200 点を 100 点に換算する。
注 5)「外国語」の英語は、「英語（「筆記（リーディング）」・「リスニング」）」の合計点とする。
※面接は、段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする。

2-1-5　一般選抜（後期日程）

令和 3 年度大学入学共通テストで本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、「総合問題」と「面接」により試験を実施した。

<table>
<tr><th>教科</th><th colspan="3">科目</th><th colspan="2">教科・科目数</th></tr>
<tr><td>国語</td><td colspan="2">『国語』</td><td>1 科目</td><td rowspan="5">3 教科 3 科目
または
3 教科 4 科目
を選択

4 教科を受験した場合は、高得点の上位 3 教科を合否判定に利用

地理歴史・公民、数学、理科において複数科目を受験した場合は、高得点の科目をその教科の得点とし、合否判定に利用</td><td rowspan="6">5 教科 7 科目
または
5 教科 8 科目</td></tr>
<tr><td>地理歴史
・公民</td><td colspan="2">「世界史Ａ」
「世界史Ｂ」
「日本史Ａ」
「日本史Ｂ」
「地理Ａ」
「地理Ｂ」
「現代社会」
「倫理」
「政治・経済」
『倫理、政治・経済』</td><td>左記科目から 1 科目</td></tr>
<tr><td>数学</td><td colspan="2">『数学Ⅰ・数学Ａ』
「数学Ⅱ」
『数学Ⅱ・数学Ｂ』</td><td>左記科目から 1 科目</td></tr>
<tr><td rowspan="2">理科</td><td>①</td><td>「物理基礎」
「化学基礎」
「生物基礎」
「地学基礎」</td><td rowspan="2">左記科目から次の a または b を選択

a　理科①から 2 科目
b　理科②から 1 科目</td></tr>
<tr><td>②</td><td>「物理」
「化学」
「生物」
「地学」</td></tr>
<tr><td>外国語</td><td colspan="2">『英語』</td><td colspan="2">1 科目</td></tr>
</table>

本学で実施する個別試験を含んだ配点は下表の通りである。

試験区分	国語	地理歴史・公民	数学	理科	外国語	総合問題	面接	合計
大学入学共通テスト	(100)注 1)	(100)	(100)	(100)	200 注 2)	―	―	500
個別試験	―	―	―	―	―	200	30	230
計	300				200	200	30	730

注 1)「国語」100 点は、200 点に 0.5 を乗じた値とする。

注 2)「外国語」の英語は、「英語（「筆記（リーディング）」・「リスニング」）」の合計点とする。

※面接は、段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする。

2-2　令和３年度大学院看護学研究科博士課程（前期）

2-2-1　特別選抜

概要

修了後、県内で活躍を希望する優秀な本学学生を確保すべく広域看護学コースおよび助産学コースに特別選抜を設定して実施している。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	実践者養成	広域看護学コース	２名以内
				助産学コース	３名以内

試験の概略　（単位：人）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率(倍)	入　学　者		
					計	県内（%）	男（%）
看護学専攻	5	5	5	1.0	5	5(　100.0)	0(　0.0)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
小論文 面　接	令和２年 ７月 15 日（水）	令和２年 ５月 27 日（水）～６月５日（金）

2-2-2　一般選抜

概要

大学卒業者等を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。大卒者でないものは就業経験により出願前に資格認定を行っている。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	研究者養成		３名
			実践者養成	NP コース	10 名（うち５名は地域枠）
				広域看護学コース	５名
				助産学コース	10 名
				看護管理・リカレントコース	２名
		健康科学専攻			２名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面　　接	令和２年 ８月 24 日（土）	令和２年 ７月 27 日（月）～7 月 31 日（金）

試験の概略　（単位：人）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率(倍)	入学者		
					計	県内（%）	男（%）
看護学専攻	41	40	22	1.8	15	7(　46.7)	4(　26.7)
健康科学専攻	0	0	0	－	0	0(　0.0)	0(　0.0)

（二次募集）

概要

８月に実施した試験の結果、合格者が定員を下回ったコース・専攻を中心に 12 月に再度募集を行った。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	研究者養成		１名
			実践者養成	NP コース	若干名（地域枠を含む）
				助産学コース	３名
				看護管理・リカレントコース	１名
		健康科学専攻			２名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面　　接	令和２年 12 月 14 日（土）	令和２年 11 月 24 日（火）～11 月 30 日（月）

試験の概略

（看護学専攻）　（単位：人）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率(倍)	入学者		
					計	県内（%）	男（%）
看護学専攻	4	4	2	2.0	2	0(0.0)	2(100.0)
健康科学専攻	0	0	0	－	0	0(0.0)	0(0.0)

2-3　大学院博士課程（後期）

2-3-1　進学審査

概要

本学大学院博士課程（前期）を令和３年３月修了見込みの者を対象に、特別研究に関する発表、面接及び出願書類を総合的に評価して審査した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻 健康科学専攻	若干名

審査科目等

試験科目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
特別研究	論文審査の日 （1月末~２月初旬）	令和２年　　令和３年 12月25日（木）～1月5日（金）

審査の概略　（単位：人）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率(倍)	入　　学　　者		
					計	県内（%）	男（%）
看護学専攻	1	1	1	1.0	1	1(　100.0)	0(100.0)
健康科学専攻	1	1	1	1.0	1	1(　100.0)	0(　0.0)

2-3-2　一般選抜

概要

修士の学位を有する者等を対象に募集した。

募集人員

研究科名	課　程　名	専　攻　名	募 集 人 員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2 名
		健康科学専攻	2 名

試験科目等

試 験 科 目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 口頭試問	令和２年 8 月 24 日（土）	令和２年 7 月 27 日（月）～7 月 31 日（金）

審査の概略　（単位：人）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入　　学　　者		
					計	県内（%）	男（%）
看護学専攻	0	0	0	－	0	0(　0.0)	0(　0.0)
健康科学専攻	1	1	1	0.5	1	1(100.0)	1(100.0)

（二次募集）

概要

8 月に実施した試験の結果、12 月に再度募集を行なった。

募集人員

研究科名	課　程　名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2 名
		健康科学専攻	1 名

審査科目等

試 験 科 目	試　験　期　日	出　　願　　期　　間
総合問題 口頭試問	令和２年 12 月 14 日（土）	令和２年 11 月 24 日（火）～11 月 30 日（月）

審査の概略　（単位：人）

区　　分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入　　学　　者		
					計	県内（%）	男（%）
看護学専攻	2	2	2	1.0	2	2(100.0)	0(0.0)
健康科学専攻	0	0	0	－	0	0(0.0)	0(0.0)

3　学生の状況と進路

3-1　在学生の状況（令和２年４月１日現在）

学生総数　434 名（学部生 331 名、院生 103 名）

（単位：人）

学生数	計	県内	県外	男	女
１年次生	86	59	27	5	81
２年次生	81	56	25	6	75
３年次生	80	57	23	5	75
４年次生	84	50	34	10	74
計	331	222	109	26	305
割合（%）	100.0	67.1	32.9	7.9	92.1
大学院博士前期（１年次生）	34	19	15	6	28
大学院博士前期（２年次生）	42	25	17	5	37
大学院博士後期（１年次生）	4	1	3	1	3
大学院博士後期（２年次生）	4	2	2	0	4
大学院博士後期（３年次生）	19	14	5	6	13
計	103	61	42	18	85
合計	434	283	151	44	390

3-2　奨学金・授業料減免

■日本学生支援機構奨学金実績　（人）

	貸与		給付
	一種	二種	
学部	80	74	54
大学院	15	4	0
合計	95	78	54

■その他奨学金実績

・壽崎育英財団奨学金　学部生６名　大学院生１名

・公益財団法人山口県ひとづくり財団　学部生１名

・Ｋツル奨学金財団　学部生３名

■修学支援制度授業料・入学金減免実績（学部）　（人）

	前期	後期	入学金
全額免除	25	27	5
2/3免除	13	13	4
1/3免除	14	9	6
合計	52	49	15

修学支援制度減免額計　23,021,400 円

■大分県立看護科学大学授業料減免制度実績（学部・大学院）　（人）

	学部	大学院	計
全額免除	5	4	9
2/3免除	0	2	2
1/3免除	0	4	4
合計	5	10	15

本学制度授業料免除額計　5,715,200 円

3-3　卒業生・修了生の進路

3-3-1　学部卒業生

令和3年4月1日現在

1　卒業生の状況（81名）

出身地別	県内	49　名	60.5　%
	県外	32　名	39.5　%
進路希望別	就職	71　名	87.7　%
	進学	10　名	12.3　%

2　進路決定状況

就職	決定	68　名	95.8　%
	未定	3　名	4.2　%
進学	決定	10　名	100.0　%
	未定	0　名	0.0　%

3　就職先内訳

（1）　地域別

大分県内	33　名 (県内出身者25名＋県外出身者8名)	48.5　%
大分県外	35　名 (県内出身者14名＋県外出身者21名)	51.5　%
計	68　名	100.0　%

（2）　就職先

独立行政法人等	30　名	44.1　%
都道府県	5　名	7.4　%
市町村	4　名	5.9　%
民間	29　名	42.6　%
その他	0　名	0.0　%
計	68　名	100.0　%

大分県内	大分大学医学部附属病院(17)、大分県立病院(5)、新別府病院(3)、湯布院病院(2)、大分赤十字病院、南海医療センター、佐伯中央病院、福徳学院高等学校、豊後大野市立清川中学校、豊後大野市立三重東小学校
大分県外	福岡和白病院(3)、虎の門病院(2)、東京医科大学八王子医療センター(2)、東京医科大学病院(2)、神戸大学医学部附属病院(2)、浜の町病院(2)、済生会熊本病院(2)、東京大学医学部附属病院、北里大学病院、昭和大学江東豊洲病院、慶応義塾大学病院、国立国際医療研究センター病院、聖隷横浜病院、一宮市立市民病院、大阪大学医学部附属病院、兵庫医科大学病院、島根大学医学部附属病院、山口県済生会山口総合病院、山口大学医学部附属病院、愛媛大学医学部附属病院、九州医療センター、九州大学病院、九州病院、ひかり保育園、長崎原爆病院、島根県雲南市立掛合中学校、柳原病院

4　進学先内訳

大分県立看護科学大学大学院　9（広域看護学コース4名、助産学コース5名）
聖マリア学院大学専攻科助産師専攻1名

3-3-2　大学院博士課程（前期）修了生

令和3年4月1日現在

１　修了生の状況（修了生３６名）

出身地別	県内	20　名	55.6　%
	県外	16　名	44.4　%

２　進路決定状況

就職	決定	34　名	100.0　%
	未定	0　名	0.0　%
進学	決定	2　名	100.0　%
	未定	0　名	0.0　%

３　就職先内訳

（１）　地域別

大分県内	16　名	47.1　%
大分県外	18　名	52.9　%
計	34　名	100.0　%

（２）　就職先

独立行政法人等	7　名	20.6　%
都道府県	4　名	11.8　%
市町村	10　名	29.4　%
民間	13　名	38.2　%
大学	0　名	0.0　%
その他	0　名	0.0　%
計	34　名	100.0　%

大分県内	別府医療センター(2)、大分大学医学部附属病院(2)、杵築市立山香病院(2)、大分県立病院、大分市、豊後大野市民病院、大分岡病院、アルメイダ病院、別府中村病院、認知症グループホームこいけばる憩いの苑、すがのウィメンズクリニック、九州電力、大分キヤノンマテリアル
大分県外	福岡市(2)、北海道、関東労災病院、横浜市立大学附属病院、聖マリアンナ医科大学附属病院、大阪府、大阪市立総合医療センター、千船病院、兵庫医科大学病院、中国労災病院、北九州市、小倉医療センター、九州病院、田川病院、佐賀県、佐賀病院、佐世保市総合医療センター

※既に就職している施設名も併せて記載。

４　進学先内訳

大分県立看護科学大学大学院　博士課程後期２名（看護学専攻１名、健康科学専攻1名）

3-3-3　大学院博士課程（後期）修了生

令和3年4月1日現在

1　修了生の状況（修了生４名）

出身地別	県内	4　名	100.0　%
	県外	0　名	0.0　%

2　進路決定状況

就職	決定	3　名	75.0　%
	未定	1　名	25.0　%

進学	決定	0　名	0.0　%
	未定	0　名	0.0　%

3　就職先内訳

（1）　地域別

大分県内	1　名	33.3　%
大分県外	2　名	66.7　%
計	3　名	100.0　%

（2）　就職先

独立行政法人等	0　名	0.0　%
都道府県	0　名	0.0　%
市町村	0　名	0.0　%
民間	0　名	0.0　%
大学	3　名	100.0　%
その他	0　名	0.0　%
計	3　名	100.0　%

就職先	上智大学、日本赤十字豊田看護大学、大分県立看護科学大学

※既に就職している施設名を記載。

～R3.3月末現在の通算修了者人数	24名

4　授業等

4-1　学部

人のこころの仕組み

1 年次前期

吉村匠平

外界の対象や自分自身を認識する人間の脳の機能の特徴、2 年次前期「行動療法と発達心理」の理解に必要な学習心理学の基本的知識について、反転学習課題、講義時間内の小実験、ペアによる話し合い活動等を通して学習する機会を構築した。講義時間中にchatやZoomの投票機能を利用したアウトプットの機会を構築し、学生が他の参加者の考えに触れる機会を提供した。講義後の学習課題として、毎時講義終了後に講義内容の要約課題とコメントの作成を求め、次回授業時に採点の上返却した。講義に先立って評価基準を学生に開示し、学習到達状況を個別に確認できるようにした。

コミュニケーション論

1 年次前期

関根剛

本講義では、1 年次生を対象にコミュニケーションの基礎となる、行動観察や自己理解、プレゼンテーションなどの講義を行った。講義内容は、従来通り、情報の「受信」「理解」「発信」を中心にしてコミュニケーションについて理解を深めさせ、プロセスレコードの理解につなげていった。講義内容は「受信」として行動観察、「理解」として文化、構成的エンカウンターグループ、「発信」としてプレゼンテーション、ボディランゲージを中心に、リーダーシップやプロセスレコードなどを行った。今年度はすべて Zoom を用いた遠隔講義であったため、構成的エンカウンターグループも遠隔でブレイクアウトルームを利用するなどの工夫をしながら実施せざるをえなかった。従来の小テストは Google フォームを用いて行なうことで提出･採点などは従来よりスムーズであった。また、Zoom 機能の投票やチャットを用いることで、即時の意見集約や全員が意見を書き込めるなど、アクティブラーニングの面ではより有効であり、対面再開後もアクティブラーニングツールとして利用することが有効と考えられる。なお、評価は集合しての試験が困難であったので、毎回の小テストと最終レポートによった。

英語Ⅰ－A1

1 年次前期

宮内信治

英語音声では発音記号の習得を目標に、記号の確認と発声法を教授した。発音についての意識を高めることができた。学習における活用を今後も促進していく。講読では文法を確認し文意を理解することを目標に、20 世紀のエッセイ、文学、哲学を題材にした英語名文集をテキストとして用いた。併記されている日本語訳を参考に、その解釈に至る基本的な文法の理解を深め、添付の音源 CD を活用してスムーズな音読の習得を目指して練習させた。英文書写、音読暗唱を課題とし、達成させた。文の量を増やすことが今後の展望である。接触文量と時間を増やすために易しい英語で書かれた書籍を自ら選択して読む多読を実施した。率先して書籍を選び英語を通して世界に通じる教養を体得できた。より高いレベルの書籍に接する機会を提供し質の向上を図りたい。

英語Ⅰ－B1

1 年次前期

Gerald T. Shirley, Yume Takano

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

環境保健学概論

1 年次前期

甲斐倫明、小嶋光明、恵谷玲央

WHO の定義する環境保健に沿って、その基本的な考え方や、環境中に存在する様々な有害因子と健康影響との関係を理解するための方法を中心に講義をしている。健康影響として環境保健上注目されるがんを中心に取り上げ、環境との関係について最新のトッピクスと関係づけて講義を行うことで、環境リスクという概念の理解を助けるような講義となるように努めた。

健康情報学

1 年次前期

佐伯圭一郎

保健統計学、疫学の基本的な考え方を中心に講義を進め、「健康情報処理演習」において演習課題を組み込んで、理解の定着と応用力の向上を図っている。

これまでの課題である科目に関する興味関心が低く、授業への満足度が低いという傾向には、授業における看護と係わる具体例の追加や内容の精選を継続している。今年度の効果に関しては、オンラインによる動画配信形式での実施という授業形式の変更の影響を考慮する必要はあるが、授業評価については低下はなく、オンラインの練習問題と解説を充実させた効果と推測するが、不合格者が昨年度より大きく減少して 6 名となった。ただし、オンラインにおける授業において、対面以上に細かく熱心に質問をしてくる学生が存在し、オンラインでも例年より密度の高い指導が出来る反面、多くの受講者については対面よりも授業に対する反応がつかみづらいという課題が存在し、オンライン形式で継続予定の来年度においては学生の反応を把握することを、例えば授業中のアンケート機能利用などで試みる予定である。

健康情報処理演習

1 年次

品川佳満、佐伯圭一郎、渡邉弘己

看護職に必要な ICT（情報通信技術）のスキルや知識について教授した。各種基本アプリケーションの操作、データ管理、画像処理、データベースの利用等については、実際に PC を使った演習により技術の習得を図った。情報セキュリティや個人情報の取り扱い等の情報モラルに関すること、看護師が医療現場で扱う病院情報システムについては、講義（オンライン）形式で教授した。また、「健康情報学」、「生物統計学」で学んだ講義内容の理解を深めるために保健統計・疫学・統計データの分析を演習に組み込んだ。コロナ禍において対面で行う演習を効率的に行うために、事前に予習動画を閲覧させることで、当日の説明を少なくし、実際に PC を使った演習に多くの時間を割り当てた。課題や試験結果をみる限りでは、例年と同程度の知識・技術の修得ができていると考えられる。しかしながら、オンライン状況下でも、ある程度の演習が可能なように、クラウドサービスのさらなる活用を考えていく必要がある。

生体構造論

1 年次前期

濱中良志、岩﨑香子

今年度はコロナ禍のため、Zoom の様々な機能（アニメーションや書き込みなど）を駆使して、人体の構造（解剖学）通して教授した。Zoom の中のチャット機能を用いて、質疑応答を行った。

生体機能論

1 年次前期

濱中良志、岩﨑香子

今年度はコロナ禍のため、Zoom の様々な機能（アニメーションや書き込みなど）を駆使して、人体の機能（生理学）通して教授した。Zoom の中のチャット機能を用いて、質疑応答を行った。

健康運動ボランティア演習（救急法含む）

1 年次

稲垣敦、吉川加奈子

今年度は COVID-19 のため、これまでボランティアに参加していたほとんどのイベントが中止となった。また、実施された一部のイベントでも、3 密を避けられないボランティア活動であったため参加を中止した。このため、感染状況とイベントの再開状況を確認しながら、次年度に開講することとした。

自然科学の基礎

1 年次前期

甲斐倫明、小嶋光明、岩﨑香子、定金香里、渡邉弘己、佐伯圭一郎、恵谷玲央、吉田成一

自然科学の基礎は看護学を専攻する学生の基礎教養として生物、物理、化学、数学の基本的事項を講義している。高校までに十分に習得できなかった項目を学ぶと同時に自然科学の考え方を理解できるように努めた。講義の終わりに確認の小テストを行い、学生の理解度を把握しながら講義を進めた。

大学ナビ講座

1 年次前期

藤内美保、安部眞佐子、石本田鶴子、稲垣敦、今村知子、甲斐倫明、影山隆之、杉本圭以子、関根剛、高野政子、濱中良志、村嶋幸代

1 年次早期に開講することで、大学で学ぶために、リテラシーと呼ばれる身につけておくべき基本的な事項および技術を習得することを目的とした。内容は、「大学カリキュラムの方針・考え方」「大学で学ぶということ」「アルバイトリテラシー」「メモ・ノートの取り方」「図書館利用法」「大学の授業と試験の受け方（大学教育及び看護系大学の教育）」「心の健康維持増進・健康な生活維持向上」「伝える技術 1 : 文を書く、レポートを書く」「伝える技術 2 : 話す、プレゼンする」「伝える技術 3 : アサーション（さわやかな自己主張）」「メディアリテラシー : 新聞・報道、インターネット活用」の 10 回講師 12 名で、一部は 45 分間の内容とした。最終レポートの感想では、早めに知りたい内容が多かった、大学での学習の仕方や生活の仕方が分かり大変役に立った、多くの先生からのさまざまな観点で話を聞けて良かったという意見が多く、おおむね好評であった。

次年度は、伝える技術で、文章を書くことを強化する実践編の内容を加え、理論的で分かりやすいレポートが書ける内容を組み込む計画である。

看護学概論

1 年次前期

廣田真里、秦さと子

看護を原理的、本質的に理解することで看護を探求し、創造していく基盤を養うことを目的としている。看護の対象である生活者としての人間理解を縦軸として、看護の役割や機能を横軸に授業を組み立て、看護とは何かを考えられるように構成した。毎回、レポートにより、その日の学習内容を復習できるように意図的に課題を課した。

10 回の講義を通して、それぞれに「看護とは何か」「生活者としての人間の理解」など、未熟ながらも 1 年次生で考えられる限りの習得はできたと考える。また、これから看護を学習していくうえで、看護学を学ぶ意味、また看護学の基盤となる学問の習得の必要性にも言及し今後の学習の動機づけとなっていることが感じられた。看護を提供する上で柔軟な思考ができるように、看護の本質について理解できるように教授した。

生活援助論

1 年次前期

秦さと子、石丸智子、田中佳子、廣田真里、三ケ田暢美、森崎太郎

シミュレーションあるいは学生に対して安全、安楽に配慮した技術が実施できることを目標に授業を行った。今年度は、感染予防対策のため、4 月から 5 月の 12 回分の授業をオンライン授業とした。授業内容の理解を深めるために事前学習を課し、学習した基礎知識の定着を目的に課題レポートに取り組んでもらった。オンライン授業は、配布可能な物品を事前に配布しておき、リアルタイムで道具を使いながら技術展開のポイントを解説するなど見せ方の工夫を行った。6 月からは感染予防対策を行いながら、18 回分を対面授業で実施した。これまで学習した内容についても、実際に身体を動かして実施できる時間を確保し、希望に応じて課外でも教員指導が受けられる体制をつくった。多くの学生が複数回、教員による技術指導を希望し可能な限り対応した。概ね目標達成できた。やはり技術修得のためには、身体を動かしながら理解する時間の確保が重要であり、感染予防に配慮した授業展開の方法が今後の課題である。

初期体験実習

1 年次前期

廣田真里、秦さと子、石丸智子、田中佳子、三ケ田暢美

7 月 6 日（月）～10 日（金）で行われた。

COVID-19 の影響により、臨地実習は困難と判断し学内演習とした。

学内演習は、個人ワークとグループワークを組み合わせて実施した。

オリエンテーションを実習の約 1 か月前に実施し、課題図書（大学が所属する闘病記）及び課題 VTR（日本看護協会編集の 5 点の看護師の多様な場における活動の記録）を示し、それらを事前に学習して実習に臨むように周知した。臨地での看護師のケアの実際を臨場感豊かに伝えるため、実際の臨床現場で撮影し、VR に編集して準備した。撮影協力は国立病院機構大分医療センターにお願いした。

実習当日は、これらの VTR や VR を視聴しながら、ワークを進めた。グループワークの課題を提示し、計画的に話し合い、カンファレンスも計画的に実施した。

7 月 7 日（火）は大雨により、学内から自宅演習とし、グループで LINE または Zoom を通して演習を実施した。カンファレンスも行い、一部には教師も参加した。全員の参加が認められた。7 月 9 日（木）も前日の大雨の影響で交通機関等の影響があると考え、午前中は自宅学習としていた。午後は全員そろって出席できた。

学内実習を通して、患者中心の看護、看護の役割と機能等についてそれぞれに考えることができていた。7 月 9 日（木）は全グループがそれぞれ趣向を凝らし、工夫して 3 日間の学びを発表した。グループでの話し合いも良くなされており、気づきも多かった。発表会の態度も良く、質疑応答も活発になされた。

今年度は、COVID-19 の影響で学内演習となったが、VR の効果により臨場感は感じることができたと考える。グループワークも効果的に実施でき、発表資料の作成も良くできていた。臨地における緊張感がなかったためか、グループワークは活発に実施できており、その際、映像を通して場面を繰り返し視聴できたことでディスカッションが効果的となり、思考を深めたと考える。

健康論

1 年次前期

福田広美、平野亙

健康の概念と健康に対する考え方や意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。本年度は、COVID-19 の影響によりオンラインで講義を行った。学生が、健康について基礎的な知識を学び、自らの生活を通して健康な生活について考え、食や運動、睡眠、禁煙、心の健康など、実生活の振り返りを通して学習を行った。今後は、学生同士が互いに健康に支援しあうようなピアラーニングの機会を設け、看護職として健康を支えるための学びを強化する必要がある。

予防的家庭訪問実習（1 年次）

1 年次

藤内美保、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため実習開始を 10 月まで延期した、これに伴い単位認定に必要な訪問回数を 1 年次生は 2 回とした。1 年次生へのオリエンテーション（4 月 22 日）で、本実習の理念・目的、訪問方法等について詳しく説明した。1 年次生は 2～4 年次生とともに 4～6 名から成る 80 チームを構成し、各チームが 10 月 21 日以降 1 名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問した。また、看護研究交流センターからメルマガを年間 5 回配信し、自粛生活による高齢者への影響に関する調査結果や他学年が行った電話訪問の様子、オンライン講義での学びの情報共有を行った。1 年次生は特に、協力者とのコミュニケーションと、在宅高齢者の生活・人生の全体像を捉えることを主眼とした。訪問機会は少なかったが、上級生と協力者との会話から高齢者とのコミュニケーションにおいて工夫する点を考えたり、協力者への血圧測定の実施を通して生活の場で測定することの難しさを経験したりできた。しかし、感染拡大を懸念して、今年度の実習協力を見合わせる協力者もおり、訪問をできなかった学生もいた。この場合は、訪問風景の動画の視聴や訪問地域に関する講義の聴講で代えた。学生の年度末レポートによれば、訪問を経験できた学生は自身の訪問実習について評価し次年度への課題を挙げることができた一方、訪問を経験できなかった学生は次年度への訪問実習に不安を述べていた。このため次年度は、訪問実習を行えなかった学生へのフォローが課題となった。

言語表現法

1 年次前期

松田美香

人と人がお互いの意思を伝え合い、理解し合うために有効な手段である『ことば』について理解を深めることを目的に、講義を行った。単位認定者数 73 名であった。

韓国語

1 年次前期

黄昞峻

ハングル文字と発音と書き方を覚え、基礎的な文の構造を学びながら、簡単な会話のやりとりも試みる講義を行った。単位認定者数は 48 名であった。

哲学入門

1 年次前期

西英久

医療従事者の立場から、「人間とは何か」という哲学の根本的問いを考察する講義を行った。単位認定者数は 46 名であった。

法学入門(日本国憲法)

1 年次

二宮孝富

日本国憲法について、歴史的意義・基本原理をふまえ、特に人権に関する諸問題を学び、市民としての基本的な法的素養を身につけることを目的に、講義を行った。単位認定者数は 60 名であった。

スポーツ救護

1 年次前期

稲垣敦

この科目は選択科目であるが、例年、受講生希望者が多い。しかし、今年度は COVID-19 のため、一般社団法人大分県スポーツ学会主催の第 11 期スポーツ救護講習会が中止となったため、開講できなかった。なお、この科目は週末に開講されるため、何年生でも受講でき、受講希望者は次年度以降も受講できる。

人間関係学

1 年次後期

吉村匠平

心理学における「人格、性格」概念の理解について、実体論的理解（類型論、特性論）と状況論的理解の双方の視点から考える機会を提供した。自他を状況論的に理解するために求められる態度としてカウンセリングマインドについて学習する機会を提供した。反転学習課題、講義時間内の小実験、ペアによる話し合い活動等を通して学習する機会を構築した。講義時間中に chat や Zoom の投票機能を利用したアウトプットの機会を構築し、学生が他の参加者の考えに触れる機会を提供した。講義後の学習課題として、毎時講義終了後に講義内容の要約課題とコメントの作成を求め、次回授業時に採点の上返却した。講義に先立って評価基準を学生に開示し、学習到達状況を個別に確認できるようにした。全て遠隔講義で実施した。

カウンセリング論

1 年次後期

関根剛

本講義では看護に必要なカウンセリング理論およびコミュニケーションスキルを解説し、ロールプレイを取り入れることで体験的にスキル修得ができることを目標として行った。コミュニケーションスキルは随時、演習を入れながら解説し、ロールプレイ演習を行った。カウンセリング理論は、認知行動療法、精神分析、来談者中心療法の代表的な 3 つのアプローチを看護の現場への応用を意識しながら比較解説した。また、患者の PTSD と医療者の惨事ストレスについて解説した。本講義も Zoom による遠隔講義であったが、ブレイクアウトルームによるロールプレイは他のグループに邪魔されることなく、相手の表情を見られるため、対面よりも優れる面があった。ただし、それぞれのブレイクアウトルームに参加して状況把握となったため、全体を見回すことができないデメリットもあった。なお、評価は集合しての試験が困難であったので、毎回の小テストと最終レポートによった。

英語Ⅰ－A2

1 年次後期

宮内信治

講読では文法の確認と文意の理解を目標に、前期と同じ教科書のうち未習のテキストを用いて講義した。文法及び文章、パラグラフの構成について理解を深めた。また、シェークスピアのソネット、新渡戸稲造『武士道』を使い、「国際人」といわれる人に求められる教養と思考の一端に触れさせた。前期と同様に学習した英文の書写、音読暗唱を課題とし、達成させた。科学的文献における文章構成への理解と応用へと繋げていきたい。講義後半では、前期と同様、多読活動を行った。演習活動に慣れて学生の読む量が増加した。多読版の古典的名著への興味関心を喚起し、そうした作品に触れていくよう指導していきたい。

英語Ⅰ－B2

1 年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

生物統計学

1 年次後期

渡邉弘己、佐伯圭一郎

看護研究を遂行する上で必要となる記述統計学、推測統計学の基礎について講義を行った。単なる統計手法の暗記ではなく、なぜそうなるかという理論部分も重要視した。今年度は記述統計学をオンデマンド型、推測統計学をオンライン型で実施したが、レポートや試験の結果を見る限り例年と同程度以上の理解度は保持できたものと考えられる。しかしながら、理解度の差は大きく、数学を苦手としている学生も多いため、このような学生に対してどのように生物統計学を教授するかは次年度以降の課題である。

生体代謝論

1 年次後期

安部眞佐子

生化学と栄養学の教科書を用いて講義をした。生体構造論と生体機能論がより深く理解できるように、低分子から高分子へと物質の基本的な性質と代謝をあつかった。酵素、ビタミン、ミネラル、情報伝達、遺伝子発現へとすすみ、エネルギー代謝を生化学での細胞内の反応として説明し、さらに個体レベルで空腹摂食サイクルの臓器での代謝に力点をおいて講義した。栄養学では、食品の特性の理解、食事バランスガイドのなりたち、食事摂取基準について説明した。オンラインでの講義となったため、毎回、正誤問題を課し、試験はその中から問題を出題した。正誤問題について、結果をすぐに得ることができ、学生の理解度がよく把握できた。ほとんど正解できた学生が数名いた反面、復習が不十分なため回答できない学生が多かったので、その点を解消する必要がある。

生体反応学概論

1 年次後期

市瀬孝道

生体反応学概論では例年同様に病理学総論の講義を行ったが、今年度は新型コロナ感染拡大により、Zoom による講義となった。病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。講義内容は次に示すとおりである。退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。

講義の工夫としては、先ず学生が病気の基本的事項を理解し易い内容の教科書（カラーで学べる病理学 : 廣川）を選択し、また付録のテスト問題を使って復習ができるようにした。教科書を分かりやすく整理したプリントとパワーポインも使って進めた。これらの資料をネコバスに上げて学生が何時でも使用できるようにした。

生体反応学各論

1 年次後期

市瀬孝道

今年度は新型コロナ感染拡大のため生体反応学各論は Zoom による講義に切り替えた。講義は、例年同様に系統別に発生する疾病（病理学各論）について講義を行い、病理学総論から各論へと、疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。講義資料はネコバスに上げて学生が何時でも使用できるようにした。講義内容は以下に示すとおりである消化器疾患、循環器疾

患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患、運動器疾患、皮膚・感覚器疾患。

微生物免疫論

1 年次後期

吉田成一、松本昂

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、および病原微生物に対する生体の防御反応について、理解させることを主要な目標とした。

今年度はオンラインでの開講となったため、接続率は高かったが、集中度・参加度がどの程度であったかは不明であった。

試験の平均点は低下し、最高点及び最低点は上昇した。今年度は新型コロナウイルス感染症が話題となっており、受講生が感染症に関心を持つ必要性は理解していると考えたいが、本質的に科目履修を意義について理解不十分な学生が散見された。看護学生としてなぜ必要なのか理解した上で履修することが大事であるため、動機付けは必要と考える。

なお、履修者（再受験該当者を含む）89 名中、82 名が単位を取得し、昨年度より単位取得率が上昇した（また、1 名は、試験を受験しなかった）。

健康運動

1 年次後期

稲垣敦、中島麗理

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、学生がしたことのないような多くのレクリエーションやニュースポーツ、具体的にはフライングディスク、アルティメット、ユニバーサルホッケー、インディアカ、ソフトバレーボール、リングテニス、フットサル、3 オン 3、バドミントン、ドッジボール、ヨガ等を行なった。今年は、COVID-19 感染予防のため、運動中もマスクを着用し、手、運動器具、体育館の消毒を徹底し、飲料水を持参するように指導した。次年度も充分な感染予防対策の下で実施する予定である。

看護理論入門

1 年次後期

廣田真里、秦さと子、石丸智子、田中佳子、三ケ田暢美

看護現象を科学的に理解する力や看護の基盤となる看護観を養うことを目的とし、看護理論に関する基本的知識について学習し、看護理論と看護実践の関連・活用について考える科目である。

「理論」について解説し、代表的な看護理論家 3 人（ナイチンゲール、ペプロウ、ベナー）の看護理論について説明することで、「看護」「人間」「健康」「環境」等の看護のメタパラダイムについての理解を促した。その後、他の代表的な 3 人の理論家（ヘンダーソン、オレム、ロイ）らの看護理論について、グループで担当を分け、調べ学習し理解した結果を他のグループにわかりやすく説明するという演習課題を課した。20 グループ作成し、全グループに発表させた。他者に自分たちの調べたことを聞かせるため、発表方法については工夫が凝らされていた。それぞれの理論家の特徴については良く調べられていたものの、使われている概念の理解は不足しているグループもあった。これらの理論の特徴を基に、次の基礎看護学実習の記録用紙への活用を説明し、実践への活用の一端となることを示唆した。

グループワークの時間がやや少なく、発表も全グループであったため、ディスカッションの時間が短く、理解を深めるまでに至らなかったと考えている。

次年度は理解したことを深められるように、ディスカッションの時間を確保できる工夫を考慮する必要がある。

基礎看護学実習

1 年次後期

廣田真里、秦さと子、石丸智子、田中佳子、三ケ田暢美

COVID-19 の影響により当該計画の時期には臨地での実習は困難であったため、2 期に分け（1 年次後期：1 月、2 年次前期：7 月）計画を変更した。

第 1 クール：1 単位を学内とし、第 2 クールを次年度の 7 月（当該学生は 2 年生）に 1 単位臨地実習と計画変更した。

対象者を社会で生活している人として理解し、健康障害や入院による影響を理解するという目標で実施した。

第 1 クール：（1 年次後期の 1 月）を学内で実施した。

模擬患者を 4 例設定し、模擬患者とのかかわりを通して対象を生活者として理解できるよう計画した。

模擬患者からの情報収集をオンラインと対面で行い患者理解に努めた。最終日には、それぞれのグループで理解した患者像と必要な看護について、看護理論で学んだ記録様式を活用して発表を行った。学生の反応は、コミュニケーションの難しさと、次の実習への意欲であった。この演習を通して臨地実習と授業へのモチベーションが上がっていた。

第 2 クールは 7 月に臨地実習を行う予定である。第 2 クールを終えて、基礎看護学実習の評価を行うことになる。

看護疾病病態論Ⅰ

1年次後期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介

2単位20コマで、疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に行う。消化器疾患、呼吸器疾患、循環器疾患、血液・造血器疾患をオンラインで講義を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。最後の2コマでは、病態探究演習とし、「浮腫」の病態のメカニズムを探求する学習を行った。事前学習したことをプレゼンテーションし、ディスカッションするなど反転授業を実施した。学生は積極的に発表やディスカッションを行い、理解が深まったようだ。教科書は系統看護学講座シリーズを使用した。専門的で学習内容が膨大なため、中間試験を実施して、2系統ずつの試験とし、知識の整理ができるよう配慮した。

人間科学系との既習学習との連動を考慮して、授業の単元の進行を検討する。また病態探求演習は学生からもわかりやすいという感想で満足度も高かったため、次年度も継続する。

看護疾病病態論Ⅱ

1年次後期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介

2単位20コマで、疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に行う。腎・泌尿器疾患、内分泌・代謝疾患、脳・神経系疾患、運動器疾患、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚疾患をオンラインで講義を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。最後の2コマでは、病態探究演習とし、「悪心・嘔吐」の病態のメカニズムを探求する学習を行った。事前学習したことをプレゼンテーションし、ディスカッションするなど反転授業を実施した。学生は積極的に発表やディスカッションを行い、理解が深まったようだ。教科書は系統看護学講座シリーズを使用した。専門的で学習内容が膨大なため、中間試験を実施して、2~3系統ずつの試験とし、知識の整理ができるよう配慮した。

人間科学系との既習学習との連動を考慮して、授業の単元の進行を検討する。また病態探求演習は学生からもわかりやすいという感想で満足度も高かったため、次年度も継続する。

社会学入門

1年次後期

大杉至

社会学の巨匠たちが社会をどうとらえてきたかを概説し、それぞれの論者によって、様々な社会のとらえ方があることを理解し、社会を見る目が豊かになるように講義を行った。単位認定者数は13名であった。

文化人類学入門

1 年次後期

足立恵理

医療分野を含む現代的なテーマや事例の検討を通して、自他の複雑で多様な人間のあり方を見直す視点を獲得し、日常や医療の現場に応用する力をのばすことができるように講義を行った。単位認定者数は 75 名であった。

教職概論

1 年次後期

吉村匠平、関根剛、赤星琴美、麻生良太、堀本フカエ、横山秀樹

専門職としての教員の基本的な心構え、教職の意義、教員の役割、職務内容などについて学び、職業としての教師が、どのようなものであるのかについて各自のイメージを作り上げる機会を提供した。講義の内容についてお互いの意見や疑問を討論し、一つ一つについて自分の意見や考えがもてるようにすることを通して、教師としての構えや教師としてのありようについて考える機会を提供した。

行動療法と発達心理

2 年次前期

吉村匠平、関根剛

行動療法については、より実務的に理解できるよう、多理論統合モデルを用いて戦略的に考える視点を中心の構成としている。評価は試験及び行動改善プログラムのレポートによって行った。

発達心理については、言語発達、運動発達、進化心理学、発達障害について、受講者が互いに意見を交流する機会を設けながら、講義を進める形を取った。評価は、毎回の要約課題とコメント、反転学習課題の成績を総合して行った。

評価は、それぞれの評価 50%ずつとして評価した。

英語Ⅱ－A1

2 年次前期

宮内信治

高度な語彙の理解習得を目標に、原書 Word Power Made Easy を教科書として用いて英語語彙の増強を図った。ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識を習得しつつ、性格描写、医療

職者などを表わす語彙を学び、その派生語について成り立ち、意味、発音を習得させた。単語小テストを行い、学習成果を確認させた。演習課題として教科書内の原文を音読暗唱させた。看護に関する英語原著論文の緒言を予習として文法解析させ、講義時の解説をもとに解釈の修正と文法理解を促したうえで和訳させた。論文読解における語彙の重要性と文法解析の有効性を認識させることができた。教養を高める語彙の取得が今後の課題である。1 年次に引き続き、多読活動に取り組ませた。語数のより多い書籍を読ませた。生涯学習としての多読の意義の理解を促進したい。

英語Ⅱ－B1

2 年次前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

環境保健学詳論

2 年次前期

小嶋光明、甲斐倫明

環境保健学詳論は生活の中で遭遇する身近な環境因子(物理的因子、化学的因子、生物的因子）が及ぼす健康影響についての基礎知識を講義している。熱中症、インフルエンザ、PM2.5 などの身近な健康影響を例にして、その予防策を学生に発表してもらうことにより、問題の把握、予防や管理のあり方を考えることができるよう配慮した講義を行った。

生体薬物反応論Ⅰ

2 年次前期

吉田成一

生体薬物反応論Ⅰは薬理学総論、末梢神経系作用する医薬品および生活習慣病、感染症に用いる医薬品に関する講義を行う科目である。学習範囲が絞られているため、理解度が高い学生が多い状況であった。しかし、一部学生にとっては、既修得科目の知識と本講義内容の医薬品に関する知識を統合することが難しいためか、学習範囲が広いと感じ、理解度が低くなると思われる学生が今年

も散見された。また、自律神経に関する内容の理解が低いことが医薬品の作用機序理解の妨げになっている状況であったため、改善が必要と考える。

今年度はオンラインでの開講となったため、接続率は高かったが、指名しても発言がないなど、集中度・参加度がどの程度であったかは不明であった。

試験の平均点は、昨年に引き続き上昇し 70 点台となった。これは、半数以上の受講者が学修内容を比較的十分理解できていることになると整理できる。また、最高点、最低点ともに昨年と同程度であった。一方、再試験受験者の合格率は低く（15 名中 9 名合格、6 名不合格）、学修方法の改善方法を検討する必要があり、予習復習の徹底を求めることも検討したい。

なお、履修者（再受験該当者を含む）88 名中、82 名が単位を取得した。単位取得率は昨年度より上昇し 95%を超えた。

健康運動学

2 年次前期

稲垣敦

1 年次の健康運動では運動の楽しさや必要性を体感した。2 年次のこの健康運動学では、さらに科学的知見に基づいて運動の重要性を講義した。運動学も科学であるため、はじめに科学について考え、その後、バイオメカニクスや生物の進化の視点を取り入れて、加齢や不活動・運動による身体機能の変化や健康との関連性を講義することで、運動の重要性を教授した。また、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても講義した。今年は COVID-19 のため、3 密を避けるため講堂で授業を実施した。次年度は、Zoom で実施する予定である。

医療技術論

2 年次

秦さと子、石丸智子、田中佳子、廣田真里、三ケ田暢美、森崎太郎

対象者の安全と安楽を優先するとともに、検査の目的や治療の効果が最大限に達成されるように支援する方法の習得を目指して授業を展開した。今年度は、感染予防対策のため、前半の 13 回分は 4 月から 6 月にオンライン授業を実施した。授業内容の理解を深めるために事前学習を課し、学習した基礎知識の定着を目的に課題レポートに取り組んでもらった。オンライン授業は、配布可能な物品を事前に配布しておき、リアルタイムで道具を使いながら技術展開のポイントを解説するなど見せ方の工夫を行った。後半の 17 回分は 1 月から 2 月に感染予防対策を行いながら、対面授業を実施した。これまで学習した内容についても、実際に身体を動かして実施できる時間を確保し、希望に応じて課外でも教員指導が受けられる体制をつくった。多くの学生が複数回、教員による技術指導を希望し可能な限り対応した。概ね目標達成できた。やはり技術修得のためには、身体を動かしながら理解する時間の確保が重要であり、感染予防に配慮した授業展開の方法が今後の

課題である。

ヘルスアセスメント

2 年次前期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介

ヘルスアセスメントでは、身体的側面からの観察に主眼を置き、ヘルスアセスメントの意義、基本技術、健康歴聴取、消化器系、呼吸器系、循環器系、脳・神経系、運動器系のアセスメントについて、講義・演習をオンラインで実施した。フィジカルイグザミネーションのスキルを学ぶ学内演習を対面ですることができなかったため、e ラーニングの事前学習や Zoom を駆使して授業の工夫をしたが、学生自身が技術修得するということについては課題が残った。

また最後の 4 コマでフィジカル事例演習をオンラインで行った。事例を設定し、慢性閉塞性肺疾患の症状、メカニズム、合併症について事前学習し、注意すべき症状や身体所見や事例患者に生じる可能性がある病態とその理由について、小グループでディスカッションすることで、臨床推論、仮説検証過程の思考を学ぶことができた。試験は、筆記試験と対面での実技試験を予定していたが、COVID-19 の拡大の時期と重なり実技試験はオンラインによる口頭試問とした。

フィジカルイグザミネーションの正しいスキルを身に付けるため、授業の工夫をして改善に努めていきたい。

看護アセスメント概論

2 年次前期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介

看護過程の展開の基礎的能力を身につけるため、看護過程の概要、看護過程と基礎理論、アセスメント、看護診断、計画、実施、評価について、講義を行った。看護過程を展開するために、実習経験が少ない 2 年次学生は患者のイメージができないため、DVD 事例を視聴させ、映像として対象者をとらえることができるように工夫した。1 人の学生が一連のプロセスで看護過程の思考が整理できるよう個人ワークを行い、身体面、心理面、社会面から必要な情報をピックアップすることから、アセスメント、看護診断、計画および評価までの看護記録の記載を行った。学生の記録を確認し、何ができて、何ができていないかを資料としてまとめ、学生にフィードバックし、学生は再度自己の看護記録を修正し、個人ワークのレポートを完成させた。必要な学生には、個人指導をして看護過程の学習の理解を強化した。今年度は COVID-19 の影響により、対面での個人指導ができにくい状況はあったが、学生は全員、目標を到達できた。

看護アセスメント演習

2 年次後期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介

看護過程の基本的知識を活用するために、5 名～6 名からなるグループ演習を行った。看護過程を展開するために作成された胃がん術後の事例の DVD を視聴させ、グループディスカッションしながら看護過程を展開させた。COVID-19 の感染状況が落ち着いている時期でもあり、対面での演習を行い、学習成果は例年と同様に全グループは良好な評価で目標達成できた。病名や健康障害の段階、発達段階、性別や個別性のある情報から看護診断が導けた。学生は既に個人ワークで看護過程の展開を行っているので、グループメンバーとディスカッションし、視野が広がり、理解が深まることを意図した。中間発表会と全体発表会を行い、ディスカッションすることで自己のグループの強みや不足部分を確認し改善・修正できていた。

予防的家庭訪問実習（2 年次）

2 年次

藤内美保、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため実習開始を 10 月まで延期した、これに伴い単位認定に必要な訪問回数を 1 年次生は 2 回とした。2 年次生は他学年とともに 4～6 名から成る 80 チームを構成し、各チームが 10 月 21 日以降 1 名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問した。また、看護研究交流センターからメルマガを年間 5 回配信し、自粛生活による高齢者への影響に関する調査結果や他学年が行った電話訪問の様子、オンライン講義での学びの情報共有を行った。2 年次生は特に、協力者の生活を把握し、在宅生活を維持するために必要な条件を考えることを主眼とした。訪問を延期している期間には、訪問地域に関するオンライン講義を実施した。さらに加速する高齢化、公共交通機関の撤退等、地域が抱える課題や自粛生活による地域住民への影響について訪問地域のステークホルダーからの話を聞くことで、訪問地域の課題を知るとともに、協力者を取り巻く現状を把握し、本実習を通して自分たちに何ができるかを考えることができていた。しかし、感染拡大を懸念して、今年度の実習協力を見合わせる協力者もおり、学生の中には訪問実習を行えなかった者もいた。多くの 2 年次生が訪問を予定していた 11 月と 1 月の実習が休止となり、手紙による問安に代えた。文書で体調を訪ねる、近況を伝える、相手を慮るといった新しい経験を通して、その難しさやこれまで行えていた訪問実習の大切さを感じていた。このため次年度は、訪問を行えなかった学生へのフォローが課題となった。

成人看護学概論

2 年次前期

森加苗愛

本講義の目的は、成人期に生じる多様な健康問題と対象への看護援助の概要を学ぶことである。講義は全てオンラインで実施した。講義内容は、ライフサイクルにおける成人期の特徴を、発達課題、健康の側面から総合的に理解し、看護を実践していく上で基盤となる知識や理論を教授した。理論の講義では、事例を通して講義を展開し、看護実践を意味づけ、理解できるように工夫した。また、オンラインでの講義の工夫としてグループディスカッションや投票機能を活用して学生が主体的に講義に参加できる機会を工夫した。

本概論を基盤として、成人看護援助論で成人の特徴を踏まえた看護援助について具体的に教授して学生が更に主体性を伸ばすことができるよう支援を行っていくことが課題である。

老年看護学概論

2 年次前期

小野美喜

老年期に生じる健康問題の特徴と高齢者への看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける老年期の特徴、健康問題をもつ高齢者の身体的、心理的、社会的問題を理解し、慢性疾患や機能障害を持ちながら日常生活を送る対象への看護援助に必要な知識を教授した。全てオンライン実施とし、各授業後に課題を提示しレポート作成ができるようにした。さらにオンライン上での小グループディスカッションにより事例検討を実施した。リモート環境によるトラブルもなくレポート学習や意見交換ができ、授業評価でも学生参加の満足度が高かった。オンライン授業となる場合は今後も継続していきたい。

成人看護援助論

2 年次前期

小野美喜、佐藤栄治、宿利優子、中釜英里佳、堀裕子、森加苗愛

成人期にある対象の特性をふまえ、系統的に特徴のある健康障害について、急性期、慢性期、回復期、終末期の看護援助方法を教授した。教授方法は、今年は COVID-19 の影響から、全ての講義をオンラインで行った。各教員が担当講義のハンドアウト資料と教科書を用い、講義を行ったが、ブレイクアウトルームによるグループワークを取り入れるなど、オンラインでありながら一方的な講義とならないように努めた。

講義の具体的な内容としては、がん患者へのケアや周手術期看護を実践的に学ぶことができるよう、解剖整理に関する教材を作成し理解しやすく工夫した。また、臨床の看護実践のリアルを学

ぶことができるよう、講師として急性・重症患者看護専門看護師を招聘し講義を行った。慢性疾患看護においては、行動変容に関する理論を理解できる様、事例を通しての看護援助方法を展開して学べるようにした。学内実習は、例年血糖値測定・インスリン注射を行うが、今年は COVID-19 の影響を鑑み見合わせた。次年度、3 年次生になってからの演習に取り入れる予定である。退院指導の講義もオンラインで行ったが、グループに分かれて事例を設定し、実際に退院に向けた看護問題のアセスメント、看護計画、指導媒体を作成し発表・全体討論を行った。ロールプレイを行うことはできなかったが、実際の退院指導をイメージしながら計画を立案して発表することができた。

今後も、更にグループディスカッション等を組み込み、学生が主体的に学び、発言できる講義・学内実習内容となるように工夫をしていく。

小児看護学概論

2 年次前期

高野政子、草野淳子、足立綾

本科目では、小児看護の特質と概要、および小児の成長発達を理解することを目的としている。小児看護の基礎として、小児保健や教育・福祉・保育の概念と、小児医療の動向を講義して、小児看護の役割と重要性について教授した。今日における小児看護の重要性の理解を促すために、まず小児医療の変遷と小児看護の特殊性をスライドや DVD を使用してイメージ化すること、自分の中の子ども観を認識するための課題レポートを課した。また、小児看護において重要な家族と親子関係に着目できるように講義を組み立てた。特に重要な概念として小児の成長と発達については形態・機能的発達、7)小児看護で用いる理論などを講義した。講義コマは、10 コマに集約することができた。

母性看護学概論

2 年次前期

林猪都子、梅野貴恵、永松いずみ

母性看護学の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖の側面から、女性の生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への援助活動を学び、母性各期における母性看護の役割と重要性について認識を深めることを目的として教授した。

新型コロナウイルスの影響を受けて Zoom 講義にて実施した。教材をネット配信できるように作成して講義に望んだ。講義中に学生の反応が見えないために Google フォームによる学び、感想を講義終了後に学生に求めた。その結果、学生の講義に対する学びや質問が見られ、それを次回講義に反映することができた。Zoom 講義は教員が不慣れなため、学生に不利益がないように、研究室メンバーで講義を視聴し、フォローしながら講義に取り組んだ。Wi-Fi 使用による講義のために時折ネットの接続が不安定になることがあった。次年度も新型コロナウイルス感染の収束が見ら

れない可能性があり、Wi-Fi 使用の講義から有線使用に切り替えてトラブルを回避するように実施し、次年度も Google フォームによる学生の学び、感想を求め、次回の講義に生かしたい。

社会保障システム論

2 年次

平野亙

在宅医療をはじめ福祉・介護と保健・医療の統合が重要視される今日の看護職にとって、社会保障の制度と社会資源に関する理解は不可欠である。講義時間数が限られているため、今後の講義の展開に備えて、社会保障の全体像が把握できるよう講義内容を整理し、特に他の講義で触れることの少ない福祉を中心に講義を組み立てた。まず社会保障制度の意義と構造を論じ、次いで医療・保健システム、福祉制度の全体像を理解するために、所得保障、医療保険、医療法、感染症対策に引き続き、母子・児童、高齢者、障がい者を対象とする個別的な保健・福祉政策について講義した。

コロナ禍のため、Zoom による遠隔授業となったが、期末試験の成績は良好であった。

音楽とこころ

2 年次前期

小川伊作

クラシック音楽、ジャズ、フォークソングの 3 つのジャンルの音楽を取り上げ、多様な音楽に触れることを通して、「音楽とは何か?」、「音楽の意味するもの」について、そして音楽 と人間との関係についてふりかえる機会とし、もって音楽についての理解を深める講義を行った。単位認定者数は 34 名であった。

美術とこころ

2 年次前期

澤田佳孝

便利さを重視する現代社会においては、とかく失われがちな、人が生まれながらに持っている物を作る力、表現する心・工夫する能力などを、描く体験を通して復活させ、自己を表現することの楽しさ、感じたこと・考えたことを形に表すこと(造形表現)の歓びを理解する講義を行った。単位認定者数は 18 名であった。

保健ボランティア

2 年次

藤内美保

保健医療に関するボランティアを体験し、体験を通じて、保健医療現場におけるボランティアの意義について理解を深めることを目的としている。学生自らが、保健医療に関わるボランティアを探し、参加手続きをとり、体験し、参加レポートを記載するなど、自主性や行動力の向上につながっている。今年度は新型コロナウイルス感染拡大を懸念して、ボランティア活動も自粛され、学生は参加することがかなり困難であった。地域の自治会さんに活動を紹介してもらい、高齢者や小児と関わるボランティア活動を体験し学びとなることでも認める方向とし柔軟な対応とした。

養護概論 I

2 年次前期

赤星琴美、小野治子

本年度は夏休みの集中講義とし、学校保健活動を担う養護教諭の基本理念、教育職員としての養護教諭の基本原理などについて講義した。具体的には、養護についての本質や基本的概念、職業倫理などを、既存の資料や図書館におかれている本・資料などを用いて学習し、ディスカッションにより学びを深めた。集中講義のため、学生が集中して授業に参加することができ、さらに、グループワークを多く取り込み、それぞれの学生が及ぼすグループダイナミクスを活用し、主体的に学習することができた。年度により履修人数が異なるが、今後も学生が集中できる講義方法を工夫していきたい。

生徒指導

2 年次前期

長谷川祐介、関根剛、吉村匠平

教師として児童生徒を対象に生徒指導を行う上で理解すべき考え方（法制度を含む）や理論、実践のための方法などを理解するとともに、学校で実際に生徒指導を行うための実践能力の基礎を養うことを目的に講義を進めた。

教育相談

2 年次前期

中島暢美、飯田法子、河野伸子

学校教育における教育相談の意義や役割について理解し、不適応とは何か、適応障害とは何かについての理解の構築を試みた。また、受講者各自が体験したことなどを課題化して、どのような対応が必要か、どのような組織との連携が必要かなどを、グループで話し合わせた。

英語Ⅱ－A2

2 年次後期

宮内信治

高度な語彙の理解習得を目標に原書 Word Power Made Easy を教科書として、医療分野を含む科学に関連する英語語彙の学習定着を行った。医療職者を含む実践者や科学者を表わす語彙とその派生語を学習させた。単語小テストを行い、学習成果を確認させた。演習課題として教科書内の原文を音読暗唱させた。看護に関する英語原著論文の本論を予習として文法解析させ、講義時の解説をもとに解釈の修正と文法理解を促したうえで和訳させた。論理的な文章構成と国際的な看護の現状の一端を理解させることができた。学生各人の卒業研究への応用及び日本を含む世界の看護界の動向への興味関心を促進喚起したい。

英語Ⅱ－B2

2 年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

放射線健康科学

2 年次後期

甲斐倫明、小嶋光明、恵谷玲央

放射線健康科学は現代医療に必要不可欠な放射線と健康との関係を理解するために、放射線の物理、生物・健康影響、その防護についての基本的な事項を講義している。また、医療での放射線利用についても紹介し、放射線問題の重要性を理解できるように配慮した。さらに、同時期に実施している健康科学実験（自然放射線の測定、診療用 X 線装置の散乱線の測定を通して放射線の量的な理解）と合わせて、医療における放射線利用に対する基礎知識がより深く理解できるように努めた。

健康運動学演習

2 年次後期

稲垣敦

学生が自分の健康課題を見つけ、主体的に目的や目標、運動内容を定め、前期の健康運動学で学んだ知識を活用して自分に合った運動メニューを作成して 15 週間実施した。また、この最初と最後に自分の目標に合った評価指標を選んで計測し、前後の値を比較して効果判定を行い、考察した。さらに、授業のはじめに運動継続のための行動変容理論の短い講義を行った。今年度は COVID-19 のため、3 密を避け、手、運動器具等の消毒を指導し、運動中のマスクの着用を義務づけるとともに、大学で授業時間中に運動する以外に、自宅周辺で運動することも認めた。次年度はコロナ禍の中で運動実施を促進できるように行動変容理論の講義を効果的に使うことが課題である。

健康科学実験

2 年次後期

濱中良志、岩崎香子、安部眞佐子、市瀬孝道、吉田成一、定金香里、甲斐倫明、小嶋光明、恵谷玲央、稲垣敦

健康科学実験は基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的としている。実験テーマは 11 テーマからなる実験を行った。1）人体解剖学実習（担当者：濱中良志、岩崎香子、安部眞佐子）、2）組織学実習（担当者：濱中良志）、3）血液検査（担当者: 定金香里）、4）基礎微生物学実習（担当者：吉田成一）、5）ラットの解剖（担当者：市瀬孝道、吉田成一、定金香里）、6）測定誤差と変動（担当者：甲斐倫明）、7）放射線（担当：恵谷玲央）、8）染色体異常（担当者：小嶋光明）、9）呼吸循環器系持久力（当者者：稲垣敦）、10）心電図（担当者：岩崎香子）、11）食物栄養学実習（担当者：安部眞佐子）。コロナ禍のため、一部は Zoom を用いて演習形式で行った。

看護アセスメント学実習

2 年次後期

藤内美保、廣田真里、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介、石丸智子、後藤成人、佐藤栄治、篠原彩、宿利優子、秦さと子、田中佳子、谷村優香、丸山加菜、三ケ田暢美、森崎太郎、渡邉一代

COVID-19 感染が県内である程度落ち着いている状況で、実習施設 3 施設のうち、大分赤十字病院と大分大学医学部附属病院が実習を受け入れていただいた。実習方法は変更しても実習目的・目標は例年通りとし、学ぶ権利を保証した。学生を 1 組、2 組と分け、前半 1 週間の臨地実習、後半学内演習する組と、前半学内演習、後半臨地実習する組で、全員が 1 週間の臨地実習ができるようにした。学生は 2 週間の実習期間で、臨地実習の受け持ち患者の看護過程の展開（例年の中間カンファレンスの目標まで）と学内演習で看護過程の評価までの一連のプロセスを行った。また、臨床の指導者の声を届けるために、講話を企画した。テーマは「看護学生、新人看護師に臨むこと」「看護過程における教育で伝えている大切なこと」「アセスメントの重要性」、また学内実習の事例の疾患であった「心不全患者の看護」についてオンラインによる講話で、インパクトがあった。学生全員が、2 事例の看護過程の学修を達成した。教員の指導体制は、学内演習を担当する教員と臨地実習指導を担当する教員に分かれた。

学生は健康管理に注意し、大きなトラブルや COVID-19 に感染することもなく、無事に実習を終えることができた。

老年看護援助論

2 年次後期

小野美喜、甲斐博美、佐藤栄治、宿利優子、堀裕子

老年看護援助論では、対象者を高齢者とエンドオブライフケアの概念に含まれる緩和ケアが必要な患者としている。学習目的は、老年期に特有な障害や疾病をもつ高齢者の健康問題や看護について理解することと、主にがん患者とその家族のトータルペインを考え、緩和ケアの基本を理解することである。本年度は COVID-19 の影響によりオンラインで講義を行い、学生が加齢に伴う諸機能の低下や日常生活への影響に関する基礎的な知識、病院や施設での看護の実際について学び、加えて、DVD を視聴し終末期のがん患者の事例をトータルペインの視点で考え学びを深められるよう事例検討を多場面で取り入れた。その際、事例検討前の事前学習や Zoom のブレイクアウトルームで発言することで主体的に学習に取り組めるように授業を行った。事例検討を重ねることで、学生からの発言も増えてきた。今後も学生が主体的に学習に取り組めるように、事例内容や提示方法を検討していく。

母性看護援助論Ⅰ

2 年次後期

林猪都子

妊娠期、分娩期の生理と異常および心理・社会的特徴とその看護を学ぶことを目的に教授した。

新型コロナウイルスの影響を受けて、講堂で講義を実施した。教室と違って広い空間で、講義模型を提示しても見えにくく、資料の配布、講義開始前の小テストの回収の効率がよくなかったので、次年度も講堂で講義を実施する場合は、教材の作成と資料の配布を工夫する必要がある。

精神看護学概論

2 年次後期

影山隆之

健康を心理－社会的側面から理解するために、健康日本 21、精神力動論、心理社会的発達論、ストレス論、及び国際生活機能分類などの考え方と、主な精神症状・精神疾患、アディクション、自殺予防などのトピックを紹介するとともに、歴史と法制の概要を講義した。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い対面授業で毎回ハンドアウトを配布できない可能性が考えられたので、前年の資料全体を早々に改訂して一括印刷・製本し、授業前に配布した。予習とくに演習問題について考えてくることを求め、授業内でディスカッションをした。授業中にはできるだけ自験例を紹介するとともに、前年のリアクションペーパーで理解度が不十分だった内容について説明を充実させした。出席確認を兼ねたリアクションペーパーに記載された質問や感想に対する回答を、3 日以内に「リアクションへのリアクション」として pdf ファイルで学生に公開した。実際には最後の 2 回を除いて対面授業ができたが、前年以上にリアクションが多く、とくに 2 回のリモート授業ではリアクションを紙でなく Google ドライブで集めた結果、おびただしい量のリアクションが得られた。学生による授業評価や筆記試験時に書かれた感想によれば、これらの方式は非常に好評であり、精神看護への関心を高め、スティグマを低下させる効果があったと考えられたので、次年度も同様の方法を継承する予定である。

地域看護学概論

2 年次後期

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、藤内修二、村嶋幸代

地域における個人・家族、集団への看護活動を行う意義、看護師に求められる役割について考えることのできる素地を養うため、地域看護の歴史と最新の情報を交えた講義を行った。地域看護の基本的知識として、地域住民が主体的に活動することを支える看護職の発展と今後の展望について地域看護分野の先駆的研究者として村嶋学長による講義を行った。公衆衛生意義、プライマリ・

ヘルスケアとヘルスプロモーションについては、研究と大分県における豊富な実践活動のある藤内修二氏による講義を行った。さらに、地域看護活動の場と特性、地域看護活動の対象と方法（個人・家族、集団、地域社会）などについて講義を行った。また、学生が地域で活動する看護職を具体的にイメージでき、かつ、地域看護についての理解が深められるよう教授した。

家族看護学概論

2 年次後期

福田広美

個人を取り巻く家族に対する看護を学ぶための講義を行った。家族看護学の理論や概念、家族機能や構造などの基礎的な知識を学習した。また、家族看護に関する主要な理論として、家族発達理論、家族システム理論、家族適応理論、家族ストレス対処理論について事例を交えながら講義を行った。これらの講義で得た知識をもとに、学生が家族看護事例を通して、家族看護について実際にアセスメントを行い、具体的な看護を考えながら学習を行った。

国際看護学概論

2 年次後期

桑野紀子、丸山加菜

講義の目的を①世界の人々を看護の対象としてとらえ、世界の保健医療に関する課題について学び、その背景や対策について考察すること、②日本国内の在留外国人や訪日外国人への健康支援に関して、対象者の文化社会的多様性に配慮する看護について学ぶこととし、内容構成した。JICA デスクから講師を招聘し、SDGs に関する参加型のワークショップを行った。また、海外での看護実践に関して、担当教員の JICA 体験談や、赤十字赤新月社の活動について外部講師の体験談を組み込んだ。開発途上国の保健医療に関する状況や健康課題への理解を深めるために適宜動画視聴を組み込むなど工夫した。試験で理解不足による誤答が多い分野もあったため、興味を持って理解を深めてもらえるよう教授方法を工夫する必要がある。

看護管理学概論 I

2 年次後期

福田広美、平野亙

看護管理の概念および看護管理を取り巻く社会背景を理解し、看護職として看護のマネジメントについて主体的に学ぶことをねらいとした。本年度は、COVID-19 の影響によりオンラインで講義を行った。学生が、看護管理の基礎知識として医療法や保健師助産師看護師法などを学び、組

織的に看護を行ううえで必要な仕組みや医療安全などに関する学習を行った。今後は、学生が、看護管理に関する新たな法制度を学びつつ、看護管理の基礎知識について事例を通して学ぶことで、学びを深められるようにする必要がある。

看護の倫理

2 年次後期

平野亙、小野美喜

看護職に必要な医療倫理・生命倫理の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく判断のための思考訓練を行うことを目的に講義を行った。講義は、「Bioethics・生命倫理の展開と課題」・「Profession の責任と倫理」・「臨床倫理：倫理的判断の方法」・「意思決定の倫理」・「生殖補助医療にかかわる倫理」・「出生前診断と倫理」・「人間の尊厳、個人の尊重と自立支援」・「End of life に関わる倫理」・「医療従事者の事故対応と責任」の 9 回を平野、「看護職の価値観と文化、社会規範」を小野が担当した。平野担当分の講義には「ケースブック医療倫理」（医学書院）をテキストとする事例演習を組み込んだ。

コロナ禍のため遠隔授業が主となったが、最初の 3 回分だけは、クラスを半分に分けて対面で 2 回講義を行った。

第 1 段階看護技術演習（2 年次生）

2 年次後期

森加苗愛

本科目は、3 つのステップからなる看護技術修得プログラムのファーストステップの位置づけにある演習である。本演習の目的は、対象への日常生活援助を 1 人で実施できる能力を身につけることである。例年、2 年次後期に開講する演習であるが、今年度は COVID-19 の影響の影響により、他の演習との兼ね合いから 2 年次前期にオンラインで実施した。

1 段階看護技術演習は、本来学生が看護援助技術を演習を通して習得できることを目指しているが、今年は演習の実施が困難である状況から、看護の思考過程を重視した内容とした。具体的には学生が主体的に学ぶことができるようにワークノートを準備し、技術の根拠や手順を自ら思考することができるようにした。また、事例は内容を洗練させて 2 事例を用意した。評価は 3～4 人でグループを組み、ワークノートへの取り組みと発表においてグループ評価とした。

学生の取り組みの状況は良く、実技は実施できなかったものの概ね目標に到達できたと考える。今年度は急な時期の変更やオンライン開催などにより、本来の演習の在り方とは大きく様相を変えざるを得なかった。今後は COVID-19 の状況を鑑みながら、可能な限り実技を取り入れた演習方法の工夫を行っていく。

教育学概論

2 年次後期

鈴木篤

教育に関する本質的理念について、これまでに受講者が有してきた経験や理解を問い直すことを通して、①教育についての基礎理論・思想を理解するとともに、②教育の歴史的発展過程を理解し、今後の変化についての見通しを持つことを目的として、講義を行った。

学校教育心理学

2 年次後期

藤田文

教職課程や心理学における教育心理学の位置づけから入り、発達、知能、パーソナリティ、学習などの個々の生徒を理解するために必要な知識について教授した。単に知識を吸収するだけでなく、自ら積極的に、教育現場に必要な心理学の知識とは何かを考えていくことを求めた。

教育課程論

2 年次後期

今井航

将来教員として授業を計画する際に、国の定める基準、即ち学習指導要領に則りながら授業内容を自ら構成できるようになるための基礎力の習得を目的とした。「教育課程とは何か（その形態・原理）」及び「学習指導要領とは何か」といった 2 点の問いを持って、授業を進めた。

生体薬物反応論Ⅱ

3 年次前期

吉田成一

生体薬物反応論 II は疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）に関する講義である。生活習慣病で使用する医薬品、中枢神経系疾患で使用する医薬品、免疫系疾患に使用する医薬品、救命救急時に使用する医薬品など多岐にわたり臨床上使用する医薬品全般について講義した。今年度はオンラインでの開講となったため、接続率は高かったが、指名しても発言がないなど、集中度・参加度がどの程度であったかは不明であった。

2 年次後期により臨床的な実習を行い、本講義で取り扱う医薬品に関し、その重要性を理解して

いるため、積極的に学習するという意欲が高く、理解度は全般的に高かった。昨年度課題であった、アレルギー性疾患治療薬、造血薬についての理解度も改善した。

昨年と比較すると、平均点、最高点、最低点のいずれも上昇したが、これは昨年度が一昨年度と比較して低下したことが起因する可能性もあるため、次年度以降の状況を注視したい。成績中位、上位層においては理解度が十分であると思われるが、成績下位層において、学修理解が十分に達していない者が多く、改善が必要と考える。

履修者（再受験該当者を含む）85 名中、83 名が単位を取得し、単位取得率は高かった。

成人・老年看護学演習

3 年次前期

小野美喜、佐藤栄治、中釜英里佳、光根美保、堀裕子、森加苗愛

健康課題（問題）をもつ成人および高齢者に必要な援助を検討し、看護過程の展開と看護技術を学内で習得することを目的とした。発達段階（成人期、老年期）の特徴を踏まえた上で、健康問題を持つ対象者に必要な看護計画を立案し、看護援助の実践がイメージできるよう視聴覚教材を取り入れ、看護技術面においては、e-Learning システムを活用した。また COVID-19 感染症拡大により対面授業が行えなかったため、web 会議ツールを利用してオンライン講義を行った。オンライン講義の特徴を活かして、学生の意向や疑問点をその場で聞き取り、解決しながら、学習が進むようにした。学生からの質問等も適宜チャットやメールを活用し受けつけ、学生の困難感を軽減するよう努めた。

成人看護学演習では、周手術期の看護から回復過程までの援助がイメージしやすい事例を独自で作成した。事例は、変形性股関節症の診断で人工股関節全置換術を受ける患者とした。術直後の患者観察や看護援助のみでなく、術中・術後の患者の状況に応じて評価修正しながら看護援助ができるよう、事例情報の提示の時期や方法を工夫した。老年看護学演習では、認知症をもつ高齢者の生活上の課題と援助、高齢者の多職種連携協働での援助に焦点を当てた。web 会議ツールを利用してグループディスカッションを行い、学生相互での学びの共有を図った。

次年度以降の改善点として次のように授業方法を改善する。成人事例の看護過程の展開では、紙面上の事例情報では患者の経時的変化がイメージし辛く情報を収集するという感覚が持ちにくい。そのため次年度は教育用オンライン電子カルテを使用し臨場感のある患者事例の提供を行う。また演習内でグループワークを行う際学生同士の情報共有が難しいという課題があった。そのため ICT ツールを活用し情報共有しやすいよう方法を工夫することとした。

老年看護学実習

3 年次前期

小野美喜、森加苗愛、中釜英里佳、宿利優子、佐藤栄治

施設に入所している高齢者の健康問題と健康の維持・増進について考え、高齢者の生活の質の維持・向上を目指した老年看護の専門性と役割を学ぶことを目的とした。

当初は例年通り、介護老人保健施設および介護老人福祉施設での 1 週間の施設実習を計画していたが、COVID-19 の感染拡大の影響により施設実習を断念し、代替として 1 週間の学内実習を行った。

学内実習は基本的にオンライン開催とし（高齢者疑似体験を除く）、「高齢社会における高齢者施設の役割」や「施設における高齢者の生活と看護師の役割」について介護老人保健施設の管理者や看護管理者から講話をしていただいた。また、「①施設の特性と看護・多職種連携」、「②認知症高齢者の理解と看護の役割」、「③高齢者の生活機能の変化と変化に伴う援助」の 3 課題を設定し、高齢者疑似体験や視聴覚教材を用いた事例検討を通して課題毎のグループディスカッションを行った。最後に「高齢者の生活の質を維持・向上するための援助と看護の役割」ついてグループディスカッションを実施し、実習のまとめとした。

施設にて高齢者への看護を経験することはできなかったが、課題レポートやグループディスカッションでの発言から各課題についての考察と学びが言語化できていた。また活発なディスカッションによって、学生間で理解を深め合うことで実習目標に到達できたと考える。次年度以降も施設での実習を計画するが、COVID-19 の感染状況と制約に合わせて、学生が実習目標に到達できるよう柔軟に対応する必要がある。

成人看護学実習 I

3 年次

小野美喜、佐藤栄治、宿利優子、中釜英里佳、堀裕子、三ケ田暢美、森加苗愛

今年度は COVID-19 の影響により、成人看護学実習 I を臨地実習として期間を縮小し、感染拡大予防に留意しつつ行った。実習施設は、大分赤十字病院 6 病棟で、各病棟に 3～4 人ずつ学生を配置して 1 グループ 7 日間の実習（学生 1 人 7 日間の臨地実習）を実施した。

本実習は、第 4 段階の専門看護学実習に位置付き、成人期の身体的・心理的・社会的特徴を総合的に捉えた上で、急性期・回復期の健康段階にある対象に対し適切な看護援助方法を学ぶ。また、チームの一員として適切な看護が実践できる能力や自主性、自律性を養うと共に自己の看護観を発展させることを目的とする。実習中は感染予防の観点から、実習部署や看護実践、時間の制限はありながらも、可能な限り実習指導者と相談・調整を行い、学生が主体的に実習を行えるように調整した。

教員は常駐しながらも、学生が看護スタッフと連携が図れるよう支援した。制限がありながらも実習施設の協力のもと、目標達成ができたと評価する。今後も引き続きチーム医療の中で学生が主

体的に行動できるような指導方法を検討していく。

成人看護学実習Ⅱ

3 年次後期

小野美喜、佐藤栄治、中釜英里佳、堀裕子、宿利優子、森加苗愛

成人看護学実習Ⅱは、COVID-19 感染症予防の観点から臨地実習する病院に制約が生じたため、あらゆる健康段階にある成人の特性を理解し、看護の必要性を判断し実践・評価できることを目的にオンライン（Web 会議ツール、Web ベースのファイル共有システム）での学内実習としとした。

事例は、胃がん患者（急性期）と肝がん患者（慢性期）の 2 つとし、成人看護学実習Ⅰで担当しなかった病期の事例を看護展開するように努めた。リアルな患者をイメージできるように各事例の動画を作成し、動画視聴で患者さんの表情や心情を理解し、患者情報も整理ながら、看護展開できるように工夫をした。また、実習できなかった病院（病棟）の師長・実習指導者から講話もして頂き、看護過程の展開に生かすようにした。

学内実習は Web 会議ツールを利用し、オリエンテーションや必要時個人面接を行った。昨年度の課題は、対象者の病態アセスメントに時間を要することであったため、学生の考えや疑問点をその場で聞き取り、解決しながら、学習が進むように努めた。学生からの質問等も受けつけ、学生の困難感を軽減するよう努めた。

次年度以降も COVID-19 による制約が考えられるが、臨地の実習学生が対象への看護を思考できる実践型の実習を目指し、今後も引き続きチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を継続していく。また、急な変更に対応できるようにオンライン上でも学習できる方法を検討していく。

予防的家庭訪問実習（3 年次）

3 年次

藤内美保、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため実習開始を 10 月まで延期した、これに伴い単位認定に必要な訪問回数を 1 年次生は 3 回とした。3 年次生は他学年とともに 4～6 名から成る 80 チームを構成し、各チームが 10 月 21 日以降 1 名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問した。また、看護研究交流センターからメルマガを年間 5 回配信し、自粛生活による高齢者への影響に関する調査結果や他学年が行った電話による問安の様子、オンライン講義での学びの情報共有を行った。訪問実習を延期期間中の 6～7 月にかけて、協力者へ電話による問安を行った。3 年次生は特に、協力者の健康維持のために大切なことを協力者と共に考え、可能な支援は実施することを主眼とした。電話訪問を経験することで、音声のみで協力者の情報を得る難しさを知るとともに、訪問を

行って得られる情報の大切さに気付くことができていた。また、例年行っている 4 月初めのグループワークをオンラインで行ったことや訪問回数が全体として少なかったことから、チームで顔を合わせる機会が少なく、チームで協働する大切さを感じている 3 年次生が多くいた。しかし、感染拡大を懸念して、今年度の実習協力を見合わせる協力者もおり、学生の中には訪問実習を行えなかった者もいた。このため次年度は、訪問実習を行えなかった学生へのフォローが課題となった。

小児看護援助論

3 年次前期

高野政子、草野淳子、足立綾

コロナ感染症の影響でオンライン講義を行った。小児の発達過程の特質を理解するための主要理論に基づき、小児の行動を多面的に捉え、発達過程の応じた日常生活の援助方法と各期の保育と保健および、小児看護における援助技術や、健康障害のある小児とその家族への援助方法を教授した。授業は、看護過程の展開を個人ワークとした。教員と個別に Zoom による看護過程の指導をして、5 事例の代表者が発表し意見交換を行った。次年度は、学生の授業評価を参考に、負担感という視点で、改善に努める。

小児看護学演習

3 年次前期

高野政子、草野淳子、足立綾

本科目は、前半に小児領域の主要な病態と疾患について教員が講義する方法に変更した。また、後半は臨地実習でよく出会う事例を 4 事例提供し、看護過程の展開について検討し、まとめてレポートして発表した。学生は発表者と意見交換する方法は今後も継続する。また、小児看護技術演習は、ナーシングスキルのビデオ学習とした。次年度は実習室で実施したいと考えている。

小児看護学実習

3 年次後期

高野政子、草野淳子、足立綾、渡邊一代、谷村優香

小児看護学実習は、コロナ感染症のため臨地実習は中止した。しかし、学生は一人 3 日間の保育所実習を 7 月末から 8 月第 1 週までに実施することはできた。幼児と出会うことが少ない学生には初めて子どもとコミュニケーションを学ぶこと、健康な子どもを理解して、病児と家族への関わりがスムーズに実施できることなど重要な効果がある。保育所実習では各グループで手洗い指導を最終日に行う課題を取り入れ、良く工夫して実施できたと保育所長会で成果が報告された。コ

ロナ感染予防に活かされた。臨地実習が中止となったので、学内実習では、病院実習の様子や、学生の実習の様子を DVD で学習した。事例は、教員が学生 1 人に 1 事例を準備して、最終日に発表した。学生の実習到達度に差があるが、他の学生の事例発表は好評であった。学生の個別性にあわせて、積極的に実習できるように指導することが課題と考える。

母性看護援助論Ⅱ

3 年次前期

林猪都子、永松いずみ、徳丸由布子

分娩期の異常と看護、産褥期、新生児の生理と異常および心理・社会的特徴とその看護を学ぶことを目的に教授した。分娩時損傷、分娩期出血、産科処置、産褥期の生理と経過、産褥期の看護、新生児の生理と看護について 3 名の教員で実施した。

新型コロナウイルスの影響を受けて Zoom 講義にて実施した。教材をネット配信できるように作成して講義に望んだ。講義内容は生殖器の内容を含むために、学生に個室で視聴する事を求めた。講義中に学生の反応が見えないためにグーグルフォームによる学び、感想を講義終了後に提出することを求めた。対面講義が実施できなかったので、評価は課題レポートとグーグルフォームによる学びと感想で評価した。次年度の評価は対面による試験で実施したい。

母性看護学演習

3 年次前期

林猪都子、永松いずみ、徳丸由布子

母性看護の実践に必要な知識を理解し、母性看護技術と看護過程を習得することを科目のねらいとした。演習は Zoom 演習によるネット配信で実施した。知識の習得と確認は、過去の国家試験問題を学生全員で解いてそれぞれ知識の習得状況を確認した。母性看護技術は、ナーシングスキルを利用して、「妊婦計測」、「新生児計測」、「沐浴、子宮復古の確認」の 3 項目についてレポートを作成した。ウェルネス看護診断に基づいた母性看護過程の演習は、産褥期の正常と異常の 2 事例を用いて、個人で看護過程を展開した。母性看護学に必要な実技演習は演習室にて実施できなかったため、母性看護学の学内実習中に母性看護技術を補った。

母性看護学実習

3 年次

林猪都子、永松いずみ、徳丸由布子、姫野綾、種恵理子

母性看護学実習施設は 2 施設（大分県立病院は学生配置せず）で、実習期間は 1 グループ 2 週

間（延べ 12 週間）であった。学生および教員の配置人数は、堀永産婦人科医院は学生 1 G4～5 名配置で 4 日間実習とし、1G に前半、後半と 12G 配置した。残り 5 日間は学内実習とした（合計 51 名）。今年度からいしい産婦人科醫院で実習を開始した。学生 4～5 名配置（男子学生 5 名）（合計 29 名）、担当教員は堀永産婦人科医院 2 名（前半、後半）いしい産婦人科醫院 1 名配置した。実習は学生 1 名につき妊婦または褥婦を 1 名受け持ち、妊産褥婦、新生児の看護について学び、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開をした。すべての学生が臨地実習に行くことができ、生命の誕生の場面を通して生命の尊厳や自己を振り返る実習となった。臨地実習中の帰学日半日は最終カンファレンスにむけて、記録整理を行った。今年度からサロンリラ・どーなつ助産院の実習を開始し、Zoom 講義による学級活動に参加した。

コロナ感染による影響により実習開始直前、実習中に実習計画を変更し、堀永産婦人科医院といしい産婦人科醫院での臨地実習日数が異なったので、次年度は学生の臨地における学びを揃える必要がある。5 日間の学内実習は指導者の講義、DVD 視聴やビジュアルグランド視聴による看護過程の展開など、色々な教材を使用したが、短い期間に内容を盛り込みすぎたので、次年度に向けて内容を検討する必要がある。今年度は全員が臨地実習に参加することができたが、全員が臨地実習に参加できないことも考慮して、実習内容を検討する必要がある。

精神看護援助論

3 年次前期

杉本圭以子、後藤成人

精神看護の対象と基本概念を確認し、科目を通して視聴覚教材、実例を多用し講義した。各精神疾患の病態・治療・看護の学習は自己の予習を基に、各自で講義での学びを追加し実習に持参できる資料として一覧にまとめた。全講義をオンラインで実施し、患者への実際の対応や地域生活を支える支援など DVD などの視聴覚教材を積極的に用いることで学生の理解が深まるように工夫した。講義の最後に小テストと感想をオンラインのフォームで提出することを求め、次回の講義の最初で問題の解説と感想を紹介することで講義のつながりを作った。

精神看護学演習

3 年次前期

影山隆之、杉本圭以子、後藤成人

学生に事例検討させるための紙上事例教材をブラッシュアップし、学生に個人で取り組ませ、全体シェアリングで振り返りを行った。臨床で遭遇しやすい事例・状況を取り上げ、動画教材やロールプレイによって、学生にイメージしやすい演習を行った。精神科医療・地域精神保健と障害福祉サービスの実際（現状）を、実習施設等から招いた外部講師による講演によって伝えた。各自が実習を行う障害福祉サービス事業所を訪ね、実際の地域生活の支援について見学し、実習での学びに

つなげる時間を設けた。本年度の演習はZoomを用いてオンラインで実施したが、教材や講師は、学生に概ね好評のようであった。講義を振り返り、後期の実習へスムーズに移行するための準備として、演習の基本的な構造は継続してよいと考えられる。

精神看護学実習

3年次後期

影山隆之、杉本圭以子、後藤成人、丸山加菜、三ケ田暢美

実習期間のうち6日間は大分下郡病院、大分丘の上病院、衛藤病院に分かれて病棟実習を行い、2～3日は4つの障がい福祉サービス事業所に分散して実習を行った。病棟実習で、学生は受け持ち患者について、全人的な理解とアセスメント、及び患者が受けている看護の理解について指導を受けた。病棟・病院内カンファレンスの意義と参加の仕方、退院支援、多職種連携の実際などについて意識付けを強化した。事業所では、利用者と共に各種プログラムに参加しながら、精神障がいを持ちながら社会で生活できるための条件や当事者ニーズのアセスメントなどについて、指導を受けた。実習最終日に学内で両者の学びを統合する最終カンファレンスを行った。また、本年度はCOVID-19 の影響のために、一部を同行実習と学内演習のハイブリッドに置き換えた。同行実習では学生が実習指導者に同行して精神科での看護ケアを経験できるよう配慮し、学内演習では視覚教材による事例について看護展開を行うことで精神科における看護展開を学べるよう工夫した。

第2段階看護技術演習（3年次生）

3年次前期

森加苗愛

本科目は、3つのステップからなる看護技術修得プログラムのセカンドステップの位置づけにある演習である。本演習の目的は、対象への日常生活援助を一人で実施できるとともに、専門領域別の基礎的看護技術の実践能力を身につけることであるが、今年度はCOVID-19の影響の影響により、オンラインで実施した

実施においては、第1段階からの流れを考慮して学生が効果的な学びができる様ワークノートを準備し、技術の根拠や手順を自ら思考して実技をイメージできる発表形式とした。また、事例は内容を洗練させて統合し2事例2課題とした。評価は3～4人でグループを組みグループ評価とした。学生の取り組みの状況は良く、概ね目標に到達できたと考える。

今年度はオンライン開催により、本来の演習の在り方とは大きく様相を変更せざるを得なかったが、今後はCOVID-19の状況を鑑みながら、可能な限り実技を取り入れた演習方法の工夫を行っていく。

在宅看護論

3 年次

福田広美、平野亙、稗田朋子

疾病や障害をもちながら地域で生活する人々とその家族に対して、在宅看護を行うために必要とされる基本的な考え方や援助方法を理解することをねらいとした。本年度は COVID-19 の影響によりオンラインで講義を行い、学生が、在宅看護に関する基礎的な知識を学び、臨地における在宅看護の実際について学びを深められるよう事例を通して教育を行った。今後は、多様な場における在宅看護を行ううえで必要な知識や多職種連携など、事例を通して学習を行う。

教育方法論

3 年次前期

佐伯圭一郎、麻生良太、生田淳一

教師による指示や発問、それに対する子どもの考察、話し合い活動、質問行動、説明、新たな課題の発見といった教授や理論の実際を概説した。加えて、学校現場の情報化に対応した教育内容や方法の実際に焦点をあて、各種情報機器の活用について紹介した。

養護概論Ⅱ

3 年次前期

赤星琴美、小野治子

本年度は、夏期集中講義とし、子どもの健康課題解決、危機管理などの学校保健における課題の歴史的変遷を捉え、具体的な養護活動を展開方法やこれからの養護教諭に求められる役割について学びを深めた。集中講義のため、学生が集中して授業に参加することができ、さらに、グループワークを多く取り込み、それぞれの学生が及ぼすグループダイナミクスを活用し、主体的に学習することができた。年度により履修人数が異なるが、今後も学生が集中できる講義方法を工夫していきたい。

道徳教育と特別活動

3 年次前期

鈴木篤

道徳教育および特別活動の特質とその方法について知識・理解を深めることを目的として、学校教育の具体的な場面を取り上げながら説明した。

環境疫学・生物学演習

3 年次後期

甲斐倫明、小嶋光明、恵谷玲央

環境疫学・生物学演習は健康と環境との関係についての知見が生まれてくる仕組みを講義している。疫学的な統計によって明らかになってくる知見や分子細胞レベルの生物学的な仕組みを通して明らかになってくる知見を演習・事例を通して理解できるように努めた。演習時間内に課題レポートを作成させて提出するやり方は、学生が主体的に問題意識を高めるとともに理解を深めることにつながる。

健康支援論演習

3 年次後期

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、渡邉一代

保健・医療・福祉の場において、看護職の視点から集団の健康問題に対して、保健活動のひとつである健康教育の展開方法とその実践力を養うことを目指した。健康教育が行われる対象や場を理解し、個人・集団の健康増進や疾病予防のための行動変容を促す理論やモデルを活用した健康教育の企画・実施・評価等の一連のプロセスを理解できるよう講義を行った。病院、施設、地域などにおける健康教育の場面を設定し、対象者にわせた支援方法をグループワークで取り組んだ。さらに、各グループの発表を通じて、学生間の理解を深めることができた。

地域生活支援論

3 年次後期

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、渡邉一代、鈴木由美

地域で生活している人びとの健康課題の特性を理解し、地域看護活動の展開方法について講義と演習を行った。地域看護の実践者として市保健師を招き、実際の看護活動について事例を用いて教授した。母子保健活動や成人・高齢者保健活動、障害者保健活動、難病保健活動などの基本的な知識のほか、コミュニティ・アセスメントの手法を用いて地域を理解する演習を設け、看護職が「地域志向のケア」の視野が広がるよう工夫した。

国際看護比較論

3 年次後期

桑野紀子、丸山加菜

2 年次の概論内容を発展させ、世界の疾病構造の変化や国際保健／国際看護の主要概念について理解を深めること、Universal Health Coverage や Sustainable Development Goals といった保健医療に関する世界的な取り組みについて学ぶこと、母子保健や精神保健といった各分野のグローバルな状況について学ぶことを目的として講義内容を組み立てた。また、学生自身が海外渡航をする際の留意点も含めて講義した。

世界の状況は刻々と変化するため、基本的な知識と共に、データや事例から考察する力をつけられるよう、学生が自ら考える能動的な学習場面を増やしていく必要がある。

国際看護学演習

3 年次後期

桑野紀子、丸山加菜

講義で学んだ知識を実践に結びつけてイメージできるように、1）在留外国人患者の看護、2）海外に渡航する日本人の健康支援、3）或るの国の健康課題とその背景、および対策について国際機関ホームページ等を情報源として調べ考察する、グループワーク／個人ワークを中心に組み立てた。文化・社会的背景が多様な在留外国人患者の看護の講義については、実践経験が豊富な外部講師を招聘し内容を補強した。また、世界の保健医療について複眼的な視点を得ることを目的として、グローバル社会の矛盾と健康格差を描いた映画鑑賞も組み込んだ。

講義の後に関連テーマの演習に取り組むことで興味を喚起できたと考える。グループワークでは海外の健康課題等について国際機関のホームページ等から英語で最新の情報を得る方法を獲得し、比較を通して見えた日本の医療や看護の特徴についてグループメンバーとディスカッションすることができた。ディスカッションがより活発化されるよう工夫が必要である。

災害看護論

3 年次後期

石田佳代子、石丸智子、内倉佑介、佐藤弥生、福田広美、松久美

本科目の目的は、地域や病院等における健康危機管理と災害時の対応について理解し、地域や病院等における災害看護のあり方、考え方とその実際を学ぶことである。講義では、災害の定義、種類、法律、制度、災害サイクル各期における特徴と看護活動、病院における初動体制、地域における災害時保健活動、在宅療養患者に対する災害看護活動、災害時のボランティア活動など、多面性を有する災害看護の全体像がわかるような内容とし、災害および災害看護の基礎的知識の習得に

重点を置いた。演習では、日本 DMAT（看護師）による指導の下で、災害時に必要な技術であるトリアージ（START 法）の習得に重点を置いた。また、災害発生時を想定したシミュレーション・シナリオを使って机上訓練を行った。本科目の評価はレポートによって行った。学生がレポート作成を通して講義で学んだことを基にしてさらに発展的に考えたり、自身の姿勢を見直したりしながら、災害時における看護のあり方や自身の責務などについての考えをより深めることができたと考える。災害時に備えて、看護職者として優先されるニーズを判断する能力や、その根拠をなす様々な基礎的知識を平時から身につけておくことは重要であると考えるため、今後も、学生が視野を広げ、知見を広げられるように取り組みたいと思う。

看護科学研究

3 年次後期

佐伯圭一郎、赤星琴美、市瀬孝道、梅野貴恵、小野美喜、定金香里、品川佳満、田中佳子、中釜英里佳、渡邉弘己

卒業研究および将来の臨床における看護研究に必要とされる基本的な考え方、知識、技術を修得することを目的としてオムニバス形式の講義・演習を行った。各回を担当する教員の経験を踏まえた学生にとって興味深い内容であるが、重複の多い事項や不足気味の内容などが見受けられた。各回のテーマに関する内容の調整のため、過去の講義内容を整理して担当講師への事前説明を行うことを次年度から行う予定である。

英語Ⅲ

3 年次後期

Gerald T. Shirley、宮内信治

講読担当 語源学の知見を基に医療や看護に関連する語彙を習得させた。また、論文構成を確認したうえで、実際に発表された英語の原著論文を読解させた。双方ともに、看護・医療に関連する新しい語彙と知見に触れさせることができた。

学校保健学

3 年次後期

草野淳子、赤星琴美、小野治子、霜山朋子、手嶋康深、吉田知佐子

講義時間数は 21 コマを実施した。本科目の目的は、児童生徒の心身の健康維持・増進における学校保健の役割について、保健管理、保健学習、保健指導の視点から学校保健の内容を理解し、要点を説明できるようになることである。講義は養護教諭の実践経験がある非常勤講師によって、主

に行われた。講義内容は根拠となる法律、学習指導要領、教育課程について取り上げ、学校保健の意義や内容が理解できるようにした。学生の実践内容は保健室経営計画、症状アセスメント、保健教育指導案の立案とし、学生が個人で作成後に全員による討議、教員の講評を行い共有した。評価は、発表と筆記試験の成績によって行った。今年度の方法は有効であったため、来年度も同様に実施する予定である。

教育制度論

3 年次後期

今井航

世界主要国における教育制度改革の動向や、学校の法的な位置づけを問うことにより、教育制度への関心を高めた。その上で、職務内容や遵守事項、免許制度、研修制度を取り上げ、教職員に関する制度の特徴を捉えさせた。加えて、教育委員会の制度の変遷、教員評価の制度、学校支援の制度についても解説した。

養護実習事前事後指導

3 年次後期

吉村匠平、赤星琴美、関根剛

事事前指導では、実習生としての遵守事項について学ぶとともに、実習校の概要について、HP や要項をもとに整理するとともに、個別の実習目標、実習期間中の具体的な行動目標を策定した。事後指導では、実習目標に沿って、実習の自己評価を行うとともに、他の学生の実習体験を共有する機会を提供した。

養護実習 I

3 年次後期

吉村匠平、赤星琴美、草野淳子、関根剛

大分市立明野中学校、稙田西中学校、西ノ台小学校、南大分小学校、碩田学園、日田市立北部中学校、別府市立大平山小学校、佐伯市立佐伯東小学校で、学校体験を中心とする実習を行った。碩田学園は 2 名、それ以外の学校は、1 校 1 名の実習となった。

応用生体機能反応論

4 年次

濱中良志、市瀬孝道、吉田成一

今年度は、コロナ禍のため、Zoom の様々な機能を駆使して、解剖生理学を一部復習しながら、病態生理学及び薬理学の思考過程を教授した。

地域看護学実習

4 年次前期

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、渡邉一代

COVID-19 による緊急事態宣言下で学内演習に変更して行なった。学生が、様々な視点から地域を捉え、地域で生活する人々を理解すること、地域で行われる看護活動の多様さ、多職種との連携の必要性を学べるよう工夫した。具体的には、オンラインで臨地の看護職による講義や、グループワーク、ディスカッション等の方法を通じて学びを深めた。

予防的家庭訪問実習（4 年次）

4 年次

藤内美保、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため、本実習は 10 月まで延期した。これに伴い単位認定に必要な訪問回数を 4 年次生は 3 回とした。4 年次生は他学年とともに 4～6 名から成る 80 チームを構成し、各チームが 10 月 21 日以降 1 名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問した。また、看護研究交流センターからメルマガを年間 5 回配信し、自粛生活による高齢者への影響に関する調査結果や他学年が行った電話による問安の様子、オンライン講義での学びの情報共有を行った。5 月には地域看護学実習の一環として、協力者に電話による問安を行った。4 年次生は特に、協力者個人の生活のみならず、地域の健康課題にも目を向けて考察・提案することを主眼とした。新型コロナウイルス感染症対策のため、地域活動の休止に伴う高齢者への影響を協力者の話から知るとともに、高齢者の健康維持に地域活動がいかに大切であるかを考えることができた。また、これまでの経験を活かし、コロナ禍での生活に適応される協力者の姿を垣間見ることもでき、高齢者であるつよみを捉えることもできていた。年度末のレポートでは、4 年間を通した自己の成長を確認するとともに、看護職として本実習を通して学んだ個別性や居住地域を意識した看護を実践したいと述べられていた。

看護管理学概論Ⅱ政策等含む

4 年次前期

福田広美

看護管理の概念を理解し、看護を提供するための「しくみ」について学び、看護職として看護実践のマネジメントについて考えることを主なねらいとした。本年度は COVID-19 の影響により、オンラインで講義を行い、質の高い看護を提供するための看護管理について、基礎的な知識を学習した。また、実際の看護管理の事例を通して、改善しながら看護の質を高めていくマネジメントのプロセスを学習した。今後は、看護管理におけるリーダーシップ等についても、事例を通して理解を深められるようにする。

第 3 段階看護技術演習（4 年次生）

4 年次前期

森加苗愛

本科目は、3 つのステップからなる看護技術修得プログラムのサードステップの位置づけにある演習である。本演習の目的は、これまでに学んだ基礎看護技術を、e ラーニングにより主体的かつ計画的に再学習することで、総合的に能力を高めることである。

本演習では、学生が主体的・計画的にかつ繰り返し学習する環境の提供として e ラーニングを行いているため、科目としては COVID-19 の影響の影響を受けることなく知識の習得ができた。また、学生がレポートにて自己の技術習得状況を振り返ることができていた。

在宅看護論実習

4 年次前期

福田広美、平野亙、稗田朋子、谷村優香、桑野紀子、丸山加菜

在宅看護論実習は、COVID-19 の影響により学内演習に変更して行った。学生が、在宅で療養する人々とその家族に対する看護が提供できるよう、動画教材を活用しながら教育を行った。また、社会資源を活用したケアマネジメントの実際について、臨地から講師を招聘し、講義と学生の質疑を通して学習を深めた。また、他職種との連携・協働についても、実際の様子を動画や臨地の看護師からの教育を通して学ぶことができた。新年度は、臨地実習と学内演習の両方を組み合わせながら、学生が在宅看護について学びを深められるようにする。

総合看護学実習

4 年次前期

看護系教員全員

今年度は、4 年次生 83 名が県内 33 施設において、6 月下旬から 7 月下旬の期間中に、3 週間の実習を行った。

本実習は 4 年間の看護学実習の最終段階にあたり、実習の集大成である。実習の目的は、主体的に実習課題を設定し、看護基礎教育における学びを統合しながらチームの一員として看護を提供するための総合的な看護実践能力、看護の質を保証するマネジメント能力、および看護専門職としての自律性を養うことであり、また、本実習の特徴は、計画から実施・評価までを学生が自律的に取り組む点である。新型コロナウイルス感染症拡大の影響下であったが、感染対策を行いながら、各施設や学生の県外就職試験等の状況に応じて、可能な範囲で臨地実習を実施することができた。

卒業研究

4 年次

藤内美保

4 年次生は、各研究室に所属し、開学以降行っている 1 人 1 テーマで研究に取り組むことを継続した。研究室配置は、各研究室の教員が、研究室の特色、研究室で行う研究テーマ、これまでの卒業研究などをオンデマンド形式で紹介し、それを学生が各自視聴した上で、研究室の希望に沿って研究室配置を決定した。各研究室において、教員の指導のもとに、卒業研究のテーマを 3 月 31 日までに決定した。テーマ決定後は、研究計画に基づき研究に取り組んだ。今年度は COVID-19 の影響により途中で文献研究に変更となるケースもあり、比較的文献研究が多かったが、実験研究や調査研究など多彩なテーマや方法で興味深い研究が多数あった。文献研究以外は、研究倫理・安全委員会に計画書を提出し、研究倫理についての学習過程を踏み、学びを深めた。研究室の配属から約 10 ヶ月間で、研究を実施し、要旨、論文、パワーポイントの作成までを行った。研究発表会は、COVID-19 の影響で初めて Zoom での発表とし、リアルタイムでの発表と質疑応答ができるようにした。3 セクションに分かれて、分科会形式で実施したが、大きなトラブルもなく実施ができたが、1 名のみ 2 日目に再度卒論発表を行った。3 セクションが同時進行のため、視聴できない研究もあったが、録画により関心のある発表の視聴はできた。今年度は要旨提出の段階で、3 名の提出がなく、日々大学に来て卒業研究に取り組むことの重要性を再認識した。また学生、教員ともにルーブリック評価を行った。

発表会の方法の変更により、卒業研究優秀賞の選出基準も変更し、視聴した教員全員が評価し、各セクションから上位 2 名、計 6 名を選出する方法とした。

原著講読

4 年次

藤内美保

卒業研究で配属された研究室で、教員の指導のもとに原著講読を行った。各研究室の裁量で実施していたが、最低限のルールを教育研究審議会に諮り、明確な目標を共有した。目標は、専門領域の原著論文（英語論文文が望ましい）を 2 本以上読み、その知見を述べることができること、卒業論文をまとめるにあたり、原著講読で学んだ知見を活かすことである。また、ルーブリック評価を新たに作成し、学生が段階的に自己の成長を確認するように自己評価し、担当教員は最終的な評価をルーブリック評価で行った。

総合人間学

4 年次

藤内美保

看護学実習や演習を経験した 4 年次生が各講師の講義を通して物の見方や考え方を学び、人間として、医療者として備えておくべき豊かな知識と感性を養うことができるように、教職員の推薦から教育研究委員会での検討を重ね、様々な分野の第一線で活躍されている 8 名の講師とテーマを決定した。さらに、看護国際フォーラムへの参加を 2 回分の講義とし、全 10 回の講義を実施した。なお、本科目は COC+による他大学学生の単位互換制度も導入し Web 受講を可能にしている。今年度は、COVID-19 の感染拡大予防策として、会場の変更（講堂）や Zoom による講義に変更を行いながら実施した。学生全員が 10 回の講義を聴講できた。先生方の講義を通して、1 人の人間としてものの見方や捉え方など視野の広がりを認識でき、レポートに看護職者としての学びや今後の課題について自己の意見を表現することができた。

本年度の開講日、テーマ、講師を以下に示す。

第 1 回 9 月 11 日 私が演劇を通して学んだこと

大阪芸術大学芸術学部 舞台芸術学科 教授　山本健翔

第 2 回 9 月 18 日 ダウン症への動作法指導を通して学んだこと

大分大学名誉教授・客員教授　田中新正

第 3 回 9 月 25 日 「働く」と「幸せ」のツナギ方

社会保険労務士　篠原丈司

第 4 回 10 月 2 日 ナースのセルフメンテナンス法～激務に負けない身体作り～

医療法人慈愛会岩男病院 リハビリ室室長　岩男淳一郎

第 5 回 10 月 9 日 アルコールや薬物依存症からの回復、リカバリー。

リカバリハウスいちご（回復支援施設）　渡邊洋次郎

第 6 回 10 月 16 日 自分の言葉で語る

大阪市立大空小学校（みんなの学校）初代校長　木村泰子

第 7 回 10 月 23 日 言葉のもつ力
TOS テレビ大分 アナウンサー　小笠原正典
第 8 回 10 月 30 日 どうぶつと共に生きる
九州自然動物園アフリカンサファリ取締役展示部部長 専門獣医師　神田岳委

養護実習Ⅱ

4 年次前期
吉村匠平、赤星琴美、草野淳子、関根剛

大分市立王子中学校、原川中学校、東稙田小学校、賀来小学校、戸次中学校、南大分小学校、南大分中学校、荏隈小学校、八幡小学校、稙田小学校、稙田東中学校、稙田西中学校、中津市立大幡小学校、日田市立光岡小学校、大明中学校で、学校安全・保健活動を中心とする実習を行った。

教職実践演習（養護教諭）

4 年次後期
吉村匠平、関根剛、赤星琴美

学校保健活動を行う現場を念頭に置いた実践的な授業を演習形式で行った。4 年間の教職課程の学びを振り返り履修カルテを完成させた。学内演習では、構成的エンカウンターグループのファシリテーター体験、場面指導案の作成と実施、投影的な自己理解促進の手段としてのフォトコラージュ体験などを行った。

看護スキルアップ演習

4 年次後期
森加苗愛

本演習も COVID-19 の影響によりオンラインを主とし、一部ロールプレイを取り入れた演習を行った。実施期間が第 4 段階実習期間であるため、人間科学系の教員とも連携をはかり、指導体制を工夫した。内容は、事例数を＜急性期＞＜回復期＞＜母性＞＜小児＞＜在宅＞と 5 つの事例を設定してとし取り組んだ。看護基礎教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を統合し、アセスメント能力および看護技術実践能力を養うことをねらいとしてグループワークとロールプレイを企画し、学生の学びと教職員の指導とが円滑に展開されるよう準備・調整・展開した。

講義形態がオンラインへ変更となり、通常ロールプレイによる発表が看護援助場面の計画立案によるセリフと一部ロールプレイによるものとなったが、学生の取り組みは主体的であり、目標は

達成できたといえる。今後も領域や事例内容を洗練させ、発表形態に応じた効果的な講義が展開できる様工夫を検討していく。

医療福祉と人権

4 年次後期

平野亙

看護専門職としてだけでなく社会人として必要な基本的人権に関する知識を習得するとともに、人権感覚を身につける目的で開講される選択科目である。人権という概念を整理し、法に規定された事柄だけでなく、その本質的な意義と役割について理解できるよう、「人権　その概念と意義」、「医療福祉における人権課題」、「人格と自由権」、「社会権～生存権と社会保障」、「高齢者の人権」、「患者の人権」、「障がい者の人権」、「差別と優生思想」の講義を行い、自ら選択したテーマでレポートを作成し評価を行った。

4 年次後期の選択科目のためであろう、今年も受講生は 1 名であったが、そのためコロナ禍の中でも対面でゼミのように議論しながら、受講生の問題意識に寄り添って講義を進められ、受講生の理解も深まったと思われる。

4-2　博士課程(前期)

生体科学特論

1 年次前期

濱中良志、安部眞佐子、岩﨑香子

今年度はコロナ禍のため、Zoom を駆使して、各臓器における解剖学・生理学・生化学の復習をした後、関連する重要疾患の病態生理から各臓器の正常の機能を教授した。

病理学特論

1 年次前期

市瀬孝道

本年度は新型コロナ感染拡大のため、本講義は Zoom 配信によって行った。講義内容は昨年度同様に疾病の基本的事項を理解するために生体防御システムに関わる炎症、免疫やアレルギー、また、腫瘍、代謝障害、先天異常などの病気の基礎を講義した。これら疾病の基本的事項と系統別の個々の疾患とが繋がるように詳しく講義した。また、系統別疾患の講義の中では疾患症例について、マクロ病理（解剖時の所見）とミクロ病理（病気の組織像）についてパワーポイントを用いて説明し、病気の理解を深めた。

病態生理学特論

1 年次前期

濱中良志、黒川竜樹

今年度はコロナ禍のため、Zoom を駆使して、各臓器別の疾患の成り立ちに関する病態生理学を教授した。

健康増進科学特論

1 年次前期

稲垣敦、安部眞佐子

はじめに、科学について概説し、測定と評価、運動の強さと量の測定について説明した。臨地で運動メニューの作成や運動指導ができるようにするため、ストレッチング、筋力、筋力トレーニング、エネルギー代謝、有酸素能力、加齢と体力、運動強度、身体活動量、運動療法等について講義した。また、身体活動量、柔軟性、最大酸素摂取量の測定実習等を行った。栄養学に関しては、食

事療法の基礎となる知識をつけるために、高脂血症、糖尿病、骨粗鬆症についての英文を読み解説を加えた。

人間関係学特論

1・2年次後期

関根剛、吉村匠平

本講義では、シラバスの記載事項を中心とした上で、受講者の関心や希望を取り入れて講義で取り上げる内容を決定した。内容に応じて、関根、吉村で担当を分担し、講義および演習を行った。吉村は、行動分析の基本理論や応用を中心に解説しながら、検診受診率をあげる、禁酒禁煙、発達障がいへのアプローチなどの現実課題についての対応について解説した。関根は、行動変容の理論である多理論統合モデルについて解説して健康行動を効率的に変容させる方法、個別の課題変容プログラムを犯罪非行の心理的背景や処遇、グループ指導のための技法と演習、PTSD と被災者などについて解説をした。評価は、関根・吉村がそれぞれ独自に課題提出などをさせ、合計による評価を行った。

健康社会科学特論

1・2年次後期

平野亙

人間の健康に関わる研究や職業的実践においては、個々の人間行動の分析・探求と並んで、社会政策など社会システムに対する分析、社会学や文化人類学等の社会的アプローチが重要である。これら社会科学的な思考と方法論の基礎を習得することを目的として、講義と課題演習を行った。

今年度は受講生が 2 名だが、同一課程の学生であったため、方法論や基本的な理念に関する知識を伝授するための講義のほかは、受講生の視野を拡大することと、キャリアや研究テーマに寄与できることを目的に、受講生の学問的関心に沿った課題に限らず、これまで接してこなかったであろう分野の研究の紹介と討論を行った。課題演習は、受講生の選択したテーマに沿った文献の抄読と討論を行った。

保健情報学特論

1・2年次前期

佐伯圭一郎、品川佳満、渡邉弘己

保健医療分野において必要とされる情報入手・情報処理・情報管理の基盤となる理論と技術について、演習も交えながら教授した。後半の生物統計学については、事前学習と発表を組み込んだ形

式で学習の充実をはかるとともに、事前事後の試験により知識と技術の定着を確認した。

今年度はオンラインによる講義が大部分を占め、受講者の反応をダイレクトに把握しづらい点が困難であった。同様な状況が予測される次年度においては受講者の反応のきめ細かい把握やオンラインでのディスカッションの活発化をはかりたい。

看護科学研究特論・健康科学研究特論

1・2 年次前期

小嶋光明、村嶋幸代、藤内美保、影山隆之、甲斐倫明、佐伯圭一郎、平野亙、関根剛、桑野紀子、大田えりか

看護科学研究と健康科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じて実践的能力の育成を行った。実験的研究、質的研究、文献研究などを実際に行っている先生方に講義をしてもらうことで研究手法がより理解できるように努めた。

看護管理学特論

1・2 年次後期

福田広美、志田京子、佐藤弥生、甲斐仁美、柿本貴之

看護管理特論では、保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる組織論、人材育成、マネジメントに関する理論とその展開について教授した。学生が、事例を通してマネジメントプロセスの理解を深め、質の高い看護サービス提供についてディスカッションを行った。組織が備えるべき機能、看護管理者に必要とされる能力について各学生が理解を深めた。学生は、看護管理に関するテーマを選び、自らの経験を踏まえて、マネジメント理論や論文等を活用したプレゼンテーションを行い、クラスのメンバー間でディスカッションを行った。今後は、学生が、看護管理の実践現場において理論を応用しながら改善、改革を進められるように教育内容を充実させる。

看護理論特論

1・2 年次後期

秦さと子、藤内美保、高野政子、桑野紀子、杉本圭以子

看護理論の基本構造や理論評価の意義及び視点について理解し、看護実践への活用について検討することを目的に、教員による講義と学生によるプレゼンテーションで構成した。履修生 10 名であったため 2 名ずつのペアとし、5 人の理論家の理論の概説と看護実践への活用の具体例についてそれぞれ発表させた。感染予防対策のため発表会はすべてオンラインで実施した。5 名の担当教員が各理論家の発表会にチュートリアル形式で支援した。それぞれの発表では、理論の解釈だけ

でなく実践への活用例について発表出来ており、活発な意見交換につながっていた。そのため、次年度も同様の授業構成で実施予定である。

看護教育特論

1・2 年次後期

高野政子、藤内美保、梅野貴恵、秦さと子、吉村匠平、山崎清男

看護を担う人材育成が質の高い看護教育に基礎をなすという観点から、教育学の理論と技法を理解し使えるようになることを目標に、本科目では看護基礎教育の内、専門分野の看護教育学、看護教育課程、看護教育方法、看護教育評価を含む内容を教授した。外部講師 1 名を招聘し、教育原理、教育心理学を分担した。履修生は、看護管理・リカレントコース 2 名、研究者コースの 2 名であった。課題レポートは、各自の立場で教育的視点に立ち、現状分析と自己の課題を明確化し、全員の前で発表して意見交換した。例年、受講生の職種や目的が多様であるので、其々に学び取っていると思われる。

看護コンサルテーション論

1・2 年次後期

杉本圭以子、関根剛、竹村陽子、吉村匡平

看護におけるコンサルテーションの概念と方法、プロセスの概略を講義し看護コンサルテーションの全体像をつかんだ後、外部講師（専門看護師）により現場でのコンサルテーションの実際を講義していただき、臨床現場に即した現実的なコンサルテーションについて考察した。さらに対象者理解のための心理的アセスメント、効果的な心理教育と心理的援助の方法について講義した。講義での学びをふまえ、後半は学生が経験した事例を持ち寄り、ディスカッションすることで看護コンサルテーションについてさらに理解を深めた。全講義をオンラインで実施した。活発にディスカッションが行われ、理解を深めることができたため次年度以降もオンライン授業の活用を検討する。

看護倫理学特論

1・2 年次前期

平野亙、小野美喜、関根剛

倫理的思考は、専門領域を問わず全ての看護職に不可欠であることから、受講者が専攻する各領域で活かせるよう、必要な生命倫理・医療倫理の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく思考訓練を行うことを目的に講義を組み立てている。11 回の講義と担当教員ごとに事例演習を行い、

さらに最終回には受講生の事例報告（レポート）による討論を行った。

講義は、「Profession の責任と倫理」・「Bioethics・生命倫理の展開と課題」・「倫理的判断の方法」・「人間の尊厳と自己決定権」・「プライバシー権」・「医療政策による人権侵害」を平野、「看護職の責任と倫理規程」・「看護職の価値観と倫理」、「看護場面の倫理的ジレンマとその解決ステップ」を小野、「倫理的行動とコミュニケーション」・「問題解決のためのコミュニケーション・スキル」を関根が担当した。事例演習は、3 名の教員各々が講義と関連付けて行った。

受講生が多くコロナ禍対応でリモート授業適応となったため、開講時期を 7 月にずらし、一部対面で講義を行った。最終回の事例報告は、例年同様受講生が 20 名を超えたので、レポートのテーマをもとに 3 名の教員で割り振り、それぞれ討論を主宰して評価を行った。

看護政策論

1・2 年次後期

影山隆之、小山明夫、小池智子、中西三春、立森久照、村嶋幸代

日本の看護・保健・福祉政策の最新の動向と、これらの政策や事業の評価方法及び評価の実例、及び大分県における看護政策について、オムニバス形式の講義を開講した。一部には、狭義の看護政策だけでなく、対策立案の方法、NPO の政策的関与、研究エビデンスの政策への反映などについて、実例や演習の要素を取り入れ、履修者には非常に好評であった。演習の時間をさらに増やすことを次年度は検討する予定である。

英語論文作成概論

2 年次前期

甲斐倫明、影山隆之

テキスト（ボタージュ先生の医学英語論文講座）と配布資料を用いて、英語論文を執筆することの意義、英語論文の書き方の概要、さらに科学論文で使用する英語表現の基本的パターン（動詞）と基本表現までを教授した。英語論文の構造化アブストラクトを書けることを目標に実験系および調査系の論文アブストラクトを例示しながら講義を行った。提出されたアブストラクトの添削指導を行った。

Intensive English Study

1 年次前期

Gerald T. Shirley

Competence in English is important for graduate students. This course aimed at improving the basic English language ability of students through intensive practice in reading, listening and grammar. It was an eight-week course in which students practiced reading, listening and grammar problems to help them improve their basic language abilities in these important areas. The course used a Computer Assisted Language Learning (CALL) system. The CALL course is designed so that students can access and practice CALL at any time on their computers at home and in the Graduate Student Room. There were no classroom sessions in this course. Students practiced the CALL course problems during their own time. Their progress was monitored and evaluated by the instructors during the eight-week course. Individual assistance and instruction was available to each student through consultation with the instructors. The course consisted of an orientation session in the CALL classroom in which the CALL course was introduced and class guidelines were discussed.

原書講読演習

1 年次前期

宮内信治

英語学習の基礎的要素の確認定着を目標とし、発音記号、英文法基礎知識、語源学の知見を基にした医療看護英単語を教授した。演習として看護（Nurse Practitioner：NP）に関する英文原著の読解翻訳に取り組ませその成果をレポートに編集させた。NP の現状を含めた看護の国際的な情報知識に触れさせるとともに、そうした知識入手における英語読解能力の重要性を認識させることができた。講義教材としての原著を更新し、国際的看護の最新情報、知識への接触と看護界の動向への興味関心を促進喚起していきたい。

課題研究

1～2 年次

稲垣敦

学生ごとに指導教員が研究指導を行った。今年度の提出論文と指導教員は次の通りであった。

（助産学コース）

加藤瑛可：妊娠期に男性パートナーに学んでほしかった出産準備教育－産後の女性によるふり返りから－（主指導教員：影山隆之、副指導教員：杉本圭以子）

坂本理佳：里帰りの有無と産後 4 か月時の母親の疲労感の自覚との関連（主指導教員：高野政子、副指導教員：草野淳子）

佐藤李帆：メンタルヘルスの不調が疑われる妊婦に対する助産師の支援の実態について（主指導教員：影山隆之、副指導教員：関根剛）

仲野水稀：助産学生が感じる外国人妊産婦をケアする際の障壁とその影響要因（主指導教員：桑野紀子、副指導教員：梅野貴恵）

羽田野朱音：Ａ高校女子生徒のダイエットに関する健康教育の効果の検討（主指導教員：梅野貴恵、副指導教員：姫野綾）

藤澤彩花：未就学児を育てている女性看護職の就業継続要因の検討（主指導教員：林猪都子、副指導教員：徳丸由布子）

桝田志帆：産科医療施設のない離島のある過疎地域で暮らす母親の周産期における課題と支援（主指導教員：梅野貴恵、副指導教員：赤星琴美）

松永知亜紀：西日本地域におけるアドバンス助産師更新の現状と課題（主指導教員：林猪都子、副指導教員：永松いずみ）

三浦彩南：NICU に入院した児をもつ母親の愛着形成促進のためのケア（主指導教員：小嶋光明、副指導教員：樋口幸）

山田ゆず：リプロダクティブヘルスからみた性教育の内容の変遷と今後の課題（主指導教員：平野亙、副指導教員：樋口幸）

渡辺莉緒：産科外来助産師の産後うつを予測する視点と情報共有の実際（主指導教員：杉本圭以子、副指導教員：梅野貴恵）

（広域看護学コース）

岡﨑真里：発達障がいの可能性のある 5 歳児へのフォローアップにおける現状の実態調査（主指導教員：赤星琴美、副指導教員：小野治子）

岡田愛美：有料老人ホーム、サービス付き高齢者向け住宅における認知症ケアの現状（主指導教員：平野亙、副指導教員：赤星琴美）

相良実希：集団予防接種等による HBV 感染被害者が医療機関で経験したことと医療機関及び行政機関に望むこと（主指導教員：赤星琴美、副指導教員：市瀬孝道）

繁田采佳：日勤ホワイトカラー労働者の昼間の過剰な眠気と生活習慣及び職場環境との関連（主指導教員：影山隆之、副指導教員：後藤成人）

下川裕子：知的または精神障がいのある母親の子育て支援について（主指導教員：平野亙、副指導教員：赤星琴美）

竹中響：医療的ケア児の母親が行った就学準備の実態―医療的ケア児が普通学校に入学する際の課題と保健所保健師の支援の在り方の一考察―（主指導教員：村嶋幸代、副指導教員：赤星琴美）

舛友里奈：1 小児科医療機関における知的障がい・発達障がい児に対する合理的配慮の取り組みについて（主指導教員：平野亙、副指導教員：赤星琴美）

門田理子：COVID-19 流行下における在留外国人の感染症に対する意識と予防行動―日本人との比較を通した在留外国人への感染症対策の検討―（主指導教員：桑野紀子、副指導教員：赤星

琴美）

（NP コース）

窪岡由佑子：日本におけるプライマリ・ケア領域診療看護師（NP）の多職種協働に関する文献研究（主指導教員：森加苗愛、副指導教員：稲垣敦）

熊野真美：急性期病院における看護管理者・医師に対する診療看護師(NP)に関する意識調査（主指導教員：森加苗愛、副指導教員：品川佳満）

佐藤圭祐：臨床における思考過程に関する診療看護師と一般看護師の比較：文献研究（主指導教員：秦さと子、副指導教員：宮内信治）

竹尾千恵：1 大分県の訪問看護師が抱く就労継続困難感の検討（仮）―組織要因と個人要因―（主指導教員：関根剛、副指導教員：稗田朋子）

土谷由香：心不全患者における栄養状態と退院後早期再入院との関連（主指導教員：石田佳代子、副指導教員：定金香里）

古家景子：NICU/GCU を管理する診療部長と看護師長の NP と特定行為に関する認識（主指導教員：高野政子、副指導教員：草野淳子）

松本佳代：米国において小児領域に従事する NP の臨床推論の過程および看護実践に関する文献検討（主指導教員：草野淳子、副指導教員：高野政子）

（看護管理・リカレントコース）

穴見奈々：メンタルヘルス不調により休職した労働者の再休職に影響を与える要因の検討（主指導教員：影山隆之、副指導教員：村嶋幸代）

後藤真由美：認知症高齢者グループホームにおける看取りおよび終末期 ケ アの実態・課題・必要とされる対策に関する文献研究（主指導教員：福田広美、副指導教員：桑野紀子）

髙木清美：中小規模病院の看護部長による効果的なスタッフの育成に関する研究（主指導教員：福田広美、副指導教員：桑野紀子）

竹尾春香：筋萎縮性側索硬化症（ALS)患者の療養の場が変わる時の看護職の双方向の連携（主指導教員：藤内美保、副指導教員：福田広美）

渡邉直美：急性期病棟の看護師によるリハビリテーション看護の効果（主指導教員：福田広美、副指導教員：桑野紀子）

特別研究

1～2 年次

稲垣敦

学生ごとに指導教員が研究指導を行った。今年度の提出論文と指導教員は次の通りであった。

（研究者養成コース）

篠原彩：ベトナム人女性技能実習生の来日後の主観的月経悪化と相談行動（主指導教員：桑野紀子、副指導教員：渡邉弘己）

矢幡明子：中高年齢労働者への運動機能測定を導入した保健指導が運動行動変容に及ぼす影響（主指

導教員：稲垣敦、副指導教員：村嶋幸代）
（健康科学専攻）
田中生弥子：中学生における自殺予防教育プログラムの効果－SOS の出し方に関する教育を中心に－（主指導教員：影山隆之、副指導教員：赤星琴美）

看護アセスメント学特論

1 年次前期
藤内美保、高野政子、石田佳代子、杉本圭以子

クライアントマネージメントを遂行するために、看護職が問題解決過程を展開し、信頼性のある方法論に従った身体的、包括的な機能評価のための情報収集の基礎理論と技法について教授した。1 点は看護過程を展開する場合の看護理論による違いにより、看護診断に違いがあるか、診断過程の違いがあるかなど検討する。2 点目は小児のフィジカルアセスメント、家族看護とアセスメント及び看護の実際について、3 点目は災害看護における概念や理論の探求、災害看護の課題とその解決の探求など、4 点目は精神看護におけるアセスメントの講義および事例展開演習を行った。いずれも、基礎理論を踏まえた看護判断に関する具体的適用方法の課題学習を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

看護管理学演習

2 年次
福田広美

看護管理に関する実践力を高めることを目的に、臨床現場における組織の現状分析を行い、課題を明らかにしたうえで看護管理演習の計画の立案、実践および評価に関する教育を行った。学生は、立案した計画をもとに演習と文献による考察を行い看護管理の改善に取り組んだ。学生は、各自で行った臨床現場の看護管理に関する現状分析を発表し、組織分析の視点を共有するとともに、課題解決のための計画、実践、評価についても互いにディスカッションを行った。学生は、こうした一連の演習プロセスを通して、看護管理の視点を学び、理解を深めた。今後は、学生が演習で実施したことを臨床現場で発展的に進められるように、教育内容を充実していく。

基盤看護学演習

2 年次後期
藤内美保、影山隆之、品川佳満

基盤看護学演習においては、研究の方法についてさまざまな観点から、その手技方策を具体的に

解説し、学生自身がその手法を理解することを目的としている。3 名の教員によるチュートリアル形式とし、担当教員の専門的な領域から演習形式で行った。「アセスメントツールの開発」「精神健康測定法」「自律神経機能とその測定法」にそって、レポートや発表およびディスカッションにより評価した。今年度は新型コロナの影響でオンラインでの授業とした。

老年看護学特論

1 年次

小野美喜

看護管理リカレントコース 4 名が受講した。夏季集中講義で実施し、COVID-19 感染対策のためすべてオンラインで授業展開した。高齢者の全体像、高齢者の理解と介入に有効な理論、認知症に関する基礎知識を教授し学びなおしとした。さらに受講生が経験している高齢者の健康上の課題について、意見交換を行い、高齢者の看護の課題と検討を行った。オンラインではあるが、学生のプレゼンテーションは画面共有により円滑であり、幅広い経験に立った意見が活発に出されるなど、効果的であった。働きながら大学院で学ぶ受講生が殆どであり、オンラインはニーズに即していたともいえる。今後も引き続き学生背景に応じた科目運営を行っていく。

発達看護学演習

2 年次前期

林猪都子、梅野貴恵

思春期、成熟期、更年期、老年期の各ライフステージにおける女性の身体的、精神的、社会的特徴と看護問題の中から、学生の学習テーマである月経異常や産後の継続ケアについて、それぞれのテーマに関する日本語・英語論文を読んでそれらの内容を討議した。

地域看護学特論

1 年次

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、村嶋幸代

地域社会におけるヘルスプロモーションおよびプライマリヘルスケアの概念やそのアプローチ方法、健康の保持・増進を支援するための理論と概念、活動方策を教授した。さらに個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、全てのライフステージの視点という広域的な看護活動の意義、目的、機能、役割を探究した。

産業保健領域で活用可能な理論を用いて事例を理解する方策、職場における看護活動を組織的に展開する方策について討議を行った。地域職域連携の意義や活動事例について最新の情報を活

用し、複雑化する地域住民や労働者への看護の役割・機能を具体的に理解できるように教授した。

広域看護学演習

2 年次

赤星琴美、桑野紀子、福田広美

公衆衛生看護、看護管理、国際看護および公衆衛生領域における最新のトピックスを扱った論文を取り上げ、各教員が分野ごとにチュートリアル方式により演習を行った。

特に、各保健領域での法改正や事業の見直しなど、常に新しい情報を学生へ提供しつつ、具体的に理解できるように教授した。

NP 実習

1 年次前期

甲斐博美、大嶋佐智子、小野美喜、高野政子、中釜英里佳、堀裕子

7 月に臨地実習予定であったが、COVID-19 感染症拡大のため実習施設の受け入れが中止となり、学内実習に切り替えて 9 月に実施した。履修者は 6 名であった。実習目的は NP の診療活動に同行し、診察の実際を体験することで NP の役割を理解し、必要な高度看護実践能力と自己の課題を明確にすることであった。同行実習はできなかったが、代わりに診療看護師（NP）や診療看護師（NP）配置の看護管理者による講義を行い、施設内における安全管理体制やチーム医療における NP の役割の学びを展開した。さらに診療看護師（ＮＰ）に関する研究等を文献学習し、発表・意見交換を行い、NP の役割と NP を目指すために必要な学びの課題が明確となっていった。臨地での実習展開ができなかった分は、次年度実習で積み上げて実施していく。また、次年度も感染対策が継続するようであれば、同プログラムをさらに改善工夫していきたい。

老年 NP 特論

1 年次後期後半

甲斐博美、小野美喜、庄山由美、高根利依子、廣瀬福美、光根美保、森加苗愛

EBN に基づいたケアを提供できる実践能力を高めるために、加齢に伴い生じる身体的・精神的・社会的機能の変化と、老年期の発達課題を理解し、NP としての看護を実践する理論、方法を探究することを目的としてオンラインによる講義を行った。8 名が履修した。講師は、各健康レベルにおける看護を専門とする教員や病院や介護老人保健施設で実践者として、または訪問看護ステーションの管理者として様々な臨床で活動する診療看護師がオムニバス形式で教授した。更に、老年期の対象者の看護実践事例をケースレポートにまとめ、それぞれのテーマ別に理論を使った事例

検討を実施した。発表やディスカッションを通じてチームマネジメントや看護アセスメントを深めた。看護実践を、今までの経験と共通・専門科目で履修した知識を統合して言語化することで、学生各自の課題や、今後 NP としての看護実践における課題が明らかになった。来年度も、オンラインを活用して、活発に自律的に取り組み、EBN に基づいた倫理的思考と主体的な学習につながる支援を強化する。

老年疾病特論

1 年次後期

濱中良志、一万田正彦、財前博文、竹下泰、甲原芳範、小寺隆元、塩月成則、木村成志

NP としてプライマリケアを提供するために、老年期によくみられる慢性期の疾病および継続医療における臨床評価について学び、その診断・処方（薬・検査）・治療について知識を教授した。今年度は、コロナ禍のため、一部は Zoom を用いて授業を行った。

老年臨床薬理学特論

1 年次後期

吉田成一、伊東弘樹、田中遼大

診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。

一度提示した処方や注意点については理解できるが、現象を一般化して、多様な条件で判断することに到達しておらず、臨床薬理学という視点での学習内容の習得状況は不十分である受講者が散見された。

履修者（再受験該当者を含む）6 名中、全員が単位を取得したが、4 名が再試験での単位取得であった。単位取得率で評価すると、一定の学修修得状況にあるといえるが、本質的理解が進んでいない現状が過年度以前より継続している状況の改善が必須である。

老年診察診断学特論

1 年次後期

濱中良志、加隈哲也、糸永一朗、阿部航、安藤優、中村雄介、中村朋子、佐分利能生、溝口博本、宮崎美樹、藤谷直明

プライマリケアから臨床医学の各専門領域にわたって専門医師による講義、演習を行った。今年度はコロナ禍のため、一部は Zoom を用いて、授業を行った。

老年アセスメント学演習

2 年次前期

甲斐博美、小野美喜、立川洋一、濱中良志、光根美保、宮川ミカ、森加苗愛

老年期の対象者への包括的健康アセスメント及び看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的にオンラインにて演習を展開し 6 名が履修した。演習では、講師の医師と NP 修了生を講師に、慢性疾患や症状を伴う高齢者（成人を含む）の事例を通して臨床推論能力を身に着ける為、情報を整理しアセスメントを行い、必要な検査の選択と結果の解釈、診断、ケアプランの作成を行った。事例のプレゼンテーションを通じ、基礎知識や NP に求められる看護マネジメント能力の確認を行った。修了生である診療看護師からの指導により看護マネジメントに必要な能力の促進を強化した。同時期に履修する老年薬理学演習とともに症例ごとのアセスメント能力の強化につながった。COVID-19 感染症対策によりオンラインでの演習であったが、主体的に取り組めた。今後もオンラインを活用して臨床の症例から臨地に近い形の演習をプログラムしていく。

老年薬理学演習

2 年次前期

甲斐博美、小野剛志、小寺高元、塩月成則

老年領域における NP の役割を理解し、必要とされる薬理学に関する高度看護実践能力を獲得するために、事例によるシミュレーションを通じて学んだ。7 名が履修した。症例を通じて、病態の理解や検査や処方の判断、治療マネジメントも含めた薬理学の習得をディスカッションによる演習で強化した。1 事例に対し複数名の履修生がプレゼンテーションすることにより、事例をより深めて学ぶことに繋がった。オンラインを活用して小テストも導入し、演習のプロセスの中で知識の定着につとめた。演習の課題は特定行為に係る内容も多く含まれ、同時に履修する老年アセスメント学演習との相乗効果で学習の到達度をあげている。今後は、近年の高齢者医療の課題であるポリファーマシーの事例も強化し、実習につながるようより実践的な学び方を考えていきたい。

老年実践演習

2 年次前期後半

甲斐博美、恵谷玲央、大嶋佐智子、小野美喜、迫秀則、佐藤博、竹内山水、田村委子、中村雄介、古川雅英、藤谷悦子、古川雅英、山本真

対象者への看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開した。COVID-19 感染症対策により、演習の時期や演習方法の検討を重ね安全に技術の演習ができるように、オンラインも導入してプロ

グラムした。NP に必要な医療行為を習得するために、専門医やコメディカルの指導の下で NP 修了生と共に演習を実施し、実習につながるようにした。さらにシミュレーターを用いて創傷処置、胃ろうカテーテルの交換など複数の治療技術について個々の病態をふまえて安全・確実に実施できるようにした。病院施設での演習が多い為、感染の動向を確認しながら指導者と履修生の安全を保障した展開をすすめる。次年度は、オンライン導入の教育を活かして、実際の演習だけでなく遠隔による指導も取り入れた多様な学び方を考えていく。

老年 NP 実習Ⅰ

2 年次前期

甲斐博美、小野美喜、濱中良志、堀裕子

プライマリ診療を行う場で実践力を身につけることを目的に NP 実習を展開した。今年度は病院施設 8 週間（老年 NP 実習Ⅰ）、診療所 3 週間（老年 NP 実習Ⅱ）、老健施設 3 週間（老年 NP 実習Ⅲ）の 14 週間で構成した。COVID-19 感染拡大の為、実習施設の変更と学内実習を組み込んだ。老年ＮＰ実習Ⅰは病院実習で基本的な診療を学んだ。1 施設 1～2 名の学生配置で 6 名の学生が履修し、単位取得した。臨床実習では特定行為のみならず、判断やアセスメント、臨床推論の能力強化の指導を強化した。NP に必要な 7 つの能力を客観的に評価できる様式を活用し、適宜、自己の課題を意識できる機会を持つように活用した。学内実習医療スタッフとの連携・協働の実践を強化し、看護実践能力の更なる強化と NP に必要な 7 つの能力を伸ばしていくことが引き続きの課題である。今年度は、コロナ禍での実習であり、学内実習や遠隔での指導も取り入れた。次年度は引き続き感染の動向を確認し実習の展開を臨地と遠隔指導を効果的にプログラムしていく。

老年 NP 実習Ⅱ

2 年次後期

甲斐博美、小野美喜、濱中良志

外来にて軽微な症状の初期診療、慢性疾患の診療について学び、指導医の訪問診療・往診に同行し、在宅で継続診療について学ことをねらいとし、3 週間の診療所実習を 6 名が履修した。COVID-19 感染対策の為、訪問診療などは厳重な感染対策を講じて同行させて頂いた。医師からの指導の元で医療面接や身体診察などを実施し、在宅での継続療養中の患者に対する包括的アセスメントを学んだ。今年度は、発熱外来での実習により、感染の動向を踏まえた判断や臨床推論を学ぶことができた。次年度の感染の動向により、臨地と遠隔指導を効果的にプログラムしていく。

老年 NP 実習Ⅲ

2 年次後期

甲斐博美、小野美喜、濱中良志

入所している高齢者およびデイケアに参加する在宅高齢者の包括的アセスメント、看護的治療マネジメント（特定行為を含む）を実施することと、急変を含めた健康状態の変化を早期発見し、医療的処置の必要性判断と実施をすることをねらいとした。6 名の学生が履修した。COVID-19 感染拡大の為、実習施設の変更と学内実習を組み込んだ。1 週間の老人保健施設での実習において、担当となる対象者やご家族に対しての看護的治療マネジメント、医療面接や身体診察を通じて包括的アセスメント能力を強化した。2 週間の学内実習では、介護老人保健施設の管理者である NP 修了生の指導者を含め、在宅分野での実践を重ねた修了生 5 名の指導者がオンラインでの学内実習の指導に携わった。臨地実習と学内実習を統合して、対象者やご家族の QOL、倫理的問題、在宅医療でのマネジメントを深く学び合うことができた。次年度は引き続き感染の動向を確認し、オンラインを活用した臨地実習との統合による学びを支援していく。

老年 NP 探求セミナー

2 年次後期

小野美喜、甲斐博美、濱中良志、森加苗愛

老年 NP コース 6 名が履修した。老年 NP 実習で担当した症例を振り返り、NP としての包括的アセスメントや看護治療的マネジメントを再検討することを目的に個人のワークとグループディスカッションを組み入れて実施した。臨地実習が短縮されたため、症例検討は例年よりも時間をかけて吟味することができた。また未習熟の特定行為についてスキルトレーニングを行った。個々の学生のトレーニングの習熟度を上げていくことが課題である。

NP 論

1 年次前期

小野美喜、高野政子、田村委子、藤内美保、光根美保、村嶋幸代

NP コースの必須科目として NP の役割、現状について考えるとともに、チーム医療の中で活動するための医療安全や手順書作成についてワークを実施した。また海外 NP の活動を学び、日本の NP 制度化の動向について理解を深めるとともに最新の情報を共有できた。急遽オンラインで実施したが、グループワークも円滑であった。今後も NP の基本的な考え方を伝え考える科目として組み立てていく。

フィジカルアセスメント学特論

1 年次前期

藤内美保、石田佳代子、濱中良志

クライアントの包括的・全身的な身体的健康状態のアセスメント能力を高めることを目的に教授した。適切なスキルのもと観察ポイントや根拠に基づいた判断できる能力を確実に身に付けるため、五感を駆使した問診、視診、触診、打診、聴診の基本技術を基本に理論と実践を学んだ。全身、頭部、頸部、胸部（肺および心血管系）、腹部、直腸、四肢、神経系のフィジカルアセスメントを系統的に実施した。COVID-19 の影響によりオンラインで学生が担当を決め、事前学習をしてプレゼンテーションとディスカッションをした。演習では異常な状態把握ができるようにフィジカルアセスメントモデルのシミュレーターを使用し、確実なスキルとその根拠を修得できた。試験は筆記試験および OSCE を行った。

小児 NP 特論

1 年次後期

高野政子、草野淳子、式田由美子、佐々木真理子、黒木雪江、後藤愛、菅谷愛美

講義は EBN に基づいたケアを展開できる実践能力を高めるために、小児の成長発達と発達課題を基本的・理論的に理解し、NP（診療看護師）としての看護実践する探究的な視座を持つことを目的として行った。臨床実践で小児を対象に活躍している糖尿病認定看護師、小児 NP、小児の訪問看護を行う訪問看護認定看護管理者などを含む 6 名がオンラインと対面で講義した。

小児 NP の役割については、NP3 名と学生 1 名、教員 2 名で討論して、日本版小児 NP として、今後の自己像をイメージする上での課題についても学ぶことができていた。次年度は、学生に事例レポートを課して、最後の討論を深めることでより学びを深めることが必要と考える。

小児疾病特論

1 年次前期

高野政子、大野拓郎、井原健二、末延聡一、糸永知代、保科隆之、久我修二、井上真紀、関口和人

小児に適切なプライマリケアを提供するために、小児期によくみられる疾病について学び、その診断・治療（検査・処方）について理解することを目的に行った。実際に臨地で NP 実習を指導した経験のある医師および地域の医療機関で小児の診療を行っている各専門領域に詳しい医師がオンラインで講義した。特定行為に関連した内容を期待することには限界があるので、学生に自己学習で深める必要がある。最後に筆記試験を行い評価した。

小児臨床薬理学特論

1 年次前期

高野政子、吉田成一、松本康弘

講義は、医薬品についての知識として必要な薬理学の概要や薬物動態など基礎的な薬理学総論を老年 NP コースと 6 コマを共通として学び、後半は小児疾患に対する薬物療法を理解し、小児の薬用量、服薬指導など知識を学んだ。特に、小児に多い発熱、下痢や腹痛、アレルギー等の疾患の治療に用いる医薬品の作用、副作用、相互作用などを理解し、小児の特殊性に焦点を当てて講義した。最後に筆記試験を行い評価した。

小児診察診断学特論

1 年次前期

高野政子、江口春彦、別府幹庸、井原健二、前田知己、大野拓郎、末延聡一、久我修二、長濱明日香、武口真広

小児の臨床における診察や診断における臨床推論能力を身につけるために、小児の全身的な臓器・器官系ごと必須の知識や技術について理解することを目的に行った。実際に臨地で NP 実習を指導した経験のある医師および地域の医療機関で小児の診療を行っている各専門領域に詳しい医師がオムニバス形式で講義した。学生は自己学習で深める必要がある。最後に筆記試験を行い評価した。

小児アセスメント学演習

2 年次前期

高野政子、草野淳子、大野拓郎

老年 NP コースの学生と共に、最初に医師から臨床推論についての講義を受けた。次に、事例や高機能シミュレータで演習を行った。慢性疾患や症状を伴う小児の 5 事例を通して臨床推論能力を身に着けるように情報整理し、アセスメントを行い、必要な検査の選択と結果の解釈、診断、ケアプランの作成を行った。事例のプレゼンテーションを通じ、基礎知識や求められる能力の確認を行い、実際に近い医療面接の場面の演習により対象者のイメージをアセスメント能力の強化につながり、臨床の専門医からの指導によりマネジメントに必要な能力の促進ができた。今年も COVID-19 の感染のため、臨床で実際の事例の情報収集ができなかったが、学生が事例を発表し意見交換した。今後も臨床に近い形での演習を組み深めていく。

小児薬理学演習

2 年次前期

高野政子、草野淳子、松本康弘

小児領域における NP の役割を理解し、必要とされる薬理学に関する高度看護実践能力を獲得するために、事例を通じて、病態の理解や検査や処方の判断、治療マネジメントも含めた薬理学の習得をディスカッションによる演習で強化した。

演習の課題は特定行為に係る内容も多く含まれ、同時に履修する小児アセスメント学演習との相乗効果で学習の到達度をあげている。実習につながるよう、より実践的な学びをさせたい。

小児実践演習

2 年次前期

高野政子、草野淳子、甲斐博美、恵谷玲央、大嶋佐智子、小野美喜、迫秀則、佐藤博、竹内山水、田村委子、中村雄介、古川雅英、藤谷悦子、古川雅英、山本真

対象者への看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開した。

小児 NP に必要な医療行為を習得するために専門医の指導の下で NP 修了生と共に演習を実施し、小児 NP 実習につながるようにした。さらにシミュレーターを用いて創傷処置、胃ろうカテーテルの交換など複数の治療技術について個々の病態をふまえて安全・確実に実施できるようにした。

小児 NP 実習 I

2 年次前期

高野政子、草野淳子、大野拓郎

急性期病院の小児病棟で、小児科部長や病棟医長等の協力を頂き NP 実習を展開した。今年度は病院 8 週間で、特定行為を含む実習を学んだ。COVID-19 があったが実習受け入れをしてくださり、1 施設に学生 2 名を配置し終了できた。さらに、実習後に指導医、教育担当師長、修了生（NP）とのカンファレンスで、小児 NP として必要な知識や能力を身につける必要性を学んだ。

臨床実習では特定行為のみならず、判断やアセスメント、臨床推論の能力強化の指導を強化した。NP に必要な 7 つの能力を客観的に評価できる様式を活用し、適宜、自己の課題を意識できる機会を持つように活用した。医療スタッフとの連携・協働の実践を強化し、看護実践能力の更なる強化と NP に必要な 7 つの能力を伸ばしていくことが引き続きの課題である。

小児 NP 実習Ⅱ

2 年次後期

高野政子、草野淳子、福永拙、後藤愛

医療型重症心身障害児施設にて、4 週間の実習を 2 名が実施した。指導者の医療面接や身体診察などを実施し、施設に入所している長期の療養児に対する包括的アセスメントを学んだ。医療センターは、指導医や臨床の PT、OT、ST や、保育士など多数の専門家とチーム医療の中で学ぶことができた。

小児 NP 実習Ⅲ

2 年次後期

高野政子、草野淳子、別府幹庸、長濱明日香

診療所の外来診療と、在宅で生活する小児の訪問診療に同行し、包括的アセスメント、看護的治療マネジメント（特定行為を含む）を実施することができた。2 名の学生が 2 施設に分かれて実習した。2 週間での実習において、受診した小児や家族に対しての看護的治療マネジメント、医療面接や身体診察を通じて包括的アセスメント能力を強化した。特定行為の実施なども行えて成果の有る実習ができた。

小児 NP 探求セミナー

2 年次後期

高野政子、草野淳子、足立綾

小児 NP コース 2 名が履修した。小児 NP 実習で担当した症例を振り返り、NP としての包括的アセスメントや看護治療的マネジメントを再検討することを目的に個人のワークとグループディスカッションを組み入れて実施した。個々の学生の特定行為の教育カリキュラムの再検討が課題である。

広域看護学概論

1 年次

赤星琴美、小野治子、川崎涼子、木嶋彩乃、佐藤愛、藤内修二、中西信代、村嶋幸代

地域社会におけるヘルスプロモーションおよびプライマリヘルスケアの概念やそのアプローチ方法、健康の保持・増進を支援するための理論と概念、活動方策を教授した。さらに個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、全てのライフステージの視点という

広域的な看護活動の意義、目的、機能、役割を探究した。

地域保健領域で活用可能な個人レベル・集団レベル・地域レベルの理論について、学生がプレゼンテーションを行い、討議を重ねながら複雑化する行政機関における広域看護の役割・機能を具体的に理解できるように教授した。特に、地域保健領域での法改正や保健事業の見直しなど、常に新しい情報をすばやくキャッチし、新鮮な情報を学生へ提供しつつ、複雑化する行政機関における広域看護の役割・機能を具体的に理解できるように教授した。

地域保健特論

1 年次

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、桑野紀子、佐藤愛、久澄千里

地域で生活する個人・家族・集団を対象とした保健師がおこなう支援の基本的な考え方を理解し、人びとが生活している地域における看護の役割と機能を理解できるよう講義した。また、個人を対象とした支援から地域社会全体を対象とした支援までの保健師の活動方法を教授した。学生が最新の情報や課題を理解し、今後の展開を検討できるよう討議を含む講義とした。

産業保健特論

1 年次後期

高波利恵、吉田愛

労働環境および作業上の諸条件から発生しやすい疾病・障害を防止し、身体的・精神的・社会的健康と福祉を維持増進するための産業保健システム、活動、看護の位置付けと役割、具体的な活動方法をヘルスプロモーションや産業保健に関する理論およびモデルを用いて教授した。

企業で働く保健師を招き、職域における保健師活動の現状と課題について実際の活動事例を示しながらディスカッションを含めた講義を行った。

学校保健特論

2 年次

赤星琴美、小野治子

学校保健安全法に基づく学校保健のあり方と、学校保健を担当する専門職、特に養護教諭の役割と機能について教授した。また、学校保健の対象の特性を理解し、それぞれの発達段階を踏まえた保健指導、健康教育等の具体的方法について教授した。

現在の学校が抱えている健康課題や地域の保健師との連携の取り方など実際の状況を教授した。さらに最新の文献を用い、変化する子どもの健康問題に対応するための地域保健の連携や組織的

な解決手段についてディスカッションを通じて考えを深めた。

健康危機管理論

1 年次後期

赤星琴美、小野治子、甲斐倫明、玉井文洋、本山秀樹

地域社会における健康危機管理（災害時保健活動を含む）に関する基本的な考え方やリスクマネジメント、保健師活動の展開方法について理解を深めることができるよう、実際の事例を用いた講義を行った。また、健康危機管理における多職種連携について理解を深めるため、県健康危機管理の経験者を講師として招き、地域での健康危機管理の実際や課題、具体的な活動方法について事例を使いながら講義を行った。

また、大分 DMAT で活躍している講師による講義を通して、トリアージの実際を経験し、大規模災害発生時の対応についても学ぶようにするなど、実践に即した学習内容を構成した。

健康増進技術演習

1 年次

関根剛、安部眞佐子、稲垣敦

本講義は、対象者の健康レベルに応じた個人・集団の健康と生活を評価し、より効果的な疾病予防・健康増進のための知識と能力を養うことを目的としたものである。疾病予防のためのアプローチとして、運動指導、栄養指導、心理相談という 3 つの領域を設定し、それぞれ 6 回、7 回、8 回の講義・演習を実施した。

運動指導については、測定（数量化）の重要性、身体活動量・強度の測定、自転車エルゴメーターによる最大酸素摂取量の測定、ストレッチングの効果、講義やエクササイズ・ウォーキングや介護予防運動の実技指導も行った。

栄養指導については、健康日本 21 の中での食事摂取基準の位置付けと栄養行政の変遷、また各国の栄養指導から見た食事バランスガイドの特性について講義した。さらに、各栄養素に発表をしてもらい基礎事項を整理し、高血圧症、脂質異常症、糖尿病、慢性腎臓病、及び、妊婦や子どもの栄養指導の演習を行った。

心理相談については、他の大学院科目と内容の重複が起きないようにしながら、受講者のニーズに配慮して講義内容を調整した。今年は、健康行動を促進させるための行動変容技術、集団指導や教育に活かす構成的エンカウンターグループ、コミュニケーションスキル、講義や講演のための教育目標設定とプレゼンテーション技術、心理測定の基礎となる統計などについて実施した。評価は講義で実施した内容についてレポートを課した。

評価はそれぞれの講師がレポートや演習などを課して、3 名の合計による総合的な評価を行った。

広域看護アセスメント学演習

1 年次前期

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、村嶋幸代、高城翔平

地域の健康課題の抽出および評価の方法として地域看護診断の基礎的考え方や方法論を教授した。既存資料の活用や地区視診を行うことで、対象集団の理解やニーズを多面的にアセスメントし、地域の抱える健康課題、地域住民の健康課題を抽出し、支援方法を立案する演習を取り入れた。また、大分県国民健康保険団体連合会の担当者により、国民健康保険データと KDB システムの理解を深める講義・演習を実施した。さらに、「地域マネジメント実習」を行う対象の市の二次データを用いて地域看護診断演習を行い、2 回の中間報告で学生や教員との討議を重ね、実習科目との連動を図った。

精神保健学特論

1 年次前期

影山隆之

地域・職域における保健師活動に必要な精神保健の知識や考え方、つまり精神健康のモデルと評価法、事例のアセスメント、精神保健の法制と政策、最新の自殺対策等について、講義形式で開講した。とくに広域看護学コースでは昼間開講し、国試必須科目として行政保健師・産業保健師に必要な内容と、実践的なインテイクの方法と事例アセスメント、職場メンタルヘルス活動の実際などを紹介した。他方、研究者・リカレントコースに対しては夜間開講し、国試にとらわれず受講者の関心が高いトピックスを加味した。すべてリモート形式で開講したが、本科目のように履修者が少ない場合には質疑が活発になることと、昼間働いている夜間履修者には通学時間の節約になるため好評であることが明らかになり、今後の参考になった。

健康教育特論

1 年次前期

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛

個人と集団が、自らの健康および福祉の維持増進のための主体的な取り組みが行えるための支援方法について講義を行った。必要な知識・技術を対象者に効果的に伝達できる能力を習得できるよう講義と演習を組み合わせて教授した。また、行動変容理論の活用や、コミュニティオーガニゼーションを用いて個人・集団・組織に教育的に働きかける方策と保健師の地区活動の展開方法について教授した。また、家庭訪問指導や集団に対する健康教育では、一人で企画、指導案の立案、実施デモンストレーションを行い、さらに修正していくという過程を踏むことで学習を深めた。

健康リスクアセスメント演習

1 年次後期

赤星琴美、小野治子、佐藤愛、木嶋彩乃

個人、家族、集団が抱える潜在的な健康問題（リスク）を的確に予測し、保健師としてのリスクマネジメント、支援のあり方を習得するために講義と結核事例や感染症事例を用いて演習を行った。さらに、対象者または対象集団がリスクを予測し、自らリスクマネジメントができる支援方策を習得するため、具体的な事例を使用して学習を深めた。

疫学特論

1 年次前期

佐伯圭一郎

人間集団における健康事象の頻度分布とそれに影響を与える多様な因子を分析するために不可欠な疫学の理論と実践の手法を教授した。テキストの講読とディスカッション、演習、確認のための小テストを組み合わせて学習の定着をはかった。さらに保健師としての活動で特に必要度の高い調査手法とその具体例について理解を深めた。今年度は保健統計学で使用した生物統計学のテキストに疫学で使用する統計手法の内容が不足していたため、別途配付資料を用意したが、生物統計学においてそれらの内容を含んだテキストの方が有効と考え、来年度の生物統計学のテキストについて変更を検討した。

保健統計学

1 年次前期

佐伯圭一郎

健康情報の調査法とその概要、ならびに分析法について、その発生源から取り扱い、解釈に至るまで体系的に扱った。また、それら健康情報を適切に整理・分析するための生物統計学の手法を演習を交え教授した。本年度は生物統計学についてのテキストを難易度の低いものに変更したが、テキストの内容不足から学習が十分でない点が散見されたため、再度変更が必要と考える。

疫学・保健統計学演習

1 年次後期

佐伯圭一郎、品川佳満、渡邉弘己

疫学および保健統計学の知識に基づいて、実践する能力を身につけることを目的として演習を

行った。保健師業務に必須である ICT 技術を身につけ、情報収集・分析・発信に活用できる能力を養った。

社会保障システム特論

1 年次前期

平野亙

保健師の活動に不可欠な知識である社会保障制度について、その意義および理念と構造に対する理解を深めるために講義を構築した。

社会保障の存在理由である生存権の意味と法・行政など社会制度の位置づけ、諸制度の内容と課題を理解することを目的に、総論として法と行政の構造、財政の仕組み、社会保障理念の変遷について論じ、次いで各論として、所得保障の諸制度、医療制度とマンパワー、医療の安全管理、公衆衛生施策の体系、高齢者の保健とケアの制度、児童福祉、障がい児・者福祉の諸制度について講義した。

コロナ禍の中にあったが少人数の講義であったため、広い教室で対面授業を行った。成績評価は、講義内容に関連して中間と期末の 2 回、情報を収集し考察を行うレポートにより行った。

保健医療福祉政策論

1 年次後期

平野亙

保健師の職務に必要な政策形成、企画立案の能力を涵養する目的で、保健・医療・福祉の基本的な政策理念と政策上の課題、社会保障財政の現状と課題、障がい論とくに社会モデルの意味と課題、自立支援について講義し、さらに事業評価ならびに地方行政における政策形成については、理解を深めるために、教員自身の経験した実例（保健事業評価、社会福祉事業第三者評価および県条例策定）を基に実務の現実を紹介した。成績評価は、大分県内の保健・医療・福祉に関する基本計画を検索、整理して課題分析を行うレポートにより行った。

疾病予防学特論

1 年次前期

池邊淑子、藤内修二、三浦源太

さまざまな健康レベルにある個人、集団を取り巻く家族、集団、社会の健康状態を的確に判断・評価する能力を身につけるために、解剖・生理学、疾病病態学、フィジカルアセスメント、臨床検査法等、診断治療学などの医学的な知識を教授した。また、疾病予防のためにエビデンスに基づい

た保健師としての健康教育・健康相談の実践活動ができるようにするために、特定健診の検査結果を解釈するために必要な知識、および実践能力を取得できるように教授した。

実践薬理学特論

1 年次前期

吉田成一

生体内に投与された薬物の生体への影響（薬力学）と、生体内に入った薬物の生体処理法（薬物動態学）を理解し、薬害と有害作用、処方概要と投薬設計、治療効果と副作用についての基礎知識に関する講義を行った。特に生活習慣病を中心とした疾患（糖尿病、高脂血症、高血圧症など）に対する主な治療薬の作用機序、副作用、注意事項など、保健指導に活用できる実践薬理学の基礎知識が習得できるような講義内容とした。今年度はオンラインでの開講し、積極的な参加であったが、対面講義と比較すると、講義進行が順調にいかない部分もあったが、新型コロナウイルス感染症に関する講義内容も含めるなど、状況に合わせた大学院生への講義が出来たと考える。

本年度は受講者が 9 名であったが、受講者の学習状況に差は認められなかった。

薬剤マネジメント学特論

1 年次

井上真

地域で治療や服薬指導に関わる看護職として、薬剤コンプライアンスの基礎知識を学ぶとともに、ノンコンプライアンス者とその家族への処方内容・指示に関する指導、家庭での薬剤管理（残薬管理等）と服薬方法などについて実践に繋がる知識が得られるよう教授した。さらに、薬物依存（健康危機状態にある）ハイリスク対象者への薬物の取り扱い方法、内服方法、効能などについての薬剤指導法（抗結核薬、抗うつ・抗不安薬、催眠・鎮痛剤、副腎皮質ホルモン剤などの取扱と服薬方法など）など保健師の保健指導に必要な知識などについて、具体的に理解が深められるよう、資料とパワーポイントを活用した。地域における薬物依存対策や禁煙対策における多職種連携の一つとして地域に拡大する薬局の現状と課題について事例を用いて討議した。

環境保健学特論

1 年次後期

甲斐倫明

健康と物理的要因（電離放射線、電磁界）、化学的要因（化学物質）、生物的要因（ウイルス）および社会的要因との関係について、基礎を整理した講義を行った。COVID-19 に関する JAMA の

Viewpoint を取り上げ、その概要解説と個人の見解についてのプレゼンを学生に割り当てて討論を行なった。学生が最新の情報を学術論文から獲得し、最新知見の現状と課題を理解するように指導した。プレゼン後の討論では、問題の多面性（自然科学的側面、統計学的側面、社会的側面など）を学生が考えるように努めた。

地域生活支援実習

1 年次

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、村嶋幸代

個別ケースを通して、対象者とその家族が地域で暮らしていけるように、ケアマネジメント、地域ケア資源の活用方法について考えることを目的として県内 7 か所の市町及び保健所において保健師に同行あるいは院生単独で訪問し、実習を行った。6 月から 3 月までの 10 か月間に合計 4 回～6 回の訪問を行い、成果報告会を 2 月 16 日に行った。実習前、実習中にはカンファレンスを行い、実習目標の検討、方法の共通理解と評価の共有を行うなどして連携をとった。9 名全員が事故なく実習を終了することができた。

地域マネジメント実習

1 年次

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、村嶋幸代

広域看護アセスメント学演習や健康教育特論の演習や発表と連動し実習が効果的に行えるようにした。地域看護診断では、地域全体の健康課題の解決に向けた地域活動支援を実施し、評価ができる能力を養うことと、地区組織化活動や地区管理を通して、関係者・関係機関との連携・調整・交渉などができる能力を養うこと、地域資源の過不足をアセスメントする力を養うことを目的に実習を展開した。県内 7 か所の市町において、4 週間の合計 20 日で構成した。9 名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習を行った。

10 月 1 日に実習施設だけでなく、大分県国民健康保険団体連合会、全国健康保険協会大分支部、大分県福祉保健部医療政策課の方々の参加を得て、実習成果報告会を開催し、実習成果の共有とともに各市町の健康課題についての意見交換を行った。

広域看護活動研究実習

1 年次後期、2 年次前期

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、村嶋幸代

開発すべき社会資源や健康政策・保健医療福祉システムについて考察・探求し、地域社会の健康

づくりの組織者として、個人のみならず地域社会全体の QOL を向上させる活動を研究的視点を持ちながら実行できる能力を養うことを目的に実習を展開した。

広域看護活動研究実習Ⅰでは、県内の保健所および市において、準備期間、まとめ期間を含む 5 週間実習を行った。9 名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習地で現在進行形の課題を実習テーマとして取り組んだ。12 月 17 日に大学において、実習成果報告会を開催し、実習指導保健師だけでなく、国保連合会、協会けんぽ等からも参加を得て実習成果を共有した。

広域看護活動研究実習Ⅱでは、県内の企業 4 か所（大分キヤノンマテリアル株式会社、大分キヤノン株式会社、株式会社大分銀行、ソニー・太陽株式会社)、大分労働衛生管理センターで職域における産業保健実習を行った。また、由布市地域包括支援センターにおいて地域包括支援センターの機能と保健師の役割について学ぶ実習を行った。

助産学概論

1 年次前期

梅野貴恵、林猪都子

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と社会変化のなかで期待される役割と重要性について、さらに助産師活動に取り組む姿勢・態度や助産師のキャリアラダーについて系統的に教授した。授業は、視覚資料を用いた講義形式と学生が事前課題についてプレゼンテーションし、ディスカッションを行う方法をとった。「女性を取り巻く社会の変化、親子関係をめぐる問題」では、女性とその家族の性と生殖に関わる課題を述べ、女性やその家族に対する助産師としての支援を具体的に調べ発表した。また研究論文のクリティークや『WHO 勧告にみる望ましい周産期ケアとその根拠』等の資料を用いたディスカッションを通して、助産とは何か、妊産婦が望む出産、社会に求められる助産師の役割について自己の助産観を述べ、他者の考えも知る機会となった。次年度は新カリキュラムに対応した内容の追加を行う。

周産期特論

1 年次前期

梅野貴恵、後藤清美、佐藤昌司、豊福一輝、嶺真一郎、米本大貴

講義内容は周産期における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産科医師・新生児科医師を講師とした。妊娠・分娩・産褥・新生児の生理とその医学的管理についての基礎知識、さらに周産期における異常の判断をするために、主な疾患の病態・検査・治療や NICU における新生児管理、新生児救急蘇生法について教授された。評価は、筆記試験を実施し全員合格した。

母子成育支援特論

1 年次前期

梅野貴恵、井上祥明、上野桂子、桑野紀子、佐藤敬子、高野政子、平野亙、吉村匠平

女性のライフサイクルにおける性と生殖の問題である不妊や出生前診断、生命倫理、母子関係や家族、愛着をめぐる心理・社会的問題、虐待や子育てを取り巻く問題、国内外の子育て支援制度など助産師活動を実践する上で基盤となる内容を教授した。専門性を考慮し、学内外の講師によるオムニバス形式で実施した。子育て体験は、感染対策の上、育児体験人形を自宅に持ち帰らせ、学生がおむつ交換、授乳やあやすなどの子育てを 24 時間体験した。体験後、激しく啼泣する児に困惑する母親の心理を理解し休みのない子育ての負担を実感する機会になった。評価は、各講師によるレポート課題等の評価で行った。

リプロダクティブ・ヘルス特論

1 年次前期

梅野貴恵、井上貴史、宇津宮隆史、中村聡、花田克浩、嶺真一郎、宮本侑子

講義内容は性と生殖における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師を講師とした。性分化の機序、生殖器に関する形態機能や主な疾患及び治療に対する基礎知識、遺伝疾患や遺伝カウンセリング、最新の生殖補助医療の現状と課題、ワクチン接種等の予防を含めた子宮頸癌の動向についても教授された。評価は、筆記試験を実施し全員合格した。

ウィメンズヘルス特論

1 年次前期

梅野貴恵、市瀬孝道、甲斐倫明、影山隆之、桑野紀子、實崎美奈、林猪都子

女性の生涯を通じた健康づくりを視野にリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性のライフサイクル全般における性と生殖に関わる健康問題を理解し、健康教育を実施するための知識や技術を教授した。講義は、講師の専門性を活かしたオムニバス形式で実施し、発表やレポート課題で各講師からの評価を得た。

妊娠期診断技術学特論

1 年次前期

姫野綾、梅野貴恵、吉田成一、安部眞佐子、小嶋光明、渡邊しおり

妊娠期の経過及び生活状態に関する情報収集に必要な基礎的な知識と実践の手法、そして、薬理、栄養、放射線障害などの知識を教授した。対象理解がすすむよう事例を用いたシミュレーションを行い、正常逸脱を予防するアセスメントと助産技術の重要性及び妊婦とその家族を取り巻く環境の理解を深めた。事前課題への取り組みから知識の確認を行い、適宜グループディスカッションを設けることで、理解力の向上を図った。

分娩期診断技術学特論

1 年次前期

樋口幸、姫野綾、生野末子

分娩期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためのフィジカルアセスメントや助産診断を行うための基礎的な知識及び助産技術を習得することを目的に、講義と事例を用いたシミュレーション演習を取り入れた。今年度は COVID-19 の影響で、学部実習で分娩の見学を行えていない学生も多かった。そのため、DVD や視聴覚教材を多く取り入れ、臨床での場面をイメージしやすいように工夫した。学生は、母児の生命の安全の確保を第一にし、さらに母親が主体的に分娩に臨み、満足感を得ることができるよう支援するための基本的な助産の実践能力を習得できた。また、講義と演習では段階的に様々な事例を展開することで、正常からの逸脱を迅速かつ的確に判断し、他の周産期医療専門職種と連携して緊急性の高いニーズにも対応し得る基本的な知識及び技術を習得できた。次年度以降は、多様化する助産師の活動の場を意識した対象把握の視点と支援の広がりについても取り入れていく必要がある。

産褥・新生児期診断技術学特論

1 年次前期

樋口幸

産褥期にある女性と新生児、乳幼児の健康状態を包括的にアセスメントし、助産ケアを実践するための内容を教授した。新生児の講義・演習では、NICU におけるケアを体験し、「周産期診断技術演習」や「NICU 課題探究実習」の導入とした。授業方法は講義と演習を組み合わせて行った。また、退院後の生活も見据えた退院指導と家庭訪問の充実を目標に、個人で指導案・パンフレットの作成を行い、ロールプレイで発表し意見交換や自己評価を行った。母乳育児支援に向けて、学内の乳房モデルや模型を使用し、乳房トラブル予防のためのマッサージ（堤式）方法や授乳指導の演習を取り入れ、実際の事例や場面を想定した演習を行った。学生は積極的に講義、演習に参加し、

活発なディスカッションとリフレクションを行うことができ、対象や場面に応じた対応のバリエーションについても考えることができた。次年度も、臨床場面や個別性のある支援のイメージができるように学生に合わせて教材の工夫を行っていく。

周産期診断技術演習

1 年次

樋口幸、姫野綾、梅野貴恵、佐藤昌司、安部真紀、軽部薫

妊産褥婦と胎児・新生児の健康状態をエビデンスに基づいて診断する技術と、具体的な支援方法について教授した。胎児の健康状態の診断については、高機能シミュレーターを用いて胎児の計測や奇形の有無などから成長・発達、健康状態の診断、異常の早期発見に関する知識と技術を習得し、OSCE で到達度チェックを行った。さらに、CTG 波形の判読についても実際のモニター波形から学び、総合的に胎児の健康状態を診断できる能力を養った。また、新生児蘇生法については、学内演習で新生児蘇生のアルゴリズムに則り、新生児モデルで出生直後から気管内挿管、薬剤の投与に至るまで、様々な事例に合わせて必要な援助技術の習得を行った。その後日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法「一次」コースを受験し、全員合格した。さらに、マタニティーヨーガやマタニティービクス、骨盤矯正や産褥体操など、分娩や育児期の身体づくりやマイナートラブル緩和のための方法について、解剖生理も含め理論を教授し実際に体験した。学生は、自分自身の心身と向き合い変化を感じることで、対象者の状態に合わせた保健指導の質の向上について考えることができた。また、宗教的背景や早産児等の様々な状況に合わせて柔軟に対応できるよう、母乳育児支援の他に人工栄養の基礎知識についても教授した。COVID-19 の感染予防対策として、少人数での分散講義を行ったが、学生はすべての講義・演習に積極的に参加し、習得した技術を実習で活かすことができた。次年度以降も感染予防対策を徹底しながら、技術の習得と臨床での応用を意識した構成の検討を行っていく。

助産保健指導演習

1 年次後期

姫野綾、梅野貴恵、種恵理子、林猪都子、樋口幸

女性のライフサイクルにおける性と生殖に関する問題を実践に応用する思考過程と、保健指導案の立案及び実践方法を教授した。妊娠期、産褥期及び育児期の保健指導や受胎調節指導の演習を行った。模擬患者への個別指導を実施し、保健相談、健康教育、援助活動の効果的な実践の能力を養った。学生自ら創意工夫し教材作成を行い、指導案立案と実践を行った。今年度は、小学校における性教育の実践はできなかったが、知己を通して集めた小学生を対象とした小集団での性教育実施の場を設け、実施の困難さと実際の反応から得られる楽しさを感じる機会を設けた。

分娩期実践演習

2 年次前期

梅野貴恵、樋口幸、姫野綾、種恵理子

今年度は新型コロナウイルス感染防止の対策のため、行動調査の上、2 週間の自宅待機の後、4 月 23 日から実施した。その間に教員 4 名で分娩介助場面のビデオを作成し、USB にコピーし、学生各自に持ち帰らせ自己学習を行わせた。4 月 23 日にデモンストレーションを一通り行ったが、質問等は小人数で対応した。その後の演習は、2 グループで、密にならないように時間を分け接触を避けて演習した。演習は、マスク着用、換気を行い、各グループの終了時には使用した器具や機材を毎回消毒させ感染対策に取り組ませた。例年よりも練習時間が少なく、夜間、土・日祝日は学内使用を禁止したため自宅でのビデオ学習を繰り返し行い、イメージトレーニングを行った。初回の OSCE で 1 名が不合格、1 名は体調不良により追試となったが、後日合格した。知識の評価は筆記試験を行い全員合格した。ハイリスク妊産婦ケア実習が学内実習となり課題を提出した後に、シミュレーション（産婦の陣痛発来時の入院対応や分娩第 1 期の胎児心拍数低下事例）を実施した。ディスカッションでは、頭でわかっていることでも実際になると慌てていることに気づく機会となった。実習終了した 9 月に産婦の主体性を尊重するフリースタイル分娩、会陰裂傷縫合のデモンストレーションと実演により学びを深める機会となった。感染対策のため、例年とは異なる演習方法であったが、教員作成のビデオは学生に好評で繰り返し視聴できるため、次年度以降も活用できる。

助産過程展開演習

1 年次後期

梅野貴恵、樋口幸

助産を実践するための基本的な助産過程の展開についてペーパーペイシェントを用いて、実践に応用する思考過程を教授した。助産診断の概念・助産診断のプロセスを教授したのち、正常から逸脱した妊婦 1 事例、正常経過をたどる分娩期事例 1 例、分娩期ハイリスク事例 1 例の計 3 事例を用いて助産過程の展開を実施した。事例の展開方法は各自で自己学習したのち、グループワークを行った。2~3 名ずつのグループで『実践マタニティ診断』の診断指標についてディスカッションし発表した。発表に対して他グループからの質問で思考の確認をすると、これまで学習してきた知識を振り返りながら根拠を述べる努力をしていた。分娩期の事例は、初期診断だけでなく数時間経過後の状態の情報（パルトグラム）を追加し、経過診断の修正と初期診断計画の修正を行い、ハイリスク事例は分娩進行中に医療介入（点滴誘発）が実施された場合の診断名、計画の修正を取り入れ、臨床推論力を強化した内容とした。評価は、提出されたレポート、発表内容から行った。

助産マネジメント論

1 年次後期

梅野貴恵、安部真紀、生野末子、戸髙佐枝子

助産師の職務、業務範囲および法的責任を理解し、助産業務を遂行するために必要な助産管理について教授した。講義は資料や視聴覚教材を用いて実施し、周産期領域における管理的視点を養う内容とし、講師それぞれの助産師としての専門性を考慮し、オムニバス形式で実施した。特に、産科領域で起こりがちな医療事故や災害時の母子への助産師としてのケアなど、身近な問題を教授しディスカッションした。評価は、発表内容や筆記試験から行った。

地域母子保健学特論

2 年次後期

梅野貴恵、赤星琴美、市原恭子、鈴木由美

日本の地域母子保健の現状について理解を深め、社会に求められる助産師の役割を明確にするための内容を教授した。母子保健の変遷、大分県の母子保健の現状をふまえた母子保健施策と母子保健の水準、育児を取り巻く社会環境や地域における具体的な母子への支援について、事例をとおしたディスカッションで理解を深めた。学生は、自分の考えを述べ質問等を行っていた。最後に、『子育てを取り巻く環境と助産師の役割』について、統計データや文献をもとにプレゼンテーションを行い、それぞれの発表に対して意見交換ができた。

助産マネジメント演習

2 年次後期

梅野貴恵、安部真紀、姫野綾、種恵理子

助産業務の行われる病院・助産所において、母子保健医療チームの一員としての助産師の役割と責任を認識し、助産の対象者の健康管理や助産マネジメントを実践する能力を習得するための演習とした。周産期母子医療センターへの母体搬送事例 4 事例をもとに、施設助産師として求められる役割と助産ケアの実際について実習室でシミュレーション学習を行い、デブリーフィングによって学びを深めた。臨地での実習を生かし、報告やマンパワーの確保は意識して行っていた。また、災害時の避難場所における母子への支援を想定し、シミュレーション学習を行った。新型コロナウイルス感染防止対策で臨地での助産院管理を経験することは中止し、開業助産師の技やベテラン助産師のケアの実際を DVD 等から学び、助産学会のオンライン講義を聴講して学びを深めた。助産師としての自己の課題と将来の目標を明確にすることができた。

助産学統合実習

2 年次前期

梅野貴恵、樋口幸、姫野綾、種恵理子

人間尊重の基本理念に基づき、新しい命の誕生に携わらせていただくことへの感謝と責任をもって、妊娠期から産褥・育児期まで継続して母子とその家族を受持ち、個別に応じた助産ケア実践能力を養うことを目的に 5 月 25 日から 8 週間と 2 週間の延長実習および 8 月 29 日まで 1 か月健診の実習を行った。実習施設は、産科診療所 3 施設と地域周産期医療センターである。分娩介助目標例数は 12 例以上とし、平均 10.6 例（7～12 例）の実施となった。学生個々の学習意欲は高いがチームとしての学びを共有する力が弱く、個々の学びに差がみられた。各施設ともに新型コロナウイルス感染防止対策のため、受け持ち学生と対象の妊産婦との関係を中心に指導していただいた。家族の面会禁止等の措置があり妊産婦との関係は築けたが家族とのかかわりが薄く課題もみられた。中間カンファレンスでは、学生個々の学びの状況に応じた助言をいただき、後半は、中間での課題を達成した学生と課題を残したままの学生がいた。自宅療養などで 16 日間の実習中断をした学生は、10 例に達しなかったが、実習終了後に学内で課題事例に取り組むことで補習した。継続事例 3 例を妊娠期から産後 1 か月まで受け持ち、家庭訪問を含む助産実践を指導者の指導を受けながら行うことで、妊産褥婦個々の問題に寄り添いケアを実践することはできていた。次年度は、例年以上に体調面の管理を行いながら、全員が 10 例以上の分娩介助が実施できるように指導者と連携し指導していく。

ハイリスク妊産婦ケア実習

2 年次前期

梅野貴恵、樋口幸、姫野綾、種恵理子

周産期におこる異常やリスクに対して的確な判断力と高い予見性、緊急事態に対応する能力を養うことを目的に総合周産期母子医療センターで 2 週間の実習を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染防止のため臨地実習不可となった。分娩期実践演習と並行にはなったが、5 月 11 日に事例（35 歳 HDP のハイリスク経妊婦）を提示し、各自で実習記録様式にアセスメントと計画を立案し、5 月 18 日に提出させ、担当教員から不足点を指導した。『助産学統合演習』中に、帝王切開にかかわる機会を得て、帝王切開時の助産師の役割等をレポートさせた。11 月後半に大分県立病院総合周産期母子医療センター産科病棟の副師長にハイリスク妊産婦へのケアについて Zoom での講話をしていただいた。周産期センターの助産師の役割や助産ケアにとって必要とされることは理解できていた。

妊娠期課題探究実習

1 年次後期

梅野貴恵、樋口幸、姫野綾、種恵理子

妊娠期の助産診断技術を活用し、妊婦と胎児の健康水準を助産師が自律的に判断し、科学的根拠に基づいた助産診断を行い、妊婦のニーズに寄り添い、安全で快適な出産を迎えるための保健指導ができる能力を身につけるための実習である。10 月 5 日から 11 月 20 日の期間に、わたなべ助産院、生野助産院で計 5 日間実習し、12 月からは、堀永産婦人科医院、あおい産婦人科、アンジェリッククリニック浦田に分かれて実習した。大分県立病院総合周産期母子医療センター産科外来は実習受け入れ不可であったことから、日数分を姫野助教が事例を用いてグループディスカッションを通して妊婦健康診査を学内で実施した。国立病院機構別府医療センター産科外来での実習は新型コロナウイルス感染防止のため不可となった。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、1 月の実習は中止とした。2 月から再開し、第 2 週からは 6～7 月に出産予定の妊婦を継続事例として受持ち健診日に実習した。臨地の産科医師や助産師の指導を受けながら、超音波診断装置を用いた妊婦健康診査 5～10 例程度と個別に応じた保健指導の実際 4～11 例程度と例年より例数は少なかったが、実習目標はほぼ到達した。

NICU 課題探究実習

1 年次後期

樋口幸、梅野貴恵

今年度は COVID-19 により大分県立病院総合周産期母子医療センターNICU での実習が中止となった。そのため、2 週間の学内実習に切り替えて、ハイリスク新生児の生理的特徴を理解し子宮外生活適応の過程をアセスメントし、個別に応じた看護を展開し、母子分離された母親とその家族への親子関係成立のための看護計画を立案した。また、ハイリスク新生児（超低出生体重児）への看護援助は高機能シミュレーターや SimPad を用いたトレーニングを行った。実習期間内には大分県立病院総合周産期母子医療センターNICU の臨床指導者に、母子分離された両親への愛着形成促進へのケア、家族とのつながりや退院後の生活を考えた育児環境の調整、入院中の超低出生体重児の看護や他部門との連携について講義をして頂いた。NICU で実際の新生児の看護実践はできなかったが、ケアの視点や方法を習得でき、助産師として妊娠期から果たすべき役割について学ぶ機会となった。次年度は、状況に応じて視聴覚教材の導入や臨床との連携体制を強化していく。

地域母子保健演習

2 年次後期

梅野貴恵、鈴木由美、渡邉しおり

助産師として地域における母子保健ニーズに対応し、質の高い母子保健活動を展開する能力を養うための演習とした。大分市の母子保健事業の概要と母子保健の水準等を自己学習したのち、1 歳 6 か月児健康診査に参加し、大分市の担当保健師とディスカッションを行い、母子保健環境の特性を理解した。また、健診の実際から母親が抱える子育ての問題を理解し、解決へ向けた保健師の対応や地域における取組み、他機関との連携を理解した。4 か月児健康診査は大分・別府市は個別健診のため、6 名が堀永産婦人科の 3 か月児健康診査に参加し、他施設の実習生は施設の許可を得て 4 か月児健康診査後の時期に継続事例に電話訪問を行った。1 か月健診後の受け持ち事例の母子の様子を見学や電話による聞き取りから、家族や地域の人に支えられ成長している母子を理解し、助産師としての役割を認識する機会となった。

健康生理学特論 I

1 年次前期

濱中良志、安部眞佐子、岩崎香子

今年度はコロナ禍のため、Zoom を駆使して、各臓器における解剖学・生理学・生化学の復習をした後、関連する重要疾患の病態生理から各臓器の正常の機能を教授した。

健康栄養学特論 I

1 年次前期

安部眞佐子

栄養学の教科書である Present knowledge of nutrition の項目を選んで英文で書かれた最新の栄養学の知見について触れた。項目として、骨代謝に関連したカルシウム、リン、タンパク質、ビタミン D、ビタミン A などを選び、内容について解説した。

メンタルヘルス学特論 I

1 年次前期

影山隆之

研究者・リカレントコースの精神保健学特論と合同で夜間開講とし、地域・職域・学校におけるメンタルヘルス活動に必要な精神保健の知識や考え方として、精神健康のモデルと評価法、事例の

アセスメント、精神保健の法制と政策、最新の自殺対策等について、講義形式で開講した。適宜、課題研究のテーマや方法論との関連を意識づけることで、関心と学習意欲を高めることができたので、今後も履修者の事情に応じた柔軟な内容構成にするのがよいと考えられる。

メンタルヘルス学演習

1 年次前期

影山隆之

メンタルヘルスに関する文献を抄読し、精神健康の評価法と研究のための分析法についてゼミ形式で開講した。履修者の研究のテーマや方法論と関連づけた内容を取り上げ、関心と学習意欲を高めることができたので、今後も同様の柔軟な内容構成にするのがよいと考えられる。

対人援助特論 I

1 年次

関根剛、吉村匠平

本講義では、シラバスの記載事項を中心とした上で、受講者の関心や希望を取り入れて講義で取り上げる内容を決定した。内容に応じて、関根、吉村で担当を分担し、講義および演習を行った。関根は、様々なカルチャーの違いにおける相互理解を促進する視点として、受け取った刺激の認識や解釈、解釈に影響を与える知識や経験などの要因について講義を行った。また、話を促進したり、明確化、理解を深めるコミュニケーションスキルについて、職務に即した形で解説したり、質疑や演習を随時入れたりしながら授業を薦めた。吉村は、システム論をベースとした援助者に求められる基本的な態度について、文献講読を行いながら、受講者と議論を重ねた。終了後、ミニレポートを課して、総合的に評価した。対象は 1 名で、対面講義で行った。

対人援助演習

2 年次

関根剛、吉村匠平

本講義では、シラバスの記載事項を中心とした上で、受講者の関心や希望を取り入れて講義で取り上げる内容を決定した。内容に応じて、関根、吉村で担当を分担し、講義および演習を行った。関根は、ユングのタイプ論から見たパーソナリティの相性、思春期心性と自我同一性発達、構成的エンカウンターの企画、研修教材の構成とプレゼンテーションなどの内容について、課題に基づいた発表を行わせた。発表に際しては、質疑と解説をする形で実施した。吉村は、行動分析の基本理論となるレスポンデント条件づけやオペラント条件づけの基本原理を解説した上で、受講者の関

心領域に応じた原著論文の購読を行った。

評価は、Zoom によるオンラインによる演習、事前の課題のとりまとめ、終了後のミニレポートを課して、総合的に評価した。対象は 1 名だった。

4-3　博士課程(後期)

保健情報科学特論

1～3 年次

佐伯圭一郎、品川佳満、渡邉弘己

看護実践に必要とされる情報を適切に収集・分析するための技法について、疫学並びに生物統計学の領域から探求することを目的として教育にあたった。本年は 1 名だけの受講者の関心と研究の志向性に対応して、特に高度な統計的分析手法と実行環境の構築について演習を含んで教授した。

精神保健学特論

1 年次

影山隆之

メンタルヘルス学特論Ⅱと合同で、履修者のニーズをふまえ、地域・職域・学校におけるメンタルヘルス活動に必要な精神保健の知識や考え方について、文献を読みゼミ形式で開講した。研究テーマや方法論と関連づけることで、関心と学習意欲を高めることができたので、今後も履修者の事情に応じた柔軟な内容構成にするのがよいと考えられる。

看護基礎科学演習

1～3 年次

甲斐倫明、安部眞佐子、市瀬孝道、稲垣敦、影山隆之、佐伯圭一郎、吉村匠平

各教員から課題提示及び講義指導が行われた。学生の研究領域に考慮した課題が提示され、学生は調査分析を行い、各教員に対してプレゼンテーション、あるいはレポートによって報告し、指導を受けた。今年度は 5 名が履修し、3 名が全ての課題を完了し単位を取得した。

看護管理学特論

1 年次後期

福田広美

看護管理学の理論や最新の研究に関する動向について教授した後に、学生が看護管理について関心のあるテーマについて文献検索を行い、レポートを作成し関連分野への理解を深めた。今後

は、学生が看護管理学に関する研究の知見を活用し、自らの研究に役立てられるよう教育を行う。

国際看護学特論

1 年次後期

桑野紀子

博士課程前期で国際看護学特論を履修した学生 1 名が受講した。学生自身の実践分野や研究に沿った関心テーマについて、英語でプレゼンテーションを行うことを課題とし、準備から発表までをサポートし、振り返りを行った。発表の場として、海外の MOU 締結校の大学院生と互いに発表・ディスカッションする機会を設け、サポートした。

特別研究

1～3 年次

稲垣敦

履修者がそれぞれの課題について、研究に取り組み、今後の活動に繋げる成果を得た。修了者の論文は、次のとおりであった。

（看護学専攻）

巻野雄介：わが国で実践可能なエコーガイド下末梢静脈穿刺法の開発（主指導教員：甲斐倫明、副指導教員：秦さと子）

野津美香子：Quality of life during the early period after diagnosis and days spent at home in the last month of life in elderly patients with advanced non-small-cell lung cancer（主指導教員：甲斐倫明、副指導教員：赤星琴美）

小野治子：特定健康診査・特定保健指導における医療費抑制効果分析（主指導教員：赤星琴美、副指導教員：甲斐倫明）

（健康科学専攻）

光武智美：自閉スペクトラム症及び注意欠如・多動症児の保護者ニーズを踏まえた小学校での性教育に関する研究（主指導教員：吉村匠平、副指導教員：平野亙）

放射線健康科学特論 II

1 年次

甲斐倫明、小嶋光明

放射線リスクや放射線治療に関する最新の英語原著論文の抄読を課して、論文の解説をプレゼンさせる研究室ゼミのスタイルで進めた。取り上げた内容は、二光子顕微鏡で観察したマウスの放

射線皮膚障害初期の特徴、自然放射線と小児がんとの関係に関する疫学研究、小児 CT 検査とがんリスク、福島における小児甲状腺がんの発症、COVID-19 と低線量 CT、マイクロビーム放射線療法のための動物モデル、乳がん患者の放射線皮膚炎評価、多遺伝子リスクスコア、思春期マウスの分割照射の乳腺影響。

放射線健康科学特別演習

1 年次

甲斐倫明、小嶋光明、恵谷玲央

最新に改訂された放射線皮膚障害に関連した ONS ガイドライン（2020）を精読し、エンビデンスとなっている引用論文の調査から、放射線治療に伴う放射線皮膚障害のケアの現状について把握する演習を行なった。

メンタルヘルス学特論Ⅱ

1 年次

影山隆之

精神保健学特論と合同で、履修者のニーズをふまえ、地域・職域・学校におけるメンタルヘルス活動に必要な精神保健の知識や考え方について、文献を読みゼミ形式で開講した。研究テーマや方法論と関連づけることで、関心と学習意欲を高めることができたので、今後も履修者の事情に応じた柔軟な内容構成にするのがよいと考えられる。

対人援助特論Ⅱ

1 年次

吉村匠平、関根剛

本講義では、シラバスの記載事項を中心とした上で、受講者の関心や希望を取り入れて講義で取り上げる内容を決定した。内容に応じて、吉村、関根で担当を分担し、講義および演習を行った。吉村は、レスポンデント条件づけの基本原理の理解をベースとして、対象者の直接的行動変容を目的として行われた介入事例の文献の購読を行った。関根は、援助を行う以前に問題点の発見を如何にするかという視点から、いわゆるアンケートをどのように使うか、効果的に思いや意見を吸い上げるためにどのように作成するのかなど、アンケート用紙の効果的な作成と利用方法について講義と質疑を行った。また、従来の調査を統計的な視点から読み込むスキルとして、統計的手法の見方と利用方法について講義と質疑を行った。講義は Zoom によるオンライン講義で、対象者は 1 名であった。評価は、関根・吉村がそれぞれ独自に課題提出などをさせ、合計による評価を行った。

4-4　その他の教育活動

4-4-1　CALL 英語学習システム講座

Gerald Shirley

本年度も例年と同様に前期と後期の 2 回実施した。年間を通し、全ての学生（1～4 年次生、大学院生）が自ら自由に英語学習に取り組めるよう、受講希望者を募った。

4-4-2　大学生消防応援隊（Oita-NHS-team）

4 年次生　武田悠平（リーダー）、芦刈章吾（リーダー）、松永駿斗、大貫良平
3 年次生　朝見舞、永路彩乃、小島柊子、金子綾菜、木村美紀、菅海咲、玉田光来、辻塚玲、平川杏奈、松谷美紗希、三浦愛未、美濃杏奈、村田美和子、吉松理子
2 年次生　安藤捺葵、一幡紗彩、貴島可菜、久米杏奈、豊田歩果、濱田桃子、浜田怜海、松井俊樹、山内珠鈴
1 年次生　永瀬天音、森口泉
担当教員　石田佳代子

1．消防応援隊の活動目的

大学生消防応援隊による活動は、大分県が若者の消防に対するイメージアップや消防に対する意識啓発と消防防災組織の育成・支援を図るために実施している「大分県ハイスクール消防クラブ及び大学生消防応援隊の結成・活動支援事業」の一環である。本学の消防応援隊は、平成 25 年度に大分県生活環境部消防保安室消防班の担当者から結成の打診を受けて同年度の 3 月に結成された。本学消防応援隊の活動目的は、地域での防災・減災の活動や災害時の活動を学び、地域での防災・減災活動に参加し、看護学生として地域に貢献することである。そのために、消防本部等の関係機関と連携をとりながら消防・防災に関する活動に参加することにより、消防に関する正しい知識、情報及び技術を習得する。

2．本年度の活動内容

1）オープンキャンパス企画（7 月、学内）

新型コロナウイルス感染の影響により Web オープンキャンパスとなったため、活動しなかった。

2）大分 DMAT 研修における模擬患者役参加（9 月頃、学外）

大分県医療政策課より参加依頼がなかったため、活動しなかった。

3）１日体験入校（夏季休暇中、学外）

新型コロナウイルス感染による影響を考慮して、予定をキャンセルした。

4）防災訓練における一部の企画・運営（11 月実施、学内）

例年、総務グループからの協力要請に応じて、本学の防災訓練における一部の企画・運営を担っている。本年度は、新型コロナウイルス感染の影響により 1 年次生と教職員が訓練に参加するこ

ととなった。3 年次生（実習中のため不参加）以外の消防応援隊学生全員で学生等の避難誘導・学年ごとの点呼（安否確認）・AED の使用訓練を中心に活動した。

5）災害食に関する検討（12 月～1 月実施、学内及び各自自宅にて）

現在の本学の災害備蓄食を知り、災害備蓄食の一部を試食して、その結果をアンケートにより集約し、学生の立場からの考えなどを提案することで、次期災害備蓄食の検討に役立てるための活動を全員で行った。なお、新型コロナウイルス感染防止のため、災害食の試食は会食を避けて個別に自宅等で行った。

3. 今後の課題など

消防応援隊学生が防災訓練などに積極的に参加することを通して、本学全体の防災意識の向上などにつながっているのではないかと思われる。感染状況を考慮しながら、今後も活動できる機会をより増やせるように取り組んでいく。消防応援隊としてのスキルの習得も重要な課題なので、消防本部等の関係機関と連携をとりながら進めていけるように、計画的に取り組みたいと考える。

4. 補助金について

令和 2 年度理事長裁量予算枠事業費　144 千円

5　研究室活動

5-1　生体科学研究室

1　活動方針

学部では、本学の教育理念の一つである「看護に関する専門知識・技術の習得とともに、科学的根拠に基づく問題解決能力などを養う」に沿って、人体の仕組みを解剖学的・生理学的・生化学的に理解し、その破たん状態（病気）の本質を十分理解する看護師を育成する。大学院においては、疾患の基礎となる生理学を細胞内のレベルまで深く掘り下げて理解し更に発展させることができる研究者および実践者を育成する。4 年次生の卒業論文の作成の幇助を行いながら、教員自身の研究を推進させる。その成果は、学会発表を国内または海外において年に 1 回以上行う。ある程度、成果がまとまったら、論文としてその成果を発表する。

2　教育活動の現状と課題

学生間の学力の差が大きくどこに照準を合わせて授業を行うかが課題であった。今年度は、新型コロナ禍であったが、授業の質は維持しながら、オンラインの授業を行い、オンラインで個別に質問を受ける機会を設けて、学生の理解力向上に努めた。
大学院でのNP教育の解剖生理学・病態生理学の講義においてもコロナ禍の影響で、オンライン授業で行った。基礎学力の低いと感じる項目においては、学部の生体構造論と生体機能論を受講することにより、解剖・生理学を理解できるようになった。解剖生理学を基に、病態生理学及び看護技術の学習が進んでないことが課題である。

3　研究活動の現状と課題

今年度は、コロナ禍のため、4年次生と密な状態を避けながら、動物や細胞を使用した実験を行い、卒業論文として、まとめることが出来た。学会活動は、オンラインで活動した。昨年度の課題だった外部資金獲得はできたが、さらに外部資金の獲得を増やすことが重要である。

5-2　生体反応学研究室

1　活動方針

生体反応学研究室の教育活動に関しては、病理学、薬理学、免疫微生物学といった看護の専門基礎分野の科目の教育を担当している。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する様々な

疾病、その発生メカニズム、薬の薬理作用や病原微生物による生体反応を理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらから得た知識が看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育行っている。生体反応学研究室の研究活動に関しては外部の競争的研究費を獲得し、積極的に英語の研究論文を海外の学術雑誌に発信して行くことを目標にしている。

2　教育活動の現状と課題

令和2年度は例年と同様に生体反応学概論、生体反応学各論、微生物免疫論：１年次生、生体薬物反応論I：2年生、生体薬物反応論II:3年生の講義と健康科学実験（血液検査・基礎微生物学実験・ラットの解剖）を行ったが、殆どがZoom配信による講義となった。

これらの講義資料はネコバスに上げて学生が何時でも使用できるようにしている。学生には、解剖学や生理学と共にこれらの病理学、薬理学、微生物学が看護実践を行ううえで十分に理解しておくことの重要性を認識させ、講義を進めることが重要であると考える。しかし、基礎科目の解剖、生理、病理、薬理、微生物学の成績は看護の科目の成績に比べるとわるい。今年度はZoom配信のであったが、来年度もZoom配信で講義が行なわれる可能性もあるため、Zoomでの講義の進め方の工夫や成績不良者の対処が今後の課題である。

3　研究活動の現状と課題

卒論生に関しては例年と同様に6名を教員3名で、2人ずつ指導することができた。生体反応学研究室の教員は外部の競争的研究費や学内の競争的研究費を獲得しているものの研究論文が少ない。研究業績（特に英語論文）は科研費等の競争的研究費獲得にも繋がるため重要である。積極的に英語論文を投稿して競争的研究費を獲得して行くことを目指している。

5-3　健康運動学研究室

1　活動方針

当研究室の教育目標は以下の 4 つである：①科学的なものの見方や考え方などを学ぶ。②実際に運動を通して体を動かすことの楽しさを体感すると共に、個人、社会、人類にとって運動が重要であることを理解する。③健康・体力を維持・増進するための運動量、運動強度を確保する。④自分に合った運動を見つけ、運動習慣を身につける。⑤ボランティアを通して様々なことに気づき、考え、今後の人生に活かす。

研究に関しては、運動、スポーツ、体育が現場のある分野なので、直接的に社会に貢献できる研究、あるいは研究活動自体が社会貢献になる研究を目指している。

2　教育活動の現状と課題

健康運動ボランティア演習に関しては、COVID-19 のため、これまで参加してきたイベントが中止となったことから開講できなかった。他の課題を出して単位を出すという選択肢もあったが、サービスラーニングの一つとしてボランティアに参加する教育効果を期待しているので次年度に開講することとした。現状では、次年度の開講も不透明な状況であるが、最悪のケースを考えて代替案を検討したい。

3　研究活動の現状と課題

当研究室の担当科目は年間 360 コマに及ぶが、スタッフは一名だけである。さらに、2018 年より理事、研究科長、看護研究交流センター長、実習センター長、管理監を兼任することになり、さらに複数の学会の学会長や代表理事としての業務が拍車をかけており、研究時間はほとんど取れない状況である。

4　その他

今年度は、COVID-19 のため、多くのイベントや講習会、研修会が中止となり、当研究室の社会貢献活動は縮小した。次年度の COVID-19 の状況は予想ができないが、ICT を活用した社会貢献活動を検討していきたい。

5-4　人間関係学研究室

1　活動方針

周りの人と喜びや苦しみを分かち合うとともに、自他の独自性及び個別性を尊重することのできる豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースとした、人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間の行動や発達についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成し、教育活動を展開している。大学院教育においては、院生自身が、課題の設定から、研究方法を確定、調査（実験）の実施、資料解析、論文の作成を、主体的に行うことができるよう、個別にゼミを開催し、指導を行っている。

2　教育活動の現状と課題

集団レベル・個人レベルでの人間関係の理解、人のこころに関する基本的な知識の習得、対人援助技術の理解および体験を促す学習環境を構築することを目的として教育活動を展開している。理解が表面的なものにとどまることのないよう、時間外課題を提示し添削して返却する、学習したカウン

セリングスキルを実践する機会を提供する、ペアワークなど、事前に構成化されたアクティブラーニングの機会を積極的に取り入れている。遠隔講義の環境下においても、学生が受け身にならず、放置されることもなく、教員のマネジメントの下に主体的に授業に参加する機会を保障している。

養護教諭養成課程の運営を担当している。非常勤講師との事務連絡、養護実習I、II、教職実践演習の運営、教員採用試験への対応、進路ガイダンスの実施、県内実習体制の環境整備、文部科学省提出文書の作成などにより、相応の負担が発生している状況である。教職課程の再課程認定に関する教員の事後調査に関する業務も全て終了した。

3　研究活動の現状と課題

研究活動に関しては、大学院修士課程における課題研究や修士論文の指導（4名）、博士課程の学生（4名）の指導がメインになっている。博士課程の学生1名が学位を取得した。大学院生の指導と養護教諭養成課程の運営の両立が今年度の課題になる。

5-5　環境保健学研究室

1　活動方針

環境保健学研究室は、WHO が定義する「Environmental Health」に沿って「環境」を、物理的要因、化学的要因、生物的要因、および行動に影響を与えるすべての関連要因と健康との関係を科学的に理解するための基礎的事項とその予防対策の考え方についての教育を行っている。一方、放射線教育は本学が開学以来、全国の看護系大学の先頭にたって実施してきたコマ数と内容をもつ。看護コアカリキュラムの教育項目に明記されたことで、本学の放射線教育モデルが他の看護系大学の参考になることが期待されている。その関係で看護教育者を対象にしたトレーナーズトレーニングを文科省事業として平成 30 年まで実施し、その後も、引き続き、研究室独自の主催で看護教育者の放射線教育を他大学と連携して進めている。大学院教育では、広域看護学コースの学生を対象に「環境保健学特論」、研究者コースを対象として「放射線保健学特論」を教授している。NP コースの放射線や画像診断教育にも貢献している。健康科学専攻では、主に診療放射線技師の社会人の放射線の教育研究を実施している。

2　教育活動の現状と課題

放射線を含む環境保健の教育は、基礎が多分野な内容を含むために、1,2 年生の段階では教育が難しい点がある。そのため、社会問題のようなトッピクスを取り上げることで関心を持たせ、その理解には物理や生物、病理生理、免疫、生物統計といった関連科目の基礎的な知識が重要であることを認識させるようにしている。さらに、2 年次の環境保健学詳論、3 年次の演習「環境疫学・生物学演習」でアクティブに関わる授業を実施し、主体的に理解を深めることを狙っている。プレゼン資料の作

成、質問応答、課題レポート作成などを通して、できる限りすべての学生に対して個別に指導することでより効果の高い講義・演習にしていくことを目指している。

3　研究活動の現状と課題

放射線研究と環境保健の基礎をテーマに研究を続けている。放射線研究では、マウスの急性骨髄性白血病をモデルとして、放射線発がんの仕組みに注目した研究、とくに線量率効果を調べる研究を行ってきた。医療における放射線被ばくが部分で分割被ばくであることに注目して、全身被ばくとの違いを調べる研究を進めている。これに関連して、マイクロビームを用いた研究で細胞レベルで照射面積の影響が起きることから、細胞間の相互作用が組織レベルの影響につながっていることを明らかにした。この成果は、放射線治療法の基礎研究につながると考え、新たな放射線生物のテーマを開拓している。診療放射線技師の社会人である大学院生の指導では、CT 診断やマンモグラフィを対象にした臨床研究を進めてきたが、最終の論文作成段階に入っている。今後も、共同研究の形で行う動物実験研究やマイクロビームを利用した細胞レベルの研究や医療被ばくの防護に関する研究を引き続けて進め、放射線がんのリスク研究と放射線保健に関する研究にさらに貢献していく。

5-6　健康情報科学研究室

1　活動方針

科学的根拠に基づいた看護実践の基盤となる、情報収集と分析および発信のための知識と技術の修得をめざして教育を行っている。また、学習と業務における情報処理の能力を早期に高めることができるよう配慮し、実践的な教育内容を展開している。特に、単なるデータの取り扱い技術や数的処理の知識として学ぶのではなく、看護職として、また一人の社会人として適切に判断・行動ができる能力を養うため、具体的な事例において自ら考えて学習することを推進している。

また、教育及び研究のみならず、本学の ICT 環境の管理と運用を通じて大学全体のパフォーマンスを日常的に支援することを実践している。

2　教育活動の現状と課題

学部における担当科目、特に健康情報学と生物統計学について課題であった科目自体への興味関心の低さに対応して、教育内容の精選や看護との関連づけを意識した内容構成を心がけ、僅かではあるが授業アンケート結果に改善が感じられる。また、オンライン授業が主であったにもかかわらず最終評価については例年の水準を維持している点は良しとしたい。しかし、オンラインによる授業形式が主であり、オンライン授業の進め方にまだ改善の余地が存在する点、対面授業となる健康情報処理演習の効率的・効果的な進行など、継続的な検討課題である。

大学院における統計学テキストの変更は、テキストの理解が十分に出来ないという問題はほぼ解

決したが、内容的に大学院レベルの教育としては不満が残っている。次年度に向けて再度テキスト及びオンラインでの授業進行について検討を行った。

3　研究活動の現状と課題

研究室メンバーそれぞれが、これまでの研究テーマを継続している。佐伯、品川准教授については科研費による研究を複数進め、2021 年度から新規の科研費については、品川准教授、渡邉助教の 2 名が獲得し新たなテーマでの研究をスタートする予定である。

コロナ禍のため、教育現場を対象とした研究など対象の側、また研究メンバー間のコミュニケーションの課題など、一部研究課題について遅延が見られており、この状況下での円滑な研究遂行について解決を要する課題は認めるが、効果的な対策が打てていない現状である。

5-7　言語学研究室

1　活動方針

言語活動の四技能である Speaking, Listening, Reading, Writing をバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション（Speaking, Listening）に取り組ませている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるよう、CALL（Computer Assisted Language Learning:コンピューターを用いたウェブ学習システム）による TOEIC 対策英語学習プログラムを実施している。

2　教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション（Speaking, Listening）を練習した。1 年次生の講義内容は、一般的な日常生活の話題（Food, Shopping, Home, その他）、2 年次生の講義内容は、看護英語であった。各話題について 3〜4 週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫した。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行った。また、1 年次生前期の授業では、CALL 学習を必修授業として取り入れている。授業を二部構成とし、上記の自作教材の英語コミュニケーションの練習と、CALL 学習を行なった。基礎的な文法、発音、語彙の習得が未熟な学生も散見されるため、演習活動の中で学生の弱点を把握しながら、今後の学生の英語運用能力の維持、向上を目指す。

日本人教員の授業では授業を二部構成とし、前半では英文テキストの日本語訳を最初に配布し読

ませることでテキストの内容を理解、把握させ、それをもとに課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行った。また、ネイティブ・スピーカーの発話を音声 CD で確認し、実際に発声の反復練習を行った。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてくることを課題とし、次週には実際に暗唱（含む筆記）できるかの確認を行った。後半では、易しい英語で書かれた書物を辞書なしで読み、総読書語数増進を目指す多読を実施した。学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機の維持を図った。前半の課題を達成できない学生が散見されたため、今後は講義時間外での学習指導の導入を検討したい。後半の読書演習では、選択する図書が限定されている学生の関心を拡大するべく、魅力的な図書の紹介を講義内に取り入れることを検討している。

言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。そこで、年間を通し、全ての学生（1～4 年次生、大学院生）が自ら自由に英語学習に取り組めるよう授業外での多読教材の貸し出しや、CALL システムによる TOEIC 対策のための英語学習、学習期間前後の TOEIC IP 試験を実施している（前期：1 年次生必修。後期：全ての学生を対象に希望制にて実施）。受講した学生は、真剣に取り組み、結果として学習効果の向上がみられた。

CALL システムについては、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7 月のオープンキャンパスにて、模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際に CALL システムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

学生の英語学習に対する意欲の維持や学習活動の継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索している。さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な学習へのきっかけ作りをいかに構築していくかが今後も継続課題である。

3　研究活動の現状と課題

今年度は、教育活動で取り組んでいる CALL 学習の効果を英語学習に対する態度と動機の視点から分析し、学内アニュアルミーティングで報告した。CALL 受講によって英語教育が必要と考えた学生が大半を占めた。CALL 受講前に TOEIC 得点が高い学生ほど受講によりモチベーションと英語学習への自己評価が増加した。受講前 TOEIC 得点が低い学生は受講により TOEIC 得点の伸びは大きいが、自己評価が 15%下がる結果が得られた。この結果から、今後の教育に関する示唆が得られた。本研究の結果および卒論生の研究成果についても関連学術誌に投稿するなどして学外へ発信する予定にしている。

5-8　基礎看護学研究室

1　活動方針

研究室責任者の交代により、研究室の円滑な運営をめざす。

4 年間での基礎看護学教育の土台となる基礎看護学についての教育目標及び内容の共通理解を深め、適切な教育内容の教授を目標とした。

良好なチームワークを形成し、教授活動に最大の効果を期待して活動した。

2　教育活動の現状と課題

COVID-19 の影響でいろいろと授業方法の変更を余儀なくされたが、内容は計画通りの実施であった。

①　講義主体の授業については、授業方法を Web に切り替え、進度も変更することなく計画通りに実施できた。Web による学生の反応も特に問題はなく、理解についても変化はなかったと考える。後半は講堂で密を避け対面で行った。

②　演習については、当初、Web で実施することとなったため使用物品を学生に配布し、自宅で実施できるように工夫した。Web で演習指導を行うため、カメラでのズームや録画を駆使して実施した。対面でなければできない演習については、時期を後期に変更して対応した。1 月以降に技術チェックを計画し、学生には練習時間の確保を図った。

学習効果を最大にするため、教員の準備が非常にタイトであった。

③　後期の準備がタイトであったことから、前期から対面で演習できるように計画し、感染予防のため、2 組に分けて展開できるように準備する必要がある。

④　また、看護学概論や看護理論の学習がどのように実践で行かされるのか臨地実習で記録物の確認や指導方法等の工夫が必要である。

3　研究活動の現状と課題

研究室全員がそれぞれの研究課題に向かって各自努力を続けるとともに、常に論文投稿や新たな研究課題の探求に努力している。4 名それぞれの研究課題は異なっているが、今後は、全員で共同研究できるように関連分野を模索しながら研究室全体で取り組めるように体制を整えていくことが課題である。

5-9　看護アセスメント学研究室

1　活動方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を根拠に基づきアセスメントできる能力を養うことを目的とし教育を実施している。看護の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的、心理的、社会的側面から看護学の視点で根拠に基づくアセスメントができることがねらいである。看護アセスメント学研究室の担当科目は、1 及び 2 年次の履修科目が多く、基礎的な理論や科学的な見方、クリティカルシンキングなど、エビデンスを追及する

姿勢とともに、看護への関心、喜びなど感性を高め、専門領域に繋げるという教育的役割がある。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論 I」「看護疾病病態論 II」「ヘルスアセスメント」「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」である。「看護疾病病態論 I」「看護疾病病態論 II」では、主要な疾病の理解や病態の理解、さらに「ヘルスアセスメント」においては、看護師の五感を活用し頭部からつま先まで身体の観察ができる能力を身につけ、身体的なアセスメントができる基礎的能力を身につける。「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」は、看護過程の展開の基礎的能力が身につくことを目的とし、講義および演習を組みわせて、知識の習得を段階的に行っていく。「看護アセスメント学実習」では、受け持ち患者と関わり、初めて実際の患者に対して看護過程の展開を行うことを通し、自己の課題を明確にし、専門看護学領域の基盤とする。

大学院教育においては、「フィジカルアセスメント学特論」「看護アセスメント学特論」「基盤看護学演習」など、根拠に基づくアセスメント、臨床推論能力を高めることを方針とする。

2　教育活動の現状と課題

毎年、学生の学びの達成度を評価しつつ、授業の目標、授業構成、授業方法などの見直し改善を行っている。「看護疾病病態論」や「ヘルスアセスメント」などフィジカルに関する科目はメカニズムの学修ができるよう工夫している。学修評価の試験では、筆記試験は過去問による断片的で暗記の知識にならないよう、理解に重点をおくための試験問題を毎回新たに作成した。さらに「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」など、人間の見方を身体以外の心理、社会面まで統合して人を包括的に捉えることの重要性を教授している。また「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」では、看護過程の理論を活用し、患者を理解し、よりよい看護実践ができることを目標としているが、看護過程の展開自体が主眼とならないよう指導が必要な場面もあるが、患者の状況や症状がイメージできるよう DVD の視聴をした看護過程の展開の工夫や、教員 4 名で個別に看護過程の基本的考え方や記録方法を丁寧に指導した。

今年度は COVID-19 のため、ヘルスアセスメントの演習もオンラインで実施し、学生のスキルの定着が図りにくかったため、感染状況を見ながら実習室での技術指導を行った。看護学実習においても、3 つの実習施設のうち 1 施設の実習受け入れが困難であったため、2 施設で実習期間を短縮して学生全員が臨地での実習を行い、学内演習と並行した実習方法を展開した。

課題は、症状から病態を探求していく力、観察をポイントの修得、臨床推論能力を育成などさらに強化していきたい。また人間科学講座の教員とも連携をとりながら、重要な知識やメカニズムの理解の積み上げや統合ができるような授業の工夫が必要と考える。

3　研究活動の現状と課題

それぞれの教員が、自分の専門的研究領域で研究を推進している。3 名は科学研究費を取得し、1 名は本学の競争的研究費の奨励研究を取得し研究を実施している。また、卒業研究や課題研究の指導により、各分野の研究の幅を広げている。論文の公表を積極的に推進することが必要である。

5-10　成人・老年看護学研究室

1　活動方針

成人・老年看護学の学習は、成人期・老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標としている。そのため、成人看護学概論、老年看護学概論、成人看護援助論・老年看護援助論、成人・老年看護学演習、成人看護学実習ⅠⅡ・老年看護学実習の各教科を設定している。成人および老年領域の概論は 2 年次前半に開講し、各発達段階や保健に関すること、理論について学ぶ。さらに成人および老年の援助論では、急性期、回復期、慢性期、終末期や老年特有の疾患や傷害をもつ人への看護を実践する力を養うために、専門的知識の教授とディスカッションやグループワーク等を設け、学生が自ら考えられるような学習方法を展開している。さらに 3 年次前期には、成人・老年看護学演習において、模擬事例へのケアについて考え学びを深める教材を使い、看護過程の展開を行った。意見交換、発表を通して看護の実践につながる思考を強化できるように取り組んでいる。さらに 3 年次前期から後期かけて実習科目をおき、成人看護、老年看護の学習成果を実践に反映できるように展開している。

また、大学院では老年 NP コースを運営し、NP 論、老年 NP 論、老年アセスメント演習、老年薬理学演習、老年実践演習、老年 NP 実習ⅠⅡⅢの科目を開講している。法的に認められた特定行為研修を含みつつ、ナースプラクティショナー（仮称）の制度化も視野にいれた老年 NP を育成することが目的であり、責任をもった自律性のある実践者としての看護師の育成に取り組んでいる。

2　教育活動の現状と課題

成人・老年看護学は青年期から老年期までの長いライフスパンにある対象者への看護の学びであり、学習範囲は非常に広範囲にわたっている。代表的疾患を持つ対象者の生活と看護を理解するための理論を主体的に学習し思考を深められるように科目を構成し、卒業時の到達目標につなげている。看護の実践の場では、教員からの指導のほかに、学生が必要に応じて主体的に学習する必要がある。その媒体として、ナーシングスキル等の e ラーニングを活用しており、成果を継続的にみていく。大学院では特に遠距離学生が学べる体制づくりが必要であり、学生との通信ネットワークを用いた対応などフィードバックを強化することが課題であった。しかし、今年度はコロナ感染症対策のためのオンライン授業の体制が整えられ、課題は解消された。今後は学習効果について評価をしていく。

3　研究活動の現状と課題

成人・老年看護学では、認知症高齢者の看護、糖尿病などの慢性期疾患看護、急性期疾患患者の看護、高齢者の生活行動に着目した研究、NP の成果に関する研究など各教員のテーマによる研究を幅広く行っている。引き続き研究を行い、課題としては国内外での研究成果の公表の機会をつくることである。

5-11　小児看護学研究室

1　活動方針

小児看護学の教育活動は、2年次生と3年次生に専門看護学として、対象とする小児に関する小児保健と小児看護の特殊性を理解でき、実習後には小児と家族への関心を深め、隣地で看護実践する能力を身につけることをねらいとしている。そのため、講義では小児の成長と発達について発達理論を学び、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を包含する小児看護の特殊性について理解を深め、演習では小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶことが目的である。

小児看護学実習では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族の関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができることを教育や指導をしている。学生が健康・不健康に関わらず小児とその家族への援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築できるよう配慮している。小児看護学研究室の研究活動に関しては、学外や学内の競争的研究費を獲得し、研究論文が積極的に学術雑誌に投稿することを目標にしている。

2　教育活動の現状と課題

今年度は新型コロナ感染症の影響を受け、4月から小児看護学の講義は、オンラインと対面授業で行った。その為、試験はレポート提出などで評価した。また、15コマの小児看護学演習は視聴覚教材と事例検討を行った。2年次前期の概論では、小児を取り巻く保健、福祉、看護などの課題を学ぶ。学生が自分自身の「子ども観」をレポート求めた。自己の子ども観を認識するように工夫している。3年次前期はより小児看護の専門的な講義と学内演習を通して、学生は多くの小児に関する学びを深める。　3年次後期は、それまで学んだ専門的知識を臨地実習で実践し、看護場面に知識を応用する。しかし、臨地実習が中止となり、実線はできなかった。

3　研究活動の現状と課題

小児看護学研究室では、小児看護の中でも小児がん看護の研究や、小児保健分野の予防接種関連の研究や、幼児後期の食行動と保護者の食育意識の研究、また、小児在宅医療に関連した医療的ケアの研究を軸に取り組み、学部の 4 年次生には課題を提案し協働した。令和 1 年度も各自が取り組んでいる研究を学会発表等で発信した。大学院では、小児 NP コースに 2 名が在籍していたので、2 年間で修了することができたのは成果である。また修士課程 1 年には 1 名が在籍しているので、学習サポートを継続する。

4　その他

ボランティア活動：糖尿病サマーキャンプ（Young Wing Summer Camp）は、糖尿病をもつ子どもを対象とするキャンプで計画していたが、コロナ感染症のため中止した。

5-12　母性看護学研究室

1　活動方針

母性看護学では、学部教育において、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は母性看護学概論、母性看護援助論Ⅰ、母性看護援助論Ⅱ、母性看護学演習、母性看護学実習で構成している。母性看護学では、学内で学んだ理論と技術を実習で実践し、理論と実践を結びつけることを目標としている。特に母性看護学実習は周産期に重点をおいて実習を展開している。

2　教育活動の現状と課題

母性看護学の講義、演習、実習は、今年度コロナウイルス感染の影響を受けて、ネット配信によるスタイルに変更された。講義は講義資料を再検討しネコバスに掲示した。Zoom 講義で学生が不利益にならないように研究室の教員で Zoom 講義をフォローした。講義中の学生の反応が分からないので、講義終了後グーグルフォームにて学生の学びや感想、質問を提出し、学生の反応を確認した。

母性看護学演習はナーシングスキルによる演習としたため、母性看護学実習中に学内でコロナ感染対策をして技術演習を強化した。母性看護学実習は全員臨地実習に参加することができ、母性看護の実際について学ぶ機会を得、臨地で学ぶことの大切さを感じた。

母性看護学実習は、各施設における分娩や産褥婦、新生児などの経験値が異なるとの課題があがっていたため、いしい産婦人科醫院とサロンリラ・どーなつ助産院の実習施設を今年度から開拓したが、コロナウイルス感染の影響を受けて大分県県立病院には学生を配置せず、実習日数を短縮して実習を終了した。今年度の実習配置は実習直前、実習中に配置を変更したため、学生に平等に配置できなかったことが課題である。

また、2022 年度の新カリキュラムに向けて、講義時期や必要単位数、実習場所について検討した。母性看護学概論の講義日数を減じることとし、2022 年度から新カリキュラムの開始にあたりカリキュラムの進行に応じて、母性看護学の講義、演習を実施していく必要がある。

3　研究活動の現状と課題

母性看護学研究室は、女性の健康に関する研究、父性に関する研究、性教育、受胎調節、家族計画に関する研究、乳房ケアや産後ケアに関する研究に取り組んでいる。平成 30 年度から大分中村病院の医師、看護師、理学療法士とともに「産後骨盤底症状に関する調査」の共同研究に取り組んでいる。今年度は産後 1 ヶ月、6 ヶ月、12 ヶ月の縦断調査結果についてまとめているので、今後報告予定である。また、大学院生の修士課題研究 2 名について、卒業後母性衛生に論文を投稿することができた。

5-13　助産学研究室

1　活動方針

大学院助産学コースは、高度な判断力と実践力をもつ自律した助産師を育てることをめざしている。助産師が専門職として社会に対して果たすべき役割について理解し、高度な周産期母子医療に対応するためにハイリスク妊産褥婦を含めた助産診断能力及び助産技術、またリプロダクティブ・ヘルスを推進するために他職種との連携・協働、社会資源の活用能力を身につけるための教育を展開している。特に、模擬事例を用いたシミュレーションや体験型の演習、段階的 OSCE を取り入れた技術試験などの教授方法を実施している。さらに、大学院修了の専門職業人として旺盛な探究心や豊かな人間性を身につけることを目指し、個別面談や他学年を交えた発表や交流の機会を設けディスカッションの場としている。研究活動は、各教員のテーマを深め研究力を高めること及び卒業研究、課題研究の指導をとおして、学会発表や論文投稿を行い、助産学領域全般の研鑽を積んでいる。また、アドバンス助産師として CLoCMiP® レベルⅢ認証の 2021 年更新申請に向けて各自オンラインによる研修を受講している。

2　教育活動の現状と課題

大学院助産学コースの助産学専門科目は、主に昼間に教育を実施している。学生は、夜間に共通科目を履修し、1 年次の前期は昼夜にわたって講義・演習があるため、課題の重複や体力・健康面の支援をしている。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、学年間の交流はメールを活用して実施した。入学前の行動調査等により、対面授業を 4 月後半以降に変更した。非常勤講師の授業は、南大分キャンパスで Zoom を用いたオンライン授業とするなど感染対策を行った。5 月以降の対面授業は通常より広い 33 講義室を使用し実施した。1、2 年次生が重複し密になる時間を避けるため、1 年次生の段階的 OSCE の実施は 6 月より開始した。2 グループに分け実習室使用の時間を制限するなど感染対策を行い短時間で効率よく練習する方法をとったが、数名でのディスカッションでも事例に応じた方法を検討し実践できた。1 年次後期の NICU 課題探究実習は実習施設の受け入れ困難となった。担当教員が臨地での実習を想定した事例展開、臨場感のある DVD の視聴とディスカッション、大分県立病院総合周産期母子医療センターNICU の副師長による講和をとおして学びを深めることができた。妊娠期課題探究実習の一部実習施設の受け入れ困難分は、学内実習にして事例を想定した妊婦健康診査の実際を担当教員とディスカッションし実施した。助産所 2 施設では、経験できたことを各自振りかえり次への課題を明確にしていた。12 月からの実習では、新型コロナウイルス感染状況をふまえて、自粛期間をとりながら、3 月までに超音波診断装置を用いた妊婦健康診査と妊婦個々に応じた保健指導の実際を実施することができた。

2 年次生は、5 月のハイリスク妊産婦ケア実習は、実習施設の受け入れ状況が困難で学内実習とした。通常 4 月に実施する分娩介助の OSCE を 5 月 15 日に延期した。分娩介助を伴う助産学統合実習は、施設と打ち合わせ感染対策を実施しながら 5 月から 8 月にかけて約 4 か月間の実習を行い、実習目標は概ね達成できた。

今年度は、1 名が持病と実習前からの心身の不調により入院・自宅療養を 16 日間、1 名が咽頭炎

による発熱で 10 日間欠席した。他の 9 名は体調を崩すことなく実習した。新型コロナウイルス感染防止対策として就職試験による県外への移動後の 2 週間の自宅待機の指示があり、7 月の就職試験では Web 面接試験を受験する者や日時の変更を依頼するなど実習に専念できない場面もあった。教員は、学生個々の問題解決能力や対人対応能力にもよるため、個別に応じた指導を展開している。助産師国家試験受験に必須の分娩介助経験であるため可能な限り臨地で経験できるように、次年度も全教員で学生の体調管理に引き続き支援していきたい。

2 年次後期の助産所助産師の自律した助産ケアの実際は新型コロナウイルス感染防止対策で中止とした。助産学会のオンライン講義や DVD の視聴、ハイリスク妊産婦の事例検討会やシミュレーションを経験し、助産師としてのアイデンティティの基礎を形成した。課題研究は指導を受けながらまとめ、全員提出し成果を報告した。今後、関連学会等に投稿や発表する予定であるため引き続き支援していく。令和 2 年度修了生 11 名は、県内 4 名、県外 7 名の病産院に就職した。

本研究室自作の修了時アンケート 19 名分（H29～31 年度）を分析したところ、大学院助産学コースの 6 つのディプロマポリシーに対する自己評価結果では、「身についた・まあまあ身についた」と回答していた。段階的 OSCE については、「自分達で様々な文献を調べ、意見を出し合ったりすることで知識が深まり、原理原則に基づいた技術が身についた。」、「ただ技術を習得するだけではなく実践の場で実施できるように“考えて行動する”力をつけることもできた。」という意見があった。今後も、実施している教育の評価を行いながら、大学院生としての思考力、自己学習力を養い人間関係スキルを向上させるための方略を検討しながら、改正カリキュラムに向けて全体を見直す予定である。

3　研究活動の現状と課題

学内外の研究費を獲得し各自の課題を探究し続けており、関連学会で発表もしくは学会誌に投稿をしている。卒業研究は、教員の研究テーマの一部や教員のテーマとは直接関係しないものの助産学の発展の基礎となる研究を指導した。大学院生の特別研究・課題研究は、主または副指導教員として指導に携わり、共同研究者として関連学会で発表し成果を残している。過年度修了生の論文を投稿するべく継続して支援していくことは継続課題である。

4　その他

平成 31 年度分として令和 2 年 2 月に実施予定であった助産師能力強化研修「経腹超音波検査」を令和 2 年 8 月 8 日に実施した。本学講義室と母性・助産実習室において、大分県内産科 6 施設の助産師 12 名を対象に、大分県立病院の佐藤昌司副院長を講師に招き、教員 4 名と院生 1 年次生 6 名が支援し実施した。

5-14　精神看護学研究室

1　活動方針

本研究室における学部教育の基本目標は、学生が以下のような看護を習得することである：1)精神科領域以外の様々な場でも展開できる精神看護、2)対象者の社会参加・自己実現や生きにくさに焦点を当てた看護、3)看護者自身の特徴や“治療的人間関係”に留意した看護、及び 4)医療と保健・福祉サービスとの連携を意識した看護。この目標の下で講義・演習・実習が一連の流れとして接続するよう、担当教員が連携しながら授業構成をしている。卒業研究に関しては、できるだけ各学生の関心に沿ったテーマで研究を進められるよう配慮し、今年度は 4 名の学生を担当した。教員の研究については、それぞれの専門領域を生かしつつ、行政や病院と協働で研究を推進できる体制の構築を図っており、複数の協力フィールドの開拓に向けて働きかけた。

大学院では、精神看護学特論、メンタルヘルス特論、看護政策論、看護コンサルテーション論などを担当している。広域看護学コースの精神看護学特論は、国家試験出題範囲にとらわれず、保健師の地域・職域精神保健活動の実際で必要な内容を扱っている。それ以外の科目は、大学院各コースの共通科目に指定されている単位が多いので、履修者全体の関心とニーズに対応する授業内容を目指している。

2　教育活動の現状と課題

学部の教育内容については、国試の出題基準も考慮に入れつつ、心の健康と疾患、精神医療・看護の歴史と現状、看護の対象者の精神的・社会的側面に着目したアセスメントと援助、治療的環境と看護の役割、社会と精神看護の関係などによって構成した。今年度は当初から、新型コロナウイルス感染症拡大により臨地実習が十分できない可能性が懸念されたので、これに備えた教育プログラムの準備にも取りかかった。講義ではテキスト以外に追加資料や視聴覚教材も多用し、できるだけアクティブラーニングを実現できるよう努めた。演習では、紙上事例や動画事例に基づく課題を精選し、体験的学習、実習施設や家族会・NPO のスタッフによる活動紹介などの基本構成を維持しつつ、続く実習への準備性を高めるようにした。実習は精神科病棟と障害福祉サービス事業所での実習を例年と同じ比重で展開したが、一病院で 2 週間の病棟実習が停止となったことから、この間の実習学生は別病院での見学実習および学内演習に振り替えた。卒業研究では、学生の関心・能力と計画の実現性をすり合わせ、卒論完成後も国試に至るまで支援を続けた。

3　研究活動の現状と課題

大学院生や学外の病院・企業・自治体と協働して、自殺予防、交替勤務と睡眠、精神障がい者のリハビリテーション、コミュニティでの看護教育、環境心理学等の領域で研究活動を展開した。自殺予防に関しては、大分市・豊後大野市の住民調査データに基づく論文を投稿中である。交替勤務者の睡眠に関する研究は複数のフィールドで続行中だが、病院看護職者に対する調査の一部は新型コロナウ

イルス感染症拡大のため計画が遅れており、このため科研費の研究期間を 1 年延長することとした。精神科病院と協働して、精神障害者の社会参加に向けたリカバリー支援心理教育（IMR）の効果評価についての研究や、保護室から患者を早期退室させるための看護師用アセスメントツールの作成を進めており、成果を逐次発表・論文投稿している。

4　その他

複数の学会の役員および編集委員として、学術活動に貢献した。また、日本精神科看護協会大分県支部の役員として、県内の精神科看護師への教育や研究の支援を行った。大分アディクションフォーラムの実行委員として、様々なアディクション（嗜癖）問題を抱える当事者や家族の支援を行った。リカバリー支援心理教育（IMR）の普及として、県内の精神科病院デイケア、精神科クリニックデイケア、就労支援継続 B 型施設での実施支援を継続した。

5-15　保健管理学研究室

1　活動方針

学部教育では、学生が看護管理学や在宅看護論等の講義、演習、実習を通して、マネジメントや在宅看護について理解を深める教育を行うことを方針とした。学生が、地域で生活する在宅療養者や家族に看護を提供できるよう各科目では、学生の主体性を引き出す教育を心がけた。

大学院教育では、看護管理・リカレントコースをはじめ、NP や助産学などの学生に実践に役立つ看護管理学を教育することを方針に講義や演習を行った。看護管理学特論では、学生が看護管理学の理論を学び、講義で得た知識を活用しながら実践現場を振り返る教育を行い、マネジメントの知識やスキルを高められるようにした。

2　教育活動の現状と課題

学部教育の看護管理学概論では、学生が看護管理についての基礎知識について理解を深め、看護管理に関する事例を通して具体的にマネジメントを考える教育を行った。在宅看護論では、基礎知識を学ぶ講義に加え、在宅療養者の事例を通して在宅看護を学ぶ教育を行った。学生は終末期や慢性期などの在宅療養者に対し、どのような看護行うか、事例を通して学びを深めた。在宅看護論実習は、COVID-19 による緊急事態宣言下で、学内実習に変更し、臨地実習に代わる教材を用いた教育を行い、学生が講義で学んだ知識をもとに、看護を考えるプロセスを経験することができた。また、大学院教育では、看護管理学の理論を学び、臨床現場をマネジメントの視点から分析する機会を設け、看護管理実践について事例をもとに知識やスキルを高めた。今後は、学部や大学院の学生が、教育を通して得た知識をもとに、実践現場を改善するための基礎力や応用力を高められるような事例を活用し、教育の質をより高めていくことが課題である。

3　研究活動の現状と課題

学部の卒業研究については、5 名の学生に保健管理学研究室の教育に関連したテーマで研究指導を行い、学生がそれぞれに研究を進めた。今後は学生が研究を通して新たな看護を継続、探求できるよう教育を行う必要がある。大学院の研究では、担当教員が各学生へ指導を行った。各学生は、個々人のテーマに沿って看護管理学および在宅看護学等に関する研究を進め、成果を学会等で発表した。今後は、論文の公表および研究の継続と発展を視野に進められるよう教育を行う。

5-16　地域看護学研究室

1　活動方針

学部教育では、看護の対象を個人から集団、地域へと視野を広げ、看護の活動の場を地域に拡大し展開できる看護職の育成をめざしている。地域全体を包括的に捉え、生活の場での看護や生活に目を向けた看護職育成への社会的要請を反映し、すべての看護職者の基礎的知識として「地域看護」の思考を持った看護師を育成する。

大学院教育では、少子高齢社会における生涯を通じた健康づくりの支援や、産業・学校を含む地域全体を対象として活動できる保健師の育成をめざしている。また、社会変化に対応し、新人期から困難事例に対応できる能力、新たな取り組みを企画立案できる保健師を育成する。

2　教育活動の現状と課題

4 年次前期の地域看護学実習は、COVID-19 による緊急事態宣言により学内演習に変更し実施した。グループワーク、ディスカッションを取り入れ、様々な視点から地域を捉え、看護職の役割について考えることができた。3 年次後期の地域生活支援論では、コミュニティ・アセスメントの考え方を活用し、4 年次で実施する実習地のデータを用いた演習を行い、実習と連動した学習を強化した。

大学院の実習では、学生・教員・自治体（企業）が一体となって教育を行なった。テーマ設定の場面から、学生の関心のあるやりたいことと、実習地が直面している「現代進行形の健康課題」などについて打ち合わせを行い、一緒に考え、実習に臨むなどの工夫を凝らして実習テーマを決定している。過去に院生がかかわった課題について、期間を経て別の学生が取り組む事例が生まれ、保健師のかかわる事業が発展していく過程を学ぶことができ、県内の保健師活動の積み上げに学生実習が連動できる可能性がみえてきた。次年度も県内保健師活動と連動した実習を行い、県内に定着する保健師育成をめざしていくことが必要である。

3　研究活動の現状と課題

学部の卒業研究では、4 名の学生に各教員が研究指導を行い、研究としてまとめた。大学院教育で

は、大学院生の実習の成果を教員指導のもと「日本公衆衛生看護学会」で発表した。また、「日本公衆衛生看護学会」で全国の大学院修士課程保健師養成の学生との交流会を持つなど、活発に研究活動を実施した。今後も、研究の継続と課題研究や実習の成果を学会発表や雑誌投稿できるよう教育を行なっていく。

5-17　国際看護学研究室

1　活動方針

学部教育では、国際看護学概論（2 年次）、国際看護比較論・国際看護学演習（3 年次）、大学院では、国際看護学特論、広域看護学演習を担当している。講義・演習では、世界の人々を看護の対象と捉え、1）地球規模の保健医療に関する課題について理解し、その直接的・間接的要因や、課題に対する地域／グローバルな規模での対策について学ぶこと、2）日本国内でも在留外国人や訪日外国人の増加等により急速に多様化する対象者の文化・社会的背景に着目し、文化に配慮したケア（Transcultural nursing）について学ぶことを目的としている。世界の健康課題の背景を理解するため、保健医療についてだけでなく、歴史や風土、経済的側面など、複眼的な視点を持ってもらえるよう留意している。また、グローバルヘルスに関する最新かつ包括的な情報は、国際機関のホームページ等から得ることができるため、信頼できる情報源から英語で情報をとる内容を演習に組み込んでいる。大学院では、受講生の研究テーマに沿い、ニーズに対応した内容を目指している。

2　教育活動の現状と課題

講義・演習では、看護の対象を日本国内だけでなく世界に広げて考えることができるよう努めている。グローバルヘルスに関する基本的な知識の獲得や、国や地域間の健康格差等の課題について、背景を知り、考察できることをめざしている。身近な問題と感じづらい内容もあり、興味を維持しながら学んでもらえるよう工夫が必要である。

講義と演習が効果的につながり、相乗効果が得られるよう教授内容を工夫する必要がある。

3　研究活動の現状と課題

多文化看護に関する内容とグローバルヘルスの課題に関する内容を中心に研究を続けている。学部生の卒業研究では、3 名の学生が所属し、コロナ禍での留学生の生活、開発途上国における栄養問題、青少年難民のメンタルヘルスに関する研究を行った。また、学内競争的研究費（奨励研究）を獲得し研究に取り組んだ。

今後は、卒業研究については単年度の研究のみでなく、研究室として学生と共に継続的に続ける研究や、海外姉妹校・MOU 締結校との共同研究にも取り組みたい。

4　その他

大分県国際交流プラザ、JICA デスク大分から国際交流に関するイベントをご紹介いただき、学生・教職員に発信している。研究では英語論文の投稿、海外学会での発表を積極的に行っていくことを目指している。

6　研究助成・事業助成等

6-1　研究助成

6-1-1　日本科学振興会科学研究費助成事業（科研費）

石田佳代子

災害時における「黒エリア」での対応に向けた実践モデル的教材の開発．基盤研究(C)．（代表）

岩﨑香子

身体不活動が腎疾患に糖尿病を誘発する機序の歩行制限モデルラットにおける解析．基盤研究(C)．（分担）

恵谷玲央

動物 X 線 CT による頭部及び全身照射がマウス造血幹細胞の変異に与える経時変化の比較．若手研究．（代表）

小野美喜

看護師の裁量範囲の拡大により生じる倫理的問題と倫理教育のあり方に関する研究．基盤研究(C)．（代表）

小野治子、赤星琴美

生活習慣病の服薬者の医療費削減に向けた保健指導の構築．基盤研究(C)．（代表）

影山隆之

病院看護師における夜勤時の眠気と先行睡眠・勤務時間・身体活動との関連．基盤研究(C)．（代表）

草野淳子

医療的ケア児を支える訪問看護師と専門支援相談員をつなぐ連携教育プログラムの開発．基盤研究(C)．（代表）

草野淳子、高野政子、足立綾

在宅療養児を支える訪問看護師に対する小児特定看護師の介入教育プログラムの検討．基盤研究(C)．（代表）

佐伯圭一郎

量的な看護研究における統計手法利用の現状分析と報告のためのガイドラインの提案．基盤研究(C)．（代表）

看護学生のシビリティー（civility）を育むアクションリサーチ．基盤研究(C).（分担）
看護系大学における臨床実習前の共用試験の検討．基盤研究(B).（分担）

佐藤愛

地域在住高齢者のオーラルフレイルの実態調査と口腔・嚥下・咳嗽機能向上の介入の試み．若手研究.（代表）

品川佳満

高校までの連続性と現場への連動性をパッケージ化した看護情報倫理教育モデルの開発．基盤研究(C).（代表）
保育者養成をベースとした妊娠から始まる子ども子育て支援者養成カリキュラムの開発．基盤研究(C).（分担）
NIRS を用いた ALS 患者の認知レベルの評価とコミュニケーション支援を目指して．基盤研究(C).（分担）

篠原彩、桑野紀子

女性外国人技能実習生のリプロダクティブヘルスニーズに対する支援の構築．基盤研究(C).（代表）

秦さと子

嚥下機能評価のための血中および唾液中サブスタンスＰ濃度の基準値の検討．基盤研究(C).(代表)

杉本圭以子

精神科デイケアにおけるリカバリー支援心理教育プログラムの標準的実施の可能性．若手研究.（代表）

高野政子

小児固形がん患者に対して包括的な認知機能評価と支援を行い、QOL 向上を目指す研究．基盤研究(C).（分担）

田中佳子

血液透析患者のシャント血流音と狭窄度の関連．若手研究(B).（代表）

藤内美保

看護基礎教育における臨床推論の看護の思考形成を導く教育プログラム開発．基盤研究(C).（代表）

藤内美保、福田広美、山田貴子、田中佳子

高度実践看護師の臨床推論に基づくフィジカルアセスメント継続教育支援プログラム．基盤研究(C).（代表）

樋口幸

予防的スキンケアのための画像解析による新生児の皮膚評価ツールの開発．基盤研究(C)．（代表）

福田広美、村嶋幸代

ピアサポートによる中小規模事業所の看護管理者能力開発と地域ネットワーク推進の研究．基盤研究(B)．（代表）

森加苗愛

糖尿病をもつ成人期男性のセクシュアリティの看護ケアの質評価基準の検証．若手研究．（代表）

山田貴子

熟練訪問看護師の臨床判断モデルの開発－新卒訪問看護師教育の開発に向けて－．若手研究．（代表）

吉田成一

PM2.5 構成成分の複合胎仔期曝露による出生仔雄性生殖系・免疫系に及ぼす影響．基盤研究(B)．（代表）

6-1-2　その他の研究助成

市瀬孝道、吉田成一、定金香里

環境中微粒子の体内、細胞内動態、生体・免疫応答機序の解明と外因的、内因的健康影響決定要因、分子の同定．科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業（CREST）研究補助金．（分担）

岩﨑香子

腸管 T 細胞制御による CKD 骨代謝異常是正の試み．日本腎臓財団公募助成　腎不全病態研究.（代表）

樋口幸、吉田成一

微酸性電解水を用いたディスポタオルの開発．鳥繁産業株式会社 受託研究費．（代表／分担）

6-1-3　学内の競争的研究資金

岩﨑香子

食事性フラボノイドの積極的摂取による CKD 骨脆弱性発症予防の可能性. 先端研究

定金香里

輸入果実に使用される防かび剤経口曝露によるマウスアレルギー性喘息への影響評価. 先端研究

丸山加菜、Gerald Thomas Shirley、桑野紀子

小規模大学における看護学生の国際交流活動に関する意識調査. 奨励研究

姫野綾、梅野貴恵、樋口幸

アドバンス助産師認証者の助産活動に対する想い. 奨励研究

吉田成一

加熱式たばこの使用により雄性生殖系が受ける影響. 先端研究

6-2　事業助成

福田広美

令和 2 年度大分県地域医療介護総合確保基金大分県中小規模病院等看護管理者支援事業

6-3　外部研究者受入れ

本年度実績なし

7　研究業績

7-1　著書

Iwasaki Y, Yamato H, Fukagawa M. “Chapter 7: Uremic Toxicity and Bone in CKD”. Uremic Toxins and Organ Failure. Saito H, Abe T(Eds). p95-114, Springer. 2020.

戸田芳雄, 相部保美, 鮎沢衛, 岩田英樹, 大友智, 岡出美則, 岡端隆, 影山隆之, 他：新しい体育. 東京書籍, 東京, 2020.

影山隆之：「ひきこもり」対「自立」でいいのか？－リカバリーからの視点から. 高塚雄介（編）ひきこもりの理解と支援－孤立する個人・家族をいかにサポートするか. pp13-23, 遠見書房, 東京, 2021.

小西恵美子, 麻原きよみ, 太田勝正, 勝原裕美子, 蔡小英, 平野亙, 小野美喜他.: 看護倫理-よい看護・よい看護師への道しるべ第 3 版. 第 13 章　看護職の責任―倫理的責任と法的責任―(分担). 南江堂, 東京, 2020.

村嶋幸代. 新型コロナウイルス感染症対応の窓口が「保健所」である理由と意味：保健所保健師の役割と重要性. 日本看護協会出版会編集部編. 新型コロナウイルス ナースたちの現場レポート. pp326-333, 日本看護協会出版会, 東京, 2020.

7-2　原著論文・査読付総説

足立綾，高野政子，草野淳子：慢性疾患がある子どもの予防接種に携わる外来看護師の支援の実態. 日本小児看護学会誌, 29, 51-58, 2020.

Shen M, Song Y, Ichinose T, Morita K, Wang D, Arashidani K, Yoshida Y. *In vivo* immune activation of splenocytes following exposure to tar from Asian sand dust. J Toxicol Environ Health A. 2020, Oct17;83(19-20):649-658. doi: 10.1080/15287394.2020.1806160. Epub 2020 Aug 20. PMID: 32819208.

Wakamatsu T, Iwasaki Y, Yamamoto S, et al. Type I Angiotensin II receptor blockade reduces uremia-Induced deterioration of bone material properties. J Bone Miner Res. 2020, 36(1): 67-79.

Etani R, Ojima M, Ariyoshi K, Fujishima Y, Kai M: Cellular kinetics of hematopoietic cell s with Sfpi1 deletion are present at different frequencies in bone-marrow and spleen in X -irradiated mice. International Journal of Radiation Biology, 2020 Aug 6. https://doi.org/10. 1080/09553002.2020.1793018.

Etani R, Yoshitake T, Kai M: Estimating Organ Doses from Pediatric Cerebral Computed Tomography Using the WAZA-ARI Web-Based Calculator. Journal of Radiation Protection and Research, 2021 Mar 31. https://doi.org/10.14407/jrpr.2020.00227.

Ojima M, Ito A, Usami N, Ohara M, Suzuki K, Kai M: Field size effects on DNA damage and proliferation in normal human cell populations irradiated with X-ray microbeams. Sci Rep. 2021;11(1). doi: 10.1038/s41598-021-86416-7.

菓子野元郎, 熊谷純, 有吉健太郎, 小嶋光明：放射線誘発バイスタンダー効果およびレスキュー効果の実態と今後の展望. 放射線生物研究, 56, 19-36, 2021.

Ono H, Akahoshi K, Kai M. The Trends of Medical Care Expenditure with Adjustment of Lifestyle Habits and Medication; 10-Year Retrospective Follow-Up Study. Int J Environ Res Public Health ,2020,17(24), 9546. https:// doi:10.3390/ijerph17249546.

小野美喜,望月啓央,甲斐博美. 診療看護師が職務上経験する倫理的問題.日本看護倫理学会誌, 13(1), 2020.

Takayasu Yoshitake, Koji Ono, Tsuneo Ishiguchi, Toru Maeda, Michiaki Kai, Clinical indications for the use of computed tomography in children who underwent frequent computed tomography: a near-13-year follow-up retrospective study at a single institution in Japan. Radiat Environ

Biophys. 59(3), 407-414, 2020.

Yuko Kadowaki , Nobuyuki Hamada , Michiaki Kai , Kyoji Furukawa Evaluation of the lifetime brain/central nervous system cancer risk associated with childhood head CT scanning in Japan. Int J Cancer. 148(10), 2429-2439, 2020

Kazutaka Doi, Michiaki Kai, Keiji Suzuki, Tatsuhiko Imaoka, Megumi Sasatani, Satoshi Tanaka, Yutaka Yamada, Shizuko Kakinuma, Radiat Res. 194, 500-510, 2020

Noriko Kojimahara, Takayasu Yoshitake, Koji Ono, Michiaki Kai, Graham Bynes, Joachim Schuz, Elizabeth Cardis, Asurele Kesminiene, J Radiol Prot. 40, 1010-1023, 2020.

Haruko Ono, Kotomi Akahoshi, Michiaki Kai, The trend of medical care expenditure with adjustment of lifestyle habits and medication; 10-year retrospective follow-up study. Int J Envion Res Public Health, 17, 9546, 2020.

Notsu Mikako, Takeaki Naito, Keita Mori, Akifumi Notsu, Ayumu Morikawa, Takanori Kawabata, Taro Okayama, Yusuke Yonenaga, Miwa Sugiyama, Hirotsugu Kenmotsu, Haruyasu Murakami, Tomoko Ito, Michiaki Kai, Toshiaki Takahashi, Days spent at home near the end of life in Japanese elderly patients with lung cancer: *Post hoc* analysis. Asia Pac J Oncol Nurs. 8(3), 228-236l, 2021.

Yusuke Makino, Mika Miyagawa, Michiaki Kai, Validation of ultrasound-guided peripheral intravenous catheterization with a probe holder compared to the traditional technique: A single-case experimental study. JNSE, 8, 865-100, 2021.

日本保健物理学会・日本放射線影響学会　低線量リスク委員会、甲斐倫明、今岡達彦、小笹晃太郎、児玉靖司、小林純也、小村潤一郎、酒井一夫、佐々木道也、島田義也、田内広、高原省五、冨田雅典、吉永信治、低線量リスクに関するコンセンサスと課題、放射線生物研究、55(2), 85-182, 2020.

黒岩千翔, 影山隆之 : 女性病院看護職者の日勤中の眠気－個人特性、前夜の睡眠、勤務条件との関連. 産業精神保健, 28, 236-247, 2020.

木嶋彩乃,守田孝恵 : 新人保健師の経験の質と振り返りに向けたプリセプターの関わり. 山口医学, 69, 125-133, 2020.

冨田志織, 草野淳子, 梅野貴恵 : 不妊症看護における看護者の心理的葛藤を構成する因子の検討. 母性衛生 61（4）, 579-586, 2021.

草野淳子，高野政子，水元恵理：在宅療養児（者）と家族に訪問看護師が行う医療的ケアの支援の内容に関する文献検討．小児保健研究, 79(5), 502-509, 2020.

草野淳子，高野政子，田ノ上辰吾：A 県の訪問看護師が小児の訪問看護の経験の有無や経験年数の違いにより不足していると認識している知識・技術．日本小児看護学会誌, 29, 1-8, 2020.

永末はるか，草野淳子，安部真紀，梅野貴恵：不妊専門施設の看護職が行う不妊女性への初回受診から治療終結に至るまでの看護の実態．母性衛生, 61(2), 423-430, 2020.

Kuwano N, McMaster R: Knowing ourselves: Self-awareness and culturally competent care. Nursing & Health Sciences. 2020 Dec;22(4):843-845. doi: 10.1111/nhs.12735.

宿利優子，小野美喜，福田広美：訪問看護ステーションで勤務する診療看護師（NP）の肺炎症例への直接的介入プロセス．日本 NP 学会誌, 4(1), 9-10, 2020.

秦さと子，戸嶋咲希，荒木菜結：嚥下機能低下予防の取り組み開始時期の検討-嚥下時の舌骨上筋群の筋活動量と年齢および自覚症状との関連から-．保健の科学, 62, 785-790, 2020.

麻生優恵，立川真実，秦さと子：高齢女性の椅子坐位姿勢による低圧分散効果の検討．日本健康学会誌, 86, 141-148, 2020.

杉本圭以子：精神科デイケアにおける IMR 参加者のパーソナルリカバリーの変化ーテキストマイニングによる分析．精神障害とリハビリテーション, 24(1), 98-106, 2020.

高野政子，橋本志乃：小児 NP の活動に対する看護師・スタッフの満足度と NP への期待．日本 NP 学会誌, 4(2), 3-11, 2020.

Tane E, Umeno Y, Ishioka Y, Bahau SP, Lord R. Comparison of Perceived Requirementsfor Maternal Delivery between Medicalversus Nursing Students. POJ Nursing Practice & Research. ISSN Online:2577-9516. 2020.

Hori H, Orita M, Taira Y, Matsunaga H, Kudo T, Takamura N: Factors affecting anxiety among administrative officers working within the urgent protective action planning zone of a nuclear power station. PLOS ONE 2020 August 5. https://doi.org/10.1371/journal.pone.0236997

宮内信治：自由間接話法疑問文における音調の検討ー*Rebound, Replay, Rethink* に着目してー．日本言語音声学会論文集, 1, 1-9, 2020.

村嶋幸代：社会に新風を吹き込む看護のリーダーシップ－大分県立看護科学大学の活動から．看護科学研究, 18(2), 49-56, 2020.11. http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/pages/18_2.html

Yoshida S, Ichinose T, Shibamoto T. Effects of Fetal Exposure to Heat-Not-Burn Tobacco on Testicular Function in Male Offspring. Biol Pharm Bull, 43(11), 1687-1692, 2020..

Watanabe H, Hyodo M, Nakagawa S: Two-way MANOVA with unequal cell sizes and unequal covariance matrices in high-dimensional settings. J. Multivariate Analysis 179, 1-15, 2020.

7-3　その他の論文等

岩﨑香子, 深川雅史： CMD-MBD と酸化ストレス, 慢性腎臓病・透析患者の酸化ストレスー最新知見と治療展開. 臨床透析. P87-93.日本メディカルセンター. 東京. 2020.

草間朋子, 小野美喜： 日本 NP 教育大学院協議会の定める「診療看護師（NP） に必要とされる 7 つの能力（コンピテンシー）」. 日本 NP 学会誌, Vol4（2）, 29-30, 2020.

影山隆之 :「コロナうつ・コロナ不安」を防ぐ. 地域保健 52(1), 32-35, 2021.

影山隆之 : 新型コロナウイルスに関して　常務理事会からリレーメッセージ④ COVID-19 拡大の中で心の健康を維持するには. 日本自殺予防学会ウェブサイト（http://www.jasp.gr.jp/document.html#20200901）

影山隆之 : 眠りの癒しを求めて. 保健の科学, 62, 169-173, 2020.

品川佳満, 伊東朋子, 橋本勇人: 看護師が注意すべき患者の個人情報取り扱い「気づかない」から「ドキッ」、そして「あたりまえ」になるために（第 4 回）FAX の誤送信. 看護技術, 66(4), 413-415, 2020.

品川佳満, 伊東朋子, 橋本勇人: 看護師が注意すべき患者の個人情報取り扱い「気づかない」から「ドキッ」、そして「あたりまえ」になるために（第 5 回）院外への持ち出し　車上荒らしによる盗難. 看護技術, 66(6), 669-671, 2020.

品川佳満, 伊東朋子, 橋本勇人: 看護師が注意すべき患者の個人情報取り扱い「気づかない」から「ドキッ」、そして「あたりまえ」になるために（第 6 回）院外への持ち出し　ルール違反からの漏えい. 看護技術, 66(7), 766-768, 2020.

品川佳満, 伊東朋子, 橋本勇人: 看護師が注意すべき患者の個人情報取り扱い「気づかない」から「ドキッ」、そして「あたりまえ」になるために（第 7 回）電子カルテの目的外閲覧. 看護技術, 66(8), 877-879, 2020.

品川佳満, 伊東朋子, 橋本勇人: 看護師が注意すべき患者の個人情報取り扱い「気づかない」から「ドキッ」、そして「あたりまえ」になるために（第 8 回）コンピュータウイルスへの感染による情報漏えい. 看護技術, 66(9), 981-983, 2020.

品川佳満, 伊東朋子, 橋本勇人: 看護師が注意すべき患者の個人情報取り扱い「気づかない」から「ドキッ」、そして「あたりまえ」になるために（第 9 回）看護部が開設しているソーシャルメディア(ブログ)からの情報漏えい. 看護技術, 66(10), 1085-1087, 2020.

橋本勇人, 品川佳満: 看護師が注意すべき患者の個人情報取り扱い「気づかない」から「ドキッ」、そして「あたりまえ」になるために（第 10 回）看護師が関与した個人情報保護違反に関する判例. 看護技術, 66(11), 1178-1181, 2020.

品川佳満, 伊東朋子, 橋本勇人: 看護師が注意すべき患者の個人情報取り扱い「気づかない」から「ドキッ」、そして「あたりまえ」になるために（第 11 回）その他の「ドキッ」と感じてほしい場面. 看護技術, 66(13), 1453-1455, 2020.

品川佳満, 伊東朋子, 橋本勇人: 看護師が注意すべき患者の個人情報取り扱い「気づかない」から「ドキッ」、そして「あたりまえ」になるために（最終回）まとめ　ミクロ・メゾ・マクロレベルからみた個人情報保護. 看護技術, 66(14), 1542-1544, 2020.

宮内信治：自由間接話法における音調選択とその効果―Yes/No 疑問文に着目して―. 大分県立看護科学大学 HP 研究紹介 2020 年 5 月.

村嶋幸代：書評「くすりの基礎を知る」（草間・脊山・松本監修），東京化学同人，2020.

7-4　プロシーディングス

該当なし

7-5　報告書

Ojima M, Ito A., Suzuki K, Usami N, Ohara M, Kai M: The Response of Cells to DNA Damage and Cell Proliferation Depends on the Size of the X-irradiated Cell Population. Photon Factory Active Report 2019., #37 (2020).

小嶋光明, 恵谷玲央, 鈴木啓司：放射線照射したマウスの骨髄・脾臓内造血幹細胞の細胞動態の解析～放射線誘発マウス急性骨髄性白血病のメカニズムを考える～. 放射線災害・医科学研究拠点 2019 年度共同利用・共同研究課題研究成果報告集, 117, 2020.

草野淳子：平成 27 年度～令和 2 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究 C 研究成果報告書　在宅療養児を支える訪問看護師に対する小児特定看護師の介入教育プログラムの検討（課題番号 15K11723）

福田広美, 村嶋幸代：令和 2 年度大分県地域医療介護総合確保基金活用事業大分県中小規模病院等看護管理者支援事業報告書.

村嶋幸代，石川貴美子，伊藤京子，岡順子，鎌田久美子，川崎涼子，成木弘子，吉岡京子，中根恵美子，土山典子，後藤芳子，池田裕美：令和元年度地域保健総合推進事業　市町村保健師の人材育成体制構築支援事業報告書. 一般財団法人　日本公衆衛生協会，（http://www.jpha.or.jp/sub/pdf/menu04_2_r01_11.pdf），2020.3.

村嶋幸代，角野文彦，田中明美，西生敏代，野口純子，野村陽子，平野一美，福田裕子，本田あゆみ：令和元年度厚生労働省先駆的保健活動交流推進事業　地域包括ケアシステム推進にむけた保健医療福祉の連携強化に関する検討委員会報告書～行政保健師の機能強化にむけて～，公益社団法人日本看護協会，（https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/senkuteki/2020/regions_caresystem_link_report.pdf），2020.3.31.

7-6　学術講演

小野美喜：浜松医科大学 FD 講演．ナースプラクティショナーの目指すものと育成：プライマリ領域 NP. 2020.12.

Michiaki Kai：10 years of radiological protection after the Fukushima - Need to share what radiological criteria are. 2020 IAEA Consultancy Meeting, Fukushima (Web 開催）, 2020.10.

Michiaki Kai：ICRP Recommendations for Recovery. International Conference on Recovery after Nuclear Accidents, Fukushima (Web), 2020.12.

Michiaki Kai：Environmental and individual monitoring in ICRP Publication 146. 15th International Congress of the International Radiation Protection Association (IRPA15). Seoul (Web), 2021.1.

Michiaki Kai：The latest ICRP recommendations in terms of radiological protection issues arising after the Fukushima Daiichi nuclear accident. The 5th International symposium of the Network-type joint usage/research center for radiation disaster medical science. Nagasaki (Web) , 2021.2.

甲斐倫明：実効線量の意味合いとその適用について　令和 2 年度第 2 回新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン　先端医用量子線技術科学コース講演会　（オンライン）、2021.1.

影山隆之, 小泉典章, 平田茜, 阿部裕, 有馬斉：大会特別企画パネルディスカッション「新型コロナウイルス問題」がわたしたちの心にもたらしていること．日本精神衛生学会第 36 回大会, 横浜（ウェブ開催）, 2020.11.

影山隆之：「新型コロナウイルス問題」と向き合うメンタルヘルス活動：これからの自殺対策のために．第 40 回日本社会精神医学会シンポジウム 2 コロナ禍における自殺予防, 東京（ウェブ開催）, 2021.3.

吉田成一：加熱式たばこについて 加熱式たばこ研究討論会．東京都, 2021.2.

吉田成一：使用による生体影響 加熱式たばこ研究討論会．東京都, 2021.2.

7-7　学会発表等

門田理子, 赤星琴美, 川崎涼子, 小野治子, 佐藤愛, 村嶋幸：A 保健所館内の精神障がい者の地域支援における組織連携の検討. 日本公衆衛生看護学会第 9 回学術集会,オンライン開催, 2020.12.

竹中響, 赤星琴美, 川崎涼子, 小野治子, 佐藤愛, 村嶋幸：小児慢性特定疾病児の学校生活に着目した保健所保健師の支援の検討. 日本公衆衛生看護学会第 9 回学術集会, オンライン開催, 2020.12.

足立綾, 高野政子:保育所における発達が気になる子どもに対する看護職の活動と課題に関する文献研究. 日本小児看護学会第 30 回学術集会, 兵庫県, 2020.9.

石田佳代子：黒エリアでの対応における実践的な訓練シナリオの検討―訓練上の黒タグ症例の分析結果より―. 日本災害看護学会第 22 回年次大会, 広島県, 2020.9.（オンライン開催, ppt 動画発表）

石田佳代子：看護学生の批判的思考育成を図るための教育方法の工夫に関する文献レビュー. 第 51 回日本看護学会－看護教育－学術集会, 富山県, 2020.11.（オンライン開催, 誌上発表）

市瀬孝道、定金香里、牧輝弥:真菌誘性喘息モデルマウスに対するアジアの砂塵と PM2.5 の影響. 第 61 回大気環境学会, 松本市, 2020.9.

市瀬孝道、定金香里、牧輝弥:黄砂発生地のバイオエアロゾル中の真菌類の気管支喘息誘導能の比較. 第 61 回大気環境学会, 松本市, 2020.9.

牧輝弥, 市瀬孝道, 定金香里, 能田淳, 御手洗聡, 森本耕三, 川下理日人:長距離輸送されるバイオエアロゾルが及ぼすヒト健康影響. 第 61 回大気環境学会年会, 長野, 2020.9.

Ichinose T：Entry route to the immune response of Asian sand dust (ASD) and exacerbation of lung allergies. Forum of Environmental factor and biological defense mechanism with imaging. The 43nd Molecular Biology Society of Japan. Online. Kobe Port Island, 2020.12.

岩﨑香子, 宮丸佳子, 長島優佳, 大和英之, 深川雅史：慢性腎臓病における骨脆弱性形成はミネラル代謝異常に先行する. 第 63 回日本腎臓学会学術集会, 横浜市, 2020.8.

岩﨑香子, 長島優佳, 宮丸佳子, 大和英之, 深川雅史：慢性腎臓病骨脆弱性発生に対する食事性フラボノイド継続摂取の効果. 第 38 回日本骨代謝学会学術集会. 神戸市. 2020.10.

恵谷玲央, 吉武貴康, 小野孝二, 長谷川隆幸, 勝沼泰, 甲斐倫明:小児頭部 CT 検査における被ばく線量の WAZA-ARI v2 を利用した推定 小児体型と臓器線量の関係の検討. 日本保健物理学会第 53 回

研究発表会, オンライン開催, 2020. 6.

Etani R, Ojima M, Miyazaki E, Kai M: Sfpi1 gene deletions causing acute myeloid leukemia remain in the C3H mice spleen for a long time after X-irradiation. 15th International Congress of the International Radiation Protection Association, Korea (online), 2021 1.

Mitsuaki Ojima, Sayuri Asao, Michiaki Kai: Dose response relationship of rescue effect on DNA damage. 日本放射線影響学会第 63 回大会, 福島, 2020.10.

小嶋光明, 伊藤敦, 鈴木啓司, 宇佐美徳子, 大原麻希, 甲斐倫明：X 線マイクロビームを用いて照射野面積の違いがヒト正常細胞集団の DNA 損傷・細胞動態に及ぼす影響～内部被ばくの健康影響を考えるための基礎研究～. 日本保健物理学会第 53 回研究発表会, 大阪府, 2020.6.

甲斐倫明、竹田百伽：甲状腺がん罹患率の都道府県地域差の年齢期間コホートモデルによる分析. 日本保健物理学会第 53 回研究発表会, 大阪（Web 開催）, 2020,6.

影山隆之：自殺統計で「その他無職」(UNJ)と分類される人の健康と自殺念慮の住民調査. 第 93 回日本産業衛生学会, 旭川市, 2020.5.

木嶋彩乃, 大河内彩子, 藤村一美：子どもネグレクトに対する海外の介入プログラムに関する文献検討. 第 23 回日本地域看護学会学術集会, 大阪, 2020.8.

Kuwano N, Younghui H, Kameya M. Comparative study on the intercultural sensitivity of Japanese and Korean nursing students. The 6th International nursing research conference of world academy of nursing science. Osaka, Feb.2020

草野淳子, 高野政子, 足立綾：A 県における小児の訪問看護の実態調査. 第 26 回大分小児保健学会, 大分県, 2020.12.

草野淳子, 高野政子：A 県内における小児の訪問看護の実施状況の実態調査. 第 40 回日本看護科学学会学術集会, 東京都（オンライン）, 2020.12.

吉永幸永, 草野淳子, 高野政子：大分県の小・中・高等学校のがん教育の準備教育と養護教諭の取り組みに関する実態調査. 第 67 回日本小児保健協会学術集会, 福岡県（オンライン）, 2020.11.

草野淳子, 高野政子：特別支援学校における医療的ケア児への養護教諭が果たす職務に関する文献研究. 第 67 回日本小児保健協会学術集会, 福岡県（オンライン）, 2020.11.

定金香里, 市瀬孝道, 牧輝弥 : 黄砂発生地の真菌類と加熱黄砂の複合曝露による気管支喘息増悪の比較. 第 61 回大気環境学会年会, 長野, 2020.9.

高野政子, 足立綾 : 小児がん患児の復学支援における看護師の取り組みと課題に関する文献検討. 日本小児看護学会第 30 回学術集会, 神戸（オンライン開催）, 2020. 9.

久保田遥, 高野政子, 足立綾 : 医療的ケアが必要な NICU 入院児の在宅移行支援に関して訪問看護との連携の実態と課題. 日本小児看護学会第 30 回学術集会, 神戸（オンライン開催）, 2020.9.

小金千秋, 高野政子 : 思春期の人工妊娠中絶に携わる看護職の経験による認識の違いと心理的反応に関する研究. 第 67 回日本小児保健協会学術集会, 久留米（オンライン開催）, 2020.11.

奥野晴香、藤内美保、山田貴子 : 看護学生の患者の状態に対する推論と情報収集の実験的検討 ―2 年次生, 4 年次生, 看護師の比較―. 日本看護研究学会第 46 回学術集会, Web 開催（誌上発表）, 2020.9-11.

安部涼子、松久美、藤内美保、松本健吾、古川雅英 : 爪ケア困難事例に対するデイケア診療看護師と急性期診療看護師の連携. 第 6 回日本 NP 看護学術集会, 愛知県, 2020.10.

後藤ゆめ, 徳丸由布子 : A 県 3 市の子育て世代包括支援センターによる支援内容と今後の課題. 第 61 回日本母性衛生学会総会・学術集会, 静岡県, 2020.10.

永松いずみ, 林猪都子 : 産褥 1 か月の褥婦が希望する妊娠期、産褥期における骨盤底症状に関するケア. 第 61 回日本母性衛生学会総会・学術集会, 大阪, 2020.10.

土肥真由子, 永松いずみ, 林猪都子 : 流産・死産を経験した女性への看護に関する文献研究. 第 61 回日本母性衛生学会総会・学術集会, 大阪, 2020.10.

大里一矢, 山川涼介, 福島学, 樋口幸, 他. : 上腕部を対象とする筋音計測に基づく内部菌活動計測に関する一検討. 日本音響学会 2020 年春季研究発表会, 2020.3.

大里一矢, 山下涼介, 樋口幸, 他. : MMG 計測による微小筋活動計測手法のエコー画像から抽出した筋繊維座標・時間波形による検証の一検討. 日本音響学会 2020 年秋季研究発表会, 2020.9.

大里一矢, 山下涼介, 樋口幸, 他. : MMG 計測筋繊維活動推定量とエコー画像変位量の相関分析による対応の一検討. 日本音響学会 2021 年春季研究発表会, 2021.3.

村松桂子, 浅井和恵, 大戸朋子, 原田千鶴, 福田広美, 村嶋幸代 : 大分県佐伯地域の看護ネットワー

クを基盤とした中小規模病院等看護管理者支援事業～小規模病院における看護管理の向上：スタッフ育成と業務改善～. 第 51 日本看護学会-看護管理-学術集会, オンライン, 2020.11.

丸山たみえ, 伊東郁子, 大戸朋子, 原田千鶴, 福田広美, 村嶋幸代 : 大分県佐伯地域の看護ネットワークを基盤とした中小規模病院等看護管理者支援事業～中規模病院における看護管理の向上：次世代の看護管理者とスタッフの育成～. 第 51 日本看護学会-看護管理-学術集会. オンライン. 2020.11.

堀裕子、折田真紀子：原子力発電所 UPZ 内の原子力防災訓練に参加する職業別特徴の検討. 日本放射線看護学会　第 9 回学術集会, 広島, 2020.9.

森加苗愛, 原田和子, 山﨑優介：どうすべき? 2 糖尿病をもつ男性のセクシュアリティの看護を始めよう―糖尿病教室での取り組み―. 日本糖尿病教育・看護学会第 25 回学術集会, 岩手（オンライン）, 2020.9.

吉田成一, 市瀬孝道：妊娠中の加熱式たばこ気化蒸気吸入が雄性出生マウスの生殖系に与える影響. 日本アンドロロジー学会 第 39 回学術大会, 石川県, 2021.1.

吉田成一：妊娠マウスの加熱式たばこ気化蒸気吸入が出生仔雄性生殖系および免疫系に与える影響. 喫煙科学研究財団研究報告会, 東京都, 2020.9.

兵頭昌, 渡邉弘己, 中川重和：Normalized transformation of Dempster type statistic in high-dimensional settings. 日本計算機統計学会 第 34 回大会, オンライン開催, 2020.5.

7-8　開発・特許等

本年度実績なし

7-9　受賞

影山隆之：2020 年日本学校メンタルヘルス学会優秀査読者賞, 2021.2.

8　社会貢献

8-1　講演等

石田佳代子

看護過程. 令和 2 年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会. 大分市, 2020.10.

フィジカルアセスメント（心音・呼吸音・全身皮膚）. 令和 2 年度看護力再開発講習会. 大分市, 2020.11.

梅野貴恵

助産師教育課程. 令和 2 年度保健師助産師看護師実習指導者講習会. 大分市, 2020.9.

小野美喜

看護専門職論 看護実践における倫理. 認定看護管理者教育課程ファーストレベル研修. 大分市, 2020,8.

実習指導計画・指導案作成の実際. 大分県看護協会実習指導者講習会. 大分市, 2020,11.

影山隆之

メンタルヘルス. 大分県自治人材育成センターマネジメント研修. 大分市, 2020.7.

メンタルヘルス. 大分県自治人材育成センター新任課長級研修. 大分市, 2020.7.

睡眠と健康. 大分産業保健総合支援センター衛生管理者研修. 大分市, 2020.7.

睡眠と健康管理. 大分産業保健総合支援センター産業医研修. 大分市, 2020.7.

平時のストレスマネジメント対策と惨事ストレス対策. 大分県消防職員上級幹部科研修. 由布市, 2020.11.

平時のストレスマネジメント対策と惨事ストレス対策. 大分県消防職員中級幹部科研修. 由布市, 2020.11.

精神科看護の基礎. 日本精神科看護協会大分県支部研修会（初任者研修）. 大分市, 2020.12.

草野淳子

令和 2 年度大分県医療的ケア教員研修会. 大分市, 2020.7.

令和 2 年度大分県医療的ケア看護師研修. 大分市, 2020.8.

令和 2 年度医療的ケア児等コーディネーター養成研修会. 大分市, 2020.11.

桑野紀子

大分県看護協会　2020 年度保健師助産師看護師実習指導者講習会. 2020.9.

品川佳満

やってみよう看護研究 2　量的研究と分析. 大分県看護協会教育研修. 大分市, 2020.7.

杉本圭以子

やってみよう看護研究 1　テーマの絞り方から研究開始まで. 大分県看護協会教育研修. 大分市, 2020.9.

やってみよう看護研究 4　看護研究のまとめ方とプレゼンテーション. 大分県看護協会教育研修. 大分市. 2020.9.

高野政子

たんの吸引の基礎・経管栄養の基礎. 令和 2 年度大分県教育委員会主催特別支援学校教員医療的ケア研修会. 大分市, 2020.7.

学校における医療的ケアの実際. 大分県立聾学校医療的ケア校内教職員研修会. 大分市, 2020.8.

医療的ケア児の健康管理と対応. 大分県立日田支援学校医療的ケア校内教職員研修会. 日田市, 2020.8.

小児看護学. 令和 2 年度大分県看護協会主催実習指導者講習会. 大分市, 2020. 9.

ヒヤリハット事例の共有・分析. 令和 2 年度大分県教育委員会主催第 3 回医療的ケア看護師研修. 大分市, 2020.12.

藤内美保

実習指導案・指導計画. 大分県看護協会　実習指導者講習会. 2020.8.

フィジカルアセスメント. 大分赤十字病院　看護師研修会. 2020.8.

看護研究. 豊後大野地域看護研究会. 豊後大野市, 2020.9.

永松いずみ

実習指導の実際　母性看護学実習. 大分県看護協会　保健師助産師看護師実習指導者講習会. 大分市, 2020.11.

廣田真里

看護サービス質管理. 認定看護管理者教育課程ファーストレベル　大分県看護協会. 大分市, 2020.7.

人材管理Ⅱ（人事・労務管理）. 認定看護管理者教育課程セカンドレベル　福岡県看護協会. 福岡市, 2020.10.

診療看護師（NP）の活動をどう支えるか. 佐久大学大学院 FD 研修会. 佐久市, 2020.9.

平野亙

福祉における権利擁護　－　障がい者の自立とその支援. 大分県・市町村福祉担当新任職員研修会. 大分市, 2020.5.

ASD 児の未来のために　～専門職に寄せる親の願い～. 大分県 2020 年度発達障がい者支援専門員養成研修初級. 大分市, 2020.12.

エンドオブライフ期の意思決定支援. 臼杵市市民後見センター権利擁護研修会. 大分市（リモート）, 2021.3.

福田広美

ヘルスケアシステム論. 大分県看護協会令和2年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル. 大分市, 2020.8.

統合演習. 大分県看護協会令和 2 年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル. 大分市, 2020.9.

看護関連法規. 大分県看護協会令和 2 年度保健師助産師看護師実習指導者講習会研修. 大分市, 2020.7.

村嶋幸代

激変する世界の中で、将来に備える. 大分県立日田高校. 日田市, 2020.7.

激変する世界の中で、将来を考える. 大分県立高田高校. 豊後高田市, 2020.8.

大学の教育課程. 2020 年度保健師助産師看護師実習指導者講習会. 大分県看護協会, 大分市, 2020.9.

地域包括ケアシステム推進における行政保健師の役割. 令和 2 年度全国保健師長研修会（書面）. 日本公衆衛生協会, p66-69, 2020.11.

大学における医療職育成の取組. 国際ロータリー第 2720 地区大分キャピタルロータリークラブ訪問. 大分市, 2020.11.

看護を武器に、より良い社会づくりに貢献する. 2020 年度島根県立大学出雲キャンパス客員教授特別講義. オンデマンド配信, 2020.12.

中堅期保健師に求められる実践能力. 令和 2 年度佐賀県中堅期保健師フォローアップ研修. 佐賀県看護協会看護センター 及び Zoom, 2021.2.

森加苗愛

看護記録の基礎. 大分県看護協会　新人研修講習会. 2020.8.

やってみよう看護研究 3　質的研究と分析. 大分県看護協会, 2020.8.

看護研究とは. 大分赤十字病院, 2021.1.

吉村匠平

構成的エンカウンターグループを用いたコミュニケーション演習（1）. 大分医師会立アルメイダ病院新入職員研修. 大分市, 2020.6.

勇気づけのコミュニケーション. 大分医師会立アルメイダ病院プリセプター研修. 大分市, 2020.7.

構成的エンカウンターグループを用いたコミュニケーション演習（2）. 大分医師会立アルメイダ病院新入職員研修. 大分市. 2020.11.

気になる子ども理解とポジティブ行動支援. 社会福祉法人皆輪会職員研修. 福岡市,2020.12.

8-2　非常勤講師

石田佳代子

中津ファビオラ看護学校　基礎看護技術 I

岩﨑香子

大分大学福祉健康科学部理学療法コース

梅野貴恵

藤華医療技術専門学校助産学科　助産学研究、研究の意義、事例研究

恵谷玲央

久留米大学認定看護教育課程がん放射線療法看護分野　放射線療法における放射線の安全な取り扱い

小野美喜

鹿児島大学保健学科　離島看護学
島根県立大学看護学科　NP 論
長崎県立大学大学院保健学科　看護倫理学特論
中津ファビオラ看護専門学校　人間と倫理

甲斐倫明

久留米大学認定看護師教育センター　放射線療法における放射線の安全な取り扱い

影山隆之

別府大学人間学部　精神保健の課題と支援
別府市医師会看護専門学校　精神看護学概論、精神看護の方法 I

桑野紀子

藤華医療技術専門学校　国際社会と看護

定金香里

大分リハビリテーション専門学校　生理学 I、生理学 II

品川佳満

別府医療センター附属大分中央看護学校　情報科学、情報科学演習

藤内美保

広島大学医学部保健学科　ヘルスアセスメント

ファビオラ看護専門学校　基礎看護技術；ヘルスアセスメント（1 年次）

ファビオラ看護専門学校　ヘルスアセスメントの実際(3 年次)

樋口幸

藤華医療技術専門学校助産学科　助産学研究

平野亙

大分大学福祉健康科学部

丸山加菜

藤華医療技術専門学校　看護学科　看護の統合と実践Ⅱ（国際社会と看護）

中津ファビオラ看護学校　国際看護

宮内信治

大分県立芸術文化短期大学　英語Ⅰ

大分大学理工学部　英語Ⅰ、英語Ⅱ

渡邉弘己

中津ファビオラ看護学校　情報科学

8-3　研究指導

衛藤病院	影山隆之	石丸智子	
大分県立病院	佐伯圭一郎	草野淳子	
大分医師会立アルメイダ病院	関根剛	杉本圭以子	
大分赤十字病院	森加苗愛	平野亙	稲垣敦

吉田成一
　大分西高等学校　課題研究中間発表会　講師

吉村匠平
　佐伯豊南地区養護教諭高等学校部会

8-4　学会役員等

稲垣敦

日本体育測定評価学会　会長
大分県スポーツ学会　代表理事
日本体育学会測定評価専門領域　代表
日本体育学会　代議員
日本体育学会　学会賞選考委員

岩崎香子

日本骨粗鬆症学会　評議員
日本 CKD-MBD 研究会　評議員
ROD21 研究会　幹事
第 22 回日本骨粗鬆症学会学術集会　プログラム委員

梅野貴恵

日本助産診断実践学会　理事・編集委員
大分県母性衛生学会　理事

恵谷玲央

日本保健物理学会　コミュニケーション委員会委員
日本保健物理学会　IRPA Guidance 翻訳ワーキンググループ委員
日本保健物理学会　「生殖腺防護に関する NCRP 声明」翻訳ワーキンググループ委員
日本放射線影響学会　論文紹介企画小委員会委員

小嶋光明

日本保健物理学会　倫理委員会委員
日本放射線影響学会　放射線災害対策委員会委員
日本放射線影響学会　グローバル化委員会委員

小野美喜

日本看護倫理学会　理事
日本 NP 教育大学院協議会　理事
日本看護倫理学会　課題検討委員
日本看護倫理学会　査読委員

甲斐倫明

一般社団法人日本保健物理学会会長（代表理事）

影山隆之

日本精神衛生学会　理事長
日本精神衛生学会　編集委員
日本自殺予防学会　常務理事
日本自殺予防学会　編集委員長
日本学校メンタルヘルス学会　評議員
日本学校メンタルヘルス学会　編集委員
日本産業ストレス学会　評議員
日本産業精神医学会評議員
日本看護科学学会　編集委員

草野淳子

NP 教育大学院協議会　委員

桑野紀子

日本国際看護学会　理事会研究委員会　評議員
大分県看護協会 実習指導者講習会運営委員会　委員長

佐伯圭一郎

日本テスト学会　編集委員

定金香里

日本生理学会　評議員
大気環境学会健康影響分科会　幹事

佐藤愛

大分県公衆衛生協会　評議員

高野政子

日本小児看護学会　評議員
九州沖縄小児看護教育研究会　幹事
大分県小児保健協会　理事
日本小児看護学会　国際交流委員会　委員
日本小児がん看護学会誌　査読委員
日本看護科学学会　和文誌専任査読委員

藤内美保

日本看護研究学会九州沖縄地方会役員

大分県看護協会　理事

徳丸由布子

大分県母性衛生学会　幹事（事務局会計担当）

永松いずみ

大分県母性衛生学会　幹事（事務局庶務担当）

大分県看護協会　助産師職能委員

林猪都子

大分県母性衛生学会　副会長

大分県母性衛生学会　事務局長

大分県母性衛生学会　学術集会実行委員

大分県助産師会　県中地区理事

姫野綾

大分県助産師会　教育委員

平野亙

医療事故防止・患者安全推進学会　理事

大分県発達障がい研究会　理事

廣田真理

大分県看護協会　学会副委員長

福田広美

大分県看護協会　認定看護管理者教育運営委員

堀裕子

日本放射線看護学会　編集委員

宮内信治

日本言語音声学会　常任理事

村嶋幸代

一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会　副会長
公益社団法人日本看護科学学会　監事、代議員
一般社団法人日本看護系大学協議会　監事
一般社団法人日本看護系学会協議会　監事
一般社団法人日本地域看護学会　監事、代議員
一般社団法人日本在宅ケア学会　監事、代議員
日本 NP 学会　監事
一般社団法人日本公衆衛生学会　評議員
日本公衆衛生協会　評議員

森加苗愛

日本糖尿病教育・看護学会　理事，評議員，研究推進委員会委員，
編集委員会委員，表彰委員会委員
日本慢性看護学会　評議員
日本糖尿病協会　編集委員会委員
日本 NP 教育大学院協議会　資格更新制度委員委員
大分県看護協会　教育委員会委員

吉田成一

日本アンドロロジー学会　理事
精子形成・精巣毒性研究会　評議員
日本薬学会　代議員

吉村匠平

日本学校心理士会　大分支部支部長

渡邉弘己

日本計算機統計学会　第 34 回大会　実行委員

8-5　その他委員等

石田佳代子

大分県リハビリテーション協議会　委員

市瀬孝道

環境省　黄砂問題検討委員会　2021.1.25

小嶋光明

大分大学医学部附属病院治験/介入臨床研究審査委員会　委員

小野治子

大分県保健師連絡会議　委員

大分市被保険者健康管理支援事業に伴うデータ分析業務受託候補者選定委員会　委員

小野美喜

日本ＮＰ教育大学院協議会　資格更新制度委員会委員長

日本ＮＰ教育大学院協議会　制度検討委員会委員

日本看護協会ナースプラクティショナー（仮称）制度検討委員会委員

日本看護系大学協議会　APN グランドデザイン委員

大分県立病院　地域医療支援病院運営委員会委員長

大分県立病院　特定行為研修管理委員

社会医療法人啓和会　大分岡病院特定行為研修管理委員

大分県立看護科学大学特定行為研修管理委員長

甲斐倫明

国際放射線防護委員会(ICRP)主委員会委員

原子力規制委員会　放射線審議会　会長

原子力規制委員会国立研究開発法人審議会　委員

大分県防災対策推進委員会原子力災害対策部会委員

鳥取県原子力安全顧問

鹿児島県環境放射線モニタリング技術委員会　委員

公益財団法人放射線影響研究所　科学諮問委員

環境省環境回復検討会　委員

人事院安全専門委員会　委員

影山隆之

大分県ギャンブル等依存症対策推進協議会　会長
大分県自殺対策連絡協議会　副会長
大分県精神疾患医療連携協議会　委員
大分県アルコール健康障がい対策推進協議会　委員
大分県医療ロボット・機器産業協議会　看護関連機器開発部会　会長
大分県環境影響評価技術審査会　委員
大分県公害審査会調停委員会　委員
大分県社会福祉協議会日常生活自立支援事業契約締結審査会　審査委員
大分市民のこころといのちを守る自殺対策行動計画策定推進検討委員会　会長
別府市自殺対策計画策定推進委員会　委員長
豊後大野市自殺対策連絡協議会　助言者
日出町自殺対策連絡協議会　委員

桑野紀子

International Conference on Nursing (ICONURS) 学会　査読委員

佐伯圭一郎

大分県情報公開・個人情報保護審査会　委員

定金香里

大分県理科化学教育懇談会　幹事
大分県環境影響評価技術審査会　委員
大分県リサイクル認定製品審査会　委員

高野政子

大分県医療的ケア連絡協議会　会長
大分県障害児適正就学指導委員会　委員
大分県立特別支援学校第三者評価委員会　委員
おおいた医療的ケア児等支援関連施設連絡会　委員
大分市特別支援教育メディカルサポート事業委託事業者選定委員会　会長

藤内美保

一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会　社員
一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会教育課程認定委員会　委員
大分県国民健康保険運営協議会　委員
大分県医療費策定協議会　委員
大分県医療費適正化推進協議会　委員

大学等による「おおいた創生」推進協議会　教育プログラム開発部会　委員
厚生労働省看護師の特定行為に係る指定研修機関連絡会　理事
厚生労働省特定行為研修制度の普及に関する委員会　理事
大分県立看護科学大学　特定行為研修管理委員会　委員
大分県中小規模病院等看護管理者支援協議会　委員
大分地方労働審議会　委員
大分県社会福祉審議会　委員

林猪都子
大分県准看護師試験委員
大学コンソーシアムおおいた　運営委員

樋口幸
大分市産業活性化プラザ産学官連携推進事業検討委員会　委員

平野亙
大分県自閉症協会　会長
大分県障がい者差別解消支援地域協議会　委員
杵築市障がい者差別等事案解決委員会　委員長
大分県特別支援連携協議会委員
大分県立特別支援学校第三者評価委員会　委員
大分県合理的配慮推進事業に係る専門家チーム　委員
大分県発達障がい者支援センター連絡協議会　委員
大分県発達障がい者療育専門員養成研修運営委員会　委員
大分県立病院治験審査委員会　委員
九州大学病院　心臓移植外部評価委員

福田広美
大分県中小規模病院等看護管理者支援協議会　委員
大分地方労働審議会　委員
大分県社会福祉審議会　委員

宮内信治
大分市立横瀬小学校　評議員
大分県高等学校教育研究会英語部会　顧問

村嶋幸代

国立保健医療科学院　評価委員
独立行政法人大学改革支援・学位授与機構 国立大学教育研究評価委員会　専門委員
大学コンソーシアムおおいた　理事
宮崎県地方独立行政法人評価委員会　評価委員
社会福祉法人三井記念病院　評議員
健康寿命日本一おおいた創造会議　委員
大分県医療審議会　委員
生涯健康県おおいた 21 推進協議会　委員
大分県国民保護協議会　委員
大分県公私立学校教育協議会　委員
大分県石油コンビナート等防災本部員　委員
野津原地域まちづくりビジョンフォローアップ会議　委員
大分市国際都市交流親善会議　会員
おおいたホームタウン推進協議会　会員

吉田成一

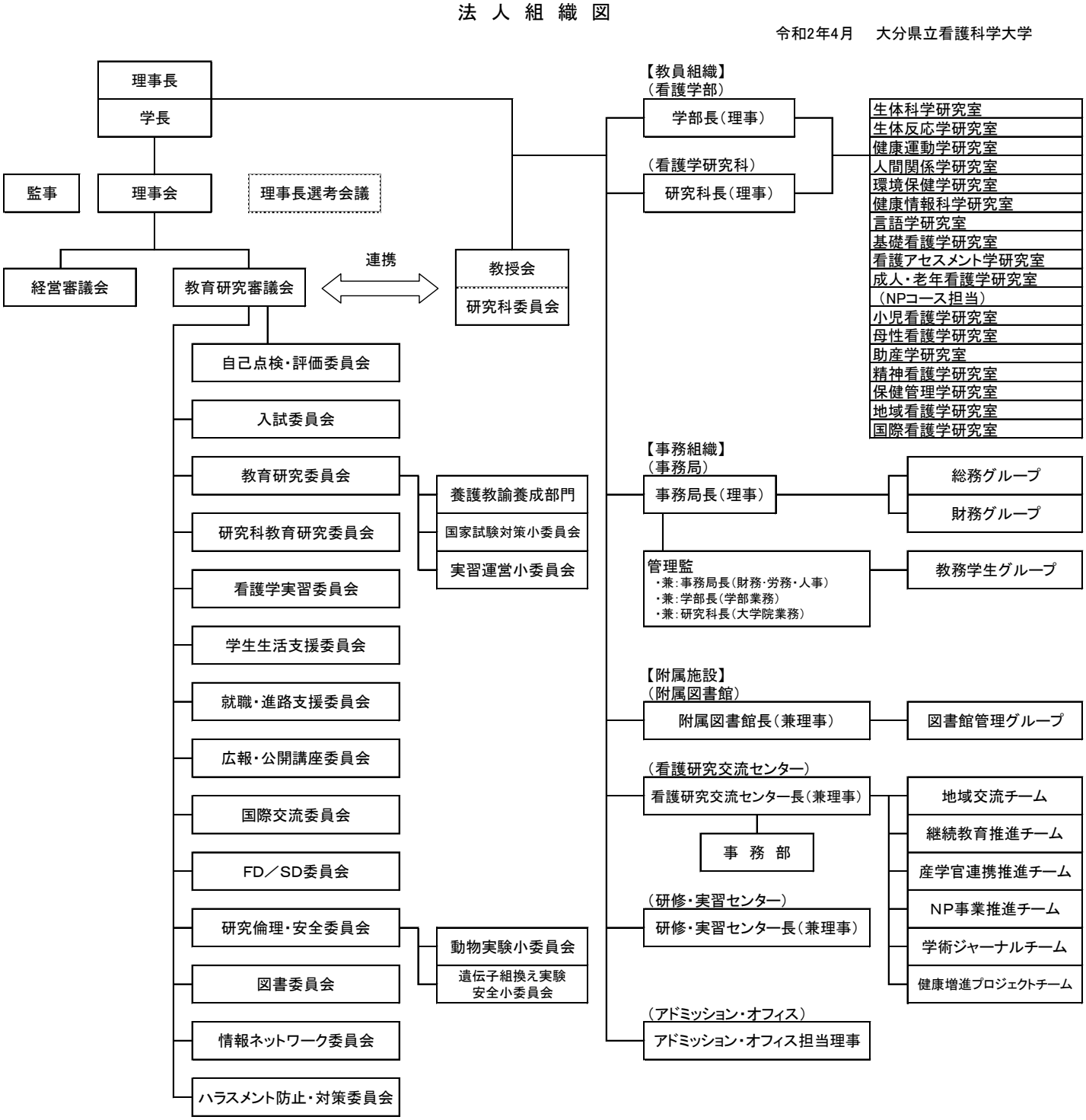
環境省　光化学オキシダント健康影響評価作業部会　委員
大分県　第二次生涯健康県おおいた 21　喫煙対策部会　委員

吉村匠平

九重町教育支援センターほっとスペース　教育相談員
大分県合理的配慮推進事業に係る専門家チーム委員（大分）
大分県合理的配慮推進事業に係る専門家チーム委員（日田）

9　学務

9-1　組織図


法 人 組 織 図
令和2年4月　大分県立看護科学大学
理事長
学長
監事
理事会
理事長選考会議
経営審議会
教育研究審議会
連携
教授会
研究科委員会
自己点検・評価委員会
入試委員会
教育研究委員会
養護教諭養成部門
国家試験対策小委員会
実習運営小委員会
研究科教育研究委員会
看護学実習委員会
学生生活支援委員会
就職・進路支援委員会
広報・公開講座委員会
国際交流委員会
FD／SD委員会
研究倫理・安全委員会
動物実験小委員会
遺伝子組換え実験安全小委員会
図書委員会
情報ネットワーク委員会
ハラスメント防止・対策委員会
【教員組織】
（看護学部）
学部長（理事）
（看護学研究科）
研究科長（理事）
生体科学研究室
生体反応学研究室
健康運動学研究室
人間関係学研究室
環境保健学研究室
健康情報科学研究室
言語学研究室
基礎看護学研究室
看護アセスメント学研究室
成人・老年看護学研究室
（NPコース担当）
小児看護学研究室
母性看護学研究室
助産学研究室
精神看護学研究室
保健管理学研究室
地域看護学研究室
国際看護学研究室
【事務組織】
（事務局）
事務局長（理事）
総務グループ
財務グループ
管理監
・兼：事務局長（財務・労務・人事）
・兼：学部長（学部業務）
・兼：研究科長（大学院業務）
教務学生グループ
【附属施設】
（附属図書館）
附属図書館長（兼理事）
図書館管理グループ
（看護研究交流センター）
看護研究交流センター長（兼理事）
事　務　部
地域交流チーム
継続教育推進チーム
産学官連携推進チーム
NP事業推進チーム
学術ジャーナルチーム
健康増進プロジェクトチーム
（研修・実習センター）
研修・実習センター長（兼理事）
（アドミッション・オフィス）
アドミッション・オフィス担当理事

9-2　危機管理対策本部

本部長　　理事長　村嶋幸代
副本部長　学部長　藤内美保、研究科長　稲垣敦、事務局長　清末敬一朗
本部員　　林猪都子、市瀬孝道、廣田真里、赤星琴美、甲斐倫明、高野政子、
　　佐伯圭一郎、今村知子、矢部美香、坂本晴生、秋吉良継

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）が令和 2 年初頭より世界中で猛威をふるい、本学もこの感染症で多大な影響を受けた。

本学でも「感染防止に努め、学生・教職員から感染者を出さない」、「細心の注意を払って授業を継続し、学生の学ぶ権利を保障する。」、「大変革期にあたり、学生・教職員自身が情報を得て自律的に行動すると共に、COVID-19 と共存する世界を見据えて必要な準備をする。」という 3 つの方針を掲げ、県と連携しながら、各委員会や事務局から学生や教職員に対して体調管理の徹底や海外渡航の注意喚起などを行ってきた。

令和 2 年度は、大分県立看護科学大学危機管理対策本部設置要領に基づいて設置した危機管理対策本部において、2 回の本部会議を実施し、入学式や遠隔授業の実施、感染者発生時の対応策の協議、方針策定をした。

令和 2 年度実施した主な協議内容は以下のとおりである。

4 月 6 日実施

・入学式の実施方法について
・オリエンテーション時の周知内容について
・学生の健康管理、把握、周知について
・遠隔授業の実施等について
・実習について
・今後の危機管理対策本部の体制について

1 月 15 日実施

本学学生に新型コロナウイルス感染者が発生したことを受けて開催

・感染者の行動履歴、本学関係者との接触について
・濃厚接触者の対応について
・教職員、学部生、大学院生への周知について
・授業は 1 月 22 日までオンラインにするよう調整
・予防的家庭訪問実習は 1 月の訪問は取りやめ

9-3　委員会等活動

9-3-1　理事会

理事長　村嶋幸代
学内理事　藤内美保、稲垣敦、清末敬一朗
学外理事　三股浩光、小寺隆、姫野昌治
監事　福田安孝、中野洋子

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。本年度は 5 回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項、重要な規定の制定または改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

特記すべき報告および審議事項として、第 1 回は、新型コロナウイルス感染拡大期における本学の授業対応、令和 2 年度卒業生・修了生の進路状況の報告の他、議題は本学の事務局財務グループ設置の大学組織の改訂、アドミッション・オフィスの設置であった。第 2 回は、令和元年度の業務の実績報告、令和元年度決算、理事長選考委員の選出を議題とした。第 3 回は、新型コロナウイルス感染リスク低減のための各種証明書の発行に係る本学学生生活規程の一部改正や再試験手続を簡略化する履修規程の一部改正について、報告事項として地方独立行政法人評価委員会評価結果（教育研究等の質向上 S 評価）、大学院入学試験結果などが報告された。第 4 回は、市瀬教授の定年延長について、教員採用、本学職員給与規程などの一部改正、理事長選考などに関する規程改正、大学院学則の一部改正、令和 2 年度中間決算、令和 3 年度予算編成方針などが審議された。また本理事会で発案された大学院 NP コースの地域枠の特別選抜を創設することが報告された。第 5 回は、教員の昇任、教員の採用について、令和 4 年度カリキュラム改定に伴う学則の一部改正および大学院学則一部改正、規程等の一部改正、第 3 期中期計画に係る令和 3 年度計画、令和 3 年度予算、大学院広域看護学コース定員枠拡大に伴う中期計画変更について審議された。

大学の円滑な運営のために活発な意見をいただいており、今後も引き続き、外部理事の方々の意見をいただき議論をして決定するよう進める。

9-3-2　経営審議会

理事長　村嶋幸代
学内理事　藤内美保、稲垣敦、清末敬一朗
学外理事　三股浩光、小寺隆、姫野昌治
経営審議会委員　千野博之、吉松秀孝、松尾和行、大戸朋子

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。法人の経営状況について報告し、審議した。

本年度は 5 回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち、法人の経営に関するもの、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規定の制定または改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検および評価などについて審議した。

なお、理事会成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから経営審議会と同時に開催し、特記すべき報告および審議事項は、理事会と同様の内容である。

運営費交付金が年々減額されていく状況のなかで、外部資金の獲得をさらに推進すること、大学の魅力を発信し優秀な学生の継続的な確保の戦略が必要であり、効果的・効率的な経営に関して継続的に審議する。

9-3-3　教育研究審議会

学長　村嶋幸代
学部長　藤内美保
研究科長　稲垣敦
事務局長　清末敬一朗
委員　犀川哲典（学外委員）、赤星琴美、市瀬孝道、梅野貴恵、小野美喜、甲斐倫明、影山隆之、桑野紀子、佐伯圭一郎、Gerald T. Shirley、高野政子、濱中良志、林猪都子、廣田真里、福田広美、吉村匠平

本教育研究審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行うことである。本年度は 11 回の教育研究審議会を開催し、各種委員会報告を行うと共に中期目標・中期計画に関する事項、学則の改正、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規定等について審議・承認した。各回の教育研究審議会の議事内容は理事会で報告された。

特記すべき審議事項として、第 1 回は、新型コロナウイルス感染拡大期における本学の授業対応方針、大学及び大学院の授業の一部を遠隔授業で実施することについて、大学施設内の学外者への立

ち入り自粛要請について、ホームカミングデイ中止について等、新型コロナウイルス関連の議題の他、アドミッションオフィス設置について、2022 年度改正カリキュラムにおけるトリメスターと長期休暇について等について審議した。第 2 回は、対面授業の段階的開始、ゾーニングの実施、総合看護学実習の時期の変更等、新型コロナウイルス感染に関する議題の他、科研費による学会年会費支払い、大学院の指導教員について等、第 3 回は、令和元事業年度の業務実績報告書、令和元年度決算、第 22 回看護国際フォーラムの Web 開催、教員評価の改定、理事長選考会議委員の選出について、第 4 回は、新型コロナウイルス感染のリスク低減のための各種証明書の申請の学生生活規程の一部改正、入試における新型コロナウイルス感染防止対応等について、第 5 回は、令和 2 年度授業料減免、新型コロナ感染リスク低減のための履修規程の一部改正、2020 年度臨床教授について等、第 6 回は本学大学大学院学則の一部改正及び大学院履修規程の一部改正について、COVID-19 感染拡大防止にかかる卒業研究発表会の方法等、第 7 回は、「2030 に向けた本学の課題」の収集と解決策の検討、本学大学大学院博士課程（後期）進学審査要領の一部改正、冬期休暇明けのオンライン授業及び基礎看護学実習の時期の変更、令和 2 年度卒業研究発表会の方法変更に伴う卒業研究優秀賞の選出方法等、第 8 回は、職員給与規程及び役員報酬規程の一部改正、理事長の選考等に関する規程及び理事長選考会議の委員に関する規程の改定、令和 2 年度中間決算の概要、令和 3 年度予算編成方針、大学院 NP コース地域枠の特別選抜の創設等、第 9 回は、令和 4 年度改正カリキュラムに向けた本学大学学則の一部改正、大学院広域看護学コースの定員について、情報ネット資産利用等、第 10 回は、令和 3 年度委員会等の構成員、「2030 に向けた本学の課題」の検討、第 11 回は、教員の昇任、カリキュラム改定に伴う大分県立看護科学大学学則の一部改正及び大学院学則の一部改正、各種委員会構成、独立行政法人評価に係る令和 3 年度計画案、令和 3 年度予算案、令和 2 年度進級判定、2030 に向けた本学の課題と解決策」の検討等を審議した。

令和 2 年度は、新型コロナ感染防止のためのオンライン授業を 4 月当初から開始したこともあり、1 年次生の留年生が多かったことが課題となった。新型コロナウイルス感染防止対策を厳重に行うとともに、学生の学ぶ権利の保証をして可能な限り対面授業を導入し、さらにより良い学習環境を整えていくことが必要である。

9-3-4　教授会

学長　村嶋幸代
学部長　藤内美保
事務局長　清末敬一朗
委員　稲垣敦、赤星琴美、市瀬孝道、稲垣敦、梅野貴恵、小野美喜、甲斐倫明、影山隆之、佐伯圭一郎、Gerald T. Shirley、高野政子、濱中良志、林猪都子、廣田真里、福田広美、安部眞佐子、石田佳代子、岩崎香子、小嶋光明、草野淳子、桑野紀子、定金香里、品川佳満、秦さと子、杉本圭子、関根剛、樋口幸、平野亙、宮内信治、森加苗愛、吉田成一、吉村匠平

本教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他の在籍に関す

る事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行うことである。

本年度は 4 回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定、および学生の表彰に関する事項について審議・承認した。今年度は開学初めて私費外国人留学生 1 名が入学することとなった。国家試験受験資格も得られ、看護師国家試験合格 100%も達成した。表彰においては、4 年次の表彰は、卒業式の日に学長賞 1 名、優秀賞 3 名、卒業研究優秀賞 6 名（COVID-19 の影響により卒業研究発表会の方法変更に伴い審査基準を本審議会で変更）、学生賞 2 名の計 12 名、在学生は、1 年次の実習が COVID-19 の影響によりできなかったこともあり基準を本審議会で変更し、新 2 年次生の表彰は 3 名、新 3 年生の表彰は 2 名が承認された。教育研究審議会で審議・承認された休学、復学、退学、進級判定についての事項は教授会で報告された。

令和 3 年度入学生は 81 名、卒業生は 81 名であり、今後も入学、卒業に関して量的、質的な観点から審議し、今後も優秀な学生の輩出に向けて努力する。

9-3-5　研究科委員会

学長　村嶋幸代
研究科長　稲垣敦
事務局長　清末敬一朗
委員　赤星琴美、安部眞佐子、石田佳代子、伊東朋子、市瀬孝道、岩崎香子、梅野貴恵、小嶋光明、小野美喜、甲斐倫明、影山隆之、川崎涼子、草野淳子、桑野紀子、佐伯圭一郎、定金香里、品川佳満、秦さと子、Gerald T. Shirley、杉本圭以子、関根剛、高野政子、藤内美保、濱中良志、平野亙、林猪都子、樋口幸、福田広美、宮内信治、森加苗愛、吉田成一、吉村匠平

本委員会は、大学院の教育課程の編成、学生の入学、修了等の在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行う。本年度も例年通り委員会を 5 回開催し、特別選抜と 2 回の入学試験の合否判定、進学判定、修了判定等について審議した。今年度は COVID-19 の影響があったが、審議事項の内容の機密性が高いため、対面で速やかに会議を開催した。また、委員が集まる機会が限られているため、委員会時に意見を求めた。

在宅勤務している教員もいるため、次年度は遠隔会議の可能性を検討する。

9-3-6　自己点検・評価委員会

委員長　佐伯圭一郎
副委員長　石田佳代子
委員　秋吉良継、稲垣敦、清末敬一朗、関根剛、藤内美保、松尾美沙、宮内信治、吉田成一

自己点検・評価委員会は、本学の教育研究水準の向上を図り、かつ本学の目的及び社会的使命を達

成するため、大学の自己点検・自己評価に関すること、内部質保証に関すること、年報の編集・発行に関すること、本学の中期目標・中期計画に関すること、および認証評価その他の第三者評価に関することを分掌している。

1）大学の中期目標・中期計画：2019 年度計画の実績報告を取りまとめた。2019 年度中に立てた令和 2 年度計画について、実績報告について各種委員会等からの資料収集を開始した。令和 3 年度計画について、各種委員会等の計画を取りまとめる作業を行った。2）年報の編集・発行：2019 年度年報を編集し公開した。今年度も編集作業が遅れて公開が 3 月にまでずれこんだ。この点に関しては、進行管理の徹底や原稿作成のためのひな形の更新などを検討し、従来のファイルで収集する方法でも円滑に編集が出来る見込となった。3）大学の外部認証評価：大学機関別認証評価の受審を 2022 年に控え、大学教育質保証・評価センターの説明会および研修会に委員長・副委員長ほか若干名が参加した。4)議事録の学内への公開状況および記載等を随時チェックして、整備を推進した。5)年度末に更新された新学外 web についてチェックを行い、広報・公開講座委員会にその結果を伝えた。

来年度に迫った外部認証評価の受審に向け、すでに受審した他大学の事例を検討するとともに、学内の自己点検・評価状態の再確認、大学ポートフォリオ作成の準備、特に学内全体の研修会などを実施する予定である。2020 年度年報については、速やかで円滑な完成を目指して、編集作業の進行管理を行う。

9-3-7　入試委員会

構成員は非公開としている。

入試委員会は、学部の入学者選抜を分掌し、令和 3 年度入学者選抜について大学入学共通テストの実施を含めて統括するとともに、入試関連の広報及び入学者選抜の方法について検討した。今年度より大学入試センター試験が大学入学共通テストに変更されたこと、本学の入学者選抜に変更がありこれについて周知を図る必要もあったこと、及び新型コロナウイルス感染症問題への対応の必要に迫られたことにより、広汎な情報収集・検討と対応が必要となった。すべての入試は、新型コロナウイルス感染症予防に配慮を要する点で依然として引き続き困難な状況の中で実施したが、感染予防のための全学的な取り組みによりトラブルなく終えることができた。

1）入試関連の広報活動

広報・公開講座委員会とも協力して、入学試験に関する広報活動を行った。業者主催の進学説明会は延べ 17 会場に参加し、高校生・保護者等延べ 325 名の相談を受けた。新型コロナウイルス感染症の影響で開催が例年より少なかったことから、本学独自に受験生と担当者が 1 対 1 の相談をするオンライン進学相談会（5 月 21 日～6 月 5 日）を企画し、大学ホームページ及び県内高校へのメールで広報した。メールで申し込んだ高校生 19 名と保護者 2 名がこれに参加し、担当者がシフトを組んで対応した。この相談は NHK テレビで紹介され、これを契機に高校での進学説明会の申し込みがあるなど、波及効果が認められた。利用した高校生から感想を収集したところおおむね好評であり、今

後は利用者を県外にまで広げることも考えられた。

県内高校の進路指導担当者等を対象とした進学説明会を、5 月 29 日に Zoom によるオンライン形式で開催し、23 校 34 名の教諭が参加した。本学でアドミッションオフィスを立ち上げたことと、入試の変更点について紹介し、全体質疑を行った後、希望者との個別質疑を行った。入試に関する質問の他、オープンキャンパス以外でも高校生が大学を訪問する機会の確保を求める声があった。オンライン形式での開催は初めてであったが、参加者数は例年よりやや多く、参加者から収集した声でも好評であったので、新型コロナウイルス感染症の状況にかかわらず今後も、この方法の継続を検討する価値があると判断された。

新型コロナウイルス感染症防止のため恒例のオープンキャンパスがウェブ開催となったことから、受験生が大学キャンパスを訪れる機会を確保するため、ミニオープンキャンパスとして高校 3 年生限定のキャンパス見学を募集した。高校生 49 名と保護者 20 名が来学し（8 月 17、18 日）、入試委員が学内を案内した。

2) 大学入学共通テストの実施

大学入学共通テスト（1 月 16、17 日）の本学会場では、大きなトラブルなく試験を実施した。この準備として公大協入学者選抜協議会(6 月 30 日オンライン開催)に入試委員が参加するとともに、文部科学省のガイドライン等に基づく感染症対策（試験会場環境・人員配置・受験生への対応等）について詳細な検討を行った。例年開催されてきた大学入試センター主催の入試担当者連絡協議会は資料送付のみ、全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会と大学入学者選抜・教務関連事項連絡協議会は中止となったので、参加しなかった。

3) 令和 3 年度入学者選抜

別項（2. 入学試験等　2.1 学部入試）に整理したとおり、令和 3 年度入学者選抜を実施した。志願者数は、学校推薦型選抜（前年度までの特別入試（推薦））では昨年度より 23 名の減少、一般選抜（前年度までの一般入試）前期日程では昨年度と増減なし、一般選抜後期日程では 74 名の減少であり、私費外国人留学生選抜に 1 名の志願者と合わせ、総計では昨年比で 96 名の減少であった。実施にあたっては、新型コロナウイルス感染症対策を綿密に検討するとともに、前年度までに検討した方法により、面接試験の得点化、および学校推薦型選抜にあっては受験生による主体的活動の書類の得点評価を入試に導入した。

新型コロナウイルス感染症対策としては、文部科学省のガイドライン等に加えて入館時の検温等を実施するとともに、感染等により受験できなかった受験生のために試験区分毎の追試験の方法を決めた。ただし実際に追試験の受験者は生じなかった。

今年度から、学校推薦型選抜及び一般選抜（前期日程・後期日程）では面接試験の得点化を導入し、前年度に続く検討と準備作業に基づいて実施した。このために面接者がタブレット端末から評価を入力するシステムを導入し、評価の標準化と省力化を図った。さらに学校推薦型選抜では、本学独自の方法を定めて受験生の「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」（主体的活動）に関する提出書類の得点評価を実施した（前年度の予定で利用するはずであった JAPAN e-Portfolio は使用できなくなったので、本学独自の方法で実施した)。

4) その他

これまでの出題と入試の実績との関係について分析し、また面接試験や主体的活動に関する書類の得点評価の実施結果と入試の実績との関係、及びこれらの実施方法について検討し、次年度以降の参考資料とした。さらに、ウェブを活用した出願システム及び主体的活動に関する得点評価システムの導入について検討を行い、次年度からの導入を目指した。

9-3-8　教育研究委員会

委員長　藤内美保
副委員長　濱中良志
委員　定金香里、品川佳満、杉本圭以子、樋口幸、森加苗愛、吉村匠平、清末敬一朗、原田千夏

本委員会は学部学生の教育を効果的かつ円滑に行うために教育関連の活動と教育予算の策定を行っている。本年度も例年通り、毎月（8 月除く）定例の委員会として 11 回の会議を開催した。

以下、本委員会の取組みを項目毎に記載する。

1. 2022 年度改定カリキュラム検討

各研究室から 1 名のカリキュラム検討タスクグループ（TG）により検討し、さらに本委員会で議論し、全学的に大幅なカリキュラム改定を行った。ディプロマポリシーを検討し評価可能な表現レベルとし、本学の教育目標と DP が合致していることも確認した。4 月に第 1 案、7 月に第 2 案、2 月と 3 月に最終段階の案として教育研究審議会で最終決定し、県を経て、4 月に文科省に申請する準備を整えた。カリキュラム改定の方針としては、現行カリキュラムの評価を踏まえ、主体的に学ぶ環境をとしてのカリキュラムで、単位数の見直し、選択科目の増加、また本学の特長である科学性や地域志向の科目は継続した。また統合科目の充実も維持するカリキュラム構築とした。

2. カリキュラムツリー・カリキュラムマップの作成

2022 年度新カリキュラムにおけるカリキュラムマップを、各科目に対応する新ディプロマポリシーについて各科目担当者からの回答を反映させ、作成した。カリキュラムツリー案を全教員に提示し意見を集めた後、数種類の案を作成し検討した。完成は来年度の予定である。

3. 新型コロナ感染予防対策における授業班の取組み

新年度の 4 月から、Zoom によるオンライン授業で学事歴通りに授業を開始することができた。その準備のため、学生への授業計画や新型コロナ感染対策のための方針決定、学生・教職員への通知、学年毎の使用講義室の決定や講義室の配席、学生の Wi-Fi 環境の確認、教科書や資料配布、受講する場合の注意点、演習や学内実習時の注意点などを学生、教職員に周知し徹底した。

6 月 1 日からは新型コロナの感染状況から対面授業を開始し、最大 2 学年の分散登校にするなど時間割の急遽の再編成を行った。後期科目についても分散登校、オンライン授業などに切り替えられるように時間割を再編成した。夏季休暇明けの 2 週間、冬期休暇明けの 2 週間はオンライン授業としたが、それ以外は年度末まで分散登校が可能であり円滑な授業運営ができた。

4. シラバス関連

シラバス入力後のチェックだけでなく、前年度シラバスをもとにした事前チェックも行うことで、シラバス作成の効率化を図った。また、昨年度に入力の不備等が多くみられた箇所については、シラバス入力マニュアルに記載例を増やすなどの対応を行った。

5. 入学前教育

大学入学前に必要な生物の学習範囲を具体的に提示、事前学習を実行するよう通知していた 2020 年度推薦入試入学者と、2018 年度推薦入学者の成績を比較した結果、生物関連科目で成績が上昇した科目と低下していた科目がみられた。一般入試入学者においても 2018 年度入学者よりも成績が低下していた科目があったことから、本年は成績にオンライン講義の影響があった可能性も考えられる。2021 年度推薦入学者にも本年度と同様の指示を出した。

6. 総合人間学

教職員から講師を募集し、8 名の外部講師とテーマを決定し、好評であった。会場の変更や Zoom を取り入れるなど感染予防対策を行い、全 10 回の講義を実施した。

7. 2 年次・4 年次に実施するカリキュラム・ディプロマ・アンケート

4 年次生は 1 月、2 年次生は 2 月末に実施しそれぞれ 90%以上の回収率であった。ディプロマポリシー及びカリキュラムポリシー到達度は前年とほぼ同様の結果であった。これに加え今年度は、12 月に 4 年次生にカリキュラムの重複についてアンケートを行い、各学年の科目数のバランスは良いが、1 年次のカリキュラムの過密感と講義内容の重複について意見を得た。これを参考にカリキュラム検討 TG で検討し改善することとなった。

8. 科目毎の成績分布

成績評価の分布について、5 月に 30 年度の科目別評価分布、12 月に前期科目の成績分布を学内に公表した。

9. 健康科学実験

順調に健康科学実験を実施できた。

10. 教育環境について

新型コロナ感染対策のため、講義室換気や加湿器、配席の決定、消毒薬設置と授業終了後の消毒実施、教卓前の透明シートの設置などを行った。またマルチルームやカレッジホールなどは対面とならないような机の配置とした。

11. 卒業研究

新型コロナ感染拡大の状況のなか、調査研究や実験研究数は若干減少したが、計画を変更しつつ卒業研究論文作成、オンラインよる卒業研究発表会を実施した。担当教員による卒業研究および原著講読のルーブリック評価を実施した。原著講読のルーブリック評価は今年度から開始し、学生は 4 月頃、中間、発表終了後の 3 回にわたり自己評価した。オンライン発表により 3 セッションで発表を行ったことに伴い卒業研究優秀賞の決定方法を変更し 6 名の優秀賞を選出することとした。例年と同等かそれ以上の卒業研究の到達度であったと考える。

12. 卒業研究発表会運営

Zoom によるオンライン方式での実施とした。1 日目は 3 つの分科会を同時に進行させ、2 日目は 1 日目に機器トラブル等で発表できなかった場合の予備日とした。また、要旨や卒業論文の提出は、

Google フォームを使って自宅などの学外から提出できるように整備した。

13. 学生表彰

卒業式に表彰する 4 年次生の学長賞 1 名、優秀賞 3 名（同点あり）、卒業研究優秀賞 6 名（今年度のみセッション毎に各 2 名）、学生賞 2 名（同点）の計 12 名を表彰した。

14. 再試験の受験申請および再試験手続の取り扱いについて

新型コロナ感染拡大防止のため、6 月に在学証明書など各種証明書などの発行を電子申請を可能とし、来学しなくても申請ができ学生の利便性の向上と事務の簡易化を図り、規程の改正を行った。また 9 月から再試験の手続きも簡易化し、学生が担当教員研究室まで出向かず事務局で窓口を一本化することで学生の利便性向上や新型コロナの感染防止対策を図った。

今年度の課題と次年度の取組

令和 2 年 3 月に県内で新型コロナウイルスのクラスターが発生し、4 月からの授業体制整備を急遽行い、授業運営、修正、学生及び教職員への周知を繰り返し、試行錯誤で取り組んだものの、オンライン授業も大きなトラブルもなく、学事歴を変更することもなく、順調に運営できた。次年度も新型コロナの感染情報に注意しながら、スムーズな授業運営が推進できるようする。

また、2022 年度改正カリキュラムに向けて、全学的にカリキュラム改正に取り組み、新たなディプロマポリシー及び新カリキュラムが決定した。今後、カリキュラムマップやカリキュラムツリーの完成を進めるとともに、新カリキュラムの具体的な運営のための準備を行う。

9-3-8　1)　養護教諭養成部門

部門長　吉村匠平

委員　赤星琴美、秋本慶子、小野治子、草野淳子、佐伯圭一郎、坂本晴生、関根剛

養護教諭養成課程の運営を担当した。履修カルテの作成、図書整備（学術誌、雑誌、図書）、新入学生全員を対象としたガイダンス、オープンキャンパスでの高校生（保護者）対象の相談会、非常勤講師の時間割（教科書）調整及び遠隔講義の実施に関する対応、実習校選定業務（大分市教育委員会と連携）、実習校の巡回指導（養護実習Ⅰ、Ⅱ）、養護実習Ⅰ履修者選考（22 名中 18 名に履修許可）、大学パンフレットへの関連情報の掲載、大分県内者（大分市の学生を除く）対象の母校実習（中津市 1 校、日田市 3 校、別府市 1 校、佐伯市 1 校で実施）、大分県採用試験のガイダンス（5 月、12 月）の開催、教員採用試験二次対策講座（実技、場面指導）、教員採用試験一次対策の遠隔配信での実施、採用試験終了後の就職支援、教員免許の一括申請、教職課程の再課程認定に伴う教員の事後調査対応である。

平成 29 年度入学生（養教課程第 3 期生、1 名は平成 28 年度入学生）は、16 名が養護教諭一種の免許状を取得した。教員採用試験の受験者は 7 名、1 次試験合格者はのべ 5 名（大分県 2 名、京都府 1 名、福井県 1 名、島根県 1 名）、最終合格者はいなかった。16 名の進路は、大分県内私立高校養護教諭 1 名（正規）、大分県非常勤講師 2 名、島根県非常勤講師 1 名、大学院等進学 2 名、医療機

関就職者 10 名。教員就職率は、28.5%、教員として勤務する卒業生の大分県内就職率は 75.0%だった。

養護実習に関しては、大分市教育委員会、中津市教育委員会、日田市教育委員会、佐伯市教育委員会、別府市教育委員会、実習校との連携の下、順調に進めることができた。九重町での養護実習の実施に向けた九重町教育委員会との協議は感染症の拡大に伴い、先送りとなっている。

令和 3 年度の課題は、養護実習 I を近隣校での学校ボランティアの形で実施するための事前調査、関係機関との連携である。

9-3-8　2)　実習運営小委員会

委員長　森加苗愛

委員　足立綾、石丸智子、後藤成人、佐藤愛、中釜英里佳、永松いずみ、姫野綾、丸山加菜、山田貴子、稗田朋子

本委員会は学生の実習に関わる教育を効果的かつ円滑に行うため、演習の運営や実習環境の調整を担う委員会である。本年度の会議は、COVID-19 の影響から演習はオンライン(一部ロールプレイ)にて開催した。毎月（8 月除く）の定例委員会を計 11 回および臨時会議を 2 回開催した。本委員会の主な役割は以下 8 点であり、今年度の活動内容を述べる。

1. 看護技術修得プログラムの運営

1 年次から 4 年次までを通じ、学生が段階的に看護実践力を修得できるよう、看護技術修得プログラムを企画・運営・評価した。今年度は COVID-19 の影響でプログラムはオンラインで実施した。昨年度、すべての段階の演習内容を見直し、学生が効果的に学ぶことができ、かつ教員の教育活動を考慮し検討を行ったが、今年度はオンラインで開催することから、内容は変更せずに現状の企画内容に従いオンラインで効果的に開催できる方法を検討した。

第 2 段階看護技術演習（3 年次前期）および第 1 段階看護技術演習（2 年次後期）では、学生が実技演習前に主体的に準備し学ぶことができるようワークノートを準備し、技術の根拠や手順を自ら思考してグループで検討できるようにした。評価は 3～4 人でグループを組み、グループ評価とした。学生の取り組みの状況は良く、概ね目標に到達できたと考える。

第 1 段階看護技術演習は、他の演習との開催時期の検討から今年度に限り 2 年次前期に変更となったが、2 段階同様にオンラインで開催し、トラブルなく実施できた。より効果的なオンラインを活用しての演習方法など今後の課題としたい。

第 3 段階看護技術演習（4 年次前期）では、学生が主体的・計画的に学習する環境の提供として e ラーニングを行い、知識の習得やレポートを通して看護技術の習得を目指すことができた。

今後は、より効果的なオンラインでの演習方法などの検討も必要である。対面での演習が可能となれば昨年度見直した内容について更に評価を重ねていく。2022 年度のカリキュラムに向けてより効果的な演習内容について検討していく。

2．スキルアップ演習の運営

看護スキルアップ演習（4 年次後期）の内容を洗練させ 5 事例にして取り組んだ。本演習は看護基礎教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を統合し、アセスメント能力および看護技術実践能力を養うことをねらいとしている。今年度はオンラインで実施（一部ロールプレイ）したが、学生の学びと教職員の指導が円滑に展開されるよう準備・調整・展開した。

実施後の学生からのアンケートでは、ディスカッションの充実や教員からの多くの講評を求める声があげられ、開催方法を更に検討していく。また、今後はより効果的なオンラインでの演習方法の検討も必要である。

3．実習関連マニュアルの内容検討および整備

1）看護技術習得確認シート

今年度は COVID-19 の影響により看護技術習得確認シートも困難であったため、新カリキュラム導入後に検討していた Google フォームでの回答方法を移行期として導入し、2020 年度の 4 年次生の卒業時看護技術確認アンケートを実施した(2021 年 1 月実施、回収人数 74 名／81 名中　回収率 91%)。

卒業時までに全員が単独で実施できることが望ましい技術項目：22 項目のうち、8 割以上の学生が「単独で実施できる」と自己評価した項目数は、7 項目（【快適な療養環境の整備】【車椅子での移送】【清拭】【整容】【バイタルサイン】【必要な防護用具の選択・着脱】【スタンダード・プリコーションに基づく手洗い】）であった。残り 15 項目（【食事介助】【排泄援助】【体位変換・保持】【歩行・移動介助】【口腔ケア】【洗髪】【陰部の保清】【点滴・ドレーン等を留置していない患者の寝衣交換】【足浴・手浴】【体温調節の援助】【身体計測】【感染性廃棄物の取り扱い】【使用した器具の感染防止の取扱い】【安全な療養環境の整備】【患者の誤認防止策の実施】）は 8 割未満であった。この 15 項目は「単独で実施できる」と自己評価した割合が昨年度と比較して低かった。

その要因としては、コロナの影響で最終学年である 4 年次生の臨地実習がオンラインの学内実習へ変更になったり、臨地実習ができても患者との接触時間や回数などが必要最小限に制限されたことにより、看護技術を経験できる機会が少なくなったことで自己評価が低くなったと考えられる。また、4 年次生で経験できなかった項目は、3 年次生の臨地実習における自己評価となるため、評価が低くなったと考えられる。1、2 で述べたようにオンラインまた対面式両者の演習方法の工夫について検討していく。

2）実習マニュアル

来年度、実習指導指針の増刷と共に内容を見直し両者のダブっている部分を合させていくことになった。また、実習中の感染症の疑いのある際の受診における基本姿勢、南大分キャンパスの運営方法について等、実習マニュアルに追記すべく項目を検討した。来年度内容の確認と実習指導指針との統合作業を行っていく。

4．南大分キャンパス管理および各実習施設の環境整備

1）南大分キャンパス

実習中のより良い環境を目指し、本キャンパスは実習痛は朝 7 時から 9 時の間は解錠することとなり、サイボウズからリモート解錠依頼できるようシステムを整えた。また、管理のために教員室と

図書館、2 階倉庫に施錠することとした。感染予防対策のために消毒薬の設置も行った。

サイボウズの解錠システムは整えたが、県立病院での実習が中止となっているため、次年度実習が再開となったら試行し、問題等ないか確認を行っていく。

2）その他実習施設環境整備

学生が効果的に看護実践に関する学習ができるように、臨地実習における環境整備を行った。感染予防対策から、実習施設には消毒液を整備した。また、その他感染予防で必要な物品など適宜準備した。

5. 実習関連予算管理

必要に応じて担当者が経費を申請し対応した。今年は感染予防対策物品の支出が大きかった。次年度以降、実習室ベッドの計画的買い替えなど予定しているため、各研究室の委員と連携のもと、計画的に支出できるようにしていく。

6. 実習関連フォルダの管理

今年度は、学生の実習記録の保管における注意事項として、Google ドライブの活用上の注意について検討してきた。今年は大いにオンラインが活用されたため Google ドライブが効果的に活用された。来年度はその評価を行っていく必要がある。

7. 実習服、ファイル等の注文・管理

実習服、ファイルや必要物品の注文・管理を担当者が行ってきた。今年度も学生の演習や実習で必要な物を検討して備え、管理していく。

8. 看護技術演習　将来構想検討

2022 年のカリキュラム改正に向けて、本委員会が担当する看護技術演習やスキルアップ演習の運営の目的・目標や運営方法のあり方を検討してきた。新カリキュラムでは 2 年次後期に『基礎看護援助技術演習（選択科目）』、3 年次前期に『臨床看護援助技術演習（必須科目）』、4 年次前半に『応用看護援助技術演習（選択科目）』を設定した。『基礎看護援助技術演習（選択科目）』、『応用看護援助技術演習（選択科目）』では、自己で技術の習得状況を把握して主体的に繰り返し学べるようにナーシングスキルを活用した e ラーニングを活用する。『臨床看護援助技術演習（必須科目）』では、実習前の看護技術確認のために技術演習を行うカリキュラムとした。

e ラーニングは看護技術習得確認シートを効果的にリンクさせ、看護技術修得の適切な評価にもつなげられるように内容を検討した。来年度も引き続き検討を行っていく。

以上の活動をふまえ、次年度も今後の課題に対する検討を重ねながらより良い演習の運営や実習環境の整備を行っていく。

9-3-8　3)　国家試験対策小委員会

委員長　杉本圭以子
委員　定金香里、佐藤愛、永松いずみ、原田千夏、山田貴子

年間9回の模試を計画し学生委員の協力を得て実施した。新型コロナウイルス感染症予防のため、登校できない時期は模試を自宅に郵送し、大学で模試を配布・受験する際には講義室を複数確保するなど配慮した。模試返却後は、成績低迷者に対して個別対応を行った。一方で、本試験の結果と模試の結果から全国に比べ本学の正答率が低い問題の一覧表を作成し全教員に周知した。7月に外部講師による「傾向と対策セミナー」をオンラインで実施し、9月より毎月過去問題をGoogleフォームで全学年の学生に配信することで国試対策への動機づけを高めた。7月に問題演習と学内模試、12月に必修問題と状況設定問題対策のセミナーを実施した。業者が提供する国試問題の傾向、本学の本試験結果から見る特徴などを情報収集し対策に活かした。合格率は、全国の90.4%に対し、本学は100%であった。

次年度の課題は、感染症予防を行いつつ効果的な国試対策の学習ができるよう情報提供と学習環境を整えることである。

9-3-8　4)　進級試験ワーキンググループ

リーダー　草野淳子
メンバー　濱中良志、佐伯圭一郎、佐藤栄治、谷村優香

進級試験WGの役割は、進級試験問題作成と、学生への周知、進級試験の実施を行うことである。6月9日（火）に2年生を対象に進級試験の目的、概要、出題範囲の説明を行った。7月末に教員へ本試験・再試験の進級試験問題の作成を依頼した。その後、WG内で問題の検討、推敲を行った。

令和3年2月26日に2年次生を対象に進級本試験を行い、合格率は49.4%であった。再試験は3月4日に行い、合格率は97.3%であった。

次年度も教員に問題作成を依頼する。

9-3-9　研究科教育研究委員会

委員長　稲垣敦
副委員長　福田広美
委員　赤星琴美、梅野貴恵、小野美喜、影山隆之、神崎正太
オブザーバー　村嶋幸代

本委員会の任務は、大学院研究科の運営に関する事項について審議することである。本年度は委員

会を 12 回開催した。入試の結果は、第 2 章に記載した。

今年度、本委員会で審議し、新設及び変更したのは以下の事柄である：(1)進学審査と修士論文の審査を兼ねる、(2)Zoom による講義の開始、(3)次年度以降の NP コースにおける Zoom の推進、(4)FS/SD 委員会の作成した大学院授業アンケートの開始、(5)大学院説明会を Zoom で開催、(6)NP コースの特別選抜制度を新設、(7)修士論文及び博士論文審査会を Zoom で実施、(8)研究レビュー報告会、研究計画報告会、研究中間報告会、研究成果報告会を Zoom で実施、(9)学生募集要項を紙媒体から電子化、(10)次年度から 8 月の入試を平日に実施、(11)他の大学院で修得した単位の認定及び修了要件に関する大学院学則の変更、(12)大学院生の研究費取扱要領の変更（使用項目の拡大）、(13)文部科学省の COVID-19 のガイドラインに基づいた入試の実施、(14)院生の複合機の使用をポイント制として上限を設定、(15)次年度より非常勤講師の妥当性をチェック、(16)指定規則の改正に伴う保健師及び助産師教育のカリキュラム及び大学院学則の変更、(17)広域看護学コースの募集人数の増員、(18)次年度より NP コースを昼夜開講として週 3 日の開講を目指す、(19)18 時以降の事務局対応、(20)学生便覧の内容の変更、(21)次年度から履修登録を電子化、(22)次年度からの課題研究の指導教員に関するルールの変更。

その他、次のようなルーティンな業務を行った：(1)入学式の準備、運営、(2)休学、復学、長期履修、退学について、(3)指導教員の変更、(4)大学院生の困りごとの随時相談、(5)退学希望者と面談、(6)大学院生の TA 雇用、(7)大学院研究費及び大学院研究室の消耗品の購入の検収、(8)NP コースの進級判定、(9)在学生の履修状況の確認、(10)特待生授業料免除希望者について、(11)大学院生オリエンテーション、(12)日本学術振興会の有志賞受賞候補者について、(13)特別選抜の募集要項の作成、配付、事前相談、問題作成、準備、設営、試験監督、採点、集計、合否判定案作成。(14) NP コースの基礎学力試験の結果の確認、(15)新入生の既習得単位の確認、(16)長期履修申請の確認、(17)キャリアガイダンスにおける大学院進学について説明。(18)指導教員の確認と未決定の学生との面談、(19)日本学生支援機構大学院奨学金推薦について、(20)大学院説明会の企画、準備、運営、(21)博士課程後期への進学審査の募集要項の作成、配付、事前相談、問題作成、準備、設営、試験監督、採点、集計、合否判定案作成、(22)入学試験の募集要項の作成、郵送、事前相談、問題作成、準備、設営、試験監督、採点、集計、合否判定案作成、(23)研究中間報告会、研究計画報告会、論文レビュー報告会、研究成果報告会の企画、運営、 (24)年間スケジュールの検討、(25)大学院特待生入学料免除について、(26)大学院入試の過去問題と解答例の配付、(27)学生便覧とシラバスの編集、(28)二次募集の募集要項の作成、配付、事前相談、問題作成、準備、設営、試験監督、採点、集計、合否判定案作成。(29)日本学生支援機構大学院第一種奨学金返還免除候補者選考について。(30)大学院生と語る会の企画、運営、 (31)修士論文と博士論文の審査員の決定、(32)大学院研究生の募集要項の作成、配布、(33)年度目標の実施状況の確認、次年度の目標と予算案の作成、(34)特待生授業料免除について、(35)修了要件の確認と修了判定案の作成、(36)修了式・学位授与式の準備と運営、(37)教育や研究環境に関する調査の実施。

次年度は、カリキュラムの変更、NP コースの特別選抜の開始と昼夜開講、広域看護学コースの募集人数増等、新しい事業が控えており、これらを慎重に進めてゆくとともに、院生や教員の意見を取り入れて教育・研究環境の改善に務める。また、他の委員会と連携して、COVID-19 に対応してゆく。

9-3-10　看護学実習委員会

委員長　赤星琴美
委員　梅野貴恵、小野美喜、影山隆之、桑野紀子、、高野政子、藤内美保、林猪都子、廣田真里、
　　福田広美、佐藤英

本年度の会議は、毎月（8 月除く）の定例委員会 11 回及び臨時委員会 2 回の計 13 回を開催した。全段階の学部実習に関することでは、令和 4 年度からの改正カリキュラムにむけて実習目的・目標、単位数を検討した。従来 6 段階に分けていたが、見学のみになりがちだった初期段階実習を廃止し、5 段階に変更した。各々の実習に、「実習としてのパフォーマンス」を求め、効果を高めるように配慮した。また、令和 2 年度の総合看護学実習の実習施設を 2 施設追加した。担当教員-専任教員型の実習から全教員担当教員型の実習へ移行した。
教員配置の方針および臨時助手の実習配置の方針内容に項目を追加した。新型コロナウイルス感染症を踏まえた看護学実習における「大学の方針」及び「実習停止の考え方」を決定し、実習停止判断フロー図を作成した。
また、県立病院で実施している実習指導者短期教育プログラム、実習指導者・大学教員交流会は中止した。

9-3-11　学生生活支援委員会

委員長　林猪都子
副委員長　宮内信治
委員　関根剛、岩崎香子、堀裕子、田中佳子、後藤成人、坂本晴生、今村知子

学生の大学生活を充実させるための環境整備をする、学生に必要とされるサポートをタイムリーに提供することを目標に下記の活動を展開している。
今年度は新型コロナウイルス感染予防対策として、学生への注意喚起や支援について検討し、下記の文書またはメールを学生、教職員に提示した。

4 月 8 日　：新型コロナウイルス感染に対する授業・学生生活について
4 月 28 日：新型コロナウイルス感染対策における学生の心の支援
　　皆さんの「こころの健康」を維持する為に（リーフレット）
　　教員の皆さんへ 外出自粛・自宅学習が続く学生に対するメンタルケアについて
5 月 29 日：新型コロナウイルス感染防止を踏まえた授業・学生生活について
　　各学年生活ゾーンの設定
7 月 17 日：新型コロナウイルスに伴う夏休み期間の生活について

9 月 9 日：新型コロナウイルス「感染者」および「濃厚接触者」への支援
新型コロナウイルス感染者・濃厚接触者情報シート
10 月 1 日：新型コロナウイルス感染防止を踏まえた授業・学生生活について
12 月 23 日：新型コロナウイルスに伴う冬休み期間の生活について
1 月 18 日：対面講義開始における学生の学内での過ごし方について
2 月 10 日：新型コロナウイルス感染に関する連絡経路

学生関連イベントについては、全学生・新入生オリエンテーションは、新型コロナウイルス感染に関するオリエンテーション内容を中心に各学年で Zoom にて実施した。、コンタクトグループ、キャンパスクリーンデー、若葉祭は中止した。DV 講演会はネットによる視聴に変更した。

学生相談は、各学年担任を中心に学生相談業務を行った。内容は相談（ハラスメント相談窓口）、学習相談（単位取得、進級に関するもの、成績不振者に面接、1 年次の入学直後に既習科目・状況調査、前期前半終了時に学習状況調査を実施）、休退学・復学相談と面談（保護者面談を含む）、過年度、休学中の学生支援などを行った。1 年次生に対する学習相談は、学生のポータルサイトに掲載した面談カードを用いて相談・支援を実施した。また、対面授業が 5 月末まで休止されていたことから、自己紹介カードを作成させ、指定した学習グループ内で相互協力ができるような体制とした。相談件数の多い事例に対しては、担任からの学年だよりの中に掲載し、全員が情報共有できるような支援を行った。

学生の自主活動への支援としてサークルは活動自粛とした。自治会活動支援として学生大会はインターネットを利用した学生大会を実施し支援した。

経済支援は、奨学金による経済支援（日本学生支援機構の奨学金支給など）、奨学金情報の収集、周知活動などを行った。今年度はコロナ禍による学生支援緊急給付金の募集があり、学生を推薦した。HP に奨学金情報を整理して掲載した。

健康支援は、学生の健康管理支援（集団健康診断、風疹抗体検査（3 年次生一部）、個別相談）、学生の保険関係の支援（加入手続き事務、退学・休学者の返還・追加、事故・疾病による入院、退院の補償請求に関する支援など）について保健室看護師を中心に行った。保健室の学生相談件数は 804 件で、そのうちメンタルヘルスによる学生相談件数は 96 件であり、メンタルヘルス事例に対応した学生支援として、コンサルテーションをカウンセラーからは年 26 件（今年度新規 5 件）実施した。

交通安全の推進については、交通安全指導である自動車講習会は中止した。通学許可面接（通学許可交付面接、交通事故対応の指導）は Zoom にて実施した。学生が被害・加害者となった場合の交通事故対応、駐車場管理（許可シールの交付、無許可利用者・違反者への対応）などを行った。今年度はコロナ禍のため 1 年次生に 6 月から自動車通学の許可を実施した。

学生生活に関する調査については、学生生活実態調査（質問紙作成、実施、集計、報告書の作成、公開）についてグーグルフォームにて実施した。学生生活実態調査の自由コメントについては各部署、担当委員会ごとに整理し、それぞれに対応について各委員会に記載を依頼した。また、犯罪被害やアカハラ・セクハラ被害に遭遇した時の相談窓口を学生に周知することとした。

その他、九州地区学生指導研究集会、九州地区公立学生部長会議は担当校による現地での会議は中止されて文書にて意見交換した。

今後の課題

新型コロナウイルス感染防止を踏まえた対策は 1 年経過したが、新型コロナウイルス感染対策は今後も継続して必要である。大分県における新型コロナウイルス感染の状況に応じて、大学生に向けた生活対策を継続して支援する。また感染状況は長期化しているので、学生への精神的な対策も継続して実施する。

また、コロナ禍において学生関連イベントを中止し、学生の自主活動は自粛とした。新型コロナウイルス感染の状況を見ながら、学生関連イベントや学生自主活動を再開していくための支援が必要である。

9-3-12　就職・進路支援委員会

委員長　福田広美
副委員長　樋口幸
委員　足立綾、大嶋佐智子、小川三代子、神崎正太、木嶋彩乃、清末敬一郎、竹中愛子

就職支援委員会は、学部生の就職・進学に関わることや就職広報及び就職後のフォローアップ、U ターン支援に関することを主たる分掌事項としている。学生の就職･進学の円滑化と県内就職率 50%を目指して、就職・進学活動を支援し、年間計画を COVID-19 感染防止対応に変更し、下記に示す 1)～4)の活動を行った。本年度の県内就職率は、48.5%（2021 年 3 月 31 日現在）となった。今後は、コロナ禍においても県内就職率を高めるため、オンラインによるガイダンスの開催を行い、県内施設に就業している卒業生の招聘および、在学生との交流の機会を設ける。また、県内施設に就業する卒業生の情報を得て、県内就職の魅力を在学生に伝える。大分県医療政策課や大分県看護協会と連携を取りながら、県内就職説明会等の情報を学生に提供していく。

1) 学生の就職・進路状況の確認と支援：卒業生 81 名であり、3 月 31 日現在、就職決定者名（看護師 68 名）、進学者 11 名（保健師 6 名、助産師 5 名）であった。4 年次生に対しては各委員が分担して、学生への個別支援を行い、メールや面談で対応を行った。また、就職面接試験に備えて模擬面接を 6 回、進学面接試験に備えた模擬面接を 1 回、希望する学生を対象に実施した。推薦を実施している施設の情報を入手し、4 年次生にメールで周知、希望者を募り委員会で選考した。3 年生に対しては、就職支援相談員による 3 年生全員を対象とした進路面接を実施、学生の就職や進学に関する相談に対応した。

2) 看護職キャリアガイダンスの開催：3 年次生対象に看護職キャリアガイダンスを 2020 年 7 月 15 日（水）と 2021 年 2 月 17 日（水）にオンラインで開催した。7 月のガイダンスは、第 4 段階の看護学実習前に、自らの進路を考える機会となるよう、就職や進学の進路選択について説明を行い、県内に就職している卒業生が自らの進路選択や看護職としての活動を 3 年次生に伝えた。アンケート

の結果、9 割以上の学生が、ガイダンスによって自らの進路を考え、今後の活動に対する動機づけとなった。2 月のガイダンスは、就職や進学の際に必要となる履歴書の書き方・面接について具体的な対策を行えるよう説明を行った。4 年生 2 名を招聘し、就職活動の経験について発表を依頼し、3 年次生が具体的な手続きや進め方について理解を深めた。また、本学の就職相談室の利用や各都道府県のナースセンター担当者による就職相談の紹介を行い、今後の就職活動に際し有料の転職サイトの利用をしないこと等、留意点を伝えた。本年度から、2 年次生を対象に看護職キャリアガイダンスを行った。2021 年 2 月 26 日（金）に進路選択の説明を実施し、学生が自らの進路を考え始める機会となった。3 年次生になる直前の時期であり、進路を考え始めるうえでガイダンスを行う時期としては適切だと考えられた。今後も、３年次生の 7 月、2 月、2 年次生の 2 月にガイダンスを行う。

3）県内施設就職情報の提供：県内施設に就職情報および卒業生メッセージに関する依頼を行い、県内施設に就職している卒業生の活動の様子を写真やメッセージとともに依頼した。学生がキャンパス内で利用しやすい食堂の一角に情報コーナーを設置し、パネルに掲示を行うなど利用しやすい環境を整えた。

4）県内施設就職者への対応・卒業生の県内Ｕターン支援：県内施設に就職している卒業生の活動状況を各施設から情報を得て把握した。卒業生の就業状況から継続して対応が必要な場合は、施設や卒業生と連絡を重ねて行いサポートを行った。また、県内施設で活躍する卒業生の情報も得られ、看護職キャリアガイダンス等で学部学生を対象に情報提供の協力をもとめた。大分県内の求人情報については、卒業生にもメールで情報提供を行った。今後も引き続き、県内施設に就職している卒業生の対応を行い、必要に応じてサポートを行う。

9-3-13　FD/SD 委員会

委員長　梅野貴恵
副委員長　関根剛
委員　安部眞佐子、中釜英里佳、永松いずみ、稗田朋子、久保紘子、矢部美香

FD/SD 委員会は、教職員の能力開発、教育/研究内容及び教育方法の改善、組織間の連携を推進することを目的に、平成 30 年度から新設され 3 年目の委員会である。主とする分掌は、①FD/SD のための各種研修会の実施、②授業評価の実施及び授業内容・方法の改善及び向上、③教員の教育、研究などに関する資質向上である。令和 2 年度の本委員会の活動内容は、以下の 1)～8)である。
1)FD/SD 研修：今年度は新任教職員研修（一部 Zoom）を実施し、科学研究費説明会・研修会、教育に関する研修会（「Zoom を利用した講義・演習」鈴木雄清氏）、学生理解に関する研修会（「特別な配慮を要する学生・職員への対応の実施について（動画と資料）」、「入学生の現状につながる背景分析」小林弘典氏）、人権に関する研修会（「りんごの色～LGBT を知っていますか？～（動画）」）、看護教育支援システムの研修会は、COVID-19 の影響で Zoom やオンライン動画の視聴を中心とした

研修を実施した。

科学研究費説明会については、申請事務担当者 1 名と今年度の採択者 2 名を講師とした具体的な計画書の工夫を中心に企画した。今年度は、COVID-19 感染拡大防止の為、大分県自治人材育成センター県職員研修の派遣は行わなかった。

また、事務職員育成のための SD 研修の一環として、大学職員としての意識改革、自己啓発となるようプロパー職員 1 名を大分県福祉保健部へ研修派遣中である（令和 2 年 7 月 1 日～令和 4 年 3 月 31 日）。

2)学内競争的研究費の活用促進として、4 月 16 日にメールにて学内競争的研究費の募集を行い、奨励研究 2 件、先端研究 3 件、プロジェクト研究 0 件の新規応募があった。5 月 13 日に FD/SD 委員会主催の審査会（審査員 7 名：FDSD 委員会から 3 名、教育研究審議会メンバーから 3 名、担当理事 1 名）で審査し、審査結果により助成額を決定した。平成 31 年度に採択された 2 年目の研究課題と合わせて、令和 2 年度は、奨励研究 4 件、先端研究 4 件への助成を行った。これらの研究成果（進捗状況）は、3 月 9 日のアニュアルミーティングで報告された。

3)科学研究費助成金申請の促進を行うために、全教職員対象に上記 1)のとおり研修会を実施した。5 月 29 日に新任教員のために、申請にあたり情報提供を行った。申請書のピアレビューは、申請 34 件のうち 15 件であった。

4)国内/海外派遣研修の促進のために、参加期間の要件等を緩和した上で、4 月 7 日から計募集を行ったが、参加希望がなかった。COVID-19 の影響もあるため、2 月にオンライン研修も含むこととし、3 月に 1 件申し込みがあった。

5)授業評価は、実習科目も含み Web による方法で、1 年次生 35 科目、2 年次生 39 科目、3 年次生 31 科目、4 年次生 5 科目の全 110 科目（のべ 121 回）で、実施率は 86.7%であった。コロナ禍で実習時期が不定となり実施ができない科目があった。後期科目の回答率が低い（10-40%程度）ので、次年度の検討課題である。回収後は、担当教員に結果の通知を実施し、科目ごとの回答数と平均値一覧を Web にアップした。大学院科目の授業評価は学部アンケートの項目を用いた実施を研究科教育研究委員会で検討し実施することとなり、Google フォームを用いた web アンケートの実施を単位認定者に依頼した。授業アンケートの実施は 46 科目（全 112 科目中）であった。

6)アニュアルミーティングは、令和 3 年 3 月 9 日に新型コロナウイルス感染拡大対策として Zoom を用いて、2 グループ制で発表者ごとのブレイクアウトルームで質疑応答を実施する開催とし、教職員 50 名が参加した。学内競争的研究費の応募者による発表 8 題、一般演題 8 題が、ポスターやパワーポイントを用いて発表された。発表の要旨集は、冊子体にして図書館に保管した。

7)平成 30 年から開始された大分県内大学等 FD･SD 合同フォーラム担当者会議がオンラインで 2 回開催され委員長が参加した。3 月 16 日に大分大学が担当し開催された Zoom による第 3 回大分合同 FD・SD フォーラム「新型コロナウイルス感染症流行下における高等教育の質の担保」に「本学の教育実施状況の経緯と臨地実習に代わる学内実習等実践報告」を委員長と基礎看護学教授が事例報告した。学長ほか教員複数人が参加した。

8)学内全教員へ他機関からの FD に関する情報提供を 31 回行った。

9)アクティブラーニング実施用の機材（パソコン、プロジェクター、拡声器など）の使用マニュアルを作成した。

今後の課題

今年度の学部の授業評価は、web アンケートを実施した。前期の回答率は高かったが、徐々に低下した。次年度の web アンケートの回答率をあげる工夫を検討することとした。大学院科目の授業評価の実施率は 40%程度であったことから、実施率を促進する方法を検討する予定である。

COVID-19 の影響で、海外や国内での研修の機会がなかったことから国内／海外派遣研修は希望者が少ないため、2 月にオンライン研修も募集条件に加えた。次年度は変更点を周知して研修参加を促進することとした。

9-3-14　研究倫理・安全委員会

委員長　市瀬孝道
副委員長　平野亙
委員　岩崎香子、草野淳子、石田佳代子、杉本圭以子
外部委員　二宮孝富、西英久
事務局　松尾美沙

研究倫理・安全委員会は今年度 12 回開催した。例年 1 月に委員会は開催しないが、令和 2 年度は臨時の委員会を開催した。各月ごとに教員と大学院生から申請された研究計画書の審査を行った。今年度の申請件数は 116 件、欠番 7 件、審査計画書数は 109 件で、そのうち 91 件が承認された。

昨年度に比べると申請件数はほぼ同じで、C 判定は 18 件あり、昨年より 2 件少なかった。今年度も大学院生の申請資料の不備が目立ち、未だに不採択者が多く、指導教員とのコミュニケイションがよく取れていないのと、研究計画書の申請に関する手引きをよく読んでいないためであると考えられた。今後も指導教員に大学院生が申請した計画書には必ず目を通すように、また申請の手引きを活用するように随時アナウンスするようにして、採択率の向上を図る必要がある。

研究倫理教育に関してはこれまでの日本学術振興会の e ラーニング（eL CoRE）と並行して、今年度は日本公正推進協会の e ラーニング APRIN を導入し、教職員全員が受講するように年度計画を立てた。APRIN 登録者数は 156 名、そのうち 119 名が APRIN を修了したが、教員 2 名、大学院生 35 名が未修了であった。しかしながら eL CoRE に関しては既に修了しており、e ラーニングの完全達成が実施できた。来年度は研究倫理・安全委員会への研究計画書の提出の際に APRIN の修了証明を添付することを義務付け、登録者全員が APRIN を修了するように計画している。

今年度は規程類の見直しは行わなかったが、大学院生が外部機関の研究倫理委員会において研究計画の審査を受けた場合にその承認通知を本学の研究倫理・安全委員会に必ず提出すること、また、外部機関で審査を受ける場合であっても事前に本学の委員会において研究計画書の審査を受けることを義務付けることとし、研究計画書の申請に関する手引きにこれらを追加記載した。

9-3-14　1) 動物実験小委員会

委員長　市瀬孝道
委員　岩崎香子、小嶋光明、定金香里、影山隆之、松尾美沙（事務局）

令和 2 年度動物小委員会は 12 回開催した。動物実験研究計画書 26 件の審査を行い、新規審査件数 19 件 ; 変更・追加件数 7 件)であり、26 件が学長によって承認された。令和 2 年度では計画に沿った動物実験が 12 件実施（1 件は不実施）され、使用動物匹数はマウスが 800 匹（市瀬 507 匹、定金 51 匹、吉田 64 匹、恵谷 103 匹、辻 25 匹、森 50 匹）、ラットが 31 匹（岩崎 25 匹、市瀬 4 匹、定金 2 匹）で、総使用匹数は 831 匹であった。前年度の総使用匹数 984 匹に比べて今年度は 16%減少した。これらの使用された動物のそれぞれの実験おける「自己点検・自己評価」を実施すると共に、動物実験実施報告書を作成し令和 3 年 4 月 22 日学長に報告した。前年度（令和元年度）使用動物の慰霊祭は新型コロナ感染症拡大によって中止された。動物実験教育訓練に関しては令和 2 年 4 月 10 日(16 名)と 9 月 14 日(5 名)に動物実験講習会（市瀬・定金）を実施した。また、令和 2 年 12 月 11 日(79 名)に実験研究（恵谷）、令和 3 年 1 月 19 日(79 名)に研究の倫理と安全の中で動物を対象とした実験（市瀬）について学部 3 年生を対象に実施し、令和 3 年 3 月 17 日(25 名)に人獣共通感染症の教育訓練を外部講師（万年和明氏）によって実施した。

動物施設に関しての今後の課題として、冬期の飼育室内の湿度管理は加湿器を用い行なっているが、雨期ではエアコンのみで行なっている。雨期は除湿が不十分なため、今年度は飼育室 3 のみに除湿器を設置した。それでも湿度が基準を超える時があった。雨季の飼育室内 1 と 2 では湿度が 100%となるため、来年度は、飼育室 1 と 2 にも除湿器の設置が必要と考えられる。

来年度はこのような湿度環境の改善と、これ迄と同様に動物実験の研究計画書を審査し、動物への配慮とよりよい動物飼育環境の推進を図る予定である。

9-3-14　2)　遺伝子組換え実験安全小委員会

委員長　濱中良志
委員　市瀬孝道、甲斐倫明

今年度の活動は無い。

9-3-15　広報・公開講座委員会

委員長　高野 政子
副委員長　小嶋光明
委員　秦さと子、石丸智子、恵谷玲央、宿利優子、徳丸由布子、姫野綾、矢部美香、黒木貴子

1) 若葉祭教職員企画

若葉祭は、5 月 22 日(金)、23 日（土）に開催予定であり、教職員企画等を実施する計画であった。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大状況を考慮し、危機管理委員会と若葉祭実行委員会との協議により中止となった。

2) オープンキャンパス

オープンキャンパスは、COVID-19 感染拡大予防のため 8 月 17 日（月）～10 月 30 日（金）までの間、本学ホームページ上で Web により開催した。事前に、大分合同新聞など新聞社 5 社に記事を掲載、大分県オープンキャンパスガイドで広報した。Web では、学長挨拶や入試概要説明、模擬授業 2 講座といった 9 つの動画コンテンツを公開し、10 名の卒業生・修了生からのメッセージを掲載した。本学 YouTube の公式チャンネル登録数は 23 名、動画再生回数は多いもので 749 回（10 月 30 日時点）と、本学について大いにアピールできた。公開した動画コンテンツでは、大学施設案内、1 年次生の合格体験談、2～4 年次生からの在校生メッセージの発表などが好評であった。参加者からのアンケートを Web で募ったが回答が得られなかったため、アンケートの実施方法についても工夫が必要である。過去のアンケートで学生がどのような教育を受けているかの DVD 作成を引き続きの課題とする。令和 2 年度は、大学見学を希望する高校生のニーズに対応するため、夏休みに入試委員会がミニオープンキャンパスを開催した。このように、大学訪問によるオープンキャンパスを希望する高校生の意見があったことから、令和 3 年度は、Web と対面のハイブリッド式によるオープンキャンパスの実施を計画する。参加者数は、感染予防の 3 密を避けるために、事前申し込みと人数制限 100～150 名程度とし、午前・午後の 2 回開催する。

3) 出前講義

高校からの依頼により、大学進学を希望する高校生を対象とした出前講義に講師を派遣した。看護系の教授 1 名、准教授 4 名と、基礎科学系の准教授 1 名を派遣した。県立大分西高校（9 月 11 日）、県立臼杵高校（9 月 15 日）、県立別府青翔高校（9 月 17 日）、熊本県立東陵高校（9 月 24 日オンライン）、県立中津北高校（10 月 9 日）、県立大分西高校（11 月 18 日）の 6 件であった。その際、2021 年度版大学案内を持参し広報を行った。

4)大学見学・ミニオープンキャンパス

COVID-19 の感染拡大により、9 月に 1 組見学希望があり対応したが、それ以降は、大学内への学外者立ち入り禁止となったため、大学見学の申し込みは受けなかった。令和 3 年度は、大学見学・ミニオープンキャンパスの募集は感染状況により検討する。

5) 大学 HP、Facebook およびマスメディアによる広報

大学 HP の運用を行った。今年度は本学の COVID-19 に関する対応について、新規に作成した専用ページで情報を周知した。その他、例年同様大学のイベント案内掲載（Web オープンキャンパス、

オンライン講義、看護国際フォーラム、ホームカミングデイなど）と、それらの実施報告として大学アルバム 12 件（2 月 4 日現在）を掲載した。本学公式 Facebook を利用して大学のイベントの告知や活動・取り組みを卒業生、在校生、受験生など一般に速やかに発信し、各研究室と事務局の持ち回りで大学の風景などについて、50 件（2 月 4 日現在）を掲載した。大学アルバムと Facebook の活用によるさらなる効果的な広報活動を行う方法の検討を次年度の検討事項とする。
教員の研究紹介は、全教員の協力のもと毎月更新し 11 件を掲載した。大学 HP に掲載している大学 Q&A は、年 3 回（4 月、5 月、11 月）更新した。本学進学に関心のある高校生や、入試情報を必要とする受験生などを対象とし、随時公開した。

また、現行の大学 HP の運用保守期間が今年度で終了する。新しい大学 HP の公開に向けて、業者の選定やサイト構築を行い、2 月に一般公開を試行し、3 月末に完了した。

6) 大学案内パンフレットの作成と活用

委員会委員 4 名が大学案内パンフレット WG に参加し運営した。業者選考では委員全員が参加し、2022 年度版が次年度 4 月中に納品されるように WG の支援を行った。2021 年度版の大学案内パンフレット約 3,000 部は、出前授業、進学相談時に本学に関心をもつ学生や保護者、高等学校に配布し、本学の認知度の向上や大学生活の具体的な説明などに活用した。大学院などについての記載もあるので、次年度から学部生、教職員にも 4 月に配布する。高校への配布資料に同封してもらう。

7) 公開講座

公開講座は、2020 年 9 月 12 日（土）午後に大分県立看護科学大学の講堂を会場としていた。また、テーマは「アラフォーから足腰の健康を考えようー健康寿命日本一の実現」で、講師は近畿大学生物理工学部 谷本道哉准教授と、本学の稲垣敦教授などで計画し、チラシ作成まで準備していた。しかし、国内外の COVID-19 の感染拡大状況を考慮し、審議会での協議により中止とした。次年度は COVID-19 の状況を見ながら開催の検討が必要だが、講師等の依頼は準備を進め、6 月のチラシ配布前に判断する。

8) 大学オリジナルグッズの作成

本学の広報活動推進を目的に、教職員に対し活用促進の取り組みを行った。具体的には、既存および新規作成の大学グッズの一覧、および利用目的に応じたグッズの種類や利用手続きなどを更新して提示した。適時利用状況を確認した。配布時にグッズの感想や使用予定などについて確認し、今後の広報活動にグッズの作成に向けた情報収集を行った。課題は、グッズの販売の可能性を検討する。

9）広報誌「風の広場」

広報誌「風の広場」は後援会と共同で年 2 回（7 月 Vol.16、12 月 Vol.17）作成した。掲載内容は、COVID-19 に対する本学の対応やコロナ禍のもとでの授業・実習の実施の紹介や卒業生インタビュー、教員の研究紹介等を掲載した。広報誌は県内高校、学部生の保護者、同窓生、県内の実習関連病院などに 1,700 部/回を配布した。

9)活動の課題

令和 3 年度の当委員会の継続課題は、

1) 大学の教育研究活動の状況やその活動の成果に関する情報を随時ホームページで公開し広報する。
2) イベントの開催情報や学生の諸活動等を、新聞や TV などのメディアやホームページ、広報誌等で発信する。

3) 一般県民（高校生含）、医療職者のニーズを満たすテーマの公開講座を開催する。
4) オープンキャンパスは、COVID-19 の状況によるが前述のような工夫をして基本は対面式で行い、その映像を大学 HP 上で、オンライン公開する。

9-3-15　1)　大学案内パンフレットワーキンググループ

リーダー　秦さと子
メンバー　足立綾、恵谷玲央、佐藤栄治、内倉佑介、秋本慶子、黒木貴子

2022 年度版大学案内パンフレットについて、昨年度までの内容を基本としつつ「未来創造」をコンセプトに作成に取り組んだ。今年度は、新緑をイメージした配色を特徴とし、学年を重ねるごとに成長する姿を木の成長で表現した。また、感染予防を考慮し、写真撮影は最小限に抑えつつ、イラストの挿入やレイアウト、文字の大きさの工夫などを行い、手に取りたくなるような大学案内パンフレットの作成に努めた。次年度は、カリキュラムの変更に伴う記事の編集が必要である。

9-3-16　国際交流委員会

委員長　Gerald T. Shirley
副委員長　甲斐倫明
委員　桑野紀子、田中佳子、恵谷玲央、丸山加菜、篠原彩、秋吉良継

1) 韓国の蔚山大学校医科大学看護課程交流派遣学生受け入れと交流
蔚山大学から学部交流派遣として学部生 8 名を同行教員 2 名と共に 7 月 27 日から 7 月 31 日までの 5 日間受入れ、本学に滞在する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の流行状況及び対応を両校で協議し、今年度は中止とした。
2) 本学学生の派遣
本学から学部交流派遣として学部生 8 名を同行教員 2 名と共に 8 月 17 日から 8 月 21 日までの 5 日間、韓国の蔚山大学校医科大学看護課程に派遣する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の流行状況及び対応を両校で協議し、今年度の派遣事業は中止とした。
3) 第 22 回看護国際フォーラムの開催
新型コロナウイルス感染症の流行状況及び対応のために、大分県看護協会と共催で第 22 回看護国際フォーラムを令和 2 年 10 月 31 日に、Zoom ウェビナーとして開催した。テーマを「AI・ICT が創る医療・看護の可能性を語ろう」とし、米国から 2 グループ計 4 名の講師が録画プレゼンテーション、国内から 2 名の講師がライブプレゼンテーションをした。参加者は 232 名と大盛況であり、その内訳は韓国 25 名、米国 1 名、インドネシア 1 名、日本の県内外から 205 名だった。参加者アンケートの結果では講演内容について 91%、質疑応答について 88%が「とても満足」「ほぼ満足」と

回答しており、高い満足度を示していた。
4) 2020 年の英語パンフレットのリニューアル
令和 2 年度に 2020 年英語パンフレット最新情報をもとに英語 Website の更新を行った。

令和 2 年度の計画を踏襲した活動を行う予定である。基本的には、学生の国際的視野の育成と教員の研究資質向上のために、国際交流の機会と内容とを十分に検討する。また、看護国際フォーラム後に参加者アンケートを実施し、看護職のニーズに沿ったテーマを選定し、地域貢献にもつなげる。

9-3-16　1)　英文 Web・パンフレットワーキンググループ

リーダー　Gerald T. Shirley
メンバー　桑野紀子、岩崎香子、丸山加菜

実施状況
令和 2 年度に 2020 年英語パンフレット最新情報をもとに英語 Website の更新を行った。

今後の課題
令和 3 年度に英語 Website の更新を行う予定である。

9-3-17　図書委員会

委員長　赤星琴美
副委員長　石田佳代子
委員　Gerald T. Shirley、三ケ田暢美、白川裕子、斧田智恵、甲斐信行

委員会選定及び学生リクエストによって新たに 1,714 冊の蔵書を整備した。また、「図書館だより」（発行回数 2 回 <Vol.13 (2020 年 7 月)、Vol.14(2021 年 1 月)>）の発行、図書企画展示（企画展示 3 回、ミニ展示 3 回）の実施、教職員の推薦図書を毎月紹介する「教職員おすすめの一冊」を継続し、教職員・学生の図書館利用拡大を図った。今年度は図書（2005 年度までの問題集）206 冊、視聴覚資料 8 点を除籍し、希望する教職員にリユースした。研究・教育がより効果的に行うことができるよう、文献デリバリーサービス「Reprints Desk」、医学映像情報センターの映像配信教育「ビジュランクラウド」を継続している。

卒業生・修了生の入館状況を次年度以降も継続的に調査集計し、利用拡大のための方策を検討していくことにした。医学中央雑誌を学内専用プランから学外からでもアクセスできる「フリーアクセスプラン」に変更し、利用拡大を図る予定である。

9-3-18　情報ネットワーク委員会

委員長　甲斐倫明
副委員長　品川佳満
委員　恵谷玲央、渡邉弘己、内倉佑介、黒木貴子、原田千夏

本学のネットワーク・サーバ管理運用、クライアント PC 支援、各種システム（キャンパススクエア、財務システム、サイボウズ、Google Workspace、Office365、Zoom など）の管理など定常的に行う業務を各委員が分担して行った。

定常の業務以外として、基幹ネットワークスイッチおよび教職員用ファイルサーバの更新、財務システムのバージョンアップ、学生ポータルサイトの新サイトへの移行を行った。

新型コロナウイルス感染対策の一環として、Zoom の導入・運用サポートおよびキャンパススクエアから各種証明書申請ができるようにした。また、無線 LAN アクセスポイントの増設や、学生自身の保有する PC、タブレット、スマートフォンから情報処理教室のプリンタや一部のサーバが利用できるように整備した。

情報セキュリティ対策として、学生を対象にした講習会と教職員を対象にした研修会を実施した。また、教職員や学生が利用可能な情報ネットワーク資産の利用範囲について整理を行った。

今後の課題

保守切れとなるサーバやシステムについて、更新を行っていく。また、開学から維持してきた学内の情報インフラおよび学外回線について、現状の利用形態や通信量をもとに、再構築に向けて検討を行っていく予定である。

9-3-19　ハラスメント防止・対策委員会

委員長　清末敬一朗
委員　石丸智子、稲垣敦、田中保之（外部委員、弁護士）、林猪都子、矢部美香、吉村匠平
　　関根剛（オブザーバー）、秋吉良継（事務局）

令和 2 年度のハラスメント防止・対策委員会として 1)～3)の活動を行った。

1) 委員会の開催

8 月 4 日（対面）、3 月 5 日（遠隔）に委員会を開催した。

2) 教職員向けハラスメント研修会の開催

FDSD 委員会と合同で、オンラインでの研修「別な配慮を要する学生・職員への対応」を実施した。

3) 規程の改定について

当事者等が相談員に苦情及び相談を行うとき、また調査委員会及び調査委員会に出席する際の録音および録画機器の取り扱いについて検討した。

9-3-20　看護系全体会議

学長　村嶋幸代
学部長　藤内美保
事務局長　清末敬一朗
構成員　梅野貴恵、小野美喜、影山隆之、高野政子、林猪都子、廣田真里、福田広美、赤星琴美、石田佳代子、草野淳子、桑野紀子、平野亙、杉本圭以子、秦さと子、森加苗愛、足立綾、石丸智子、今村知子、内倉佑介、小野治子、大嶋佐智子、甲斐博美、木嶋綾乃、後藤成人、佐藤愛、宿利優子、田中佳子、谷村優香、種恵理子、徳丸由布子、姫野綾、中釜英里佳、永松いずみ、稗田朋子、樋口幸、堀裕子、丸山加菜、三ケ田暢美、山田貴子、佐藤栄治、篠原彩、渡邊一代

例年、4 月、7 月、12 月の年 3 回の定例会議を予定している。今年度は COVID-19 の影響から、会議の機会は多くあり情報の周知が行えていることから、定例会は必要が生じた時に開催することが決定した。年間を通じて特に開催の要望はなく今年度は開催しなかった。

9-3-21　衛生委員会

1 号委員　清末敬一朗
2 号委員　角匡幸
3 号委員　赤星琴美
4 号委員　佐伯圭一郎、秋吉良継
オブザーバー　今村知子
事務局　松尾美沙

衛生委員会は、職場の労働災害及び健康障害を防止し、職員の安全及び健康の保持増進を図るために活動を行っている。本年度は、計 9 回の委員会を開催し、健康診断結果の把握や職場巡視等を行った。

1　職員の健康管理

(1)　定期健康診断を 4 月 15 日に実施した。健康診断結果を確認し、精密検査の必要がある職員に当該精密検査受診を勧奨した。

(2)　労働安全衛生法に基づくストレスチェックを 5 月 21 日から 6 月 3 日に実施し、集団分析結

果から健康リスクの確認を行った（59 名受検、受検率 81.9%、前年度比 1.1%増）。

(3) インフルエンザ予防対策として、予防接種希望者を募り、11 月 10 日に学内接種を行った（希望者 37 名）。

(4) 有機溶剤を使用する実験室の作業環境測定を 5 月 21 日と 11 月 10 日に実施し、その評価の報告を行った。

(5) 夏季休暇の取得促進のため広報を行い、取得状況を教育研究審議会等に報告した。

2　健康増進活動支援事業

昨年度に引き続き、教職員の健康管理への意識向上を図るため、職場ウォーキングラリーを開催し、教職員 37 名が参加した。

3　職場巡視

12 月 21 日と 1 月 18 日に学内を巡視した。その結果、キャビネットの上に不安定な物を置いている、またキャビネットの転倒防止措置がされていないところを確認し措置した。新型コロナウイルス感染症の感染防止のための換気や消毒の状況についても巡視で確認をした。

9-3-22　評価委員会

委員長　稲垣敦

委員　梅野貴恵、清末敬一朗、藤内美保

本委員会は、学内申し合わせルールに従って理事長及び理事以外の常勤教員の年間活動に関する評価を行い、理事長に報告する。また、評価方法の改善や昇任人事の準備も当委員会の分掌事項である。本年度は、教員からの意見に基づき、評価の透明性、理解しやすさ、公平性等の点から評価方法に関して 11 点の改定をするとともに（改定内容は割愛）、評価結果の報告期限を 3 月 3 日に変更した。この改定を反映させた自己評価書等の資料の提出を 12 月 21 日に教員に依頼した後、所定の方式で評価を行い、その結果が適切であることを合議で確認し、理事長に評価結果を報告した後、理事長名で教員に評価結果を示した（3 月 3 日）。今年度は評価結果に関して、委員の委員会活動の自己評価に関する質問が寄せられ（3 月 5 日）、評価委員会で検討した結果、該当者の評価を訂正して個人評価票を差し替えた。また、この教員評価結果を含めた昇任基準に基づいて昇任の可能性を確認し、助教 1 名の講師への昇任を理事長に提案した。

次年度も教員の意見を取り入れて改善してゆくとともに、評価委員会での入力ミスを防ぐために自己評価票を EXCEL ファイルで提出することを検討する予定である。

9-4　FD･SD 活動

1. FD 研修

1)新任教職員研修：4 月 2 日 9:00～16:45。対象者 8 名。大学組織概要、カリキュラム概要など、8 領域に関する研修を実施した。

2)科研費説明会・研修会・ピアレビュー：7 月 27 日 13:30～14:30。参加者は 50 名。科研費申請の説明、今年度採択者 2 名の講義を実施した。また、先立って 5 月 29 日に新採用教員向けに、科研費申請のポイントに関する資料やインターネットサイト等の資料提供をメールにて実施した。科研費申請に先立つベテラン教員による助言（ピアレビュー）は 15 件行われた。

3)教育に関する研修：5 月 18 日 14:40～15:40（Zoom）。参加者 40 名。テーマは「Zoom を利用した講義・演習」で、Zoom のブレイクアウトルーム、投票などの機能の使用方法やオンデマンド授業を中心とした内容であった。講師は、大分大学高等教育センター･IR センター准教授鈴木雄清氏。

4)学生理解に関する研修：1 月 13 日 16:00～17:00（Zoom）。参加者 53 名。テーマは、「入学生の現状につながる背景分析」で、東進ハイスクール小林弘典氏。

5)学生理解に関する研修：2 月 2 日～3 月 31 日に各自でオンライン視聴。テーマは、「特別な配慮を要する学生・職員への対応の実施について（動画と資料）」で、参加者は 35 名。

6)人権に関する研修：11 月 12 日～1 月 31 日に各自でオンライン視聴。参加者 55 名。テーマは 「りんごの色～LGBT を知っていますか？～」など動画計 3 本。

7)その他の研修：2 月 15 日 16:00～17:00（Zoom）。参加者 33 名。テーマは、「看護教育支援システム」で、①多視点 3D 解剖教育システム、②Medi-EYE（教育用 Web カルテ）、③F.CESS　Nurse（実習プラットフォーム）についての紹介が行われた。

2.学内競争的研究費

4 月 16 日に募集を行い、奨励研究 2 件、先端研究 3 件の新規応募があった。5 月 13 日に審査会が開催され、5 件すべての採択およびそれぞれの助成額が決定された。その結果、平成 31 年度採択分とあわせ、奨励研究 4 件、先端研究 4 件への研究助成が行われた。なお、それぞれの成果については、3 月 9 日のアニュアルミーティングにおいて報告された。

3.国内／海外派遣研修

国内派遣研修に 1 名の応募があり、令和 3 年 3 月 25 日の「魅力的なオンライン授業の創り方」のセミナーに 1 名の教員を派遣した。

4.授業評価

1 年次 35 科目、2 年 39 科目、3 年 31 科目、4 年 5 科目、合計 110 科目について実施した。結果は担当教員に通知され、科目ごとの平均値一覧結果はウェブに掲載された。

5.アニュアルミーティング

3 月 9 日に発表研究費取得演題 8 題、一般演題 8 題がオンラインによるポスター発表形式で実施

された。

9-5　研修派遣

本年度実績なし

10　附属組織

10-1　図書館

・2020 年度利用者数

図書館入館者数（延べ人数）　13,237 人

※7 月 10 日～9 月 24 日は入館ゲート故障のためカウントされていない

学外からの利用者数（実人数）　0 人

・2020 年度受入図書冊数　1,714 冊

うち購入数　1,707 冊

・2020 年度受入雑誌タイトル数　206 点

うち購入数　143 点

・図書等資料蔵書数（2021 年 3 月 31 日現在）

蔵書冊数	81,864 冊
所蔵雑誌タイトル数	644 点
電子ジャーナル購読タイトル数	617 点
電子ブック購読タイトル数	15 点
視聴覚資料	2,243 点

10-2　看護研究交流センター

10-2-1　看護研究交流センター推進会議

センター長　稲垣敦

副センター長　影山隆之

メンバー　平野亙、廣田真里、濱中良志、小野美喜、篠原彩、神崎純子、清末敬一朗

オブザーバー　村嶋幸代

今年度は開催しなかった。チーム間の連携の必要性が生じた場合は、速やかに開催する予定である。

10-2-2　地域交流チーム

リーダー　影山隆之
メンバー　秋吉良継、内倉佑介、神﨑純子、木嶋彩乃、清末敬一朗、篠原彩、藤内美保、稗田朋子、福田広美

本チームの最重要任務は予防的家庭訪問実習の運営であり、さらに新型コロナウイルス感染症下における本実習の対応を話し合うため、チーム会議を年 8 回開催した。

予防的家庭訪問実習を行う上で考慮したことの 1 つは学生の協力者との関わりによる学習効果であり、もう 1 つは高齢で基礎疾患も持っている協力者に感染源を持ち込まない、学生も感染しないことを目標に取り組んだ。協力者に対しコロナの状況を踏まえ実習受け入れの意向確認と依頼、実習要項の作成、学生・教員へのオリエンテーション、本実習における感染対策の作成、進行状況の管理（学生・協力者・担当教員の調整）、および感染拡大防止を考慮した簡略な形ではあったが協力者を訪問しての面談等を行った。地域ステークホルダーとの運営会議は、感染拡大防止を考慮して書面開催とした。年度末に訪問地域関係者との幹事会を開催し、本実習の報告とともにコロナ禍における地域の状況について情報共有を行った。学生による実際の訪問は、感染状況を確認しながら 10 月より開始し、自宅での訪問の承諾を得た 49 のチームが訪問を行うことができた。訪問休止期間中は、学生による電話での問安と、訪問地域の特徴に関するオンライン講義を実施するとともに、協力者に対し大学の様子や健康に関する情報を掲載した予防的家庭訪問実習通信を計 5 回発行した。さらに、学生の学修状況の確認および次年度の運営の参考にするため、学生の年度末レポートの分析を行った。以上のように、様々な変更を余儀なくされたものの、実習全体としてはスムーズに進行した。

なお、野津原地区の多世代間交流事業や富士見が丘団地のわかば老人クラブ等のイベントは中止されたため、今年度は参加できなかった。予防的家庭訪問実習に長年ご協力いただいた方々が、年度末に多数辞退された。本実習を開始して 7 年目を迎え、開始当初 70 代後半であった協力者が 80 代後半を迎えるにあたり、今後、さらに辞退が進むことが考えられる。地域のさらなる高齢化や人口減少、さらに感染状況を考慮して、今後の実習運営を検討する必要がある。

この他、COC+事業の後継活動である大学等によるおおいた創生推進協議会に参加し、県内の高等教育機関や地方自治体との連携活動に参加した。同協議会を発展的に解消して代わりにおおいた地域連携プラットフォームを発足させるにあたり、県内の高等教育機関・地方自治体・産業界団体と協議を重ね同プラットフォームのあり方を検討した。次年度以降はこちらに参画しながら、新たな連携のあり方を模索する予定である。

10-2-3　継続教育推進チーム

リーダー　廣田真里
メンバー　樋口幸、佐藤愛、後藤成人、佐藤愛、篠原彩

チームの 2020 年度の大きな活動は、「地域貢献としての看護研究支援」及び「ホームカミングデイの実施」であった。

１．地域貢献としての看護研究支援

4 施設（県立病院、大分赤十字病院、アルメイダ病院、衛藤病院）から研究支援の依頼があり、4 施設とも支援を実施した。大分赤十字病院に関しては、昨年よりも研究数が多く、支援者を 2 人から 3 人へ増加した。

2 月にはほとんどの施設の支援が終了し、各施設から感想等の意見が寄せられた。全施設、3 月までの年度内に施設内での研究成果を発表する会が実施され、支援者による公表が行われた施設もあった。

2020 年度の支援については、COVID-19 の影響により、Zoom やメール、電話等での支援が多く行われた。施設によっては、支援者による講義を実施したところもあった。

研究支援に関しては、おおむね満足しており、次年度以降も継続の希望がすべての施設からあった。

2021 年 8 月に行う予定の交流会についての意見を募ったところ、交流会の意義を再吟味する必要性が出てきた。そのため、2021 年度に施設の意見を考慮したうえで、方法等についての再検討を行うこととした。

２．ホームカミングデイの実施

6 月 19 日に予定されていたホームカミングデイについては、COVID-19 の拡大防止を考慮し、中止とした。

11 月末に 2019 年度の卒業生に対し、COVID-19 の流行に際し、最前線で頑張っていることに感謝しつつ、大学からエールを送ることを目的に各研究室等大学すべての部署及び学長から動画を送ることを企画した。12 月中旬までに各部署に動画作成を依頼し、クリスマスプレゼントとして 12 月 25 日にアップした。即日から反響があり大変喜ばれた。

次年度のホームカミングデイは、実施を前提に、4 月を目途に方法を大学で実施か Web で実施かを検討することとした。

10-2-4　産学官連携推進チーム

リーダー　濱中良志
メンバー　廣田真理、樋口幸、佐藤栄治、秋吉良継、篠原彩、神崎純子

特定非営利活動法人ホビータイムの産学官交流グループ「ペットボトル開栓時の補助具商品化・販

売」に本学の参加が決定した。

本学と共同研究を行っている株式会社鳥繋産業の取り組みが JICA の民間技術活用可能性調査事業に採択され、JICA からのヒアリング（2020 年 11 月 24 日）に参加した。（樋口、秋吉）

県内で開催された以下の産学官連携関連セミナーへ参加した。

- 令和 2 年　5 月 2 日～5 日　第 8 回看護理工学入門セミナー（樋口、佐藤）
- 令和 2 年 10 月 23 日～24 日　東九州メディカルバレー構想 10 周年記念推進大会（樋口、秋吉）
- 令和 2 年 10 月 26 日 大分県産学官交流会（秋吉、篠原）
- 令和 2 年 12 月 13 日　医療関連機器ニーズ発表会（佐藤）

来年度は、産業科学技術センターや弁理士等の連携体制を構築することを目標に掲げて活動する。

10-2-5　NP 事業推進チーム

リーダー　小野美喜

メンバー　大嶋佐智子、甲斐博美、神崎純子、草野淳子、宿利優子、藤内美保、高野政子、中釜英里佳、濱中良志、堀裕子、宮内信治、村嶋幸代、森加苗愛

令和 2 年度の NP 事業推進チームの主となる以下の 1)～5)の活動計画にそって活動を行った。

1) 大学院 NP コース学生を育成し、修了生を県内外に配置する

大学院カリキュラムの展開と質担保のための段階的な試験を次のように実施した。1 年次生には 12 月 15 日に口頭試問、2 月 26 日に進級試験を実施し、11 名が進級となった。2 年次生には実習前試験を実施（8 月 5 日 OSCE 試験）し、8 名全員が合格した。また 2 年次生は修了試験（令和 3 年 1 月 28 日実施）では修了予定者 8 名全員が合格した。この 8 名は日本 NP 教育大学院協議会の NP 資格試験（令和 3 年 3 月 7 日）に合格し NP 資格の認定を受けた。全学生が進級及び修了できたことが学習支援の結果である。今年度修了生のうち 3 名が県内に就職したが、県内の学生配置数を増やすことは引き続きの課題である。県内看護師が履修しやすいようにオンラインシステム等を活用した学習方法を検討してきた。コロナ禍でありオンライン授業が急速に普及したため、大学から遠距離の県内学生を獲得できるよう積極的にすすめていく。

2) NP 修了生の継続教育の実施

メーリングリストを活用して適宜情報発信（学会情報、研修案内など）を実施し、継続学習の支援を行った。令和 3 年 2 月 19 日は修了生に対し、オンラインにてフォローアップ会議を開催した。参加者は 24 名であった。大学院生や教員とも意見交換し、修了生の現在の状況について相互理解を深められた。さらに修了生独自で構成する「診療看護師の会」の立ち上げがあり支援した。修了生の自律した活動も成長としてあり、バックアップの仕方を考えながら進めていく。

3) 実習施設連携・特定行為研修による評価体制の構築

実習前後の実習施設合同会議を毎年開催しているが、今年度はコロナ禍でありオンラインで実施した。この会議によりコロナ禍での実習運営を大学側・施設側の双方で確認し、臨地での実習指導を受けることができた。また「特定行為管理委員会」を 9 月に書面開催し、3 月 2 日に対面会議にて実

施した。委員会での修了判定により、老年 NP コース 6 名、小児ＮＰコース 2 名の特定行為研修（21 区分 38 行為）の修了を認定した。

4) NP に関する研究活動を行い、NP 大学院教育の特徴を社会に向けて発信する。

各委員が NP に関するテーマによる学会発表や日本 NP 学会誌への論文公表を行った。また既投稿論文が海外で引用された情報などの共有を行い、海外での NP の動向なども確認できた。引き続き NP 制度化につながる研究を促進していく。

5) 日本 NP 教育大学院協議会、日本 NP 学会事務局運営

日本 NP 教育大学院協議会の事務局として、全国 11 大学院の NP 教育機関の連携と組織強化を図った。次年度の課題は継続して加盟校の増加を図り、NP 制度化に向けた活動を行う。

10-2-6　学術ジャーナルチーム

リーダー　平野亙

メンバー　G. T. Shirley、定金香里、徳丸由布子、山田貴子、渡邉弘己、秋本慶子、白川裕子

看護科学研究編集委員会ならびに査読委員の事務を行ったほか、「看護科学研究」18 巻 1 号（2020 年 6 月）、同 2 号（同年 11 月）の審査・編集・発刊に関する実務を行った。目標である年間 3 号の発刊は 2 号までとなった。

編集事務に関しては、編集委員会の議論に基づいて、投稿規定や査読関連文書の整備を行った。

近年は一定数の投稿論文があるが、再三の査読を必要とする論文が多く、刊行までに時間を要する傾向が続いており、そのため 1 号の刊行が遅れて 3 号の発行が達成できなかった。今後も投稿論文を増やすための努力の継続は必要であるが、査読のさらなる迅速化、効率化のための改善を、編集委員会と事務局が一体となって進めていく。

10-2-7　健康増進プロジェクトチーム

リーダー　稲垣敦

メンバー　赤星琴美、石丸智子、甲斐博美、木嶋彩乃、桑野紀子、佐藤愛、篠原彩、秦さと子、田中佳子、濱中良志、掘裕子、稗田朋子、谷村優香、樋口幸、丸山加菜、森加苗愛、渡邊一代

【事業協力】

- Smart Life Project（厚生労働省）
- 2020 横浜スポーツ学術会議（日本体育学会、日本スポーツ体育健康科学学術連合、日本体育測定評価学会、ICSSPE、日本学術会議等 2020/9/8-22 パシフィコ横浜ノース）
- 日本スポーツ救護看護学会の設立

- 大分県介護予防運動機能向上専門部会（大分県）、第 11 期スポーツ救護講習会、第 9 回スポーツ救護スキルアップ研修会、スポーツ救護ナースの派遣事業、第 10 回大分県スポーツ学会フォーラム、大分県スポーツ学会第 11 回学術大会（大分県スポーツ学会、大分県スポーツナース協議会、大分県理学療法士会、大分県作業療法協会、大分県柔道整復師会、大分岡病院、西別府病院ほか）、世代間交流健康づくり事業（大分市社会福祉協議会）、富士見が丘団地夏祭り（富士見が丘連合自治会）、姫島村健康づくり事業（姫島村健康推進課）、大分県中学校新人大会（大分県中学校体育連盟）、あすぴあフェスタ 2020（大分県身体障害者福祉センター）、第 36 回ななせの里まつり（大分市、野津原地区商工会）、総合型地域スポーツクラブ交流会（大分県教育委員会）、別府大分毎日マラソン大会（大分市陸上競技場）、2021 森林セラピートレイルランニング in 野津原・のつはるウォーキング大会（大分市、野津原商工会）、第 9 回森林探検ウォーキング（富士見が丘連合自治会）等は COVID-19 のため中止となった。

【人材育成、啓蒙・啓発】

- 姫島村健康づくり事業研修会（姫島村離島センター）、第 9 回スポーツ救護スキルアップ研修会（アイネス）、第 10 回大分県スポーツ学会フォーラム（アイネス）、第 11 期スポーツ救護講習会（本学講堂）、第 12 回大分県スポーツ学会学術大会（J:COM ホルトホール大分）等が COVID-19 のため中止となった。

【県民の健康・体力チェック】

- 本学若葉祭（本学）、世代間交流健康づくり事業（多世代交流センター）、大分トリニータホームゲーム（昭和電工ドーム）、富士見が丘体育祭（横瀬小学校）、若葉会サロン（富士見が丘公民館）、第 35 回ななせの里まつり（みどりの王国）、総合型地域スポーツクラブ交流会（昭和電工武道スポーツセンター）等が COVID-19 のため中止、あるいは 3 密を避けられないため学生を派遣できず、今年度は実施できなかった。

【スポーツ大会の救護員】

- 大分県中学校新人戦等が COVID-19 のため中止となり、今年度は実施できなかった。

【研究】

- 大分県立看護科学大学「健康増進プロジェクト」の活動について. スポーツおおいた 6.
- これからの日本体育測定評価学会に望むこと. 体育測定評価研究 21.
- 会長退任にあたり今後の学会に期待すること. 日本体育測定評価学会第 20 回シンポジウム.
- 1 回の登山が幸福感に及ぼす効果, 卒業研究.
- 自重トレーニングによる糖代謝の改善, 卒業研究.

【広報・メディア】

- 本学 HP：https://www.oita-nhs.ac.jp/site/np/536.html
- facebook ： https://www.facebook.com/ 大分県立看護科学大学健康増進プロジェクト-

1620945748225362/

- パンフレット：本学パンフレット 2021（p.40）
- テキスト：めじろん元気アップ体操＆同ビッグ 4 パンフレット PDF 版、https://www.pref.oita.jp/site/790/mejironntaisou.html
- 動画：TouTube 及び大分県庁 HP：めじろん元気アップ体操動画再生総回数 273,748 回（2021/5/5 現在）、https://www.pref.oita.jp/site/790/mejironntaisou.html
- 県内の各社ケーブル TV：めじろん元気アップ体操指導番組で 8,000 回／年以上、3,000 時間／年以上。

当プロジェクトの最終的な目的は、既存の資源を活用した地域住民の健康増進システムの構築である。2020 年度は COVID-19 のためほとんどのイベントが中止、あるいは感染予防のため、学生とともに地域に出向くことができず、活動を大幅に縮小せざるを得なかった。また、これまでの当プロジェクトの活動を本学の公開講座で紹介する予定であったが、これも次年度に延期となった。このため、今年度は誌上で当プロジェクトの活動を紹介し、また、めじろん元気アップ体操の普及について調査した。今後も COVID-19 の影響は避けられないので、次年度はこれまでの研究成果を公表してゆくとともに、コロナ禍における新たな事業を検討する必要がある。

11　設備等

（1）　校　舎

所在地　大分市大字廻栖野２９４４番地の９

○　校　地　　（単位：㎡）

区　分	面　　積
校舎敷地	５７，９９０
運動場用地	１３，１４０
駐　車　場	７，７３４
計	７８，８６４

○　校舎建物　　（単位：㎡）

区　　分	面　　積	構　　造
管　　理　　棟	２，２２４	鉄筋コンクリート３階建
講　　義　　棟	２，８１６	鉄筋コンクリート３階建
図書館・食堂棟	３，３４６	鉄筋コンクリート３階建
実習・研究棟	５，８８２	鉄筋コンクリート３階建
交　　流　　棟	９３０	鉄筋コンクリート３階建
体　　育　　館	１，０６７	鉄筋コンクリート平屋建
実験動物施設	１０２	鉄筋コンクリート平屋建
車　　庫	６９	軽量鉄骨平屋建
倉庫及び機械室	４９	鉄筋コンクリート平屋建
計	１６，４８５	

（2）　南大分キャンパス（研修・実習センター）

所在地　大分市豊饒二丁目７番２号
　　敷地面積　２，３５４㎡
　　延床面積　１，０７７㎡　　鉄筋コンクリート２階建

（3）　職員住宅

所在地　大分市大字廻栖野３２０２番地の１
　　敷地面積　２，１４７㎡
　　延床面積　　７５４㎡　　鉄筋コンクリート３階建等（２棟・１２戸）

12　名簿

12-1　役員

理事長（学長）		村嶋幸代	
理事	学部長	藤内美保	
理事	研究科長	稲垣敦	
理事	事務局長	清末敬一朗	（～R3.3.30）
理事（非常勤）	大分大学医学部附属病院長	三股浩光	
理事（非常勤）	社会福祉法人百徳会理事長	小寺隆	
理事（非常勤）	（株）大分銀行取締役会長	姫野昌治	
監事（非常勤）	大分県看護協会監事	中野洋子	
監事（非常勤）	公認会計士	福田安孝	

12-2　審議会委員

経営審議会

学内委員	理事長	村嶋幸代
学内委員	理事	藤内美保
学内委員	理事	稲垣敦
学内委員	理事	清末敬一朗
学外委員	理事（非常勤）	三股浩光
学外委員	理事（非常勤）	小寺隆
学外委員	理事（非常勤）	姫野昌治
学外委員	弁護士	千野博之
学外委員	立命館アジア太平洋大学教授	吉松秀孝
学外委員	大分合同新聞社特別顧問・論説委員	松尾和行
学外委員	大分県看護協会長	大戸朋子

教育研究審議会

学内委員	学長	村嶋幸代
学内委員	学部長	藤内美保
学内委員	研究科長	稲垣敦
学内委員	事務局長	清末敬一朗
学内委員	生体科学教授	濱中良志
学内委員	生体反応学教授	市瀬孝道
学内委員	人間関係学准教授	吉村匠平
学内委員	環境保健学教授	甲斐倫明
学内委員	健康情報科学教授	佐伯圭一郎

学内委員	言語学教授	G.T.Shirley
学内委員	基礎看護学教授	廣田真里
学内委員	成人・老年看護学教授	小野美喜
学内委員	小児看護学教授	高野政子
学内委員	母性看護学教授	林猪都子
学内委員	助産学教授	梅野貴恵
学内委員	精神看護学教授	影山隆之
学内委員	保健管理学教授	福田広美
学内委員	地域看護学教授	赤星琴美
学内委員	国際看護学准教授	桑野紀子
学外委員	大分大学名誉教授	犀川哲典

12-3　教職員

12-3-1　専任教員

生体科学	教授	濱中良志		
	准教授	安部眞佐子		
	学内講師	岩﨑香子		
生体反応学	教授	市瀬孝道		
	准教授	吉田成一		
	学内講師	定金香里		
健康運動学	教授	稲垣敦		
人間関係学	准教授	吉村匠平		
	准教授	関根剛		
	非常勤助手	秋本慶子		
環境保健学	教授	甲斐倫明	R3.3.31	退職
	准教授	小嶋光明		
	助教	恵谷玲央		
健康情報科学	教授	佐伯圭一郎		
	准教授	品川佳満		
	助教	渡邉弘己		
言語学	教授	G.T.Shirley		
	准教授	宮内信治		
基礎看護学	教授	廣田真里	R2.4.1	採用
	准教授	秦さと子		
	助教	石丸智子		
	助教	田中佳子		
	臨時助手	三ケ田暢美	R2.12.31	退職
	臨時助手	森﨑太郎	R3.1.15	採用
			R3.3.31	退職
看護アセスメント学	教授	藤内美保		
	准教授	石田佳代子		
	助教	山田貴子		
	助手	内倉佑介		
成人・老年看護学	教授	小野美喜		
	准教授	森加苗愛		
	助教	堀裕子		
	助教	中釜英里佳		
	助教	宿利優子		
	助教	佐藤栄治		

	臨時助手	光根美保	R2.7.19	退職
（NP コース担当）	助教	甲斐博美		
	非常勤助手	大嶋佐智子	R3.3.31	退職
小児看護学	教授	高野政子		
	准教授	草野淳子		
	助教	足立綾		
母性看護学	教授	林猪都子		
	助教	永松いずみ		
	助教	徳丸由布子		
助産学	教授	梅野貴恵		
	准教授	樋口幸		
	助教	姫野綾		
	臨時助手	種恵理子	R2.4.1	採用
			R3.3.31	退職
精神看護学	教授	影山隆之		
	准教授	杉本圭以子		
	助教	後藤成人		
保健管理学	教授	福田広美		
	准教授	平野亙	R3.3.31	退職
	助教	稗田朋子	R3.3.31	退職
	臨時助手	谷村優香	R3.3.31	退職
地域看護学	教授	赤星琴美		
	助教	小野治子		
	助教	佐藤愛		
	助教	木嶋彩乃	R2.4.1	採用
	臨時助手	渡邊一代	R2.4.1	採用
			R3.3.31	退職
国際看護学	准教授	桑野紀子		
	助教	丸山加菜		
看護研究交流センター	臨時助手	篠原彩		

12-3-2　就職相談員

就職相談員	小川三代子	R2.10.20	退職
就職相談員	竹中愛子	R2.10.20	採用

12-3-3　非常勤講師（学部）

麻生良太	教職概論、教育方法論
横山秀樹	教職概論
長谷川祐介	生徒指導
飯田法子	教育相談
河野伸子	教育相談
鈴木篤	教育学概論
	道徳教育と特別活動
藤田文	学校教育心理学
今井航	教育課程論、教育制度論
生田淳一	教育方法論
中島暢美	教育相談
堀本フカヱ	教職概論
石本田鶴子	大学ナビ講座
松久美	災害看護論
佐藤弥生	災害看護論
松本昂	微生物免疫論
澤田佳孝	美術とこころ
西英久	哲学入門
松田美香	言語表現法
大杉至	社会学入門
二宮孝富	法学入門（日本国憲法）
足立恵理	文化人類学入門
小川伊作	音楽とこころ
黄昞峻	韓国語
霜山朋子	学校保健学
手嶋康深	学校保健学
副島尭史	家族看護学概論
吉田知佐子	学校保健学

12-3-4　非常勤講師（大学院）

廣瀬福美	老年 NP 論
立川洋一	老年アセスメント学演習
田村委子	NP 論・老年実践演習
古川雅英	老年実践演習
佐藤博	老年実践演習
山本真	老年実践演習
迫秀則	老年実践演習

宮川ミカ	老年アセスメント演習
高根利依子	老年 NP 特論
藤谷悦子	老年実践演習
塩月成則	老年薬理学特論、老年実践演習、 老年薬理学演習
小野剛志	老年薬理学演習
庄山由美	老年 NP 特論
玉井文洋	健康危機管理論
三浦源太	疾病予防学特論
藤内修二	広域看護学概論、健康危機管理論、 疾病予防学特論
池邉淑子	疾病予防学特論
本山秀樹	健康危機管理論
大津孝彦	地域保健特論
高波利恵	産業保健特論
吉田愛	産業保健特論
若松正人	健康危機管理論
甲斐仁美	看護管理学特論
佐藤弥生	看護管理学特論
柿本貴之	看護管理学特論
竹内山水	老年実践演習
伊東弘樹	老年臨床薬理学特論
阿部航	老年診察・診断学特論
糸永一朗	老年疾病特論
安東優	老年診察・診断学特論
永瀬公明	老年診察・診断学特論
財前博文	老年疾病特論
小寺隆元	老年疾病特論、老年薬理学演習
甲原芳範	老年疾病特論
一万田正彦	老年疾病特論
竹下泰	老年疾病特論
木村成志	老年疾病特論
中村朋子	老年診療診断学
中村雄介	老年実践演習、老年診察診断学
加隈哲也	老年診察診断学
式田由美子	小児看護学特論、小児 NP 特論
山崎清男	看護教育特論
黒木雪絵	小児看護学特論、小児 NP 特論、

	小児アセスメント演習
菅谷愛美	小児看護学特論、小児 NP 特論、 小児アセスメント演習
佐々木真理子	小児看護学特論、小児 NP 特論
井原健二	小児診察・診断学特論
岡成和夫	小児診察・診断学特論
小林修	小児診察・診断学特論
前田知己	小児診察・診断学特論
久我修二	小児診察・診断学特論、小児疾病特論
井上真紀	小児疾病特論
江口春彦	小児診察・診断学特論
別府幹庸	小児診察・診断学特論
大野拓郎	小児診察・診断学特論、小児疾病特論
岩松浩子	小児疾病特論
福永拙	小児疾病特論
清田晃生	小児診察・診断学特論
佐藤圭右	小児診察・診断学特論、小児疾病特論
長濱明日香	小児診察・診断学特論
松本康弘	小児薬理学特論
後藤愛	小児看護学特論、小児 NP 特論
小山秀夫	看護政策論
小池智子	看護政策論
立森久照	看護政策論
中西三春	看護政策論
佐藤昌司	周産期特論、周産期診断技術演習
飯田浩一	周産期特論
豊福一輝	周産期特論
後藤清美	周産期特論
中村聡	リプロダクティブ・ヘルス特論
嶺真一郎	リプロダクティブ・ヘルス特論、周産期特論
戸高佐枝子	助産マネジメント論
生野末子	分娩期診断技術特論、助産マネジメント論、 助産マネジメント演習
宇津宮隆史	リプロダクティブ・ヘルス特論
上野桂子	母子成育支援特論
井上祥明	母子成育支援特論
井上貴史	リプロダクティブ・ヘルス特論
實崎美奈	ウイメンズヘルス特論

佐藤敬子	母子成育支援特論
清水久美恵	地域母子保健学特論、地域保健特論
鈴木由美	地域保健特論、地域母子保健学特論
花田克浩	リプロダクティブ・ヘルス特論
高城翔平	広域看護アセスメント学演習
平井健一	老年実践演習、老年診察・診断学特論
上田徹	老年診察・診断学特論
田中遼大	老年臨床薬理学特論
井上真	薬剤マネジメント特論
宮本侑子	リプロダクティブ・ヘルス特論
安部真紀	周産期診断技術演習、助産マネジメント論、助産マネジメント演習
大田えりか	看護科学研究、健康科学研究特論
末延聡一	小児疾病特論
小野克重	病態生理学特論
佐分利能生	老年診察・診断学特論
溝口博本	老年診察・診断学特論
黒川竜紀	病態生理学特論
志田京子	看護管理学特論
宮崎美樹	老年診察・診断学特論
藤谷直明	老年診察・診断学特論
竹村陽子	看護コンサルテーション論
川崎涼子	広域看護学概論
中西信代	広域看護学概論、地域保健特論、健康危機管理論
糸永知代	小児疾病特論
関口和人	小児診察診断学
保科隆之	小児疾病特論、小児診察診断学
武口真広	小児診察診断学

12-3-5　事務職員

	事務局長	清末敬一朗	R3.3.30	退職
総務グループ				
	副主幹	秋吉良継	R3.3.31	転出
	主査	松尾美沙	R2.4.1	転入
	事務員	草牧有美	R2.5.31	退職
	事務員	木下明美	R2.4.1	採用
	事務員	松井里美	R2.4.1	採用
			R2.4.30	退職
財務グループ				
	主幹	矢部美香	R3.3.31	転出
	主幹	黒木貴子		
	主任	久保紘子		
	事務員	宮川眞美		
	事務員	石田真樹	R2.7.1	採用
教務学生グループ				
	主幹	坂本晴生	R3.3.31	転出
	副主幹	原田千夏		
	主査	佐藤英	R2.4.1	転入
	主任	神﨑正太		
	事務員	有馬沙希		
	事務員	佐藤真衣	R3.1.25	採用
			R3.2.17	退職
	事務員	岸田美由紀	R3.2.17	採用
	保健師	今村知子	R3.3.31	退職
図書館管理グループ				
	サブリーダー	白川裕子		
	非常勤司書	斧田智恵	R3.3.31	退職
	非常勤司書補助員	甲斐信行	R2.4.1	採用
			R3.3.31	退職
	司書補助員	川上裕	R2.9.9	採用
看護研究交流センター				
	事務員	神﨑純子		